
私の邪悪な魔法使いの友人

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の邪悪な魔法使いの友人

【Nコード】

N9366S

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

若き魔法使いプラーヌスは念願の塔を購入した。彼はこの塔を、自分の理想の住まいにするため、世界中からあらゆる優れた人材を集めようとする。その手助けをしてもらおうと、彼はまず友人のシヤグランを塔に招待した。自称「新本格ファンタジー小説」より詳しいあらすじは本編に。

映画の予告編風あらすじ

「何もかも偽りだったってわけか、プラーヌス・・・」

「いや、少なくとも僕が君に抱いた友情は本物だよ、シャグラン」

蠟のように白い膚、吸いこまれるように真蒼な瞳、魔法使いなのに若さと美しさを併せ持った男、プラーヌス。

その若き魔法使いプラーヌスは、念願の塔を購入した。

しかしせっかく手に入れたこの塔は問題だらけの物件だった。

不必要な程に多い召使い。

どこからともなく聞こえてくる不気味な女性の泣き声。

前の塔の主が行っていた人体実験の残滓。

そして度重なる蛮族の襲撃。この塔の前の主はその蛮族との戦いに疲れて、健康を害して死んだという。

そんな塔に招かれ、そこで働くことになった肖像画家のシャグラン。

彼は魔法使いプラーヌスの古くからの友人であった。

「友達だから君に頼んでいるんだよ、シャグラン。こんなことは信頼できる人間にしか依頼出来ない。だってこの塔の全てを晒してしまうわけだからね」

そうやって口説かれ、肖像画家の仕事を一時休止し、シャグランは仕方なく塔で働くことになる。

しかしそんなシャグランには奇妙な記憶の空白があった。

いつからこの魔法使いプラーヌスと友達になったのか、どうやって魔法使いなどと仲良くなったのか、よく思い出せなくなるときがあったのだ。

シャグランは彼のそんな症状を共有するものに、この塔で出会った。

騎士バルザである。

バルザはファビエル中にその勇名を轟かす騎士。決して魔法使いの塔の門番として働くような人物ではない。

どうやらバルザはプラーヌスに何か弱みを握られているよう。

いや、実はバルザは偽の記憶を埋め込まれて、プラーヌスの意のままに操られていたのだ。

少しずつ明らかになるプラーヌスの邪悪さ……。それに戸惑うシャグラン。

そもそも彼らの友情は真実なのか偽りなのか？
雷鳴のように明滅する偽りの記憶の中で、シャグランは迷宮のよ
うな塔を彷徨う。

新本格ファンタジー小説「私の邪悪な魔法使い」更新中！

第一章 1 プライヌスからの手紙

私の邪悪な魔法使いの友人、プライヌスが手頃な値段で塔を手に入れたらしい。

いつでもクールに感情を抑えている彼にしては珍しく、嬉々とした文面でそれを報せる手紙を寄こしてきて、私は少し微笑ましい思いをした。

しかしその手紙から察するところ、そこはかなり問題の多い物件のようだ。

最も近いエリュエールの街からでも相当離れているようだし、鬱蒼と生い茂った樹林に囲まれた場所に塔は建っているらしく、そこまでの行き来はかなり不便を極めるみたいだ。

しかもその樹海には大勢の蛮族が住んでいて、塔はたびたび襲撃されているという。さすがの彼もその対処に手を焼いているようだ。

そんな手紙を読んで誰がそんな塔に行ってみたいと思うものだろうか。

だいたい私も画業のほうで忙しく、病気がちの母もいる身である。気軽に旅など出来る状況ではない。

しかし相変わらずプライヌスはほとんど命令口調の横柄さで、私をそこに招待したいと言ってきたのであった。

断るすべはない。彼がそう決めたのなら私は従わざるを得ない。プライヌスは私を拉致してでもそこに連れていくだろうから。

彼は本当に手加減も何も知らないのだ。私に対する嫌がらせのためにも、派手な魔法を使って私を拉致していくに決まっている。そうなればこの静かな街が大騒ぎになってしまうのは請け合いである。

そういうわけでプラーヌがしびれを切らして私の街にやってくる前に、私はトランクの中から久しぶりに旅用のフードを取り出し、高い金を出して馬車を借りて、ここまで来たのである。

第一章 2) カプリスの森

その樹海はカプリスの森と呼ばれているらしい。

私が聞いた話では、その樹海は昼でも夜のように暗く、延々と続く同じ風景が旅人の方向感覚も失わせるとか。

あるいは木々がまるで生きているようにウロウロと移動して、その形や地形を僅かに変えるから、どんな地図も磁石も役に立たないとか。

いずれにしても、どんな人間だってそこに一度入りこむと抜け出すのは不可能だということをあらゆる場所で聞いた。

私はそれを理由に彼の招待を拒むことを本気で考えた。いくらなんでも命懸けで彼に会いたいとは思わない。

しかしその樹海の近くの村に住む人たちによれば、そんなのは風説に過ぎないと一蹴された。

ちゃんとした案内人さえつければ道に迷うことはないようだ。それを証拠にその村人が私の案内人を快く買って出てくれた。

「確かに木々は動きますがね。でもそんなのは問題ではないんですよ」

その村人は言うてきた。「むしろ動いていく木に沿って歩いていけばある泉に到着するんです。そこから塔まではすぐですよ」

だけどその案内人を雇うために支払わなければいけない金貨の量が、普通の旅人なら誰も払うことの出来ない額だった。もちろん私もそれだけの持ち合わせはない。

私は窮した挙句、塔に到着すれば、その主が必ず払うと約束して、何とかその男を雇うことが出来た。

プラーヌスは世にも邪悪で意地悪な魔法使いだが、決してケチではない。

まあ、ケチな人間に魔法使いなど務まるわけがない。魔法使いは魔法を使う度に、この村人を雇うよりも高価な宝石が壊れていくのだ。そんな魔法使いたちに真つ当な金銭感覚のようなものがあるわけないのだ。

その村人もおそらく魔法使いのそのような事情を知っているのだろつ、私が塔の魔法使いの友人だと知って、目的地に到着してから金貨を払うことを簡単に了承してくれた。

第一章 3) 魔法使いの宝石

馬車の手綱をその村人に任して、私は幌の中で眠っていた。

外から見る限り、木々が密生して歩く道もないほどの樹海かと思っていたが、途中までは馬車で行けるらしい。近くの村人たちもその森で狩りをしたり、木の実を採ったりするようだ。

しかし途中までしか馬車で行けないということは、こんな樹海のどこかで馬車を乗り捨てなければいけないことになる。

馬は手で曳いていくとしても車は無理だ。そこにしばらく放置せざるを得ない。でもこれは借り物である。ちゃんと借りた相手に返さなければいけないものなのだ。

だけど私はこんな薄暗い樹海を歩く気になれなかった。

少してこの馬車に乗っていられるのならそれがいい。

そのあとのことは考えてもらえない。

だいたい、もし私が借り主に馬車が返せないとすれば、それはプラーヌスのせいだ。こんな僻地に住んでいるプラーヌスが全て悪いに違いないのだ。

私はそうやって開き直って馬車の中で眠っていた。

まあ、しかし魔法使いの塔がこれほど不便な場所にあるのには理由がある。

何も邪悪な彼らが街の人間から恐れられ、このような僻地に追いやられているわけではない。

魔法を使うには宝石が必要である。

詳しいメカニズムは私の知るところではないけれど、魔法使いは宝石の中に秘められているエネルギーを糧にして魔法を使う。その度に宝石は割れていく。

魔法は非常に高くつく、この世の高級品なのだ。

だから魔法使いは限られた回数しか魔法を使うことが出来ないわけだ。

まあ、そのおかげで、魔法使いなんかがこの世界を支配してしまうようなことから、辛うじて免れているのである。

確かにこの世は、ろくでもない国王たちも多い。でもそれでも魔法使いたちよりはマシに決まっている。

魔法使いが支配する世の中なんて、そんなこと考えるのも恐ろしいことだ。

しかし宝石を消費しなくても魔法を使うことの出来る、限定された場所がある。

それが世界各地に散在している魔法使いの塔の中だ。

どうして塔の中だと宝石の力を借りずに魔法を使えるのか？

その理由は単純だ。その塔の聳え立つ地盤のはるか地下に、鉱床が存在しているからだ。

魔法使いは地下に眠る、宝石の原石の力を借りて、思う存分、心置きなく魔法を使えるらしい。

だから優秀で高名な魔法使いの多くが塔に住んでいる。私の邪悪な魔法使いの友人、プラーヌスが塔を手に入れられてこんなに喜ん

でいるのはそういうわけである。

彼はおそらく塔に閉じこもり、好き勝手に実験に明け暮れているはずだ。そしてその成果を誰かに自慢したくて仕方ないのだろう。

私はおそらく、彼の唯一の友人だ。そういうことで運悪く、私に白羽の矢が立つたに違いない。

第一章 4) 蛮族襲撃

奇妙な叫び声と馬蹄の響きを聞いたのは、馬車の振動に慣れてきてようやくウトウトしかけていたときであった。

しばらく私は夢心地でその音を聞いていたが、これは明らかに何か異常なことが起こりつつあることに思い至って、慌てて飛び起きた。

私は幌から身を乗り出して、村人に叫んだ。

「何事ですか、これは？」

「み、見つかってしまいました。この辺り、彼らは余り出没しないはずなのに！」

必死に鞭で馬を叩いて、馬車のスピードを上げようとしながら、その案内人の村人は答えてきた。

「見つかったって？」

「蛮族ですよ。私たちはもう終わりだ」

「そ、そんな・・・」

弓矢が馬車の幌を突き破り、さっきまで私がもたれていた馬車の骨組みの部分に突き刺さったのはそのときだ。

私は幌から身を乗り出し、弓矢の飛んできた方向を見た。

そこには馬に跨った、上半身裸の逞しい身体をした男たちがこっちに向かって走ってくるのが見えた。

確かにその村人の気弱な意見に同意せざるを得なかった。

その男たちの面構えはどれも見るからに獰猛で、まるで飢えたケルベロスかオルトロスを連想させた。捕まれば私たちは躊躇なく殺され、それどころか丸焼きにされ食べられてしまうかもしれない。

「あれは人間なのか、それとも魔物なのか・・・」

私は呆然とつぶやいた。

「さあ、わかりませんが言葉が通じないことは事実です。逃げるしかないですよ」

村人は私を怨むような声でそう言ってきた。「いや、もう逃げても無駄か」

蛮族の男たちは見事な手綱さばきで馬を乗りこなし、木々がせまり合った林の中を抜け、私たちの馬車の前に回り込んできた。

馬車馬はそれに驚き足を止めた。私も村人も同時に馬車の外に転がり落ちた。

落ちた衝撃で胸の辺りを強打して、息が出来ないことも確かだった。しかしそれ以上に私は恐怖で顔を上げることが出来なかった。

何を言っているのかわからない蛮族たちの言葉が少しずつこっちに近づいてくるのだ。

それだったらまだ、「こいつの足は俺が喰うから、お前は腕をやるよ」とか、「脳みそはみんなで仲良く分けよう」などとはつきり言ってくれたほうがましである。これから何をされるのか把握出来るのだから。

私は思わず、同じように隣で丸くなっている村人の手を握りながら祈りの言葉をつぶやいた。「ルヌーヴォの神よ、これからは一切嘘をつきません。父母も大切にします。だからお願いします。どうか命だけはお助けを！」

しかしそんな私の敬虔な祈りを蹴散らすように蛮族たちの足音が近づいてくる。

そして鞘から剣を抜く、乾いたあの金属音も聞こえてきた。

私は必死にルヌーヴォの神に祈り続けた。どうか命だけは助けて下さい。まだ妻も娶っていませんし、人生の楽しみの半分も体験してません。

だからどうか慈悲を。

いや、もういつそ殺されても構いません。しかしせめて苦しみなくひと思いに殺して下さい。

そのとき薄暗い樹海の中が一瞬、明るく瞬いたのだった。

私は何事が起きたのかと思い、さっきまでの恐怖も忘れて顔を上げた。まるで真昼の砂漠が見える窓を開けたかのように、私の視界は強い光に包まれた。

光に慣れてきてようやく何が起きているのか理解出来た。七、八人もいた蛮族たち全員が、炎に包まれて、のたうちまわっているのだ。

やがて蛮族は、さっきまでそこに存在していなかったかのように、黒い灰になり燃え尽きていった。私はその光景を、砂時計の砂が落ちていくのを見守るように息を殺して見つめていた。

すると背後に何かの気配を感じた。

「この辺りは塔のテリトリーじゃないようだ。宝石が必要みたいだった。君のせいでサファイア、オパールを三つずつ使ってしまったよ」

私は身構えながら慌てて振り向いた。すると黒いローブを着た若い男が、そんなことを言いながらこっちに向かって歩いてくる姿が見えた。

蠟のように白い膚、吸いこまれるように真っ蒼な瞳、銀色の髪が額にかかっているのが見える。

美しい男だ。

喉のところに印象的な傷があるが、それは彼の美しさを台無しにするどころか、むしろ美しさを引き立てる飾りになっている。あるいはただその程度の傷と引き換えにして、十全なる美を手に入れたか契約の印のよう。

その男の手の平からキラキラした粉がこぼれ落ちていた。

おそらく壊れた宝石の細かい破片であろう。その手からこぼれる光のきらめきと相俟って、少し物憂げな足取りでこっちに歩いてくる様はまるで天界に住む翼人の一族のようだ。

しかしこの男こそ、私の邪悪な魔法使いの友人、プラーヌス。

「プラーヌス！ 君のせいで危うく死ぬところだったんだぞ！」

私は思わず彼に叫んだ。

「それが命の恩人に言う言葉か、シャグランよ。僕は君の様子をずっと見守っていたさ」

彼の柔和な唇が開き、そう私に言ってきた。

「はっ？」

「ほら、君は何を握っているんだ？」

彼の言葉に私は自分の手を見た。

私の手はなぜか木で出来た人形を掴んでいた。
確か恐怖の余り、私は祈りの言葉をつぶやきながら、案内人の村人の手を握っていたはずだ。

それなのに村人はどこにもいなかった。その代わり、赤ん坊ぐらいのサイズの木の人形がそこにある。

「どういうことだ？」

「単純だよ、シャグラン。もともとあんな村人はいなかったんだよ。あれは僕が魔法で作りに出した幻さ」

「えっ？」

「あんなに都合の良い案内人がいるものか、僕が君のために用意をしておいたに決まっているだろ」

私を馬鹿にするようにそう言いながら、プラーヌスは持っていた杖で、地面に堆積する朽葉をかき分け、馬車の周りに大きな円を描き始めた。

「戦利品は馬が八頭か。この程度では割に合わないな。でも仕方ない、シャグラン、その馬たちを出来るだけこの円の中心に集めてくれ」

「あ、ああ」

私が苦勞して馬を集めると、プラーヌスはロープの懷から革製の小さな袋を取り出した。そしてその袋の中に指を入れて、宝石を二つほど出してきた。

「ダイヤモンドか」

私はその美しさに見惚れながら言った。

「そうだ。馬車馬と併せて馬が九頭、幌つきの馬車、人間二人、それだけいれば最低でもダイヤが二つは必要だ。飛ぶぞ」

「飛ぶ？」

「僕の塔まで瞬間移動だ」

第一章 5 プライヌスの塔

すぐに視界が真っ暗になり、身体が宙を浮くような感じと、勢いよく落下していく感じが立て続けに襲ってきた。まるで嵐の海に小舟で乗り出したかのようなようだ。気がつくとは私は地面に手をつき胃の中の物を吐いていた。

「大丈夫か、シャグラン、生きているか？」

プライヌスの声が聞こえる。

「あ、ああ、何とかね」

「しかし失敗したよ、宝石が少し足りなかったかもしれない」

「えっ？」

「ほら、一緒に瞬間移動してきた馬が」

プライヌスが指差したほうを見ると、一頭の馬の身体の後ろ半分が無くなっているのが目に入った。輪切りにされたその馬の身体から、内臓や骨や筋肉が露出しているかと思うと、それがドロドロと身体の外に流れ落ちていた。

私はその光景を見て、更に気分が悪くなった。

「あんなことになるのが君じゃなくて良かったな」

「な、何だって？ 僕にもその可能性が？」

「ああ、僕が宝石をケチったせいでね。あともう一つ、アメジストでも混ぜておけばあの馬も無事に飛べたかもしれない」

私は哀れに息絶えていく馬を、ありえたかもしれない自分の姿のように見つめた。

「何てことだよ・・・」

こんな重大なミスを、このような態度で片付けようとするプラーヌスに向かつて、何か辛辣な言葉を言ってやろうと思ったけど、その気力も体力も私にはなかった。

それにふと視界を上に向けた私は、そんな怒りも吹き飛ぶような驚きを覚えてもいた。

「こ、これか？」

「ああ、これさ。我が塔によっこそ」

そう、プラーヌスの塔が、破壊の限りを尽くして立ち去っていく巨人のように、傲然と突っ立っていたのだ。

塔の門がすぐ目の前にあり、それが私の視界のほとんどを覆っていてその全体の像は見えなかったけど、それはとても巨大な塔だ。まるで天に続く梯子のように遥か高くまで伸びている。

確かに塔は黒くて、暗くて、不吉な印象しか訴えかけてこないが、王の住む宮殿や、リヌーヴォーの神々がいる神殿などと比較出来るだけの壮大な建築物である。

「・・・想像していた以上だよ」

「そうか」

プラーヌスは私の言葉に満足そうに頷いた。だけでもちろんお世辞なんかじゃない。私は本当に圧倒されながらその塔を見つめていた。

黒い鋼鉄製の門には細やかな装飾が施されている。幻想上の生き物の姿や、魔法文字が彫られているようだ。

その門を囲むように巨大な悪魔の石像が塔に張り付いていた。まるでその塔に來た客を追い返そうと威嚇しているごとく。

間違いなく、はるか古代に建設されたものだろう、今の建築様式とはまるで違う。それに悪魔の石像などを守り神のように設えているなんて魔法使いの塔しかないに違いない。彼らは魔族の力を借りて魔法を使うのだ。

私が塔の装飾に目を凝らしていると突然、門が開き、小汚い農夫のような男たちが三人ほどトコトコと出てきた。

プラーヌスはその男たちを見ると吐き捨てるような口調で言った。

「おい、馬の死体进行处理しろ。くれぐれも僕たちの今晚の夕食になど出すなよ！ まあ、食べたければ君達が食べるがいいが」

男たちは返事なのか唸り声なのかわからないような声で頷いて、気だるげにプラーヌスから言いつけられた仕事を始めた。

「ずっとこの塔に住み着いている召使いなんだ。まるでドブの中

の生き物みたいな連中だろ？ 何人かを除いて、彼らを全て解雇するつもりだよ。どうも気に入らない連中なのさ」

プラーヌスが私に言ってきた。

「で、でもこれだけの塔を維持していこうと思えば相当な人手が必要じゃないのかい？」

私は巨大な塔を仰ぎ見ながら、プラーヌスの怒りを滲ませた言葉にそう反論した。

「ああ、その通りだ。だから今すぐは無理だけど、いずれ新しい召使いに取り替える。実は君をここにも呼んだ一因もそれにあるんだ」

「はあ？ どういうことだよ、それは？」

「まあ、詳しい話しは後だ。とりあえず塔に入って旅の疲れを癒すといい」

第一章 6 プライヌスからの依頼

塔の中に一步入った途端、明らかに違う空間に足を踏み入れたような感覚がした。

背筋を凍らすような冷氣、目に見えないが何かが近くをウロウロと浮遊しているようで、心が落ち着かない。どこからジロジロと誰かに見つめられている気もする。

今までこれに似た感覚を覚えたのは、子供の頃、誤って墓場に彷徨いこんでしまったときの、あの何とも言えない心細さに近いかもしれない。

確かに壮大で、凄い建物で、プライヌスもこの塔を誇らしげに自慢しているけれど、残念ながら私には墓場か処刑場のような、恐怖と不気味さしか覚えなかった。

ランタンを持った召使いが、階段を上る私たちの足元を照らしてくれている。

石柱や石壁などに細やかな魔法文字が刻まれていて、それがときおり虹色にきらめいていた。

しかしその程度の灯りでは、この塔の暗黒に少しも抵抗出来ない。

この塔に到着したときはまだ日は暮れていなかったはずなのに、塔の中は真夜中よりも暗かった。私は塔を前にしたとき、その外観に心を打たれたけれど、中に入った途端、その感動は完全に消えていた。

「応接の間に食事を用意している」

プラーヌスが階段を上りながら私に言ってきた。「まあ、まだ客を迎えられるように整ってはいないんだけどね、応接の間などと呼ぶのもおこがましい殺風景な部屋さ。この塔は本当に巨大なんだよ。僕はまだ部屋がどれくらいの数あるのか把握し切れていない。そしてどれくらいの人数がこの塔で働いているのかもわからない」

「そ、そうだろうね、普通の城館ぐらいの大きさはあるみたいだから」

そのとき何か冷たいものが私の首筋を撫でていったような感触がしたので、私は思わずプラーヌスのローブの端を掴んだ。

プラーヌスはそんな私をいぶかしげに見たが、気にせずに話し続けた。

「ただでさえ魔法の研究で時間が足りないんだ。僕にこの塔を管理している暇なんてないよ。だから僕にとってこの世で大事な友人である君を、上手く歓待出来ないかもしれない。それでも心を悪くして欲しくない」

「プラーヌスらしくない言葉だね」

何か冷たいものが私の首筋を撫でていったのは気のせいだったようだ。私は気を取り直しながら言った。「君にそう言って貰えるだけで十分嬉しいよ」

「いや、シャグラン、でも君にはこの塔を自分の家だと思って寛いで欲しいのさ」

ブライヌスが自ら扉を開けて、僕を先にその部屋に入れた。大きな部屋だ。応接の間には中央に十人はゆうに座れる大きなテーブルがあり、そこに既にたくさんの料理が用意されていた。給仕人と思しく白い服を着た男が私たちを迎える。料理からは私の空腹を刺激するような香りが漂っていた。

だけどブライヌスの言う通り、確かに殺風景な部屋だった。剥き出しの石壁が寒々しく、広過ぎる部屋が余計にそれを助長している。華やかな飾りといえば、花柄のテーブルクロスと、皿の上にこれでもかと盛られている果実だけだ。それ以外、その部屋には温もりや華やかさなんてものがまるでなかった。

しかし天井の梁に吊るされたたくさんのランプから発せられる灯りのせいで、幾らか私の恐怖が和らいだことは確かだ。

「君が無事にこの塔に到着したこと、僕たちの永遠の友情を祝して、乾杯」

ブライヌスがワインを入ったグラスを掲げた。

「乾杯」

それに余りに空腹だった私はその用意された料理をすぐに食べ始めた。

まあ、はつきり言って美味しい料理ではなかった。カボチャの煮込みシチューや、豚の丸焼きをトマトで味付けたものなど、もちろん食べたことのない料理ではなかったが、何もかもが粗雑で、味付けは濃過ぎるし、素材にも新鮮さが感じられない。

もしこんなにも空腹でなかったら、食は遅々として進まなかっただろう。

しかしブライヌスの心遣いは、この料理の豪奢さから十分に伝わ

ってくる。

私はいつの間にか随分リラックスし始めていたと思う。
かなり高価なワインも私のリラックスに寄与していただろう。
ワインに料理人の腕は関係ないから。

「美味しかったよ」

「そんな社交辞令はいい、大した味じゃないのはわかってるさ。
僕はもうこの料理に辟易しているよ」

プラーヌスは白いハンカチで口を拭きながら、少しうんざりしたように言った。

「いや、でも僕は嫌いじゃないけどね、毎晩、姉が料理を作ってくれているのだけど、彼女の料理の腕も酷いものだからさ」

「新しい料理人を探しているんだ、宮廷かどこかで働いている、この辺りで一番の腕利きの」

「ああ、それはそれで良い考えだと思うけど」

私は果物を食べながらそう返事した。果物のほうもあまり甘くない、新鮮さに欠けていたが、料理よりは悪くない。口直しにはなる。

「料理人だけじゃない。優秀な建築家や家具職人、あるいは部屋をコーディネート出来る人間も欲しい。この塔には永く住むつもりだからね、出来るだけ快適で清潔なほうがいいに決まっている」

「それはそうだね」

「召使いたちだつて僕に忠実であるのはもちろん、心地良い印象を受ける人間たちを雇う。とにかくありとあらゆる分野において一流の人材を僕の下に集めたい。まあ、それにはかなりの手間暇がかかりそうだ。でもワクワクするだろ？　そうやって自分の理想とする住まいを作れる機会なんて滅多にないものさ」

確かに楽しそうだ。そういうことが出来る機会なんて、王が、大成功した商人か、魔法使いぐらいにしか訪れないに違いない。

しがない絵描きの私には永遠にそんな機会は訪れることはないだろう。

「それで最初の話しに戻るんだ」

プラーヌスが言ってきた。

「うん」

「そもそもどれだけこの塔に住んで、働いているのか、この塔にどれだけ部屋の数があるのか、そしてどれだけの人材が必要か調べなければならぬ」

「ああ」

「その仕事を君に頼もうと思って、僕は君をここに呼んだのさ！」

プラーヌスはまるでとても誇り高い、荣誉ある役割を騎士に授ける王のように、自慢げに口調でそんなことを言ってきた。

「は？」

私は自分の耳を疑った。

それ以上にプラーヌスがどういう神経をしているのか信じられない。プラーヌスは当然、私が喜んでこの仕事を受けるといった顔で見てくるのだ。

「えーと、そ、それはどうということかな？」

私はそんなプラーヌスの表情を呆然と見つめながら尋ねた。

「別に難しいことを言ったつもりはないんだけど」

プラーヌスは再度私にワインを勧めながらそう答えてきた。

「で、でも僕には街に仕事があるし・・・」

「仕事といっても絵描きだろ？ そんなもの時間があるときに描けばいいではないか。それより僕のこの塔を円滑に運営する手伝いをして欲しい」

「で、でも、僕は肖像画を描いているわけで、それは街でしか出来ない仕事だから、どこでもいいという訳にはいかないよ」

「わかった、シャグラン、だったら言い方を変える。確かに君はしばらく絵描きの仕事を休む必要があるかもしれない。だけど絶対に損はさせない。給金は弾むから君の家族に迷惑を掛けることはないし、ここでなら君は、普通の人間が決して送れないような豪華な生活が遅れる。君の人生は一変するさ！」

「いや、もちろん僕だって出来る限り協力はするよ。でもそういう仕事は他の人間でも出来ると思うし、それにしばらくと言っても、

そう簡単に終えられるとも思えない。やはりこの仕事は僕向きじゃないよ」

私はそう言った。まあ、しごく当然のことを言っただけだと思う。だって私の都合を踏み躪って、一方的に無茶なことを言っているのはプラーヌスのほうだから。そんなことは誰が聞いてもわかることだろう。

しかし私の言葉にプラーヌスの顔色が変わった。

「そうか、君はそんなに、僕の塔で暮らすのが嫌なのか？」

プラーヌスは怒っているとも、落胆しているとも言えない口調で言ってきた。

「・・・えっ？ いや、そういうわけではないよ、ただ」

「本当に残念だ。もうこれで僕たちの友情はおしまいだね」

「・・・い、いや、早とちりしないでくれよ、プラーヌス。僕はただそんなに長い間、仕事を休むわけにはいかないと言っているだけで、何もこの塔がどうか、友情がどうかなんて言っているわけじゃないんだ」

「いいや、君は僕たちの、永遠だったはずの友情を壊そうとしている」

「・・・プ、プラーヌス、やめてくれよ、そんな子供みたいな態度」

「仕方ない、だったら君を生きて帰らせるわけはいかないな」

プラーヌスは私を捕えるように見つめていった。

「な、何だつて？」

私は口をあんぐりと開けて、彼を見つめた。「ちょ、ちょっと待ってくれよ、そんな勝手な話があるかよ」

私は思わず笑い出してしまった。そう言えばプラーヌスは昔からこういう類の冗談が好きな奴だった気がする。

「なあ、プラーヌス、僕たちは友達だよな」

私はプラーヌスを諭すように言った。

「ああ、さつきまではそうだった。友達だから君に頼んだんだよ、こんなことは信頼する人間にしか依頼出来ない。だってこの塔の全てを晒してしまうわけだからね」

「うん、僕もそう思う。でもプラーヌス、これは友達に対する態度じゃないよ」

「その通りだ。君が僕の依頼を断ったとき、友情は終わってしまったんだから」

プラーヌスのその言葉に私は一瞬言葉を失ったが、ここで黙っていれば本当に何をされるかわからないと思って必死に言った。

「・・・と、とにかくこんな我儘は間違っているよ。自分の要求

が通らないから殺してしまうなんて、どんな傲慢な国王だって許されることじゃない」

「まあ、僕は別に君を説得するつもりはない。嫌なら死ねばいいんだ」

そう言ってプラーヌスは愛用の魔法の杖を引き寄せた。

そして何か私には理解出来ない魔法の言葉をつぶやいた。

すると突然、私の座っている椅子の両脇の床に黒い穴が空き、そこから大鎌を持った、頭部がカボチャで身体は重騎兵の鎧を着たバケモノが二匹現れた。

「な、何だよ、これ！」

私はおののく様にして、席から立ち上がった。

「死刑執行人さ。君の首を切るために魔界から呼び寄せた」

カボチャの頭をしたバケモノの一匹が私の腕を掴んだ。

そいつは凄い力で私を掴んで離さず、私は一步も身動き出来なくなった。

それにそいつの手はまるで冬の凍結した地面のように冷たい。

私は本物の「死」が自分のすぐ近くに来ているのを嫌でも実感した。そしてもう一匹のほうが後ろに回り、その大鎌を振り上げた。

「わ、わかった、やるよ、プラーヌス！ 君に言いつけられたその仕事、やる」

私は仕方なく、悲鳴まじりそう叫んだ。

「何だよ、その仕方なくやらされているって態度、気に入らないな」

「・・・で、でもプラーヌス、君のやり方は強引過ぎる、こんなんじゃ脅しと同じさ」

「君が喜んで、自ら積極的にやってくれないとなれば、君に頼む意味が半減する。この仕事はかなり根気もある。時間もかかる。一切手を抜かないと約束してもらわないと」

「や、約束するよ、だからこのバケモノを早くどっかにやってくれ」

「本当かい？」

「本当さ！」

「そうか、きみがこんなにこの仕事を引き受けたというなら、君に頼むことにするか」

そう言っただけの邪悪な魔法使いの友人、プラーヌスは満足そうな笑みを浮かべた。

ようやくカボチャの頭をしたバケモノも私の腕を離した。私は全身の力が抜けて石畳の床に座り込んだ。

「とりあえず君はこの塔の見取り図と、全人員の名簿を作ってくれ。この中で使える奴と使えない奴をより分けてくれ。それとこの塔の機能を維持していくためにどれくらいの手が必要かも見積もってくれ」

プラーヌスは何事もなかったように平生と話しを進め出した。

「わ、わかったよ」

「僕はまだまだやらないといけないことがたくさんある。まだこの塔を完全に自分のものにしていない。ここを支配している魔族との契約が済んでいないし、それにこの塔の番人を雇わなければいけない。ここに来る途中、君の乗っていた馬車を襲ってきた蛮族たちがいただろ？ 奴らがこの塔にも定期的に襲撃をかけてくる。この塔をしばらく管理していた魔法審議会からその情報を聞いていたから、あらかじめ街で傭兵を雇ったんだが、まるで役に立たなかった」

「でもあんな蛮族たち、君の魔法ならわけもなかったじゃないか」

私はまだプラーヌスへの何とも言えない感情がしこりのように残っていたが、それを振り払うためにも、いつも口調でそう言った。

「それはその通りだが、朝早くから叩き起こされて奴らの相手をするのはうんざりなんだ」

プラーヌスは本当にそれが疎ましいと言うふうには、苛立ち気に顔を歪めた。「それに前のこの塔の主が早死にしたのも、この蛮族たちとの度重なる戦いのせいだったという話も聞く。連日、魔法を使い続けると寿命を縮めてしまうものだからね」

「はあ・・・」

「それとある有名な騎士をこの塔の番人に雇うつもりなんだ。そのための準備や何かに色々と手が掛かるのさ」

「ちょ、ちよつと待つて、騎士を番人だつて？」

私はプラーヌスの突飛な考えに、彼の正気を疑いながら言った。
「それはちよつと贅沢過ぎないか。まるで魚を捌くのに王家伝来の宝剣を使うものじゃないか。だいたい番人をやりたがる騎士なんているわけがないし」

「いいや、探せばいるもんさ」

プラーヌスは私の意見も当然だと感じて頷きながらも言った。「しかもとても優秀な騎士でね。知ってるはずだ、シャグラン、君も確か名前はバルザ、隣国パルの騎士団団長だったかな」

「な、何だつて？」

プラーヌスはさりと恐るべき、いや、とても尊い名前を口にした。

バルザ殿と言えば、既にたくさんの吟遊詩人たちが詩にしている、生きる伝説の英雄と言つてもいい騎士ではないか。

槍を持てば戦場では天下無双、兵を率いても彼の前に敵は無し。もちろん生きる伝説と言つてもまだ国の重役を担っているはずだ。パル国の騎士団団長で、その国の軍の最高司令官か何かだったと思う。

「そ、そんな人がこの塔の番人をするわけないじゃないか」

「それがどうにかなるものなのさ。知恵と工夫次第だね」

プラーヌスはそう言って、とても意味ありげに、不敵な笑みを浮かべた。

「知恵と工夫・・・？」

「そう、知恵と工夫、そして魔法のスパイス少々。とにかくこれから忙しくなる。君にもその知恵と工夫の一端を担ってもらってもいいんじゃない」

「あ、ああ、わかったよ」

私はもう何もかも諦めるように言った。「だけどその前に家族に手紙を書いておきたい、しばらく家に帰れないだろ？」

「いいだろう、使いの者に届けさせよう」

「良かった、でもそんな信用出来る召使いがここにいるのかい？」

「いや、そういう人物を君に探してもらったためにも、この仕事を頼んだんだよ」

プラーヌスは当然のことのようにそんなことを言っただけで席を立った。「東の塔に君の居室を既に用意させてある。そこが気に入らなければ違う部屋を使ってもいい。家具やベッドが気に入らないなら、倉庫にあるものを勝手に使ってくれ。倉庫の責任者には、僕に仕えるように君に仕えるよう言っておく」

「ああ、わかった」

私もプラーヌスに続いて部屋を出ようとした。

するとまだ私の隣に寄り添うように立っていた、あのカボチャの頭をしたバケモノが、あるうことが私の後についてきた。

「なあ、それとプラーヌス、もう一つ頼みがあるんだけど・・・」

「何だ？」

プラーヌスがロープを翻して、面倒臭そうに振り向いた。「君も要求が多い男だね」

「・・・いや、ただこのバケモノをさっさと消して欲しいんだよ」

「ああ、これは君に何かあったときのための、君の身を守ってくれる衛兵だと思えばいい。それにこれがいたら威嚇にもなるだろう。塔の召使いたちも君の言うことを聞きやすくなるに違いない。言うことを聞かない奴がいれば、こいつに命令して殺してもいいよ」

私はむしろこのバケモノか、あるいはプラーヌスこそをどうにかして殺してしまいたい気分だったが、仕方なく彼の言葉に頷いた。

「でもこのバケモノが寝室にまで来るのは御免だよ」

「だったらドアの前に立たせておくがいい。君の命令に従うようにしてある」

もう要求はないね！ プラーヌスは少し苛立った声でそう言って、自分の部屋がある西の回廊に向かって歩いていった。

私はそれと逆、東の回廊のほうに歩く。

カボチャの頭をしたバケモノたちと、足下を照らすランタンを持った召使いも私についてくる。

「そうだった、シャグラン」

プラーヌスが角を曲がりかけている私に呼び掛けた。「僕は昼過ぎまで眠っている。夕方、謁見の間で会おう。それまで好きなように過ごしてくれ」

「ああ、そうする」

わかったよ、プラーヌス、何でも君の言う通りにする。

私は余りに腹が立ち過ぎているせいか、自分にあてがわれた部屋に向かう途中、塔の暗闇にも、その不気味な雰囲気にも、先程までに感じていた恐怖は覚えなかった。

そんなことよりもプラーヌスの態度に腹が立って仕方なかったのだ。

この悔しい思いをどこに持っていけばいいのかわからなくて、今夜は到底眠れそうにないと思っていたけど、しかし長旅の疲れと極度の精神的な疲労で、ベッドに横になった途端、私は眠っていたようだ。

気がつくと朝になっていた。暗黒ばかりが支配していた塔に、かなりの量の太陽の光が差し込んでいる。

こんな塔の近くでも鳥は生息可能なようで、私の街でも聞こえるのと同じような長閑の鳥の鳴き声もある。

私はそんな鳥の鳴き声をベッドの上で聞きながら、見馴れない天井をしばらく見つめていた。

すると何だか笑いたくなってきた。

どうしてこの私がこんな面倒な仕事を押しつけられないといけな
いんだ？

いや、そもそもどうして私はこんなところにいるんだ？

そんなことを考えていると自分の運命が面白くて仕方なくなってきたのだ。

笑いたくなっただけでなく、実際、私は大声で笑ってやった。

多分、もうどうにでもなれといった気分になりかけていたんだろう。

第二章 1) 塔、仕事始め

「愛しの姉、エリーサよ、とても面倒なことになってしまったよ。てつきりプラーヌスは、彼が購入したばかりの塔を、ただ私に自慢したいばかりに、こんなところまで私を呼び寄せたんだと思っていただけ、少し当てが違ったようなんだ。

なにやら彼は非常に困っているようなんだ。

私は友人が困っているのを見過ごせるような男じゃない。母も姉さんも、私のそんなところを誇りに思っていてくれるのだから？ そういうわけでしばらく家に帰れそうにありません。

生活費は私の貯えを切り崩してそれに当ててくれて構わない。出来れば早いうちに幾枚かの金貨を送るよ。

それが無理でも、今の貯え以上の報酬をプラーヌスから必ず貰う予定だから何も心配することはないさ。この仕事が終わればどこか南の島にでも遊びに行けるくらいの余裕が生じているはずですよ。

とにかく私は困っている彼の仕事を手伝って上げることにしたんだ。

その仕事はどうやら、彼の唯一の友人である私にしか出来ない仕事のようなので、何も嫌々やらされるわけになったわけじゃないから、そこところは気にしないでいいです。

だからそういうわけです。しばらく会えないかもしれないが、お互いくれぐれも身体に気をつけて、この不条理な人生を出来るだけ上手く立ち回ることしよう。そのためには少しばかりの我慢も必要なはずだよ。

母には姉さんから上手く言っておいて下さい。別にこの手紙を直接見せても構いません。

我が家族に永遠の愛を誓う、シャグランより」

私は姉についた小さな嘘に心を痛めながら、手紙に封をした。いや、もしかしたら案外、嘘をついていないかもしれない。ところどころ思わず本音が出たところもあったかもしれない。

たとえば「お互いくれぐれも身体に気をつけて、この不条理な人生を出来るだけ上手く立ち回ることによろ。そのためには少しばかりの我慢も必要はずだね」などという箇所なんてそうだ。その考えはまさに今の自分に言い聞かせるようなフレーズ。

手紙を書き終えた私は、少しでも早くプラーヌスから依頼された厄介な仕事を終えるため、朝から仕事に取り掛かることにした。

扉を開けると、カボチャの頭をしたバケモノが二匹、昨夜と同じように不気味な表情で立っていて、私は驚きで心臓が止まりそうになった。

野ウサギのように飛び跳ねた心臓の鼓動を何とか沈めて、私はバケモノたちに言った。

「ここで待っている、別に僕についてこなくていいから」

そう言って二、三歩歩いて、ふと私は立ち止まった。

「……いや、でもこの塔に何がいるかわからないよな」

もしかしたら、こいつみたいなバケモノがいて私に襲いかかってくるかもしれない。皮肉なことに今のところ、このカボチャの頭をしたバケモノだけが私の唯一の味方なのだ。

「……やっぱりついて来い」

私はその二匹のバケモノを従え、塔の見回りを開始することにし

た。

回廊は相変わらず薄暗かったが、高窓から差し込んでくる朝の新鮮な太陽のお陰で、ランタン無しで十分歩けそうである。

しかし少し日が沈むと真っ暗になるだろう。この後、またここを通ることを思うと私は暗然とした気持ちになる。

「少なくともこの通路にはランタンか、蠟燭立てを設えてもらおうかな」

カボチャのバケモノ以外そこに誰もいなかったが、私は声に出してつぶやいた。「ここが明るくなれば、いくらかこの暗鬱な塔も愛せるかもしれないし」

そんなことを考えながら長い回廊を歩いていると大きな鋼鉄製の扉の前に到着した。そこを開けると広大なホールが広がっていた。

昨夜もここを通って応接の間に到着したはずだが、昨夜はそのホールを観察する余裕はなかった。私は改めてその部屋を見回した。かなり広大な部屋である。いや、部屋というより、やっぱりホールと呼んだ方がしっくりくる。

高い天井を振り仰ぐと、月と星が描かれた天井画が見える。四方に聳える石造りの壁は頑丈そうで、冷たく無言のまま聳えている。

そのホールにはほとんど装飾的な飾りはなく、ただ石と冷たさだけで出来上がったかのような印象だ。

但しホールを囲むように数十もの人の形をした石像が並んでいた。しかしそれは部屋を飾るためというよりも、むしろ部屋を陰鬱に演出するために存在しているかのよう。

その石像を拭き掃除している男が四、五人いた。

この日、私が最初に遭遇した召使いたちだ。

その中に昨日、ランタンを持って居室まで案内してくれた召使いもいるようだ。顔は覚えていないのだけど、足を引きずるように歩く姿に記憶がある。

「やあ、おはよう」

私はその召使いに話しかけた。

「昨夜はよく眠れたよ。僕はどっちかっていうと旅先なんじゃ眠れなくて苦勞するほうなんだけど、昨夜は珍しくぐっすりさ」

私はちよつと不自然なくらい馴れ馴れしく話し掛けた。

何といつても私はこの塔の主の客なんだ。きつとこれくらい打ちとけたほうが向こうもリラックスするに違いないと思ったからだ。しかし彼のほうは、どうして自分に話しかけて来るんだって感じで、いぶかしげに私を見ている。肌は浅黒く、髪の毛はくせ毛で、目が細い。おそらく南のほうの出身に違いない。動作はノロノロとしているせいでもつと年老いているのかと思つたが、近くで見ると顔立ちは若い印象だ。

「そんなに緊張しなくていいよ。ただ君の名前を教えて欲しくてね」

私は羊皮紙を取り出し、インク壺を床に置いて、羽飾りのペンをそれにひたした。

「ここで働いている人たちの名簿を作りたいのさ。・・・えーと、それで君の名前を知りたいんだけど」

しかし彼はにらみつけるような視線のまま私を見るだけで、何も答えない。

「・・・あれ、僕の言葉が通じてないのかな」

問い掛けるようにそう言っても反応がなかった。

「僕に何か不満があるのか？ いや、やっぱり言葉が通じないだけだよ・・・」

私は黙り続ける彼としばらく見つめ合った。だけどやっぱり彼からは何の反応も返ってこなかった。

「仕方ない、君のあだ名は『ダンマリ』にしておく。もう仕事に戻っていいよ」

私は用意してきた羊皮紙にそう書いて、彼の前を去った。

そして一応、その他の召使いたちにも近づいた。彼らは作業の手を止めて、私と「ダンマリ」の遣り取りを見守っていたようであった。

そんな彼らに向かって、私はさっきと同じような感じで話し掛けた。しかし案の定、他の召使いたちも私の言葉が通じないようであった。彼らも「ダンマリ」同様、私を黙って見つめてくるだけ。

この調子なら名簿作りですらかなり手間取りそうだ。まず通訳を探さないと仕事が一歩も進まないわけなのだから。

ブラーヌは何という面倒な仕事を私に押し付けてくれたことか。私は肺にある空気を全て吐き出すような、深いため息を吐いた。そして仕方なく彼らにも適当にあだ名をつけて、そこを後にした。

第二章 2) 陰鬱な召使いたち

一段と気分を落ち込ませながら、私は北の回廊に続く扉に向かった。確か昨夜、プラーヌスの説明では、そっちに厨房や召使いの居住室などがあると言っていた。

ここでまず通訳が出来る人間を探そう。

出来ればハキハキと喋って、明るく、この塔の事情に通じている、頭の良い人間、ベテランの召使いがいい。

だけどこの陰鬱な塔にそんな人間がいるだろうか。

さっきの召使いたちとの接触で、私は絶望を感じてしまった。言葉が通じないのはまだしも、あんな陰鬱なタイプしかないのなら私はますますこの塔にうんざりしてしまいそうだ。

まあ、しかしそんなことも言っていられない。

私は自分の仕事に協力してくれる人間を探さなければいけない。さもないと何も前に進みはしないだろう。このままではいつまでも自分の街に帰ることが出来ないではないか。

北の回廊は、私の客室があつた東の回廊より作りが古いのか、それとも手入れがなされていないのか、石壁には欠けた箇所があつたり、苔が生えたりしている。

しかし東の回廊では感じられなかったある種の匂いがあつた。

それは生活の匂いというか、街の匂いというか、人間の匂いというか。上手く説明出来ないけど、決して不快な匂いではなかった。何となく安心出来るような匂いなのだ。

何だかその匂いを嗅いでいると空腹感を覚えた。

そういえばまだ朝食を食べていないことを私は思い出した。ついでに厨房かどこかで何か食べるものを頂こう。

しばらく進んでいくと回廊の奥からざわざわした話し声が聞こえてきた。

少し歩調を早めると召使が大勢集まっている広場に到着した。

その真ん中には泉があり、召使たちはその縁に腰掛けて会話を交わしながら洗濯物を洗ったり、食器を洗ったりしている。

その多くが女性だった。若い女性もいれば中年の女性もいる。

しかし残念ながらまた会話が聞き取れない。

その顔立ちから判断する限り、どうやら中央の塔にいた召使たちと同じ国の出身のようである。

私の存在に気づいて、召使いたちは何やらざわめいた。

あるいはカボチャのバケモノを見て驚いているのかもしれない。

私は敵意が無いことを示すようにカボチャのバケモノに停止を命じ、自分だけ彼女たちに近づいた。

「知っているかな、僕はこの塔の主に招かれたシャグランという者なんだけど、彼に頼まれてこの塔で働く人たちの名簿作りをしている。僕の言葉は通じているかな？」

無反応だ。これだけいるのに自分は言葉がわかると名乗ってくる者もないようだ。

だけどさっきの男性たちと違って、その意味不明な言語で、向こうからも私に何か話し掛けてくれた。

「残念ながら僕も君たちの言葉がわからないんだよ、誰かわかる人はいないかな？ 出来ればそういう人を呼んで来て欲しいんだけど」

私は無理を承知に、身振り手振りでそんなことを伝えてみた。しかしそれが伝わらなかった結果なのか、それとも協力する気がない

せいなのか、動く者は誰もいなかった。

「うーん、やっぱり駄目か・・・」

私は彼女たちにこだわるよりも先を急ぐことにした。

まず通訳出来る人間を探すが先決なのだ。こんな状況では名簿作りなど捗るわけがない。

召使いたちが集まっていたその広場から更に奥に通じる通路があった。

私はカボチャのバケモノを連れ、そっちに歩みを進めようとした。するとさっきまで自分の仕事を黙々と勤めていた召使いたちが、慌てて立ち上がり、私の前に立ちはだかった。

「な、何さ？」

私が彼らの行動に戸惑っていると、召使いたちは手を振ったりしながら何かを言ってくる。

「そっちには行つては駄目だと言つのか？」

もしかしてこっちは彼らの居住スペースかもしれない。それなら彼女たちが怒るのも無理はないだろう。

私が理解を示すように頷いて、そっちに行くのを諦めた。するとそれ以上、彼らは何も言つてこなかった。やはりそのようだ。

この広場には私が通つてきた中央の塔に通じる回廊と、恐らく召使いたちのプライベートルームに通じる廊下と、その他にも一つは階段があった。

私に残された選択肢は必然的にそこしか残されていない。上りと

下りがあるが私は上りの階段を昇った。

第二章 3) アビュ登場

外から見たときは近過ぎてその塔の全貌がよくわからなかったが、少し中を散策してその構造がいくらか把握出来た。

まず中央にメインの塔があり、その北と西と東それぞれに回廊がまっすぐ伸びている。

北の回廊が召使いたちの居住スペースや厨房など、東の回廊が応接の間や、私が寝た客間がある場所だ。そして西がプラヌスの私室。その三つの回廊を支えるため、その中央の他に三つの塔が建造されているようである。

私は今、その北の回廊の、それを支えるための塔の螺旋階段をいま昇っているようだ。

少しすると、決して香ばしいとは言えないが、私の空腹を刺激するような匂いが漂ってきた。

どうやら厨房が近いみたいである。まだ階段は上に続いていたが、私は匂いのするほうに歩みを進めた。

するとすぐに多くの食卓が並んだ食堂に辿り着いた。今は無人だが五十人は一度に食事出来るくらいの食卓が並んでいる。狭い部屋ではなかったがそのせいでかなり手狭に感じる。

厨房はその奥にあった。

食器がカチャカチャなる音が聞こえるから誰かいるらしい。そっとそこを覗いて見てみた。どうやら若い女性のようなだ。

私はカボチャのバケモノたちを入口の前に残し、咳払いしながらゆっくりとそこに近づいていくと、彼女も私に気づいてこっちを見てきた。

「えーと、僕はこの塔の主に招かれたシャグランという」

私がさっきから繰り返している挨拶をしようとしたら、向こうから語りかけてきた。

「あつ、昨夜来たお客だね」

「えっ、そう」

ようやく言葉が通じたというのに私はそれにすぐ気づかなかった。彼女も、私やプラーヌスのような白い肌をしていなかったから、異国人かと思い込んでいたのだ。

しかしよく見るとさっき出会った召使いたちとも顔立ちが違うようだ。

髪は黒く、眼の色も黒い。肌は黒くも白くもない。歳は若そうだ。髪は短くて、動きが敏捷な小鹿のような印象。

「どうだった？ 昨夜の食事？」

私が更に近づいていくと、その若い女性は私に少しも物怖じしないで馴れ語りかけてきた。

「昨夜の食事？ ああ」

そういえばあれは酷いものだった。昨夜の不満を彼女にぶつけようかと思ったが、ふとある予感を感じたので自制した。

「えーと、まあ、美味しかったよ」

「そう、良かった。まだ全然慣れなくて大変だったけど」

女性は胸を撫で下ろすようにそう言った。

やはり料理は彼女が作っていたようだ。嘘について良かった。

せっかく言葉が通じる相手に出会ったのに、そんなことで心が通じなくなるのは避けたいところであつたから。

「でも慣れないって、料理の経験が少ないんだ？　じゃあそれまでは誰が作ってたんだい？」

私はふとそんな疑問を感じて彼女に問い掛けた。

「それはゲオルゲ族の料理人がちゃんと作ってた。でも塔の主が変わってからは、ケチなことに自分たち一族のためにしか作ってないんだ。まあ、それでも私と同じくらいの腕だったけどね、大して美味しくなつたよ」

彼女は強がるようにそう言った。

そのせいなのか、最初の印象よりも更に子供っぽく見えてきた。いや、実際、思った以上に若いかもしれない。子供っぽく見えるというよりも、本当に子供と呼ぶしかない年齢のようだ。

「ゲオルゲ族って？」

そんなことよりも彼女の言葉に引っ掛かったフレーズがあつた。

「下にいた連中よ」

「ああ、彼らが、えーと、何だっけ？」

「ゲオルゲ族」

「そう、ゲオルゲ族ね。でもどうして彼らは料理を作るのを辞めたんだろうか？」

「それは今の新しい塔の主が舐められているからよ」

「舐められている？ あのプラーヌスが！」

私は思わず驚いて、大きな声を上げてしまった。

「うん、だってやけに若い人が主として来たからね。前の主は凄く恐くて、ずるい老人だったから彼らも渋々従っていたけど。基本的にここで働いている人たちは、何代も前からここで生まれて育ってきた一族だもん、この塔を自分のものだと思っている」

「なるほど」

プラーヌスを侮るなんて、中々恐いもの知らずの連中だ。しかし彼らはその態度を後悔することになるだろう。プラーヌスは彼らを追い出すことに決めている。彼らに舐められていることを知れば、尚更情けを掛けることはなくなるに違いないのだから。

「じゃあ君もここで育ったわけか」

とりあえずゲオルゲ族のことは横に置いて、私は更に話しを進めた。

「うん、まあ、でも私たちは比較的最近で、お祖父ちゃんの代かららしい。ちょうど三代前の主のときから働き始めたみたい」

「ということとはゲオルゲ族だっけ？ 君は彼らの言葉はいくらか理解出来るのかな」

「出来るよ、もちろん」

「そうか・・・、じゃあ、君か、君の知り合いの誰かに頼みたいことがあるんだけど」

私は手近にある椅子に坐りながらそう言った。「いや、その前にすぐ解決して欲しい問題があるんだった」

彼女は私と会話を交わしながらナイフで果物をむいたり、竈の炎の調節などをしたりして、甲斐甲斐しく働いていた。

プラーヌスの遅い朝食か、それとも自分たちの昼食の準備をしているのだろうか。いずれにしてもそれを見ていたら、私は自分が空き箱のように空腹であることを思い出した。

「昨日の夜から何も食べてないんだ。出来ればパンとコーヒーが欲しいんだけど」

「ああ、そう言えばお客さんの朝食忘れてた！」

彼女はハツとして口に手を当てた。「ちゃんと用意するように言われてたのに。私ってそういうところあるんだよね」

彼女は慌ててバタバタと動き始めた。どうやらすぐに私の食事の準備に取り掛かってくれるようだ。しかし慌てて動いたせいで、棚の上の物を落っこしそうになっている。それは落とさなかったようだが、その代わり床に置いていた樽を誤って蹴飛ばした。

まるで飛び方を覚えたばかりのカササギガモのような騒々しさだ。

しかし何だかその様子を見ると、彼女に好感を抱かないわけにはいかなかった。私は思わず顔をほころばした。

「じゃあデザートに林檎もおまけしていくよ。昨夜、パパが村から買い入れてきたばかりなんだ」

彼女は蹴飛ばした樽を元通りに戻しながら言ってきた。

「ああ、それは嬉しいね」

出来ればハキハキと喋って、明るく、この塔の事情に通じている人間、そんな人がいれば是非通訳を勤めて欲しい思っていたのだけど、どうやら簡単にそんな人間が見つかったようだ。

私は彼女を見ながらそう思った。

第二章 4) 通訳兼助手

厨房は広々としていた。

この塔にいる人間たちの胃袋を満足させるためにはそれぐらいの広さが必要なのであろう。石で出来た竈の数が四つも五つもある。木製の大きなテーブルには、まな板や陶器の素朴な作りの皿や、ナイフが置いてあり、そこでなら同時に何人もの人間が調理出来る感じだ。

私は出入りしたことがないが、いわば都などにある大きな宿屋の厨房や、宮殿の厨房はこのようなところなのであろう。

全体的に窓の少ないこの塔にしては珍しく、この厨房にはいくつか大きな窓があった。そのせいで日当たりも風通しも良く、普通の街の民家にいるような快適さを感じるほどだ。

その厨房の奥、食堂と逆のほうにもう一つ部屋があつて、そこにはたくさんの数の食器やグラスが並べられているようだ。

彼女はその部屋から、凝った装飾が施された陶器を持って戻ってきて、そこにコーヒーをいれてくれた。

彼女の名前はアビュという。

祖父と祖母、そして父の四人でこの塔で生活しているらしい。

母とは離れて暮らしているようだ。母はもともと近くの村の出身で、彼女が幼い頃、この塔での生活に疲れて出ていったという話だ。

「それは寂しいね」

「まあ、出ていったきり、会ってないからね」

素直にその寂しさを認めるのは嫌なのか、アビュは複雑な笑みを浮かべた。

朝食を食べながら、私はアビュの個人的な事情だけでなく、この塔の詳しい状況も訊いた。

相変わらず、パンと一緒に出してくれたベーコンには何の味付けもされてなくて、味のほうはイマイチだったが、その会話で私が欲しかった情報はいくらか手に入った。

この塔で働く召使いたちの多く、七割ほどが、私がさつき下で大勢出くわした召使い、いわゆるゲオルゲ族らしい。

ゲオルゲ族というのは、ここからはるか南の島国に多く住んでいる民族で、どういう事情でそんな南の国からこの塔に連れてこられたのか、もはや昔のこと過ぎて事情はわからないらしいが、彼らはこの塔に住み着いた一族では最古のようだ。

召使いたちの間でもヒエラルキーがあるらしい。

最多数のゲオルゲ族が一番上で、彼らの下にその他三割の様々な国から来た召使いがいる。ゲオルゲ族がやりたがらない仕事を、その残りの三割がやらされているようだ。

しかしそうは言っても実質、ゲオルゲ族なしではこの塔を円滑に運営するのは不可能なよう。

「なるほど、それじゃあ尚更、通訳が必要だな」

私はアビュの言葉に相槌を打ちながらそう言った。

「そうかもね、ゲオルゲ族の言葉は独特だから」

アビュは私との話しに夢中になって完全に料理の手を止めていた。何だか彼女の仕事を邪魔している気がしたが、私は更にアビュに尋ねた。

「この塔の事情に詳しい人間と言えば誰が思いつくかな？ たとえば召使いの中のリーダー格的存在入るかどうかわりたいんだけど」

「うーん、リーダーみたいなのは特にいないと思う」

アビュは思い悩むように、ショートカットの髪を何度か揺らしながら言った。「それと、この塔の事情に詳しい人も思いつかないねみんな、自分のテリトリーのことにはしか興味がない人ばかりだと思うけど」

「たとえば君のお父さんとかお祖父さんとかは？」

「パパもお祖父ちゃんも詳しいと言うほどじゃないと思うけど。でも詳しいってというのは例えばどういうこと？」

「詳しいっていうのは、この塔を維持していくためにどれくらいの人員が必要かってことがわかっているとか」

「ああ、そんな人はいないんじゃないかな。今、多過ぎることは確かだけど」

「じゃあ、この塔の見取り図を持つてる人は？」

「多分ないと思う。必要なら自分で作らないと」

「でもざっと見て、部屋はどれくらいあると君は思う？」

「さあ、見当もつかない。地下牢もあるって噂だし、主人のいる西の塔は行ったことないし、私たちみたいな下っ端の召使いが立ち

入れない倉庫もあるし」

「そうか・・・」

ってことは結局、地道にこの塔を散策して、見取り図を作り、そして人員名簿を作りなどしなければいけないようだ。

私はその面倒な作業を思って大きなため息を吐いた。やはり簡単に終わる仕事では無さそうである。私が街に帰れる日はまだ遠い。とはいえ朝に比べたら大きな前進をみせたことは確かだ。ため息を吐いた私をいぶかしげに見ているアビュに言った。

「食事は毎食、君が作ってるのかな？」

「うん、私たち家族の分と、この塔の主の分、そしてこれからはあんたの分をね」

この言葉でようやく思い出したのか、アビュはまたナイフと野菜を手に取った。

「お父さんは手伝ってくれないんだ？」

「他の仕事で忙しくてそれどころじゃないよ。父はもともと村や町まで食事を買い出しに行くのが仕事だから」

「じゃあお祖父ちゃんやお婆ちゃんは？」

「たまに手伝ってくれるけど、もうかなりの高齢だし。それにお婆ちゃんと一緒に料理するとうるさいんだ。野菜の切り方がなっていないとか、味付けがどうか。お前は料理が向いてないってまで言うってくるし」

「わかった」

私は彼女に同情するように頷きながら言った。「じゃあプラーヌに言ってこの仕事を誰か代わりにやらせよう」

「えっ？」

「そうだな、そもそも最初に料理番だったゲオルゲ族の人間にでも。まあ、いずれ宮廷で働いているような腕の良い料理人を雇ってもらだってプラーヌは言ってたしね。とにかくもう君はこの仕事はしなくていいよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、私、別にこの仕事嫌ってわけじゃないけど・・・」

彼女は私の言葉にひどくショックを受けたようで、すがりつくように言ってきた。「あつ、わかった、やっぱり私の料理、口に合わなかったんだね。お願い、これから頑張って料理上手くなるから、私をここから追い出さないでよ」

私は誤解を受けている様子のアビュに慌てて弁解した。

「違うよ。新しい仕事があるんだ。君にしか出来ないことだよ」

「私にしか出来ないこと？」

「ああ、私の助手兼通訳をやって欲しいんだ」

「えっ？ 何それ？」

「君は頭が良さそうだし、好奇心も旺盛のようだ」

それにこの陰鬱な塔に似合わず明るい。

「字は書けるかな？」

「まあ、多少はね」

「簡単な計算は？」

「一応出来るけど」

「よし、何一つ問題無しだ。文句は言わせない。僕の仕事を手伝ってもらいたい」

「そ、それじゃあ塔を追い出そうってわけじゃないんだ」

なんだ、良かったと、胸を撫で下ろしながらアビュはそう言った。私もどうやらアビュがその仕事を快諾してくれたことがわかって、同じようにホッと胸を撫で下ろした。

「助手兼通訳だっけ？」

アビュが確かめるように尋ねてきた。

「ああ、そうさ」

「何だか面白そうだね。もしかしたらそうという仕事のほうが私向きかもしれない」

アビュは上機嫌にそう言った。まるで新しく繕って買ったドレスを、鏡の前で試し着している娘のように。

第二章 5) 謁見の間

塔の中央、樹木で言えば幹に当たる部分、その最上階に謁見の間があった。

おそらく塔の全ての部屋の中で最も豪華な部屋だと思う。

部屋の四方の隅に、劇場の幕のような深紅のカーテンが垂れ下がっている。堅固な台座の上に、円形の石材が一つ一つ積み重なって出来た巨大な円柱が、飾りガラスの丸天井まで無数に伸びていた。床は黒い大理石で出来ており、まるで星空の上を歩いているみたいな感じで、上下の感覚を狂わされるよう。

アーチ型の入り口から赤い絨毯がまっすぐ伸びており、その両脇には篝火が焚かれていた。

その炎が天井高くまであがっているが、巨大な謁見の間の天井には到底届かない。

しかし私はその燃え盛る炎の盛大さに目を奪われつつも、むしろこの炎を管理する召使いがいて、その召使いがこのようにきちんと仕事していることに感心していた。

それに謁見の間の床もきれいに磨かれているようでもある。

プラーヌスは召使いの働き振りが気に入らないようであったが、しかしそうは言っても、自分の職務を忠実にこなしている者も大勢いるようだ。

部屋の一番奥の石段を三段上がった壇の上に、豪勢な背もたれと肘掛けのある、まるで玉座のような椅子があった。

待ち合わせの時間である夕方、私はその玉座の前でプラーヌスが来るのを待っていた。

玉座は少し趣味が悪いんじゃないかってくらい様々な装飾が施さ

れている。

しかし派手な割には、どことなくたびれていた。埋め込まれていたはずの宝石も所々欠けているようであるし、革もすれて色が変わってしまっている。

まるで遠い戦場から帰ってきた疲れ切った老兵のようだ。タフな戦場で手を失っただけでなく、歯まで抜けてしまったという感じの。

私はそんなことを思いながら、その玉座を観察していたら、プラ―ヌスが突然、何の前触れもなくその玉座の上に現れた。

一瞬、何が起きたのか全く理解出来なかったが、彼は魔法で瞬間移動してきたのだ。

「お、驚かせるなよ、プラ―ヌス！」

私は無様に尻餅をつきながら言った。

「シャグラン、ふざけて僕の椅子に座るようなことをするなよ」

「ど、どうして？」

「この魔法を使った先に生物がいると、そいつは大怪我を負うことになるから」

「あ、ああ、肝に銘じておくよ」

「しかし酷くくたびれた椅子だろ？」

さっきまで私が何に注意を奪われていたのがわかったのか、プラ―ヌスはその椅子を撫でながら言ってきた。「前の主は趣味が悪かったというよりも、そういうのにあまり気を使わないタイプだった

ようだな。まあ、魔法使いにありがちだが」

「当然、この椅子も取り変えたいわけだね」

私はお尻を払いながら、さっきの驚きから立ち直るように立ち上がった。

「ああ、しかしそんな時間がまだ捻出出来ない。この塔を魔界から支配している魔族と上手く連絡が取れないんだよ。なかなか僕たちに注意を払ってくれないのさ」

プラーヌスは悔しげにそう言っ、ため息を吐いた。

彼もあまり詳しく教えてくれたわけではないから私もよく知らないのだけど、魔法使いというのは魔界の魔族の力を借りてその魔法が発動される。

そのために必要なのは供給役の魔族、いわゆるプロバイダと呼ばれる存在で、魔界とこの世を行き来することの出来るその供給役の魔族が、魔法使い自身の代わりに魔界の様々な魔族と連絡を取ることによって、魔法使いは新しい魔法を覚えたり、魔界から情報を仕入れたり出来るのだ。プラーヌスがさっき「僕たち」と言っしたのは、すなわちそのプロバイダの魔族と彼のことだ。

「一体でいいんだ、それなりに強力な魔族と連絡がつけば、あとは芋づる式に事は運んで、いずれここを支配している魔族に目通り出来る。それで契約を取り付けられれば僕の魔法はもっと強力になる。この塔にいる限り、誰にも負けなくらいにね」

プラーヌスは、はやる気持ちが抑えられないと言っ、た感じでそうつぶやいた。

まあ、プラーヌスが焦るのも仕方がない。

塔の主になろうと虎視眈眈とその機会を狙っている魔法使いは多いらしい。この塔にもいつ、他に魔法使いが侵入してくるかわからないのだ。

せっかく塔の主になれたというのに、それをすぐに失ってしまうなどプラーヌスが望むはずもない。それを追い払うため、どれくらい強くなってもなり過ぎることはないわけだ。

「そんなことより、そっちの仕事の進捗具合はどうなんだ？」

プラーヌスは一刻の時間の余裕もないと言った感じで私にそう言ってきた。

「ああ、そうだった」

私はアビュと話し合ったことや、この塔に対する感想と意見を簡潔に述べた。

すなわちアビュを助手として雇うこと、そのため彼女の代わりに新しい料理係を選ばなければいけないことなどを。

「アビュの前任の料理係がいたらしいんだ。しかし今は自分の仲間のためにしか料理を作っていないようだ」

「ほう、それはなぜかな？」

私はゲオルゲ族がプラーヌスを軽んじているらしいという事実を話そうか話すまいか少し悩んだが、話しの流れ上、正直に話さない訳にいかなかった。それにそもそも彼らを庇う理由も私にはない。

しかし出来るだけソフトな言い回しにしておいた。それでも案の

定、プラーヌスの怒りは大変なものだった。まあ、表情はあくまで冷静だが、しかしその口調は辛辣極まりなかったのだ。

「彼らを追い出そう、これまではまだいくらか迷っていたが、今はつきりと確信したよ。よくやったぞ、シャグラン、見事に重要な情報を引き出した」

「だけどプラーヌス、ゲオルゲ族でも忠実に働いている者もいるよ。うだ。それに前のこの塔の主人は彼らを上手く仕切っていたようだ。プラーヌスもその気になれば」

「それは違うよ、シャグラン、恐怖で統治するのは簡単だよ。僕だってそんなことをするのは、引き出しの中からインク壺を取り出すのと同じくらい容易なことさ。問題は、僕はそんなふうに恐怖で統治するのは嫌だ。僕は怯えた眼差しで見られるのが不愉快で仕方ない性分なのさ。そんなことを親友の君に説明しないといけないとは思わなかった。そもそも君をここに呼んだのもそれが理由じゃないか」

「はあ、そうなのか・・・」

「ゲオルゲ族を追い出す、それはもう決定事項だ。まあ、しかし今すぐは無理だ。代わりの召使いを見つけるまでは我慢するさ」

プラーヌスは自分自身に言い聞かせるように言った。「まだそんな時間的な余裕が全くない。その前に魔族との契約も取りつけないといけないし、何より騎士バルザを勧誘しに行かないといけない。それらが最優先事項だからね」

しかしゲオルゲ族の料理人は許せない。

そいっだけは脅してでも、僕たちの料理を作らせよう。

プラーヌスはそう言って、玉座のような椅子の肘掛けに置いてあった金細工の鈴を振り始めた。

鈴は手の平サイズ小さなものだったが、魔法が施されていたのか、その音は塔中に響き渡った。

しばらくすると、続々と謁見の間に召使いたちが集まってきた。どうやらこの塔にいる全ての召使いが、この謁見の間に集まろうとしているようだ。

「そういう決まり事もないんだよ」

プラーヌスは続々と集まってくる召使いたちを見ながら呆れたようにつぶやいた。「鈴の音がしたら僕の許に来るよう指示してあるだけだから、全ての召使いたちがここに集まってくる、なあ、シャグラン、至急、そういう決まり事も作っておいてくれ」

「ああ、わかった」

とりあえず召使いの中の代表的な存在が必要なのかもしれない。一度だけ鈴を鳴らすとこの代表者だけが来るといった感じのルールも作っておこう。

謁見の間は先程まで唾を飲み込む音も聞こえるほど静かだったのに、人が集まりに連れて少しずつザワザワと騒がしくなった。

暗くて静かだったこの塔のどこに、これだけの人が潜んでいるのかと驚いてしまうほどの人の多さ。

プラーヌスの座る椅子は少し高い位置にある。私もその高い段の上にいる。そこからだと集まってくる召使いたちの様子がよく見渡せた。

その中にはアビュもいるはずだった。しかし彼女を探すのも苦勞するほど人が多くて、私は探すのを諦めた。

「ちょうどいい機会だから紹介しておく、僕の隣にいる男はシャグランという。この塔のナンバー2に就任した」

それは私も耳を疑うような事実であったが、ここは黙って聞き流しておいた。

「これから僕と彼とでこの塔の大改革を行う。数日の内に、この塔の主が変わったということを君たちは否が応にも認識させられるであろう。文句があるものは去るがいい。誰も止めない。それが嫌なら僕の分身だと思って彼に仕えるように」

プラーヌスはおそらく同じようなセリフを、三つの違う言語で繰り返し述べた。その度に彼の言葉に対する返事が所々から聞こえてきた。

「話しはそれだけだ。各自すぐに持ち場に戻れ。ただしゲオルゲ族の料理人だけはこの場に残るんだ」

その言葉もプラーヌスは三度繰り返した。

その度に謁見の間から召使いたちが去っていく。最後にプラーヌスの指示通り、ゲオルゲ族の料理人だけが残った。

ゲオルゲ族の料理人はどこにでもいる街の酒屋の店主のような男で、明らかにイラついているプラーヌスを前に恐怖に震えていた。何か企みや反抗の意思があるようには到底見えなかった。彼が非協力的なのは、ただ単にこれまでプラーヌスが彼らに訓示するのを怠っていただけのような気がする。

しかしいずれにしろ、既にプラーヌスの逆鱗に触れているようなのだ。もはやプラーヌスの気は簡単に静まりそうにはない。

「シャグラン、少し手荒なことをするからこの場を外してくれ」

プラーヌスが言ってきた。

「・・・あ、ああ、わかった」

私はプラーヌスの冷たい形相に少したじろぎながらそう答え、謁見の間から足早に立ち去った。

そのとき心なしか、ゲオルゲ族の料理人が私に助けを求めるような眼差しを送ってきたような気がしたが、私は見ない振りをした。

おそらく彼のプラーヌスへの反抗は、この料理人だけの意思ではないだろう。間違いなくゲオルゲ族全ての意思のほずである。彼だけを叱責するのはいささかアンフェアな気もする。

しかしゲオルゲ族全てを首にする余裕がないだけに、彼だけが生贄にされるのも仕方ないかもしれない。彼は不運な籤を引いてしまったのだ。

私は彼の運命を憐れみながら謁見の間を去った。私の告げ口からこのような事態に至ったことだし、少し責任を感じないわけではないが、私としてはただ彼の危機を感じる能力の低さを憐れむしかない。

第二章 6) 不気味な女性の泣き声

「つてことは私、この塔のナンバー2の助手になるわけか、悪くないね」

アビユはルルルツとハミングしながら、スキップするように私の二、三步先を歩いている。その姿はまさに野原を駆ける元気な小鹿のよう。

謁見の間を出た私は気を取り直し、アビユと早速名簿作りを開始した。夕食の時間までまだ少し時間があつたので、それまでの間、少しでも仕事を進めることにしたのだ。

「海から来たの?」

アビユは短く切りそろえた襟足をサツと振りながらこちらに向き直り、突然そんなことを尋ねてきた。

「な、何だつて?」

「海から来たのかつて聞いたの」

「ああ、確かに港町から来たけど」

「やっぱりね。匂いでわかったよ、潮の匂いさ。一度だけ父に連れられて海に行ったことがあるんだ」

「別に漁師でも船乗りでもないけど、僕から潮の匂いがするなんて思わなかったな」

「私、この塔からほとんど出たことないからね、ちょっとした匂いでわかつちゃうんだね」

「ああ、そうか、なるほどね」

アビュに護身のためにつけられたカボチャのバケモノのことも説明しておいた。

さすがにこの塔で生まれ育ったからか、アビュは少し驚いたくらいで納得した。

私はまだ直視するのも嫌なのに、それを何て呼べばいいのか私が答えられないと、アビュは彼らの名前を考え出したぐらいだ。

それで彼女の命名によると、いつも僕の左側にいるのは「ワ」で、もう一人が「ギヤー」。

そういうわけで、都合四人で私たちは塔を歩き回った。

「倉庫から調べない？ 中央の塔の地下にあるんだけど」

アビュがそう提案してきた。

「まあ、別にいいけど」

「一度その中を見たかったんだよね、そこに近づいただけで死刑に処された人もいるって聞かされていたから。そういう噂を聞くと逆に見たくなるの、わかるでしょ」

「ああ、わかるよ」

私たちは広い螺旋階段をひたすら降りて、やがて倉庫のある地下の階層に到着した。

塔の中は既に夜の闇にどっぷり浸されていたというのに、階段を下りることに、更にその闇が濃くなっていくようで、私はまた街が恋しくなってきた。

「蝋燭係という仕事を新しく作りたいんだよな。こういう滅多に行かない地下は仕方ないとしても、人がよく通る回廊や階段は明るくしたいんだ」

私はこれまでずっと考えていたことをアビュに言ってみた。

「まあ、いいんじゃない、私も賛成かな。でも街って夜でも明るいところなの？」

「いや、街もそんなに明るくないけど、ここほど真っ暗じゃない。月の明かりもあるし、星も光っている。何より友達がいた。僕の家は小さかったから、廊下を歩くのにこうやってランタンを持つ必要もなかったし」

「一言で言えば、暗いのが怖いってわけね」

「違う、この塔が怖いんだよ」

私は私たちを真上から圧迫するようにそそり立っている冷たい石壁を見上げた。

おそらくありきたりな、街の大聖堂の外壁に使われているのと同じような石なのだろうけど、この塔の石壁にはあらゆる邪悪な怨念や願望がしみついているような気がして、私を脅かすのだ。

「そう言えば昨夜聞こえなかった？ シクシク泣いている女の人
の声」

「や、やめろよ、こんなところでそんな冗談」

私は思わずビクツとして、アビュに触れるくらいまで近づいてしまった。そんな私をからかうようにアビュは更に言ってきた。

「本当だよ、どこから聞こえてくるかわからないんだけど、女の人が泣いてる声がするんだ。他の召使いもみんな聞いているよ」

「どうせ風の音が、鳥の鳴き声だろ」

「ううん、それは絶対ないよ。あれは明らかに女性の泣き声だよ。まあ、多分、そのうち聞くことになると思うけどね」

「そんなのが聞こえてきたらすぐに荷物をまとめて街に帰りたくなるだろうね」

「本当に怖がりね。でもあんな力ボチャのお化けがいるくらいだから、そんなのいても少しも不思議じゃないと思うけど」

「まあ、確かにそうだな」

「そんなことより怖いのは、ここには地下牢もあるし、多分、誰も気づかれない隠し部屋とかもあるし。そこに誤って閉じ込められてしまったて出られなくなった人とか、どういう罪で囚われたのかわからない人がずっと入れられていて、そういう人が本気で泣き叫んでいると思っただほうが怖くない？」

「恐いよ、だからやめてくれ」

「いやよ、面白いからやめない」

アビュはそう言って、本気で震えている私を指差し、ゼンマイ仕掛けの人形のようにカラカラ笑ってきた。

そういうところはまるで子供だ。

私は一瞬、助手を選び間違えたような気になった。もっと色々な候補者に会ってじっくり選んでも良かったかもしれない。

まあ、しかしこの暗黒の塔には、これくらい明るくて能天気な少女のほうがいい気もするが。

「そういえば君のお父さんに会いたいな」

私は心霊話しの話題を打ち切るためにもそう言った。

「どうして？　もしかしてパパに私を叱らせるつもり？」

「違うよ。頼みたい仕事があるんだ」

姉宛ての手紙を届けてもらう仕事を誰かにやって貰いたいのだけど、もしかしたらアビュの父親がそれに適任なんじゃないかと考えていたのだ。

おそらくアビュの父親だからそれなりに信頼出来るだろうし、それにそもそも村や町に食料などの買い出しに出るのが仕事で、旅に慣れているに違いない。

「わかった、言うておく」

そのとき突然、アビュが立ち止まり、耳を澄ますような仕草をしながら言った。「あれ？　何か聞こえない？」

「何って何が？」

「女性の泣くような声」

「だからもういいよ、そういうのは」

こんな現象がタイミング良く起こるわけがないではないか。やはりそういうところがまだ浅ましい子供だ。もはやこんな脅しに私が恐がるわけもない。

私は下手な演技をしているアビュを置いて、さっさと先を急ごうとした。しかしアビュの顔は真剣だった。

「ほら、・・・これ」

「何言ってるんだよ、まだ太陽が沈んで」

間もないじゃないか。そういうことからかうのなら、もっと夜が深まってからにすればいいだろ。

そう言いかけた私の耳にも、しかしアビュが聞いているその何かが聞こえてきたのだ。

「な、何だ、これ・・・」

シクシクと恨みがましくて、まるで地獄の底から聞こえてくるような悲しみに満ちた声だった。

この世にこんな最悪な悲しみがあるということを知らしめて、聞く者の心を地獄に引きずり落とすかのような。

「ずっと前から私が聞いていた声、これよ」

アビュが言った。

私はそれに答えず、ただ青ざめて立ちすくんでいた。

それは本当に私を凍りつかせ、しばらく言葉を奪ったのだ。

「た、確かに聞こえるよ」

ようやく私は絞り出すように言った。

「嘘じゃなかったでしょ？」

「ああ」

だけど嘘ならどれだけ良かったことか。

「とりあえず上に戻ろう」

私はそう言ってアビュの手を引っ張り、来た道に戻るために思い切り走った。

「ちょっと待ってよ、どうせどの部屋にいても聞こえてくるよ！」

そう言いながらアビュも、私を追い抜く勢いで走っていった。

第二章 7) 問題だらけの物件

「いったいこの塔を買うのにどれだけ苦勞を重ねたことか。はっきり言つて僕は多くの人を破滅に追い込んできたよ。無垢な人を騙し、自分の命も危険に晒した。それでどうにかこの若さで、この塔を買い取るまでの財力を手にしたんだ」

あの女性の泣き声はプラーヌスの部屋にも聞こえていたようだ。夕食のとき、応接の間で私と顔をあわせて早々、プラーヌスは憤りをあらわにし、こうまくし立ててきたのだ。

「ここはとんだ、いわくだらけの物件だよ。蛮族がいつ襲来してくるかわからないというのは事前に聞いていた。それが理由で割安だったからね。だから騎士を雇つてそれに対処させる。それで万事は上手くいくと思つていたのに」

しかしこんな泣き声が聞こえてくるなんてことは聞いてなかったよ。

プラーヌスはあの女性の泣き声を、「まるで生きているのに間違われて葬られてしまった者が、その事実を知らすために棺の内側を叩いたり、ひつかいたりしているかのような切羽詰まった音」と表現した。

「魔法の研究が捗らない。ようやくこの塔を魔界から支配している魔族と会うことは出来たんだ。それで前の塔の主が魔族と交わっていた契約を破棄させた。あと一步で移譲されるところまで来たんだよ。それなのにこの気持ちの悪い声に邪魔されて、魔族との交渉に集中出来なかった。魔族を見失ってしまったんだ。またゼロから

やり直しだよ」

そういうわけでプラーヌスは私にまた新たな仕事を言いつけてきた。

「すまないがシャグラン、この問題を解決してくれ。君だって嫌だろ、買ったばかりの部屋でこんな声が聞こえたら」

「それは嫌だけど、でもこれは生きている人間が出している声なんだろうか？ そうじゃなかったらどう考えてもプラーヌス、君の領域じゃないか。僕にどうこう出来る問題じゃない」

「うむ、そうだね、だったら言い方を変えよう。原因を探ってくればいい。解決まで君に期待するのは酷だった」

「わ、わかった。出来るだけのことはしておく」

「ああ、頼むよ」

プラーヌスはいつもの優美な表情を歪ませ、本当に忌々しそうにそう言った。

まあ、確かにせっかく大金を支払って買ったのに、こんな家だったときの落胆は計り知れないものがあるだろう。

私だっていつか結婚をし、世帯を持って独立して家を購入することもあるはず。

そのときこんな家に当たってしまったらと思うと、プラーヌスが苛立つ気持ちが十分にわかるというものだ。

しかしそんな苛々としていたプラーヌスであつたが、ようやく運ばれてきた料理を一口食べ、その表情を少し輝かせた。

どうやら今夜から料理を作ることになったゲオルゲ族の料理人が口に合ったようだ。私もプラーヌスに続き、その料理を口に運んで思わず唸った。

料理はシンプルでありふれたものだったけど、それは本当に美味しかったのだ。

細かく刻まれたキノコが入ったオムレツに、仔ウサギの肉のスープ、酸っぱいドレッシングがかかったサラダ、そしてこんがりと焼かれたたパン。どれを取っても絶品だった。

「君のアドバイス通り料理人を変えて正解だったな。これまでこの塔で食べていたものが料理なんて呼べる代物ではなかったってことが改めてわかった気がするよ」

プラーヌスは私もこの料理に感動しているのに気づいたのかそう言ってきた。

確かに昨夜の食事と比べると格段に違う。私の大切な助手のアビユを悪く言うつもりはないけど、プラーヌスの言う通りあれは料理と呼べるたぐいものではなかったかもしれない。

「本当にどこかで一流の料理人を雇おう。これ以上に美味しい料理が毎日食べられるなら生活にも潤いが出ると言うものだ」

プラーヌスは少し機嫌を直したようにそう言って、フォークとナイフをカタカタ鳴らして夢中で食べ始めた。

プラーヌスの機嫌がよくなるならどんなことでも歓迎だ。

美味しい料理でワインも進んだのか、プラーヌスは本当に上機嫌になったようで、その食事中、彼にしては珍しく懐かしい思ひ出しを語ったりもし出した。

ちようどこうやって、街の食堂で二人して、初めて食事をしたと

きの話しだ。

プラーヌスに申し訳ないことに、私はほとんどそのことを覚えていなかったが、プラーヌスの言葉に適当に相槌を打っているうちに、何となく思い出されてきた。

そういえば以前にも、こんなふう二人だけで向かい合い、美味しい料理に舌鼓を打っていた。

何だかそのときの匂い、そのときの料理の味、周りの喧騒なども同時に蘇ってくるようだ。

「あの頃は貧しかったけど、毎日が楽しかったものだね。戻れるのなら、今でもあのときに戻りたいくらいさ」

プラーヌスは少し遠い目をしながらそう言った。「まあ、しかしこうやって今は二人で食事をしているんだから、あの時期に戻れたも同然かもしれないけどね。だったらこの幸福で満足しておこうか」

「まあ、僕はあの頃と何も変わってないからね。君は今や塔の主だけど、僕はまだまだ駆け出しの肖像画家だよ。どこに戻ってもその事実是不変ならないさ」

しかしこれはこの会話の流れに全く即した感想ではないのだけど、こうやって二人だけで食事をしていて改めて私は、プラーヌスは本当に美しい顔をしていると思ってしまった。

それなりに付き合いの長い友人相手にそんなことを思うなんておかしいと言われそうであるが、一緒に向かい合って食事をしていても、何だか照れ臭くなってくるくらいなのだ。

プラーヌスを女性だと間違える人間はいないと思うけど、その優美で繊細な顔立ちとは明らかに女性的な美しさに属しているような気

がする。

料理を口元に運ぶ指先も丁寧で柔らかだ。魔法使いのプラーヌスが貴族出身のはずなどないが、どんなに格調高い社交界に出席しても、その美しさと共にその仕草も絶賛されるに違いない。

こつやって二人だけで食事をするのが何だか勿体ない感じなのである。これはもつと多くの人間に見せる値打ちがある。

「どうしたのさ、シャグラン？ 僕の顔に何かついていないのか？」

どうやら私は不自然にチラチラとプラーヌスの顔を見ていたのだろう、彼がスープに口をつけながら怪訝そうな表情で訊いてきた。

「い、いや、別に何も……。それにしてもこのオムレツは美味しいね」

とにかく、この美味しい料理のお陰で、この塔に来て二日目の晩は平和に過ぎていくかと思われた。

しかしまた、あの女性の泣き声が聞こえてきたのだ。それでプラーヌスの顔色は一瞬で変わった。

「この声だよ、シャグラン」

プラーヌスは持っていたワイングラスをやけに丁寧にテーブルに置いた。大きな怒りか、もしくはうんざりして呆れている気配が感じられる仕草。

「……あ、ああ、僕が聞いたのもこれだった」

私もナイフとフォークを置きながら言った。

せつかくの私とプラーヌスの和やかな食事の時間をこの泣き声は

邪魔してきたのだ。このとき私は恐怖よりも怒りすら覚えた。

それにプラーヌスの手前、この声の謎を解かなければいけないという立場もあったかもしれない。これが聞こえているうちに、どこから声がするのか探ろうと、すぐに私は椅子から立ち上がった。

しかしそのとき、その泣き声をかき消すようにして、何者かの絶叫が聞こえてきて、私はビクツとして立ち止まった。

その声は塔の回廊を響くように聞こえてきて、どこから聞こえてくるのかわからないあの女性の泣き声とは全く異質な感じであった。どうやら本当に召使いの誰かが発した声のよう。いずれにしろこれで完全に、静かで温かな夕食の時間は中断されたことは確かだった。

「何か事件が起きたようだな」

プラーヌスも苛立ちをあらわにそう言って立ち上がった。「しかし次々に問題が頻出する塔だな。いくら割安だったとはいえここまで酷いとはね」

そのとき応接の間を慌ただしくノックする音がした。現れたのは青ざめた顔をしたアビュだった。

「わ、私もよくわからないんだけど」彼女は切れた息を整えながら言った。「何か怪物が現れたって」

「怪物だって？」

私は問い詰めるようにアビュを見た。

「う、うん、私も見てないからわからないけど・・・」

「か、怪物なんていくらなんでも大袈裟じゃないのか。どうせどこから迷い込んできたゴライアスガエルを見たとかだろ・・・」

私はその報告を認めたくなかったばかりにそう言った。不気味な泣き声に続いて、謎の怪物まで現れるなんて、もはや私はついていけない。

それにこれ以上、プラーヌスを苛立たせる材料が増加されるのもうんざりである。

「そ、そうかもしれないね・・・」

アビュも私の言葉に曖昧に頷いた。

「どこだ、とにかくそこに案内するんだ」

しかしプラーヌスは事態を重く見たのか、そう言いながらすぐに部屋を出ていった。

プラーヌスはやはり苛立っているようだ。その口調は一見穏やかだったが、明らかに怒りが滲み出ているのが感じられる。

そんなプラーヌスの後をアビュが慌ててついていった。

私はこのような騒ぎに関わるのは御免だったが、ここで留守番しているのもなんなので、仕方なく彼らに従った。

第二章 8) グロテスクな同居人（前書き）

多少、グロテスクな表現があります。ご注意ください。

第二章 8) グロテスクな同居人

召使いたちは恐怖に凍りついた表情を浮かべ、壁を背に、這うようにして立っていた。

まるで斬首を待っている捕虜の群れのようなのだ。

私とプラーヌスとアビュは、召使いたちの前を通り抜け、彼らをそんなにも怯えさせている何者かがいるらしい場所に向かった。

北の塔の、召使いたちの住居や食堂などがあるエリアである。

中央の塔から西の回廊を通り、泉のある広場に着いた。その泉の広場で、召使いたちは身を寄せ合うようにして大勢集まり、口々に何か言いながら下りの階段のほうを指差している。

そこに何かいるようだ。

広場は薄暗く、召使いたちの持っている松明や、もともと設けられているランタンだけでは到底照らしきれないほどで、特に部屋の隅のほうにある階段は真夜中同然だった。

私はそんな闇だけでも怖いというのに、その怪物とやらに立ち向かえるだけの度胸はなかった。

しかしプラーヌスだけでなく、アビュも歩調を緩めずその闇に向かって歩いていくので私も逃げるわけにいかない。

プラーヌスが何か唱えると、彼の持っているロッドが光り始めた。それでプラーヌスの周りだけ真昼のように輝いた。

その光を頼りに、私は恐る恐るその階段のほうに目をやった。

まだ何も見えない。しかし魚の腐るような匂いが鼻をつく。

そして確かに階段のほうに何者かが存在している気配がした。

ぐちゃりぐちゃりと、まるで柔らかい生肉をかき混ぜているかの

ような奇妙な音が聞こえるのだ。

「ちよつと待てよ、プラーヌス」

私は彼の背中に呼び掛けた。「本当に何かいるみたいじゃないか」

「ああ、間違いなくいる。その階段の下だ」

さすがに怖いもの知らずのアビュも、臆したようで足がすくんで動かないようだった。しかしプラーヌスだけは私の警告を気にも留めず、まるで歩き慣れた散歩道を進むように階段を下りていった。

五、六段階段を降りる音がした後、プラーヌスの足音が止まった。アビュは怖くて堪らないようであったが、好奇心のほうに勝るのかゆつくりとその階段のほうに近づいていった。

私も仕方なしに彼女を追い越した。そしてありったけの勇気を振り絞り、階段の下に目をやった。

何かが二体、階段を這いながらこちらにゆつくりと近づいてくるのが見えた。

裸の人間のようなようだった。顔は苦渋に歪んでいて、まるで溺れてでもいるかのように、何かを掴もうと、こちらに手を伸ばしているように見える。

最初はそんなに怖がるほどのものではないように思った。哀れな人間が苦しんでいるだけに思えたのだ。しかしその姿がまともに目に入り、私は思わず悲鳴をあげそうになった。

二体とも胴から先がなかった。まるで強引に引き裂かれたかのようで、奇妙に胴の先端が先細りになっている。

しかしおかしい部分はそこだけではない。それはとんでもなくグロテスクな生き物だったのだ。

一体のほうは背中に何か斑点のような模様があると思ったら、全て目であった。

おそらく人間の目なんだろう。目玉が動いたり、あるいは閉じたり開いたりしている。丁寧にまぶたもついているようだ。

しかし本来なら目のあるはずの顔に目はなくて、何か肉の塊が不気味に突起しているだけだった。

もう一体は額の部分にネズミの大きさほどのこぶがついていた。それが膨れ上がったり、縮んだりしている。

どうやら心臓のようだ。体中の血管が身体の表面に浮かびあがっていて、その心臓につながっているのだ。

近づいてくるにつれて息をするのも辛いぐらい悪臭も強まってきた。

「見ないほうがいいよ、アビュ」

私は呆然としながらつぶやいた。

「うん、でももうばつちり見ちゃった・・・」

さすがにアビュもそれから目を逸らしながら、深い後悔を込めた感じの声でつぶやいた。「だけど怪物って本当にいたのね」

私もアビュの言葉に頷いた。

こんな怪物が存在しているなんて本当に驚きだ。これまで生きてきてこんなものに出くわしたことなくない。

確かに抒情詩や古い物語などで聞いた記憶はあるけど、あくまであれは伝説か作りごとの中のお話だ。

「プ、プラーヌス、これが魔界の魔族って奴なのか・・・」

私は彼の背中に問い掛けた。

「まさか、これは魔族ではない。魔族とは人間よりも数等美しいものさ」

「じゃ、じゃあ何なのさ！」

「さあ、わからない。しかしグロテスクなだけで、こっちに何か危害を加えようとしているようでないことは確かだ」

プラーヌスはロッドを掲げてまた何か呟いた。
すると光っていたロッドの先に橙色の炎が浮かび上がった。
それをその二体のグロテスクな怪物に向かって差し伸べた。二体の怪物はその炎から逃げるように後退し始めた。

「ほらな？ 部屋の中に誤って迷い込んできた蛇かネズミのようなものだ。こっちに敵意はないようだ。でもだからと言って僕もこれ以上この生き物を直視してられない。それに何より自分の塔にこんなおぞましいクリーチャーが動き回っていることに怒りを覚える。こんな怪物は存在しているだけで害だ」

プラーヌスはそう言うてはロッドの上に浮いていた炎を二体の怪物の上に放った。

炎に取り巻かれ、二体の怪物は激しくのたうち回った。何か叫んでいるように見えるが、口がないのか喉がないのか知らないけど悲鳴は聞こえなかった。

すぐにその怪物たちは灰になって消滅した。
プラーヌスはその光景を見つめながら、本当にうんざりしたように言った。

「想像して以上に、様々な問題があるようだな、この塔には」

そう言ってプラーヌスは黒いロープを翻して、荒々しい足音をたてて階段を上がってきた。

「蛮族の定期的な襲撃、それだけじゃなく、訳のわからない不気味な女性の泣き声、そしてこのクリーチャーの出現、これでは全く魔法の研究が進まない！ いや、それどころか生活すらままならない。昼夜問わず、この塔の全ての出入り口を固く見張っておくんだ！」

私に向かって言ったのか、この場にいる召使い全員に言ったのか、プラーヌスは声を張り上げそう叫んだ。

プラーヌスのあまりに怒りに満ちた口調に、その言葉がわからない召使いも頷いていた。

「これまでにこのような怪物を見たことはある者はいるか？」

そのプラーヌスの問いに、どの召使いも、アビュも首を慌てて振った。

「そうか・・・、この怪物の出現にこれほどに怯えているのだからそれは嘘ではないな」

プラーヌスはしばらく思索気に俯いていたが、すぐに顔を上げた。「いずれにしろ今日の門番たちは全て打ち首だ。明日、謁見の間に連れてこい！」

プラーヌスは一人の召使いを指差しそう言いつけたが、すぐに首を振った。「待てよ、もともとこの塔に潜んでいた可能性もあるな・

・…。打ち首は訂正する！ もう少し様子を見よう」

その召使いはホッとしたように、「わかりました」と返事した。

「しかしだとするとまだどこかに潜んでいるかもしれないな、倉庫を這いまわるネズミがその一匹たりと限らないように」

独り言のようにそうつぶやいたあと、プラーヌスは私のほうに振り返った。

「シャグラン、君も気をつけておいてくれ」

「あ、ああ、わかった」

私はこの塔に潜む怪異に心底怖気ついていた。この塔に充満する夜よりも濃い闇だけでもうんざりだったのに、不気味な女性の泣き声が聞こえたかと思ったら、プラーヌスですら正体が掴めない怪物まで出現する始末なのである。もうすぐさまここから逃げ出したい気分だった。

しかし逃げる先がある私はまだ。ここ以外に行き先がない、アビュや召使いたちは本当に不安そうにしているのである。それを見ていたら、いくら気弱な私でもそんな気分は消えた。とにかくもう二度とこのような事件が起きないことを望むだけである。

だけでもその日の深夜、更なる事件が起きた。

奇しくもさっきのプラーヌスの不安は的中するのだ。

第三章 1) 大群大発生

その日の夜、どうもぐっすりと眠れなかった。

あまりにもインパクトのあった、あのグロテスクな怪物の姿が脳裏から消え去りはしなかったからだろう。

もしかしたらあの怪物の夢を見ていたかもしれない。

そうじゃなくても、まだ私の近くをうろついているような気分がして、眠りは少しも心地良くなかった。

私は何かの予感に打たれたせいなのか、それともまるで眠りと呼べないくらいそれは浅かったからか、浜辺に打ち上げられるようにして深夜に目覚めた。

それから眠ろうと必死に努力した。たとえ夢の中であの怪物に追いかけられようと、夜の闇と、あの怪物の気配に怯えているほうが嫌だ。

せめて眠りの中に逃げ込みたい。そして少しでも早く朝の光を見たい。

しかしなかなか眠りは訪れてくれなかった。

するとまたあの悲しげな女性の泣き声が聞こえてきたのだ。

シクシクという、あの恨みがましい声がして、私はビクリとして跳ね起き、まるで背中に冷ややかナイフでも押し当てられたような気分ですべて部屋の中を見回した。

もうこれで到底眠れそうになくなった。

しかしそれは更なる事件のプレリユードに過ぎなかったわけだ。

それから少し経って召使いたちの悲鳴が聞こえてきた。

この塔は広大で、私の部屋から召使いの居住室まで、街で言えば一件の靴屋から違う一件の靴屋までぐらいの距離があるはずなのに、まるで一個の管楽器として設計されているのか、気持ちの良いくら

い声が響いてきた。

またあの同じような怪物が出たに違いない。

そう思っ て私はすぐに部屋を飛び出た。

あの怪物を見るのはもう懲り懲りだし、私が出向いたところでどうこう出来る問題とも思えなかったが、ここでじっとしているよりも大騒ぎになっている現場に出向いたほうがマシな気がしたし、それに一応この塔のナンバー2としての責任感が私をそうさせたのかもしれない。

とにかく私は部屋を出て東の回廊を駆けた。

中央の塔に着くと、ちょうどアビュが北の回廊の扉を開けるところだった。

「また出たわ!」

アビュはベッドからそのまま這い出てきたのか、寝床で着るような薄い衣服をまとっていた。夜の涼しさに寒そうに見えたとし、身体の線もあらわだった。

思わず私は目のやり場に困った。

いや、もちろん、まだ子供のような体つきのアビュのそんな姿を見たからって、私がそれに動じるわけではない。そんなの当然だ、言い訳するまでもない。

だけど彼女のその慌て振りが事態の緊急性を感じさせ、私を緊張させたのだ。

「しかもさっきみたいに一匹や二匹じゃない。あの怪物がそこら中にウヨウヨしているの!」

アビュが怒鳴るように言ってきた。

「ウヨウヨって？」

「大群よ、巢穴を突いて蜂がブンブン出てきたかのような」

私はその様を想像して、思わず足をすくんでしまった。それにこの事態はどうやら私一人の手に負えそうもない。

「わかった、プラーヌスを呼んできた方がいいな」

「もう来ているさ」

西の回廊に通じる扉が開き、プラーヌスが現れた。

表情を見るまでもなく、その足音だけでどれだけ機嫌が悪いのが感じ取れる。

それでも恐る恐る振り返りプラーヌスを見た。彼はなぜか静かに微笑みを浮かべていたが、それが逆に彼の怒りの大きさを証明している気がする。

「なあ、シャグラン、なぜ僕が太陽に背き、こんな真夜中まで起きて魔法の研究をしているか知らないわけじゃないだろ？ 夜のほうが魔界と接続しやすいからだ。そっちのほうが魔族たちとのコミュニケーションが上手くいくからだ」

プラーヌスは夕食のときに着ていたのとは違う、全身を覆うような黒いローブをまとい、自分の背丈よりも長いロッドを持っていた。その暗黒のローブのせいで、彼の肌がいつそう白く引き立っている。これが魔法使いの正装だろう。魔法使いの詳しいことはわからないが、彼が何かの作業に打ち込んでいたことは間違いない。

「この時間はとても貴重なんだ。一刻の遅れが大変な喪失につながる。相手は世にも気まぐれな魔族だからね」

そう言い終わった後、プラーヌスは私の前で立ち止まった。

「大変な数の怪物が出てきたようなんだ・・・」

私は言い訳するようにそう言った。本当に、その作業中断も仕方ないくらいの大事件が起きていることを祈りながら。

「アビュの報告に拠れば足の踏み場もないくらい、あの怪物たちで溢れているらしい」

私は同意を求めるようにアビュを見た。しかし彼女は、プラーヌスの前ではいつものはつらつとした性格を無くしてしまうようだ。アビュは私の言葉にも遠慮がちに頷くだけだ。

「門番たちから何も報告はないな」

プラーヌスが言った。

「あ、ああ。ないようだけど」

「だとすると奴らはやはり塔の中に潜んでいたわけか。いいだろう、今夜でこの件は徹底的に片付けよう」

第三章 2) 魔法の人体実験

私たちは急ぎ足で、召使いたちの居住室がある北の塔に向かった。そこですれ違う召使いたちを捉まえては、どういう状況なのか尋ねて回った。

それで幾らか確たる情報を得た。その怪物たちがどこから現われたのか判明したのだ。

召使いたちの幾人かが、地下の廊下に不思議な扉を発見していたらしい。

そんなものはこれまでなかったようだ。そしてそこからあの怪物たちがウヨウヨ這い出てくるのを見たものがいたらしい。

その報告を聞いてプラーヌスは何かわかったようだった。

「おそらくそれは前の塔の主が作った魔法の隠し扉だろう。昨晚、僕は前の主が結んでいた魔族との契約を破棄させた。それで彼がこの塔に残っていた、あらゆる魔法が解けたのだ」

前の塔の主はそこに何か大切なものか、もしくは後ろ暗いものをそこに隠していたようだな。

プラーヌスはそう言った。「もちろんこの場合は後者、後ろ暗いものを隠していたに違いない。前の主は人体実験をしていたんだろう」

「じ、人体実験だって？」

「ああ、昨夜、あのグロテスクな姿を見て僕もすぐ気づくべきだったけど、あまりに改変されていたから思わず見逃してしまっていた。しかし前の主は人間の身体をいじくり回し、新しい生き物を創

造しようとしていたのさ」

「えっ？　じゃ、じゃあ前に現れたあれはもともと人間？」

私は心の底から驚きの声を上げた。

「そう、おそらくその実験結果さ」

プラーヌスは私の言葉に頷きつつそう言ってから、更に独り言のようにつぶやいた。

果たしてあれは彼にとって失敗だったのか。いや、あるいは成功だったのかもしれないな。どれだけグロテスクな生き物を創造出来るのかと競っていたとしたら。

「いずれにしろかなり悪趣味な主だったようだ」

「そ、そんなの」

悪趣味とかそれどころの問題じゃないではないか。それは殺人以上の罪悪、人間性を踏みにじる最悪の所業！

だけどあの怪物たちの姿を思い出すと、あれが以前は人間だったなんて想像も出来なくて、上手く怒りを感じることが出来なかった。それよりもまだ恐怖や忌避感のほうがずっと強いのだ。

「とにかくその魔法の扉のあるところにまで案内しろ」

プラーヌスは召使いたちにそう命じた。

何人かの勇気ある召使いが頷き、私のような臆病者はオドオドと後ろに下がっていった。

私だってこれ以上ついていきたくなかったが、そういうわけには

いけない。仕方なくプライヌスの後に続いた。

第三章 3 おぞましき光景（前書き）

多少、グロテスクな表現があります。ご注意ください。

第三章 3) おぞましき光景

壊れた魔法の扉があるという、地下の一角に近づくにつれ、足下を這うあのグロテスクな怪物たちの数が増えてきた。

私も最初はそれにいちいちビクビクしていたが、あまりにも数が多く、驚くことにも恐がることにも疲れてきた。

プラーヌスもそれを見つけるたびに、松明を持った召使いに焼き払わせたり、自ら魔法の炎で焼き殺したりしていたが、彼もいちいち関わり合うことを止めて先を急ぐことを選んだようだった。

しかしそれは元人間であつたらしいのだ。こうやって、まるで害虫やネズミを退治するように殺していいのか疑問に思わなくもないいや、私だつて平気でこの元人間たちをグロテスクな怪物などと呼んでいる。

考えてみればそれだつて無礼なことだ。

彼らはこつちに一切敵意を向けてきたりしない。おそらく一方的な被害者。前の主の狂った所業のせいでこんな醜い姿にされただけなのだ。

しかしこのグロテスクな元人間たちに関する、あらゆることは私には耐えがたかった。

その怪物たちが発しているに違いない、まるで魚の頭が腐ったような匂いが辺りに漂っていた。

プラーヌスもアビユも私も、そしてついてくる召使いたちも、布や衣服などで鼻から口まで覆って、少しでもその匂いを避けようとしている。

しかしそれもあまり効き目がなかった。プラーヌスですら、それに耐えかねたようときおり咳きこんだりしている。

その見た目のおぞましさに關しては、もはや語るまでもないだろう。

詳しくそれらの怪物の個性を観察する気になんて到底なれない。一体一体微妙な部分が違っているようだが、どれもが足がなく、腕の力でしか前に進めないようにされているところは共通しているようだった。

だけど人間としての原型をほとんど留めていないくらい改変された怪物は、それほど気持ち悪くないかもしれない。

むしろ逆に、ほどよく人間の名残を留めつつ、しかし確実に別の何かに変えられている怪物のほうが、私の胃をムカつかせた。

たとえば一体の胴体に顔が三つも四つも付けられている怪物などは、一人の人間以上に人間性が過剰であり、よりグロテスクさを感じさせているのだ。

だけどそのような直接的な不快感よりも、もしかしたらこんな醜い生き物が、元は私たちと同じ人間であったという事実、どんな不運に見舞われたのか知らないが、このような悲惨な目にあつたという運命、そういうことが私を気疲れさせ、彼らへの同情を阻んでいるのかもしれない。

私の脆弱な神経では、それを受け入れることは不可能なのだ。

そのグロテスクな生き物たちを跨ぎながら階段を下り、やがて私たちは地下の円形の部屋に到着した。

そこで私はまた息を飲んだ。その円形の部屋が、足の踏み場もないくらい怪物たちで溢れかえっていたからだ。

私たちはしばらく階段の途中で佇んで、階下のその光景を眺めていた。

地下室はもちろん暗くて、プラーヌスの持っているロッドの光や、召使いたちの松明だけではそこを照らしきれない。

そのおかげで直接的に地獄のような光景を目にしないで済んだよ

うだ。しかし私たちのすぐ下で、あのグロテスクな怪物たちが大勢蠢いている気配はしかと感じられた。

「いったいどういう目的で前の主は人体実験なんて？」

私はその気配に慄きながらプラーヌスに尋ねた。

「そんなの単純さ」

プラーヌスが返事した。「心臓が二つあればそれだけ長生き出来るし、脳が二つあれば思考力も増す。これはなかなか有益な実験なさ。しかしそれにのめり込むうちに、前の主は横道に逸れていつてしまったのかもしれないね。ただどれだけグロテスクな作品を作るかに血眼を注いだのかもしれない」

そのうち、クチャクチャ、ネチャネチャと、そんな不気味な音がどこかから聞こえてきた。

「な、何、これ・・・」

アビュはそう言ったかと思うと、うずくまって吐き始めた。

そんなアビュを介抱してやろうとした寸前、私もその音の正体に気づいてしまって嘔吐感を覚えた。

そのクチャクチャとまるで肉片を踏みつぶすような音、それはどうやら怪物たちがお互いの身体をむさぼり喰っている音だということに気づいてしまったのだ。

「どうやら彼らは腹を空かせていたようだな」

プラーヌスが苦笑いしながらそう言って、私の意見を追認した。

「前の主がいなくなったせいで、彼らへの食料の供給が止まっていたんだろう。それで怪物たちは空腹に耐えかね食料をもとめて地下室から飛び出てきたのかもしれない。しかし食料は容易に見つからず、いつの間にか共食いを始めたというところか・・・」

「共食いだなんて彼らも人間だったんじゃないのか？」

私は吐き気を抑えながら、訴えかけるようにプラーヌスに言った。

「貧しい寒村では、飢餓のとき人を食べるのは珍しくない。長い籠城戦でもそうだ。それに彼らは人体実験で脳にも改変が加えられているだろう。いくらかの人間性を失っていても驚くことじゃない」

しかし全て焼き殺す。

プラーヌスはそう言った。

「この光景は神に申し訳ないからね」

心なしか、彼のその声には怒りが感じられたかもしれない。

プラーヌスは二、三步階段を下り、持っていたロッドを掲げて何かブツブツと唱え始めた。

しばらく何も起きなかったが、しかし徐々に部屋中が蒸し暑くなつてきた。

そうかと思うと、床からチロチロと炎が湧き上がって来て、グロテスクな怪物たちがまるで網の上で焼かれる魚のように、少しずつ炎に包まれていくのが見えた。

炎から逃れようとするかのように怪物たちの動きが慌ただしくなった。だけど炎はそれ以上の勢いで燃え盛っていき、やがて部屋中

の怪物たちを真っ赤に染めた。

第三章 4) 囚われのフロリア

プラーヌスの放った魔法の炎は、地下の円形の部屋で互いの身体をむさぼり合っていた怪物たちを一瞬にして焼き尽くした。

今は床に灰が薄く散り積もっているだけとなった。

肉の焼ける匂いと煙が立ち込めている。

煙が立ち込める中、私たちもプラーヌスの後に続き階段を下りていった。

彼は灰を踏み締めながら、部屋の奥の地下室の入り口の扉があるほうにさっさと向かっていく。しかしプラーヌスの足元は何だかおぼつかないようであった。

もしかしたら強力な魔法を使ったせいか、体力をかなり消耗したようだ。一歩歩くごとに呼吸が荒くなっていき、魔法の扉の前に辿り着く頃には肩で息をするまでになっていた。

しかしまだまだ、その壊れた扉の残骸の隙間から、あのグロテスクな生き物たちが溢れ出てこようとするのが見えた。

プラーヌスは心底からうんざりした表情をこっちに向け、召使いたちに指図し始めた。召使いたちはプラーヌスの命令通り、松明の炎で怪物たちを威嚇した。怪物たちは炎を恐れて隅のほうに逃げていき、私たち一行のために道を開けた。

魔法の扉の向こうに階段があつて、うねうねと曲がりくねりながら、はるか下まで続いているのが見えた。

私たちは石と石の間に苔が生えている階段を、滑らないように踏み締めながら下りていった。階段の壁をなす石組は茶色の水に濡れ、まるで不治の皮膚病にでもおかされ、止まらなくなつた膿が滲み出ているかようだ。

黴と腐臭の合わさった匂いが更に強まり、もうそれが我慢しきれないくらいまで達した頃、ようやくその部屋に辿り着いた。

地下室は広いが、天井の高さがかなり低いせいか圧迫感を感じた。私はどつちかというと背は高いほうなので屈まなければ歩けないほどで、プラーヌスが持つロッドも天井につかえそうだった。

しかしそんなことよりも、私はその部屋の、あまりのおぞましい光景に言葉を失っていた。

部屋の目立つところに木製の手術台があった。その隣の台にはメスやハサミ、斧やのこぎりや縄など、人体実験に欠かせない道具なのであろうか、そういうものが並べられている。

部屋の隅の棚や、あるいは床のいたるところに、透明の液体の入った瓶が無造作に置かれていた。

その瓶の中には、人間の手首から先だけとか、各種の内臓とか、馬の首とか様々な大きさの脳みそとか、浸けられている。

「酷い・・・」

アビュが私に同意を求めるようにそう言ってきた。
私も心痛な面持ちで頷いた。

その部屋の奥に鉄の柵で区切られた広いスペースがあった。

その牢獄の柵はすさまじい力でねじ曲げられていた。

そこにあのグロテスクな怪物たち、いや、人体実験であんな姿にされた人間たちが閉じ込められていたようだ。まだ少し残っているクリーチャーたちが、今も床をうろつくと這っていた。

突然、召使いの一人が恐怖に満ちた声をあげた。

私もその悲鳴の主と同じくらいの恐怖を覚えながら振り向くと、
一体のクリーチャーがまるで人懐っこい小動物のように、その召使

いの足にすがりつこうとしているのが見えた。

召使いは手に持っていた松明をそのクリーチャーの顔面に押し付けるが、クリーチャーはなかなか逃げようとしなない。

「だ、誰か助けて！」

召使いは恐怖に満ちた声を上げながら後退するが、背中が鉄の柵にぶつかり逃げ場がなくなった。

プラーヌスが面倒そうに、横にいた身体の高い召使いに合図した。

彼は手術台の横に置かれていた斧を取り、それを怪物に向かって振り落とそうとする。

「やめてください！」

そのときどこから若い少女の声がした。プラーヌスは斧を振り上げた召使いを制しながら声のほうを向いた。

私もその声がどこから聞こえてきたのか探した。

「お、お願いです、この人たちを殺さないで下さい」

格子の向こうに、そう言って声を上げている少女の姿が松明の光の中に照らされた。

「何者だ、君は？」

プラーヌスはそう言いながらその少女のほうに向かってゆつくりと歩いていく。

かなりみすばらしい格好をした少女だ。しかしこちらをしっかりとした眼差しで見つめてくる。私も彼のあとを続いた。

柵がねじ曲げられた牢獄の他に、壊されていない別の牢獄もあって、その柵の向こうにその少女は立っていた。

いや、その少女だけじゃない。彼女の後ろに、壁の隅で怯えたように固まっている十数人の人もいた。その十数人は老いた女性や中年の男性、幼い子供など様々であった。

「そうか、生き残りか」

彼らの様子を見ながら私はだいたいの事情を察した。その者たちはちゃんと衣服をまとい、傷もないようで、何とかまだ人体実験の餌食にならずに済んだ者たちのようだ。

格子を掴んでいた少女はプラーヌスが近づいてくるにつれて、さっきまでの気丈な表情を失い、少しずつ後ずさっていった。

「怯えるな、僕はこの塔の新しい主だ、君たちの命を救いにきた」

プラーヌスのその言葉に少女だけでなく、隅にいる十数人の男女たちも感動の声をあげた。

「だけどあの人は殺さないで下さい」

少女は召使いの一人にすがりついてまだ離れないクリーチャーを指差した。召使いはとくに気絶していたようで、怪物はその身体の上をのそのそと這い回っている。

「もしかしたら父か母だったものかもしれません。そうじゃなくても以前までは私たちと同じ人間でした」

「知っている。しかし生かしておいても彼らの人生にどんな光が差すのだろうか？ 脳まで犯されているようではないか。空腹のあまり共食いを始める始末だ」

「で、でも・・・」

少女は何か言いたげなまま下を向いて黙った。

少女は痩せていた。頬はこけ、髪の毛は長い間手入れされていないようで垢じみ、着ている服も汚れている。

「君はここに入れられてどれくらいなんだ？」

プラーヌスがそう尋ねた。

「わ、わかりません、太陽の光も差し込みませんから。いつ一日が終わり、いつ始まったのか知れることも出来ませんでした」

「今、田に稲が実り始めた頃だ」

「私が村を出たとき、ちょうど稲が実っていました」

「そうか・・・」

ということは一年も、ここにこうやって閉じ込められていたわけだ。しかもいつ次の実験台になるかわからない恐怖に怯えながら。

「どういう経緯でここに連れられてきたんだい？」

私も彼女に尋ねた。

「父と母は仕事がなくて困っていました。やっと働き口が見つかったのがここで」

「騙されたのか・・・、それは本当に可愛そうなことだったね、でも大丈夫だ、君たちはもう自由だから」

私はさっきから目についていた、小さな木製のテーブルの上に放り投げられたように置かれてある鍵を手にとった。

おそらくこの牢獄の鍵であろう。

彼女たちが閉じ込められている牢獄から、このテーブルまで五歩か六歩の距離である。しかし鋼鉄の柵が、その間を無限に隔てている。

「いや、少し待つんだ、シャグラン」

鍵をその牢獄の鍵穴に差し込もうとしていた私にプラーヌスが言ってきた。

「彼らを簡単に解放するわけにはいかないな」

「ど、どうしてさ？」

私は愕然としながらプラーヌスのほうを見た。

「よく考えてみるがいい。もしかしたら前の塔の主の悪行が、僕の悪事として受け取られる可能性がある」

「えっ？ でも、そんなの」

「噂はどう伝わるかわからないではないか。カプリスの森にある塔の主が代替わりしたなんて、少し離れた街の住人が知るはずないからな」

「だ、だけどプラーヌス！」

「わ、私たちは決して他言しません」

この展開に私以上にショックを受けたのか、今までずっと黙って、その少女の後ろに隠れるようにして立っていた髪の白い女性が、跪いて哀願してきた。

「いえ、たとえ話したくても、あれほど恐ろしい出来事はもう思い出したくもありません。だからどうか私たちを自由にして下さい、この悪魔の塔から一刻も早く出して下さい。これ以上ここにいたら気が狂いそうです！」

しかしプラーヌスは無下に首を振った。

「この悪魔の塔という呼び方が気に入らないんだ。君がそうやって吹聴すれば、悪評が広がる。それにそもそも僕が君たちの口約束なんかを信じると思うのか？」

「そんなぁ・・・」

「プラーヌス、その仕打ちはあまりに酷いよ！」

私も彼を非難するように声を上げた。「この人たちは被害者だ。君に何か害をなそうとしないさ」

「シャグラン、こつちだつてとんだとばつちりだよ。まさかこの塔でこんなことが行われていたなんて思いもしなかった。この事實は徹底的にもみ消さなければならぬ。一片たりとも同情の余地を残すわけにはいかないんだよ」

プラーヌスの言葉に牢獄の向こうの人達は絶望的な表情で天井を振り仰いでいた。

あの少女と同様、まだまだこの先の人生のほうが長い若者たちもいる。あるいはこの先の短い余生を、せめて故郷で静かに送らせてあげたくなるような老人もいる。

その者たちは皆、せつかく命が助けられたというのに、それ以前と同じような絶望的な表情になっていた。

「じゃあこの塔に軟禁させ続けるのか？」

「あるいはこの塔で死ぬまで働いてもらうかだ」

プラーヌスは皮肉な笑みを浮かべながら言った。「しかし僕も悪魔じゃない。何が何でもこの塔を出たいというのなら、出してやつてもいい」

突然のプラーヌスの言葉に、牢獄の向こうの人たちは喜びよりも戸惑うようにざわめいた。

「ただし条件がある。この塔にいたこと、この塔に来た事実、その間の記憶を消させてもらう。それを承諾するなら出してやつてもいい」

「記憶を消す？　そ、そんなことが出来るのか？」

戸惑っている牢獄の中の人たちに代わり、私がプラーヌスに尋ねた。

「ああ、そういう魔法は僕の得意な分野だね。幾らか時間はかかるが簡単だよ。どうだ？」

プラーヌスの問い掛けに、少しも悩む様子もなく皆が一斉に頷いた。

「むしろ嫌な思い出を消してもらえるなら、それは嬉しいくらいです！」

「しかしぼつかりと空いた数年の記憶は、君たちに居心地の悪い虚無をもたらすかもしれない。それ埋め合わせようとこれから一生、無駄な探求に時間を費やすことになる可能性もある」

「私はそれでもかまいません」

先程プラーヌスに跪いて哀願していた老婆がいち早くそう答えた。他の者たちも口々に頷いた。

「よし、だったらそれでいいだろう。君たちを解放してやる。その代わり明日、一人ずつ順番に謁見の間に来るがいい」

そう言うってからプラーヌスは近くにいた召使いに指示を出した。「すぐに新しい衣服と食糧を用意してやれ。それに馬車と幾らかの金貨を与えるんだ」

「ありがとうございます、この恩は決して忘れません」

檻の向こうにいる全員が深々と頭を下げた。プラーヌスは彼らの感謝に素気なく頷きながら、少し皮肉な笑みを浮かべた。

「いや、君たちは僕への恩も忘れてしまっただよ、ここに来た事実そのものを君たちの記憶の中から消すんだからね。僕への恩も確実に忘れるのさ」

私は牢獄の鍵を開けてやった。

彼らはまだ恐々としていたが、勇気を振り絞るように外に出てきた。

おそらく凶々しい記憶を思い出しているのかもしれない。この牢獄から出た順に、人体実験をされたという事実を。

「生き残っている怪物たちは一人残らず焼き殺せ。どうせ奴らもあんな姿で生きているのは酷な話だ」

プラーヌスが手の空いている召使いにまた新たな命令を発した。それから私に言った。

「シャグラン、僕はもう疲れた。魔法でかなりの体力を消費したようだ。全ての後始末は君に任せる。先に寝室に引き下がらせてもらうよ」

「ああ、任せてくれ」

プラーヌスが苦しそうに息をしていることはずっと気になっていた。私は当然そう返事した。

「お待ち下さい、新しい塔のご主人様」

しかしそのとき我々に最初に声をかけてきたあの少女が、歩き去ろうとしたプラーヌスを呼び止めた。

「ご主人様、数々のご厚意にはいくら感謝してもしきれません。ただどうかあの人たちにもご慈悲を」

「慈悲だつて？」

プラーヌスは足を止め、怪訝な表情で振り返った。

「は、はい、どうか焼き払うなどと仰らないで下さい。今はあのような姿になってしまいましたが、少し前まで私たち同じ人間でした。いえ、たとえあのような姿にされようとも、今だって人間です」

「フローリア、もう余計なことを言うな」先程の白髪の女性が少女を窘めた。「これ以上、いったい何を望むというのだい！」

「だけどおばさま、私たちがこうやって無事なのは、みんなが私たちよりも先に犠牲になってくれたお陰じゃないですか。ご主人様！」

そう言つて少女はプラーヌスに再び向き直った。「私があの人たちの世話をいたします。最後まで看取らせて下さい！」

「ほう、なかなか面倒な性格をしているようだな。君はあの怪物たちが気味悪くないのか？」

部屋から去ろうとしていたプラーヌスは面倒そうではあったが、いくらか好奇心を覚えたような表情で少女に近づいていった。

「少しも気味悪くありません、私の父と母もあのような姿にされました。だからあの人たち皆が、私の父であり、母であると思います」

少女はそう言いながら、少しも臆することなく、まっすぐな視線でプラーヌスを見つめている。

利発そうな瞳だ。しかもその目は純粋な優しさで満ち溢れているようであった。

私はその純粋そうな瞳を見ながら何だか不思議に思った。

この少女はこれまで散々、悲惨な残虐行為を目にきて、自らも悪い人間に騙され、その身体を踏みにじられる寸前であった。それなのに、どうしてそんな優しさを宿し続けられるのだろうか。普通、とんでもない悪を前にしたら、心は荒むものじゃないのか？ 少なくとも余裕を失って、自分の身の安全しか考えられなくなるものだと思う。他の人質たちはそのようだ。

しかし彼女の心だけまるで特別な囲いがあって、どんなものにも汚されることがない仕組みにあっていくかのよう。

「君の名は？」

プラーヌスも私と同じような感想を持ったのだろうか、少し感心するような表情でそう尋ねた。

「フローリアです」

「フローリアよ、面倒を見るなど簡単に口で言うが、それは想像を絶するほどの苦行であろう。この悪臭は耐えがたいし、ほとんどの者が手も足もないものばかり、糞尿の始末も大変だ。それになぜ

かどいつもこいつも性器だけは元のまま残されている。食欲同様、性欲も消えずにあるという証しであろう。そんな生き物を君のこの痩せた細い腕だけで面倒看るなど不可能だ。悪いことは言わない。手厚く葬ることは約束する」

「しかしご主人様、さつきも言わせていただいた通り、私がまだこうして息をしていられるのは、私より先に犠牲になったあの人たちのお陰です。その恩はどうやっても返せそうにありません、せめてその最後は安らかに」

プラーヌスはフローリアという少女の言葉に説得されたというよりも、その真摯な眼差しに心動かされたに違いない。

「わかった、フローリア」

渋々とはあったが、プラーヌスは仕方ないと言った感じで頷いた。「面倒なことではあるが、君のその風変わりな望みを叶えることにする」

全ての召使いに通達せよ。哀れな姿をしたこの者たちは呪われた種族でも、罪を犯した幽鬼でもない。決して手を掛けることを許さぬ。

プラーヌスは黒いローブを翻しながら振り向き、周りにいる全ての召使いに号令した。

「ありがとうございます！」

「シャグラン、生き残りはどれくらいいると思う？」

プラーヌスが私を見た。

「さあ、確かなことは言えないけど、少なくとも三十体はいただろうね」

「フローリア、三十体もいる彼らをこの塔の外に出すわけには当然いかない。彼らを看取るまで、君はこの塔に軟禁することになるけど？」

「別にかまいません」

フローリアはまっすぐプラーヌスを見上げたまま、力強く頷いた。

「よし、それならこの塔でしばらく暮らすがいい」

どこでもいい、この塔の中で彼女と彼らが静かに暮らせる部屋を設けるんだ。

この命令はまだこの塔に不慣れな私に適さないと判断したのか、プラーヌスは近くに控えていた召使いにそう命じた。

「しかし僕も僕以外の塔の住人たちも、もう二度と彼らの姿を見たくない。決して部屋から出さないと約束しろ」

プラーヌスはフローリアを再び見つめ、厳しい口調でそう言い渡した。

「もちろん、お約束します」

「君の記憶はしばらく残そう、しかしこの塔から出るとき、必ず私の前に来るんだ。君も例外扱いにはしない」

以上だ。

プラーヌスはもう何も言われても聞き耳は持たぬと言った感じで、断固としてそう言い放ち、さっさと出口の階段に向かって歩いていった。

プラーヌスが部屋から去ると、ずっと頭上近くを飛び交っていた蝙蝠の大群がどこかに飛び立ってくれたような感じで、緊張感がふつと緩んだ。

どうやら真夜中に塔を騒がせる事件が起きたという事実よりも、苛々しているプラーヌスと一緒にいることのほうが私を気疲れさせていたようだ。私は思わずホッとしてため息を吐いた。

しかし部屋は目も当てられないくらいの惨状である。

あのグロテスクな生き物たちが足下をうろついているし、さつきまで捕えられていた生き残りの人たちは皆、これからどうすればいいのか問い掛けるような表情で立っている。

てきばきと指示しなければいけないことが山ほどある。それが今、全てが私の肩に押し掛かっているのだ。

しかもプラーヌスの前ではキビキビと動いていた召使いたちも、私と同じように明らかに気が緩んだようで、見るからにだらけ始めていた。

何もかも明日に引き延ばして、さっさと部屋に帰りたいが、それも許されない。

私は自分も奮い立たせるように手を叩きながら、だらけ始めた召使いたちを急き立てた。アビュの通訳に協力を仰ぎながら、細かい指示を言い渡していった。

第三章 5) 夜の後始末

長い長い夜が終わり、自分の居室に向かって東の回廊を歩いていった頃には、既に朝の新鮮な太陽の光線が高窓のほうから差し込んでいた。

その角度からすると、気まぐれな太陽は今朝、北よりの空から通って昇っていかうとしているようだ。

言うまでもなく私は疲れ果てている。

全く寝ていないのだから当たり前だ。

膝の裏がチクチクと痛くて、部屋に帰る足は、魔法を使つた直後のプラーヌスの足取りのように覚束なかった。

ぐっすりと、誰に邪魔されることなくゆっくり眠りたい。

お腹もぺこぺこに空いていたが、何よりも今、私が望んでいるのはそれだ。

それほど寝心地の良いベッドでもないけど、私はそれが愛おしくて仕方なかった。まあ、おそらくこんな日ぐらい、休みを取ってもプラーヌスも文句は言わないだろう。

どうせ彼も夕方まで寝ているんだ。私も今日だけはそれに倣うことにしよう。夜明けまで駆け事や女遊びに興じる遊び人のように、太陽に背いた眠りを貪ることにしよう。

ふと誘われるように高窓から差し込む太陽を眺めると、その光が目の中に突き刺ささってくるようで、それが私の眠気を吹き飛ばすどころか、疲れている目をしょぼしょぼとさせて逆に眠気を刺激してくる。

こういうときに太陽を見るのも悪いものじゃないな。

私は疲れ果てているけど、夜のうちにやれることはだいたいやったという充実感があって、気分は良かった。

何だか心地良い眠りに興じれそうだ。かなり苦労はしたけど、それなりに首尾良く事は進んだのだ。

しかし苦労したことは確かだった。

とりあえずの措置として、あのグロテスクな生き物たちをもう一度、牢獄の中に閉じ込めることにしたのはいいけど、その作業は本当に過酷を極めた。

元は人間だってことはわかっているし、こっちに何ら敵意を抱いていないことも知っている。

しかし毒がないとはいえ蛇を好んで触る人がいないように、あのグロテスクな生き物を率先して触ろうとする召使いはいなかった。

アビユですら尻込みしていたのだ。

私が率先してやってみるしかなかった。いや、実を言うと私もそれに關しては自慢出来る働きをしていない。

本当に動いたのはフローリアというあの少女だけだ。

しかし元々、彼女の我儘と言ってもおかしくない申し出によってそういうことをする破目になったのだ。それも仕方ないだろう。あのグロテスクに改変されてしまった人たち全てを回収出来たわけではなく、まだこの塔のどこかをウロウロしているだろうが、それも彼女に任せるしかない。

けどそういうこと以上に大変だったことがある。

それは囚われていた人たちに新しい衣服を用意してやることだった。

この塔には余分な衣服などないようなのだ。地下には大きな倉庫があるようで、だから倉庫の責任者を呼んで聞いたのだけど、鎧や防具などはあっても、そういうものは一つもないということだった。だから仕方ないから、召使いたちの私物を徴発するしかなかった。

しかし彼らも代わりの服に余裕なんてなく、誰もが出し渋った。いずれ街の古着屋で新しい服を買ってやることを条件に、ようやく人数分の服を手に入れられたのだけど、その説得が大変だったのだ。

私がるまで召使いたちに威信がないかよくわかった。それどころか信頼もされていないようだ。

ナンバー2なんていうのは名ばかりなのだ。

いずれ街の古着屋で新しい服を買うということだって空約束である。プライヌスの機嫌の良いときに、彼に改めて申し入れなくてはならないのだ。

もしそれをプライヌスに断られたら私は嘘つきになってしまい、ますます信頼を失ってしまうだろう。

まあ、もちろんプライヌスは馬鹿じゃないし、いや、むしろ嫌になるほど計算高い人間だから、その可能性はないだろうけど、不安は不安である。

本当にこの塔で仕事をするためにはもっと実質的な力が必要な気がした。

たとえばこの塔の財政を管理して、召使いたちの給料などを払う立場に立つとか、あるいはアビュ以外にもっと直属の部下を増やすとか。

しかし下手にそんなものを手にしたら、この塔から永遠に出られなくなるかもしれないと思う。

私なしではこの塔が運営出来なくなるなんてことになったら、プライヌスはこの塔から私を解放してくれなくなるに違いないのだから。

けどそういう権力がなければ、私の仕事は円滑に進んでいかないことも確かだ。

いずれ、どっちを取るべきか私は真剣に考えなければいけないか

もしれないだろう。

さもないと中途半端な立場のまま、プラーヌスと召使いの間でいつまでも板挟みになっていなくてはならなくなる

とはいえ、ただひたすら眠りたいだけの私は、今、そんなことを真剣に考えるつもりはなかった。

そういう面倒なことを忘れるためにもぐっすり眠りたいのだ。

幸いなことにこの塔は基本的に静かである。

街にある私の住居だと、石畳を走る馬車の音や、物売りの子供の声で昼まで眠れたものではないだろう。だけどこの塔で起きる騒音は、昨夜のあのグロテスクな生き物が巻き起こした騒動くらいである。あれは一応、解決したのだ。もうそういうことはないだろう。

汗はかいたし、あのグロテスクに改変された人間たちと長時間同じ場所にいて、身体中が何か汚らわしいものに穢れているような感覚がしたけれど、私は服も脱がず、新たな衣服に着替えることもなく、そのままベッドに倒れこんだ。

そしてすぐに眠りに落ちていったようだ。

第三章 6) 蛮族襲来

頭がガンガンする。

何者かが私の頭を、胴から無理に引つ剥がそうとしているような感覚。

私は何者かのその無礼な行為に必死に抵抗していたけど、残念ながら力及ばずに負けてしまった。

私の頭はその何者かに引っこ抜かれ、部屋の外に持ち出されようとしていた。

それはやめてくれ！

そう思つて、その何者かを追いかけようと立ち上がったら目が覚めた。

夢を見ていたようだ。

それにしてもなんて目覚めの悪い夢、起きてもまだ頭がガンガンすると思つたら、部屋の中にも鐘の音やら銅鑼の音やらが鳴り響いていた。

「畜生！ いったい何事だよ！」

滅多にそのような口をきかない私も思わずそう叫んでしまった。

眠気も疲れも全く解消されていない。

無理に眠りの世界から外に出されたからか頭が痛い。

その頭の痛みに沁み込んでくるように、鐘の音やら銅鑼の音やら響いてくる。それでも私はあまりの眠たさにもう一度ベッドに横たわった。しかしこの騒ぎの中では到底眠れそうにはなかった。

私は大変な怒りを覚えながら起き上った。

もしかしたらほとんど眠れなかったのかもしれない。部屋の外に出て窓のほうを見ると、光の差し込み方が眠る前とほとんど変わらないように思えた。

やはりろくに眠れなかったようだ。

私は渋々、騒ぎが起きているほうに向かった。西の回廊を歩き、中央の塔に到着すると既にプラーヌスがそこにいた。

プラーヌスもイラついているのがわかる。

足下に控えている召使い、恐らく大柄だから門番などを勤めている召使いだろうか、その男に向かって声を荒げていた。

それを見て私は少しホツとした。もしかしたらいつもの時間に起きてこない私を起こすため、プラーヌスがこんなことを仕向けたのではないかと一抹の不安を抱いていたからだ。

しかしプラーヌスの様子を見る限り、そんな感じではない。

「何の騒ぎなんだよ、プラーヌス、僕はほとんど眠ってないぞ」

だからってわけではないけど、僕は少し強気にそう言った。

「蛮族の襲来だよ、シャグラン」

よりによってこんな日、こんな時間にね！

プラーヌスが声を荒げたから、私は自分が責められたかのように、思わず首をすくめてしまった。

しかし蛮族の襲来だって？

「前にも言っただろ、ここに来る途中、君の乗っていた馬車を襲ってきたあの蛮族たちが、この塔に定期的に襲撃をかけてくると」

ああ、思い出した。それでプラーヌスは番人に騎士を雇うなどという、無茶苦茶な願望を口にしていたっけ。

「奴らは律儀だね。普段はこんな朝早く襲撃を掛けてくることはないのだけど、今日はこういう風の吹き回しか知らないがやってきたらしい」

角笛の音と、馬蹄の響きが、少しずつこちらに近づいてくるのが聞こえてくる。

プラーヌスの意識がそっちの方に向いたのかきっかけに、私も恐怖と好奇心が織り交ざった気持ちでバルコニーに出た。

このエリアには窓一つなく、その様子を見るには扉の外のバルコニーに出るしかない。

私のいるバルコニーよりも数階高い場所に見張り台があった。そこで召使いたちが蛮族の襲来を報せる銅鑼や鐘を叩いている姿が見えた。

私は叩き起こしたのはその音のようだ。

その音に混ざり、蛮族の鳴らす角笛や、自らを奮い立たせる鬨の聲が聞こえてくる。

確かに蛮族たちがやってくる。

塔の近辺以外は深い森が広がっていて、それに隠され彼らの姿はまだ見えない。しかし確かに何者かの大群がこちらに押し寄せてく

る音が聞こえるのだ。

「百人程度は来ているな」

プラーヌスが私の背後に来てそう言ってきた。

「ひゃ、百人だつて？」

「前もそれぐらいだった。放っておけば塔の中に侵入して来て略奪が始まる。何としても撃退しないとイケない。しかしそれで魔法のエネルギーを使い切り、僕の一日は台無しさ。しかも塔の外に出ていかなければいけないから、宝石も使わなければいけない」

「ぼ、僕も武器を持とうか？ 手伝えることがあれば言ってくれ！」

事の重大さがわかって、ようやく眠さも疲れも一気にどこかに吹き飛んだ感じだった。私は意気込むようにプラーヌスに言った。

だけどプラーヌスは私のその言葉を一蹴に伏した。

「足手まといになるだけさ、シャグラン、君は絵筆しか持ったことのないだろ？ ここで黙って見とけばいい。でも僕は君のそういうところが好きなのさ」

プラーヌスは私を見て、少し嬉しそうに微笑みながらそう言った。

「ほ、本当に大丈夫なのか」

私は彼の微笑みに少し照れながら、しかし気遣うように言った。

「ああ、問題ない、あんな未開の蛮族に僕が負けるわけがないさ。しかし僕が騎士を必要に感じるのも理解出来るだろ？」

「そ、そうだね」

戦場の音が近づいてくる。

幸いにも私はこれまで一度も本物の戦場に立ち会ったことがない。戦乱に明け暮れている恐るべきこの時代ではあるが、生まれたところが良かったせいか剣すら握ったこともない。

しかし私が出来るだけ避けてきた戦いが、今、間近で起きようとしている。

私は湧き上がってくる恐怖を止めることは出来なかった。昨夜、感じた恐怖とは別種の恐怖。何か気味の悪いものと遭遇する恐怖ではなく、本当に命が危険にさらされる恐怖だ。

「クズクズしてられない。蛮族はもうそこまで迫っている。君はここで見ていいが」

そう言ってプラーヌスは何か魔法の言葉をつぶやき、私の前から消えた。

第三章 7) 魔法の稲妻

プラーヌスの予想通り蛮族たちの数は百ぐらいだろう。

裸馬に跨っている者や、徒歩の者などが、隊列を組むわけでもなく漠然と入り乱れ、角笛を鳴らし、奇声を発しながら、塔の唯一の入り口に向かって殺到してきた。

プラーヌスは彼らが突撃して来るその行き先の真ん前に、突然ふっと現れた。

まるで最初からそこにいたように、何かの障害物のせいで私の視界に入ってなかっただけのような、あまりにも自然な現れ方。

蛮族たちも、突然目の前に出現したプラーヌスに驚いたふうもなく、自然とプラーヌスを取り囲むように二手に分かれていきながら進撃を止めた。

どの蛮族も弓や棒きれのような槍ぐらいでしか武装していない。

防具は更に粗末で、寒さを防ぐぐらいの役にしか立ちそうにない毛皮をまとっているだけだ。

しかしその数は圧倒的だ。そして全身から漲る殺気は旺盛で、士気もかなり高いよう。

「なぜ敵わない相手にこうやって無益な襲撃を繰り返すんだ？」

プラーヌスは蛮族たちをゆっくりと見回しながら、大声でそう言った。「それともまだ、勝てる見込みがあると思っているのか？ 今すぐ去れば命だけは助けてやってもいい。しかし一歩でも動けばどうなるか」

その言葉が通じなかったのか、あるいはプラーヌスの脅しは蛮族たちに空々しく響いたのだろうか、蛮族たちはプラーヌスの警告をもともせずに一斉に襲いかかってきた。

蛮族たちが一斉に襲いかかってきて、プラーヌスの姿が再び消えた。

かと思うと彼らの上、蛮族たちが槍を突いてもギリギリ届かない辺り、まるでアルファベットの上のアクサンテギュの位置にプラーヌスは浮かんでいた。

それに気づいて蛮族たちは武器を弓矢に切り替えた。最初の矢が当たりそうになった寸前、プラーヌスはまたもや消えた。

そのとき晴れ渡っていた空が突然黒くかき曇り始めた。

蛮族たちが突然の天候の変化に驚き、空を見上げた。

空は曇り出しただけでなく、風が強まり、湿気を帯び始めた。更に空から大量の雨粒が落ち、雷の音が遠くから聞こえ始め、そしてそれは次第に近づきだしたかと思うと、稲妻はまるで意志をもった生き物のように次々と蛮族の上に襲いかかった。

私はその光景を呆気に取られながら見ていた。

稲妻は一瞬にして蛮族の半数を死滅させた。

生き残った蛮族たちは腰を抜かし、呆然とした様子で空を見上げている。

肉の焼け焦げる匂いと、蛮族たちの感じた恐怖が、煙と共の空に立ち昇っていくのが見えるようだ。

「この塔にいったい何の用なのだ？」

その言葉と共に、プラーヌスはまた私たちの前に姿を現した。

蛮族たちは酷く怯えながら後ろを振り向いて、彼を見た。

「二度とこの塔に近づくな、もしまた近づけば」

彼はそう言ってロッドを振り下ろした。

黒い空は再び不穏な唸りを上げ始めた。

蛮族たちは算を乱して逃げ出そうとしたが、恐怖のあまり足がもつれ、まるで氷の上を滑っているかのようにだった。

第三章 8) 蛮族再襲来

「前の襲撃のときはやってきた蛮族を一人残らず殺してやった。僕の方ではそれぐらいのこと容易いことだ。ポケットの中の櫛を取り出すぐらいの労力もいらない。しかし今回はあえていくらか逃がしてやった。この塔に住む魔法使いの恐ろしさを仲間たちに伝えさせるためだ」

プラーヌスがいくらか興奮した面持ちで帰ってきた。

さすがの彼もこれだけ人を殺した後は平常ではいられないようだった。巨力な魔法を使って疲れているせいもあるのだろうけど、いつものプラーヌスと様子が違う。

沸き上がってくる感情を抑えられないと言った感じで妙に早口だし、どつちかというと常に無愛想で、突き放すような態度でしか話さないのに、今のプラーヌスはやけに人懐っこい笑顔を浮かべている。

「奴らもこれで懲りて、しばらくは近寄ってこないだろう」

プラーヌスはそう言って、満足げに自室に引き下がっていった。

しかしそれでも蛮族はやってきた。

その襲撃の翌日、以前と同じぐらいの兵力で彼らはこの塔に攻め寄せてきたのだ。

そのときのプラーヌスの落胆と言すべきか、怒りと言すべきか、何と表現すればいいのかわからないけれど、とにかく蛮族たちが彼の警告にまるで耳を貸さない事実、プラーヌスは本当に絶望していた。

もちろん再び、プラーヌスは自ら蛮族たちを撃退した。それは以前と同じようにプラーヌスの圧倒的な勝利で終わった。

前回散々に負けたのに、こうやって懲りずに攻め寄せて来るくらいなのだから、蛮族側は何か新しい策でも携えてきたのかと思ったがそういうわけでもないようだった。

ただ前と同じように正面から突撃して来るだけ。

どう見積もっても、蛮族たちは魔法使いプラーヌスの敵ではないよう。

しかし連日、こうやって蛮族を相手にしなければいけないことに、プラーヌスは心の底からうんざりしていた。

そういうわけでプラーヌスは少し予定を早めて、騎士に会いに行くことを決意したようだ。

蛮族が再び襲来したその日の夜の夕食の席、プラーヌスはその計画を私に語ってきた。

「僕は騎士バルザをこの塔の門番に勧誘するためにパルに行ってくる」

プラーヌスの目当ての騎士はパルの国に住んでいるらしい。

パルがどこにあるのか私は詳しく知らないけど、その国がどこにあるのがそこまで行くのにプラーヌスの魔法なら一飛びであるう。

しかしそこで、その騎士との折衝やら何やらに最低三日か四日は塔を留守にしないといけないらしい。

そういうわけで、それまでの留守番役をどうするかプラーヌスは頭を悩ましていたようだ。

てっきり留守番役を任されるのかと思ったが、プラーヌスは私のことなど念頭になかったようだ。

「君では役不足に決まっているだろう、蛮族を追い払うことも出来ないではないか。君には街で手伝わってもらいたいこともある。一緒に来るんだ」

その代わり、塔の留守は僕の複製に務めてもらうことにした。

「複製だつて？」

ブラーヌスは驚くべきことをさらりと言ってきた。

「そう、複製さ。それなら四日、五日ぐらい誤魔化しはきく。蛮族とも戦えるし、他の侵入者も撃退出来る。何なら僕よりも残酷な複製だよ。魔族にその中身を務めさせるからね」

「魔法ならそんなのも出来るのか」

百人の蛮族を一瞬で殺し尽くすことが出来るくらいなのだから、今更驚くべきことではないかもしれないけど、私は改めて感動するようにつた。

「まあ、複製と言ってもそれほど正確なものじゃない。四、五日しか継続しないし、ただ蛮族を殺すことだけしか出来ない代物だ。しかし今はそれで十分」

ただし塔を留守にするのに一番の心配事は蛮族のことじゃない。ブラーヌスは不安そうに表情を曇らせながら言った。

「他の魔法使いが僕の留守中にやってきて、この塔を占領されることのほうが怖い。それ相手では僕の複製などという稚技は通用しないからね」

だけどそれもどうにか計算はたつたらしい。

「まだ完全に、この塔を魔界から支配している魔族との契約を取り付けたわけじゃないが、もうあと一歩だ。他の魔法使いが勝手に交渉しに来て、一、二週間ぐらいでは移譲されないぐらいまでの信用は取り付けたのさ。まあ、魔族相手に信用と言うのもおかしいが」

魔族との契約のことは私もよくわからないが、プラーヌスが以前から言っていることを自分なりに整理して説明すると、こういふことだ。

ただ塔に住んだからといって、この塔の完全な主になれるわけではない。

塔を魔界から支配している魔族との契約を取り付けなければ、ただこの塔に間借りしているような状態に過ぎない。

すなわちそれでは、他からフラリとやってきた魔法使いと立場は同じということ。

確固として自分の塔にするためには魔界からこの塔を支配している魔族と契約しなければいけない。それでようやく、塔の主としての様々なアドヴァンテージを魔族から得ることが出来る。

そうなると、この塔を簡単に失うこともない。

それまでプラーヌスが自分の書斎に籠り、夜中まで忙しく働いていたのはそれをやっていたようなのだ。

「主要な魔族との契約は取り付けた。この塔が完全に僕のモノになるのはもう時間の問題さ。そういうわけでバルザ殿に会いに行く時間も出来た。そのついでに街で買ひ物も済ませよう」

プラーヌスがワインで口を潤した後、そう言った。

「久しぶりに街に行けるのは嬉しいけど、でも買い物って何をかうんだよ？」

私もメインディッシュの羊の肉のカツレツを食べながらプラーヌに尋ねた。ゲオルゲ族の料理係になってから本当に料理が美味しくなったものだ。

「まず花が欲しいね。あのグロテスクな怪物たちの残した腐臭がまだ塔中に漂っている。塔中に花を飾って、花の香りでこの悪臭を追いつ出すのさ」

「ああ、それはいいかもね。暗い塔が少しは華やかになるかもしれない」

塔を花で飾ろうというプラーヌスの趣味はどうかと思うが、私からすれば少しでもこの塔が明るくなればそれでいい。

「単純に塔を華やかにするだけならもっと良い方法がある。小汚い召使いたちを追いつせばいいのだ。もっと若い、見目麗しい召使いたちに入れ替えるのさ。しかしまだ新しい召使いを探すだけの時間は無い。だけど街で家具や調度品を買う時間ぐらいはあるだろう」

「いいな、街か。何だか心が湧きたつよ」

久しぶりにこの塔から出られるとあって、私の表情もほころんだ。来る日も来る日も、この暗鬱な塔をぐるぐる回っているだけの生活にはさすがに飽き飽きしていたのだ。

「しかし君と二人で買い物をして歩くなんて、まるでデートみたいだな」

プラーヌスが微笑みながら言ってきた。

「男同士でデートなんて、馬鹿なことを言ってるんじゃないよ」

私はプラーヌスの冗談に苦笑いしておいた。しかしそれでも街に行けるのは本当に楽しみなことだ。

「まあ、その街に娼館もあるだろう。久しぶりに女を抱けばいい」

プラーヌスが澄ました顔でこんなことを言ってきた。

「いいよ、そんなの」

私は首を振って断った。いざ街に着くとまた気分は変わるかもしれないが、今はそんな気はないし、それに何よりプラーヌスの勧めに従って女性を抱くのも何か嫌なもんだ。

私がそう言って断ったら、プラーヌスは何を勘違いしたのかこんなことを言ってきた。

「ああ、そうか、シャグラン。君はあの召使いに既に手を出して済ませているわけか？」

「はあ？ あの召使いつて？」

「君の後をチヨロチヨロついて回っている女の子がいるじゃないか」

「も、もしかしてアビュのことを言ってるのか？ あんな子供を

そんなふうに見てないよ」

私は慌ててプラーヌスの言葉を否定した。いくらなんでもその勘違いは酷過ぎる。

「まあ、いいさ、どうしても君の好きにすれば」

焦る私を尻目に、プラーヌスはもうその話題に厭きたといった感じで、さっさと話しを変えてきた。

「そういえば名簿作りのほうは？」

「え？ ああ、少しずつ進んでいるかな」

私は話題が変わったことに内心ホツとしながら言った。「明らかにこの塔の住人は多過ぎる。仕事も無く、時間を弄んでいる者は多いね」

「いずれ首にする。だけどまだ混乱は避けたい」

「召使いで思い出したんだけど、牢獄に閉じ込められていた人たちの新しい服を、召使いたちから借りたんだ。そのとき引き換えに新しい服を買ってやる約束をしたんだけど」

「それも街で買おう。まだしばらくその召使いたちには働いてもらわなければならないからね」

「あと、まだ残っているその元囚人たちが五人いる。いつでも塔を出て行ける準備は出来ているけど」

彼らをこの塔から自由に解放する条件が、この塔に居たという記憶を魔法で奪ってからというものだった。

しかし蛮族の襲来やらで、その作業が予定通り進んでいない。

「残念ながらそんなことに費やしている時間は無いな。魔法で街を行き来しなくてはいけないから、余分なエネルギーを彼らに避けない。僕が帰ってくるまで、まだこの塔で待機してもらおう」

「彼らにそれを告げるのは心苦しいな」

きつと彼らは、この塔から一日でも早く出ていけるのを心待ちにしているはずだ。

「怨むのなら前の主か、蛮族を恨めとでも言うんだ」

「わかった、仕方ないな」

プラーヌスが彼らのために自分の予定を一日二日遅らせるはずもない。私は諦めるようにその言葉を飲み込んだ。

「そうだ、忘れるところだった、シャグラン、倉庫から女性もののような指輪を用意しておいてくれ。安物で構わない」

部屋を去り際、プラーヌスが私を呼び止めてそう言ってきた。

「ああ、指輪だね、用意しておくよ。誰かのプレゼントかい？」

「そう、騎士バルザ殿にね。この指輪一つで彼は僕たちの仲間になるはずだよ」

プラーヌはそう言ってどことなく不気味に微笑んで、部屋を出ていった。

第四章 1) エリユエールの街へ

その次の日、エリユエールの街に私たちは着いた。

そこはプラーヌスの塔と、バルザが住むというパルの都のちょうど中間辺りに位置する。

本当に魔法ならどんな場所でも一瞬で到着する。

しかし突然、街の真ん中に現れるわけにもいけないので、私たちが着いたのは街の外れにある野原だ。そこに私たちを乗せた二頭引きの馬車は静かに到着した。

そこからは普通に馬車を走らせて街に向かう。

「魔法ならどこにでも好きなところに行けるのか？」

この瞬間移動は船酔いのような症状に襲われる。しかしこれを体験するのも二度目で幾分慣れたようだった。

今回も少し吐き気を覚えたが、それから気を逸らすためにもプラーヌスにそんなことを尋ねた。

「いいや、以前行ったことがあって、あの魔方陣の残っていると
ころか」

私は馬車から身を乗り出してプラーヌスが指差したほうを見た。草叢に隠れてよく見えないが、確かに地面に何か模様が残っているようだ。「あるいは仲間の魔法使いが迎え入れてくれる所だけだよ。パルには行ったことがないから仲間の魔法使いを頼っていく」

「パルに友人の魔法使いがいるんだ？」

「いや、会ったこともないから友人とは言い難いけど。魔界を通じてパルに住む魔法使いにコンタクトを取ったのさ。運良く親かな魔法使いに出会えた。これでわざわざ馬車で行かなくて済む」

「魔界を通じてコンタクトって？」

「魔法使いのことを説明していけばきりが無いけど、魔界には距離が無い。魔界に接続出来る者とは誰とでも話しが出来る。魔法使いとでも、もちろん魔族とでも」

「自分では魔法使いのことを多少知っていたつもりだったけど、まだ何も知らなかったみたいだよ」

「そうだろうね、当然、魔法使いは秘密主義者が多い」

「ただどこにきて魔法使いの実態に興味が出てきたようだねと、少し嬉しそうにプラーヌスは言ってきた。」

それはこんな便利で凄い魔法を見せられ続けていると、私の好奇心は刺激されざるを得ないだろう。

こっちの迷惑も顧みず、プラーヌスには振り回されることも多いけれど、それと同じくらい、いや、それ以上に彼と一緒にいると刺激的なことも多い。

最終的にその採算がプラスになるのかマイナスになるのかかわからないけれど、今はプラーヌスと友人であることが、この世の僥倖のように思えてきた。

だってこんな凄い魔法使いを友人に持っている者なんてそうはいないだろう。

父が宝石商だったとはいえ、魔法使いとそれ以上の接点があるわ

けでない私がプラーヌスと友人になれたのはちよつとして奇跡だ。

あれは確か、・・・あれ、どういうきっかけで私たちは知り合っ
たんだっけ？

私は久しぶりの街を前にして舞い上がっているのだろうか、昔の
ことがよく思い出せなかった。

まあ、友情の始まったきっかけなんてそんなものかもしれない。
そんなことよりも街を守る城壁が見えてきた。

私たちと同じように街を目指して歩いている人の姿も散見される
ようになった。城壁などはこれまで嫌になるぐらい見てきたけど、
私は何とも言えない懐かしさを感じた。

「まだ日暮れ前だ。面倒な誰何も受けず街に入れるだろう」

プラーヌスは馬に鞭を当てて馬車を急がせた。

ここまで来ると道も整備されてきて馬車の揺れも酷くなくなつて
いる。少々スピードアップしても大丈夫だろう。

その通行人たちを追い越したりしているうちに、エリュエールの
街に到着した。

第四章 2) 吟遊詩人プラーヌス

私たちは念のため旅の吟遊詩人の格好をしている。

まあ、私は画家だから、いつもの格好と全く変わりが無いが、魔法使いのプラーヌスはそのままでは目立ち過ぎるということで、よそ者であっても滅多に怪しまれることのない吟遊詩人の扮装を選んだ。

いつもの黒いローブを脱ぎ、その代わり羽飾りのついたつばの広い帽子をかぶり、ひざ丈のキュロットを履き、裾の長いジャケットを着ている。

おまけにリュートを背中に背負っているから、どこから見ても吟遊詩人だ。

そういうこともあって、私たちは安々と街に入ることが出来た。

まず街に到着した私たちは、おそらく街で一番大きくて豪華な宿屋に部屋を取った。

もちろんこの宿を選んだのはプラーヌスである。こんな贅沢な旅は、魔法使いと一緒にでなければ到底出来ないものだ。

まあ、貴族や成功した商人などはそもそも宿屋に泊らないものだから、私が泊まることになった部屋も大したものでもないかもしれない。

所詮、旅人向けの庶民的な部屋に過ぎないだろう。

しかしそれでも貧乏画家の私にとっては充分過ぎる贅沢である。

私が一人旅で泊るような部屋は、大概見知らぬ旅人と相部屋だから、ただどプラーヌスは贅沢なことに私にも個室を取ってくれた。まあ、その理由はただ単に、彼は誰かと一緒だと眠れないからのようだけだ。

さて、時間に一刻の猶予もない私たちは、宿屋の前に馬車を置いてさっそくエリュエールの街を散策に向かった。

石畳の整備された街路の両脇に同じ様式の家が建ち並んでいる。私の故郷の港町とそれほど距離も離れていないせいもあって、驚くような街並みではないけど、私の住む街に比べると行きかう人の数も建物の数もずっと多い。

大聖堂の尖塔を目印にしながら、私たちは街の中心に向かった。そこに近づくに連れ、物乞いや浮浪児の姿が目につくようになっていた。だけど他の街と比べてもそれほど多くはないだろう。

傷痕兵の姿は一切目に付かなかった。戦の影が差し込んでいないのも、この街の豊かで安定している原因なのだろう。

ところで街をプラーヌスと一緒に歩いて気づかされたことがあった。

それはすれ違う女性たちの多くがプラーヌスに見惚れているってことだ。

中には振り返っている女性もいた。あるいは咄嗟に色目を使ってくる女性までいる。

プラーヌスは慣れているのか、いちいちそんなことに気を留める素振りを見せなかった。

まるでそういうのは当然のことといった傲慢な態度で、自分の美を贅嘆してくる女性たちを街路に並ぶ並木か、店の前の看板程度にしか感じていない様子。

確かにプラーヌスは美しい男だと思う。

背は高いほうではないが、均整が取れたすらりとした体形をしているし、やけに瞳が青くて、それにじっと見られると不気味だけど、パツと見には海みたいに綺麗な目をしていると勘違いされることで

あろう。

細い鼻や、少し尖った顎はどう考えても神経質そうな性格を連想させ、いざ付き合うとどれだけ面倒なタイプか思い知るに違いないが、女性のように真つ赤な唇は肉感的で、逆に第一印象は人懐っこい印象すら受けるかもしれない。

まあ、人目を惹く魅力に溢れていることは間違いない。

更にこのとき、いつもの暗黒の魔法使いのローブではなく、緋色のジャケットをまとった吟遊詩人の格好をしている。

これでは見るなというほうが間違いであろう。

だから私も別にそんなブラーヌスと対抗するつもりなんて少しもない。

そんなの滅相もないことだ。

だいたい私は私だし、この世にたった一つある永遠の愛さえ見つけられればそれで満足で、あらゆる女性の注目を集めたいなんて思わない。

むしろブラーヌスみたいに生まれなくて良かった。こんな容姿だと始終格好に気をつけていなくてはならないだろう。

しかしである。しかしこうやってあからさまに区別されると、同じ男として悔しいというか何というか、やはり嫉妬を覚えざるを得ないことも確かだ。

だってこうやって隣を歩いていると、完全に私が引き立て役なんだから。

だけど同時に、そんな人目を惹いてやまないブラーヌスと友人であることが誇らしくもある。

やっぱり単純にこういうことは嬉しいものだ。

何だか強くて目立つ者の仲間になりたがる子供のような幼稚な感情かもしれないけれど、おそらくプラーヌスと友達である私を羨ましく思っている人は多いはずだ。もし私がそっちの立場だったら、そう思っていた気もする。

とにかくそういうわけで、何だか複雑な感じを受けながら、私はプラーヌスとこの街を歩いたのである。

第四章 3) 黒猫と鴉

さて市場は夕暮れ間近で閑散としていた。

まだ物売りの姿も散見出来たが、花や野菜などは朝市でしか買えないようであった。

そういうわけで花は明日、私が朝早く起きて買い集めることにした。プラーヌスは旅でも自分の生活のペースを保つつもりらしく、朝に寝て夕方に起きるサイクルを変える気はないようだからだ。

やむを得ずというわけでもないけれど、その次、私たちは古道具屋を探して街を歩いた。

その途中、プラーヌスは路上で熱心に蠟燭を売り歩いている少年を突然呼び止めた。

蠟燭なんて塔に帰ればたくさんあるのに、どうしてそんなものが必要なのかと思っていたら、プラーヌスはその蠟燭売りの少年にこんなことを言った。

「黒猫と鴉を二、三匹捕まえてきたら、君の持っている蠟燭を全部買い取ろう。更に金貨一枚もおまけでやる、どうだ、やるか？」

「き、金貨一枚？ や、やるよ、もちろん！」

少年は突然舞い込んできた幸運を逃して堪るものかといった表情で、今にもプラーヌスにしがみ付かんばかりに言ってきた。

「よし、出来れば明日中に捕まえて来るんだ。僕たちが泊っている宿は、シャグラン、どこだっけな？」

「えつ、えーと、確か『三匹の羊亭』だったっけ」

「そう、その宿屋の一番良い部屋に泊っている。そこに捕まえた黒猫と鴉を持ってくるんだ。ただし黒猫も鴉も生きたままだぞ」

「わ、わかった、お安い御用さ！」

「ああ、待っているぞ」

蠟燭売りの少年は建物の庇に降り立った鴉を見つけ、早速それを追いかけて走っていった。

子供の力で生きたまま鴉を捕まえるのは簡単ではないだろうが、金貨一枚のためなら知恵を絞って必死に頑張ることだろう。

それがあればしばらく働かなくても暮らしていけるぐらいの大金なのだから。

「素直な子供だな。僕が約束を守らないかもしれないなんて疑う素振りもなかった」

プラーヌスが少年の後ろ姿を見つめながら言った。

「まさか彼が持つてきても金貨を払わないつもりなのか？」

「いや、もちろん、ちゃんと約束は守るよ。けっこう利発そうな少年だった。確実に役目を果たしてくるだろうね。だけどあんなに利発そうなのに、釣り合わない好条件を頭から信じるなんてやはり子供だよ。大人だったら逆に誰も受け合えない。それ相応の相場の謝礼を言い渡す必要があるし、なぜ黒猫や鴉を僕が欲しがるのか余計な忖度をしてくるだろう」

「ああ、それはそうかもしれない。プラーヌス、僕がまさにその余計な付度をしたがる大人だよ、いったい黒猫とか鴉なんて集めてどうするつもりだよ？」

確かに蝋燭は塔ではかなり入用で、いくらあっても無駄ではない。ただプラーヌスが黒猫や鴉なんて動物を愛する趣味があるとは知らなかった。

「拡張子として使うんだよ」

プラーヌスが私の質問にそう答えた。

「何だい、それは。聞き慣れない言葉だけど・・・」

「いわば魔法の道具さ。黒猫や鴉が、僕の手先のように勝手に働いてくれると説明すればわかりやすいだろうか」

「わからないな、それでも」

「黒猫や鴉も、バルザ殿を仲間にするために必要なんだよ」

「黒猫や鴉が？」

「ああ、これまでも既に何匹か拡張子を放っている。今でもそれらは、僕のために頑張っただ働いているはずさ」

そのとき初めて、私はプラーヌスが何度か繰り返していた、「バルザを仲間にするという言葉」に、どこか邪悪な響きも込められているような気がした。

だって普通に仲間にするのに、このような魔法の細工が必要だろうか？

プラーヌスは何か良からぬことを企んでいるような気がしたのだ。

「プラーヌス、そのところ、もうちょっと詳しく話してくれないだろうか？」

私は足を止めて彼にそう言った。

「うん？」

プラーヌスは私の真剣な表情に気づいて、肩をすくめた。「まあ、君も少しはわかってているだろ？ バルザなんて大物が塔の番人を喜んで勤めるはずがないことを」

そんなこと当たり前だ。名だたる騎士が魔法使いの塔の番人など、どれだけ金貨を積まれてもやりたがりはいない。

まして相手はファビエル中に勇名の轟くバルザである。わざわざプラーヌスから教えられるまでもないことである。

「だけど僕はバルザを嫌々引きずり込むつもりもない。彼が心から塔の番人を勤めなくなるように仕向けるのに、幾らか細工を施す必要があるってことだよ。別に悪いことじゃないさ」

プラーヌスは立ち止まっている私を放って、さっさと先に歩いていった。

「何も知らないまま、悪の片棒を担がされるのは嫌だよ」

私は慌てて彼の後を追いながら言った。

「ああ、君に悪が似合わないことは僕もよく知っている。何も心配することはないさ」

私はもう少しこのことを追及しようと思ったが、プラーヌスはもう聞く耳を持たないといった態度でぐんぐんと歩いていった。

結局、それでこの話題は終わってしまった。

どうやら上手く誤魔化されたようだ。それにかねてからバルザ殿のことを話すとき、プラーヌスは本当に楽しそうにしているの、そういう意味でもこのことを執拗に追及する気になれなかった。

しかしかなり釈然としない気分を感じたことは事実である。

第四章 4) 憧れのルーテティア

何だか割り切れない気分を抱いたまま、それから予定通り、何件かの古道具屋に入った。

ただどの店にもあまり良い品がなく、というか少なくともプラーヌスが欲しくなるような家具はなくて、私たちは買い物をさっさと切り上げることになった。

彼は初めから、そのような予想をしていたようで、少しもがっかりした表情も見せなかった。

だけどこっちにすればかなり残念だった。

確かにこの街の古道具屋には、私の住んでいる港町にもあるような品しかなかったことは事実だけど、こういう店はウロウロしているだけで楽しめるものである。

そういうこともあり、旅が始まってまだ間もないのにもう私はうんざりするような気分だった。

まだバルザ殿の件で心は引つ掛かっているし、そもそもプラーヌスの気儘さに引き回されるのはもうたくさんだっていう気分である。まあ、いわばプラーヌスと付き合うようになってから度々感じる、絶望感といえ言い過ぎだけど、彼と友人になったことを後悔したくなる、あの何とも言えない気分に陥ったのだ。

とはいえさつきから私も、彼と友人であることを誇りに思ったり、まるで逆の感じのことを思ったりで感情の振幅が激しい。

まあ、でもそれがプラーヌスという人間と付き合うということなのだろう。

それを証拠にそのあと、私はまたプラーヌスのちょっとした言葉で、沈んでいた心が一気に浮き立ってしまったのだから、それは間

違いない。

プラーヌスにしてみれば何てことないことだったろうけど、彼はこう言ったのだ。

「やはりアンティークものの家具を買うなら、ルーテティアまで行く必要があるね。日を改めて、何もかも落ち着いてから行くこうではないか、シャグラン」

「ルーテティアだって？」

私がどれだけルーテティアの街を懂れているのか、プラーヌスが知っていたかどうか知らない。しかし芸術や工芸品などに関して、ルーテティアは最も有名な街である。

ルーテティア、そこは世界中から様々な種類のアーティストが集まる自由都市だ。画家である私がそこに懂れを抱かないはずがない。

かねてから、絶対に死ぬまでにはいつか行ってみたいと思っていた場所なのだ。

だけど自分で行くにはルーテティアは遠過ぎた。船に乗って遙かなる大洋を渡らなければいけない。私の財政状況では到底手の届かない場所だった。

しかしプラーヌスと一緒に話しは別。魔法なら一飛びである。正直言つて、プラーヌスと友達でこんなに良かったって思ったことはなかったかもしれない。

「今から楽しみにしているよ、プラーヌス！」

私はさっきの蠟燭売りの少年のように、今にプラーヌスに掴みかからんばかりに興奮しながら言った。

「ああ、必ず行こう。しかしそういう長旅のためにも、バルザという優秀な番人は必要なのさ、わかるだろ、シャグラン」

第四章 5) 悲しきハイネの物語

街に到着したのが遅い時間だったせいもあり、そんなうちに日はすっかり暮れた。

プラーヌスは旅の準備が忙しくて昼食を食べていないらしく、もう夕食を食べようということになった。

そういうわけで私たちはとある大衆食堂に入った。

まあ、どこで食事をしても構わなかったのだけど、客引きの女性に執拗に誘われたのがこの店を選んだ理由だろう。

それにしばらく静かな塔で生活していたせいか、久しぶりにこういうガヤガヤとした場所に行きたくなかったという訳もある。

とにかく酒も食事もある大きな店だったので、ここでゆっくりしようということになった。

しかしここは食事をしながら劇も見られる店だった。なぜだか知らないがプラーヌスはこれが気に入らなかったみたいで、「つまらない劇に時間を費やすのは勿体ない。食事を食べたらさっさと出よう」と不満を言い出した。

古道具屋のこともあり、どこで食事をするのか私に選ばせてくれたようだけど、実際、店の中に入ると、いつもの我儘が顔を見せたのだ。

しかし驚くことに最初は嫌々その劇を観ていたプラーヌスが、いつのまにかその劇に夢中になっていた。

その劇を観終わったあとなど、ちよつとした興奮状態と言ってもいいほどであったのだ。

私たちはそこで、チキンの唐揚げやウサギのパイ包みなどを食べながら、「悲しきハイネの物語」という芝居を見た。

プラーヌスはどうか知らないが、それほど芝居好きというわけでもない私でも知っている物語である。

妻もいるある高名な騎士が、自分の腹心の妻であったハイネという女性と禁断の恋に興じてしまうという、ありふれたラブストーリーなのだ。

確かにこの旅芸人の一座の芝居は悪いものではなかった。しかしプラーヌスみたいに感動する程では到底なかったと思う。

「そんなに気に入ったのかい？ プラーヌス」

芝居小屋が終わって、ビールを飲んでいる間もその話ばかりするプラーヌスに私は尋ねた。

「芝居自体はありきたいなメロドラマだけど、ハイネという登場人物がね、大変に気に入ったのさ」

芝居小屋の喧騒の中でも不思議に通る声でプラーヌスは言っていた。

「ふーん、プラーヌスはあんな女性がタイプなんだね」

物語の中のハイネは世にも美しい女性である。

実際、演じている役者は、少しも浮世離れた美しさなんてものは感じさせなかったけれど、物語に没入していくにつれて美しく見えるようになるのだから、よく出来た芝居だったのだろう。

「そういうわけじゃないさ。これも使えるんだよ。バルザ殿を仲間にする材料にね」

またしてもこのセリフだった。

「使える？」

「ああ、この芝居を見て本当に良かった。どうやってリアリティを出すべきか悩んでいたんだけど、これをそっくりそのまま使わせてもらう」

私は少しばかり険しい表情でプラーヌスを見ていたんだと思う。プラーヌスはそれに気づいて苦笑いしながら言ってきた。

「おっと、またそんなことを言ったら君に怒られるな。さっきの言葉は聞き流してくれ」

「・・・プラーヌス、君を止める力は僕にはないけれど、君の前から去ることは出来るんだから」

私は申し渡すように静かにそう言った。

「わかつているさ、天使のように優しいシャグランクン君。前から言っているように、そんな君だから信頼出来るし、僕は君が大好きだってな」

プラーヌスは私を優しく宥めるように言ってきた。

そういうとき、プラーヌスはどんな行商人よりも上質な愛想笑いが浮かべられるようだ。デザートに出ている南国産のフルーツより

も甘い笑顔。

「・・・わかった、もうこれ以上、このことで責めるのはやめる」

私はまだまだ不満はあったが、ビールの泡と一緒に飲み込むことにした。

「ありがたい、君に責められると僕も心苦しかったからね。せつかくの旅なんだ、仲良く行こう」

プラーヌスは私が飲み干したグラスにビールを継ぎ足してきた。プラーヌスがこんなことをしてくれるなんて珍しいことだ。私ももう怒っていないという印に、彼のグラスにビールを注ぎ返した。

それから時間を忘れて私たちは飲み続けた。

そうというのが旅の良さだと思う。

明日もいつもと同じ時間に起きるつもりだけど、どこか解放感があって、いくらか羽目が外せられるのだ。

この店を出ても、私たちは違う酒屋で飲み続けた。

本当に愉快的な夜だったと思う。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていないくらい私たちは酔っぱらったのだ。

プラーヌスも私に負けないくらい飲みまくっていた。

いや、プラーヌスがいつものように冷静だったら、私も酔えるわけがなかった。

だけど今夜のプラーヌスは普段のクールな表情をかなぐり捨て、

どこにでもいる労働者のように飲みまくっていた。

プラーヌスは、一介の庶民に過ぎない私とはまるで違う世界に住む、本当に恐るべき魔法使いだけど、こういうところは人付き合いの良い普通の男になれる。

どうして私がこんなにプラーヌスと仲良くなったのか、改めて思い出せたような感じだったかもしれない。

こんなふうに、お互い本当の自分を曝け出して酒を組み合わせる仲だから、私たちはこんなに仲良くなり、今まで友達であり続けてきたのだろう。

そう思うのが思い出せた、とても実りのある夜だったと思う。

第四章 6) 朝市

その代償というわけではないけど、次の日の朝は大変気分が悪かった。

こういう二日酔いは久しぶりである。

ベッドの上のいるということは一応、無事に宿に帰って寝ているようであるが、しかし昨夜の記憶はほとんどないから、間違いなくプラーヌスのお陰で帰り着く事が出来たのであろう。

プラーヌスもしたたかに酔っていたはずだけど、やっぱり彼はどこか醒めていたのかもしれない。

そう思いながら、クラクラする重い頭を何とか持ち上げてベッドから起き上がったとき、プラーヌスがベッドの下で眠っている姿を発見して、私は酔いが醒めるかというくらい驚いた。

私は思わず笑いそうになった。

誰かと一緒だと眠れないと言って、わざわざ個室を取っていたプラーヌスが、私の部屋で、しかもこんな恰好で寝ているなんて！

盛大に寝息をたて、無防備に背中を見せ、少しお尻をつき出したような姿勢で眠っている。

髪は乱れ、皺ひとつなかったシャツもしわくちゃだ。

恐るべき魔法使い、プラーヌスらしいからぬ姿である。

だけど友人の私にすれば、謁見の間の玉座にふんぞり返っているプラーヌスより、こういうプラーヌスのほうが好感を持てるのは間違いない。

そもそもこっちが私の知っているプラーヌスなのだ。

プラーヌスをベッドまで運んでやろうと思ったが、起こすのも悪い気がしたので、背中に布団をかけるだけにしておいた。

私は足音をたてないようこっそり部屋を出て、用意されてあった桶で顔を洗い、そのまま階下の食堂で朝食を食べに行った。

食堂にはあまり人はいなかった。

窓から差し込む太陽の感じからしても、朝方という感じはしない。明らかに正午前か、それを過ぎてしまっているかだ。

「今朝の太陽はどっちから出たのかな？」

私は自分の食事を受け取りながら、その食堂を切り盛りしているおじさんに尋ねた。

「うん？　気まぐれな太陽さんは今朝、西からおいでなすったよ」

「ってことは？」

ここは住み慣れた街じゃない。どっちが北か南が見当がつかないのを思い出して、彼に尋ねた。

「まだ昼前さ」

「よかった、朝市はまだ開いてるね」

「ああ、まだまだ大丈夫だろうね」

私は朝食を食べ終え、すぐに朝市に向かった。場所は昨日の散策でだいたい把握しているから迷うことなく到着した。

食堂のおやじさんの言う通り、市場はまだまだ人通りが多く活況を呈しているようだった。

市場には、この街の平和と豊かさを象徴するように、たくさんの品物が並んでいる。

プラーヌスの塔から最も近い街はここだから、私たちの塔で必要な生活物資や食糧など、主にこの街で買い出ししているはずである。それを思うと、並んでいる果物や野菜など、普段接しているものばかりで、そういう意味では新鮮味は欠けるが、こうやって色とりどり並んでいるのを見るとまた格別である。

私自身あまり市場に足を運ぶタイプではないせいもあるだろうけど、何だか遥かなる場所に旅に來た気分で楽しかった。

私はしばらく市場を散歩して回った。

美味しそうな果物などを買って、その場で齧ったりして束の間の自由を満喫した。

幸い、この辺の人とは言葉も通じる。

まあ、訳のわからない言葉を喋るゲオルゲ族など身近にいないのが普通の世界である。

そんなのがうるちよろしている、あの塔が異常なのだ。それを有難く思う私の感覚のほうがおかしくなり始めているだけかもしれない。

市場を気儘に歩くのはそれぐらいにし、まず私は古着屋で召使いたちの衣服を買い集めた。二、三十着の衣服は、軽くはないけれど持てない量じゃない。

それから私はありったけの花屋を廻り、ここにある限りの全ての花を買うから、私たちが泊っている宿屋に持ってくるように言って回った。

予想通り、どの花屋の主人にも鼻であしらわれた。

私の吟遊詩人風の格好を見て、そのような財力を有しているとは思ってもされなかったのだ。

しかしこつそり金貨を見せ、持ってきてくれたら必ず払うことを約束すると態度が変わった。

出来ればあまり金貨を持っていることを知られたくなかった。どこでその遣り取りを見ている、スリやら強盗やらがいるかもしれないのだ。

今は隣にプラーヌスもないし、私を守ってくれる衛兵代わりのあの力ボチャのバケモノもない。特に治安の悪そうな街ではないが用心に越したことはないはずである。

しかし金貨を見せなければ話しが進まなかったのだから仕方がない。

それにどの花屋も、どうしてこんなに大量の花がなぜ必要なのか不思議がっていた。

私は適当に説明したが誰も納得した様子を見せてくれないのだ。とにかく代金を払うから持ってきてくれと言い張るしかなかった。

そついうわけでまだもう少し街を見て回りたかったが、身の安全のこと第一に考えすぐ宿に帰ることにした。まあ、とりあえず衣服と花を買えたのだから、それでよしとしよう。

宿に帰ると、昨日の少年が入口に座っていた。

プラーヌスが黒猫と鴉を捕まえると頼んだ、あの蝋燭売りの少年である。

モゴモゴと動く麻の袋を持っているところを見ると、きちんと仕事を果たしてきたようである。

「おい、黒猫と鴉、二匹ずつ捕まえてきたよ」

私の姿を見ると、少年はホツとしたように駆け寄ってきた。

「部屋まで持っていったんだけど、あの人に凄い剣幕で怒られたんだけど」

「・・・ああ、まだ眠っていたんだろう。彼は起こされるのを何より嫌う」

「まだ寝てんの？ もうお昼だぜ」

「子供には理解出来ないかもしれないが、世の中には夕方まで眠る人間もいるんだ」

私も夜遅くまで飲んでいたせいで寝不足だった。そんな話をしていると眠たくなってきて思わず大きな欠伸をした。

「だけど彼も喜んでいいるはずだ。ほら、約束のお駄賃だよ」

私は少年を誰の目のつかないところまで引っ張って行って、その手に金貨一枚を握らせた。

それにしても金貨一枚は子供にとって大変な大金である。

いや、子供にとっただけじゃない。大人でも金貨一枚稼ぐとなれば、一日二日不眠不休で働いても難しいだろう。

私だって花を買うためにプラーヌスから預かっていなければ、金貨など持ち歩いていない。

とにかく黒猫と鴉を捕えるだけで手に出来るものではない。到底それに見合わないのだ。

しかしプラーヌスが約束したのだから仕方ない。

私はプラーヌスの無責任さを憂うと共に、その子の行く末も案じながら金貨をあげた。

少年も約束だから支払ってもらえなければ怒っただろうが、実際それを目にすると怖氣ついたように震えていた。

「誰にも見せないほうが身の為だぞ。それか思い切って親に預けるか」

「親なんていないよ。怖い親方しか」

あつ、これ、昨夜の分と今日の分の蠟燭だよ。全部売り切らないと親方にブン殴られるんだ。

そう言いながら大量に蠟燭が入った箱も私に手渡してきた。

「そうか」

それで昨夜あんなに必死に働いていたのか。「君も大変だな」

「そうでもないさ。でもこれでいつか商売を始めて、さっさとこ

の街を出ていく」

「商売？」

「うん、誰にも舐められないくらい大きくなったら、これを元手にして商売をするんだ。それで世界一の金持ちになる」

どうやら私の心配は杞憂だったようだ。歳の割りにかなりしっかりしているようだ。

「そうか、頑張れよ、次から蠟燭は君のところで買うことにしよう、買い出し担当に者にとっておいてやるよ」

「本当？ それはうれしいな。あれ？ でもあんたたちって旅の詩人だろ？」

「いや、まあ、少し訳ありでね、実は正体は別にある。けどもちろん秘密だぜ。君を信用するから教えてやってるんだ」

「ああ、俺は口がかたいから安心して」

そう言っ て少年は私に手を振りながら走り去っていった。

第四章 7) 水晶玉の向こう

部屋に戻るとプラーヌスは既に目覚めていて、私の部屋で何やら作業をしていた。

ベッドを壁に立てかけ、テーブルも脇に移動させ、板敷きの床に何か模様を描いている。

その横に大きな水晶玉と、それより一回り小さいのと、二つの水晶玉を置いていた。

更にその周りに、いくつかの宝石が無造作に転がっている。

「やあ、帰ってきたか。窓から見てたよ、少年との遣り取りを。何やら心が通じていたようだったじゃないか」

プラーヌスは私が手に持っている麻袋を見ながらそう言ってきた。

「えっ？ ああ、感心したよ、まだ幼いのにしっかりした少年だった。またいつか会いたいものだね」

プラーヌスに見られていたとしたら、他の誰かにも見られていたかもしれない。そんな危惧を少し感じた。

まあ、しかしたとえ見られていても、事情を知っているプラーヌス以外、私があの少年に金貨を渡したことは気づかれていないだろう。それほど心配することもないと思う。

「あの少年にとってはかなり印象的な出来事だったはずだ。彼がどう受け取るか知らないが、こういう出会いはいつまでも記憶に残るものだろうね。シャグラン、とりあえず僕が合図したら、その黒猫と鴉を一匹ずつその魔方陣の上に置いてくれ」

プラーヌスが床に描いた模様を指差しながら言ってきた。

「えっ？ ああ、わかった」

プラーヌスの目の前にある水晶玉の中に、どこかの街並みが映っていた。

大きな屋敷だ。

貴族か、成功した商人か、もしくは国の高官が住むような。その屋敷の前を行き来する通行人の姿も見える。

「よし、準備は出来た。おい、応答してくれ、こちら、CPだ」

プラーヌスがそう言って呼び掛けると、小さな水晶玉のほうもちカチカと瞬き、しばらくすると何かの映像が映り出した。それと同時に床に転がっていた宝石が一つ割れて粉々に消えた。

「パルにいる僕の協力者の魔法使いを呼び出しているのさ」

プラーヌスのしていることをいぶかしげに見ていた私に、彼は説明してきた。「魔界を通じての通信だよ」

そう言いながらプラーヌスは懷から仮面を取り出し、それをかぶった。仮面といっても目だけを隠す仕様のものだ。

「シャグラン、僕の後ろに立つなよ。魔界を通じての通信は正体を明かさないのが基本なんだ。だから仮面をして仮名を使う」

しばらくして、小さな水晶玉の前に人の姿が現れた。その人もプラーヌス同様、仮面をかぶっているようである。

「・・・まだ眠っていたぞ、こちらはFCだ」

その水晶玉の向こうの男の声がそう言った。私たちよりも年配のしわがれた声だ。

この声はプラーヌスが手に持っている陶器の瓶のようなものから聞こえてきた。

もちろんプラーヌスの魔法の力によるのだろうけど、こんな現象に立ち会ったのは初めてだったので私が驚いたのは言うまでもない。

「それはすまない、旅に出てるんだ。僕もまだ眠っていたかったけど、少し生活のサイクルが狂っている。迷惑だったら他の魔法使いに頼むけど？」

プラーヌスが小さな水晶玉に向かって言った。

「いいよ、受け合おう」

少し不服そうだったが、プラーヌスの脅しに屈するような声が聞こえてきた。「その代わりきっちり謝礼はもらう」

「もちろんだ、何がいい？ 最近、面白い魔法を見つけたよ。あらゆるものを新鮮に保つ魔法だ。それを使うとその建物内にある花や野菜、肉や魚など、なかなか枯れたり腐ったりしなくなる。どうだ？ 便利な魔法だろ？」

「そんな魔法、使い道に迷うな、他には？」

プラーヌスの通信相手が言った。

「ならば雨雲を呼び、雷を落とす魔法。その雷は大人数の相手に

有効だ。弱点は屋外でしか使えないこと」

「まあ、それでいい。多分、私の知らない魔法だ」

「そうか、だったらいつものアドレスに落としておく。それで本題だけど、こっちからの依頼はまたバルザの件だ」

「ああ」

「これから拡張子を飛ばすから、バルザの屋敷に上手く行き着くように仕向けてくれ。黒猫二匹に鴉二羽だ。これが最後の拡張子だ」

そう言つと、プラーヌスは私に合図をしてきた。

私は慌てて麻の袋を魔方陣の上に置いた。

プラーヌスが落ちていた宝石を拾い、それを掴みながら何か言葉を囁くと、二つの麻袋は私たちの目の前から消え失せた。

「到着した、活きの良さそうな拡張子だな、きちんと取り計らう」

水晶玉の向こうの男がそう言ってきた。

「よし。今夜、予定通り僕もそっちに行く。直前に連絡出来ないだろうから、ずっと魔方陣を開けておいてくれよ」

「わかってる。あんたを怒らせるようなミスはしないよ。どっちの魔力が上か、ちゃんとわきまえているからな」

「よし、それでは今夜、会おう」

小さな水晶玉の中に映っていた映像が消えた。それを確かめてか

らプラーヌスは仮面を取った。

「よし、全て順調だ。そっちはどうだ？」

「あ、ああ、ありったけの花を買ってきたよ。夕方頃、届けるように言っただけから、もうそろそろ来るかな。だけど到底、馬車一台には収まりきらないぜ」

「うん、それも魔法で何とかするさ」

プラーヌスは立ち上がった。「これから忙しくなるぞ。花が届いたら君を塔に送ろう。帰る準備をするんだ」

「わかった。プラーヌス、君は？」

「僕はまだまだやることがある。今夜にはパルに移動するし、その前にやっておかないといけない野暮用もある。その前にお腹が空いたな。食事をとろう、多分、この街で最後の食事になるだろう」

第二章 8) 朝食もしくは昼食

花屋が持ってきた花を、プラーヌスは自分の魔法で次々と塔に送っていった。もちろん花屋には魔法使いだとはれないようにして。花屋が来る前にプラーヌスは馬車の中で何かゴソゴソしていたから、そのとき細工をしたのだろう。

それから私たちは近くの食堂で、プラーヌスにとっては朝食、私にとっては昼食となる食事をとった。

「この旅でかなりの量の宝石を使っただろうな。いや、これからもまだまだ使う必要がある」

プラーヌスがパンをかじりながら、少し不満そうに言ってきた。「また何かでしっかり稼いで宝石を補充しないと。さもないと僕は、塔以外では魔法を使えない間抜けな魔法使いになってしまう」

「だけど魔法使いなら、宝石の十個や二十個分の金貨、すぐに稼ぎ出せるだろ？」

魔法使いは引く手数多だ。大金持ちの貴族や、大成功した商人たちが様々な依頼をしてくる。

いや、それどころか、ときには王が戦争の助力を頼んでくることもあるし、冒険家と共に冒険をすることもある。

その依頼を幾つかこなせば金貨や宝石などあつという間に溜まるはずである。

「いや、僕にとってそういう時間もおいしいのさ。俗人たちの依頼を叶えてやる時間があれば、魔法の研究をしたい」

プラーヌスは言った。「しかしそうも言っていられない。魔法使いも労働しないと魔法使いでいられない。シャグラン、だから塔の人員を出来るだけ削る必要があるんだよ。塔には不要な召使いを雇っていられるほどの余裕はないわけさ」

「ああ、そうだね」

プラーヌスのその言葉で、私は塔でやらないといけない自分の仕事を思い出し、少し憂鬱な気分になった。

もうすぐ旅は終わろうとしているのだ。

あまりに短い旅だった。しかし逆にまだ旅の最中でもあることが確認出来て、時間が許す限りこの街を堪能しようという気分になる。

「多分、魔法使いが望む究極の魔法は、無から金を作る魔法か、ただの石ころを宝石に変える魔法だろうな」

プラーヌスが最後の一口のパンを食べながら言った。

「さすがの魔法使いもそれだけはまだ不可能なんだね」

「ああ、それが出来れば世界は邪悪な魔法使いが支配することになるよ」

第四章 9 プライヌスの複製

プライヌスは食後すぐに、どこかに出ていった。何やらやらなければいけない準備がかなりあるようだ。

私はその間、街を散歩した。

しばらく街をウロウロしていたら、大聖堂の前で絵を描いている中年の男性を見つけた。

職業柄、こういうときどれだけの腕前か気になるものである。

私は背後からそっと覗きこみ、絵の出来栄を見てみた。

それほど達者ではなかったので、それを生業にはしていないようだ。ちよつと洒落者の貴族か、成功して余裕のある商人が暇潰しに絵筆を持っているだけであろう。

だけどそれを見ていたら私も絵が描きたくて仕方なくなってきた。ここ最近、時間に余裕がなくて、まるで描いていない。

仕事が一段落したらプライヌスに掛け合つかして、何が何でも自分の時間を作ろう。一応、鞆の中に絵筆を入れておいた良かった。

まあ、私がこういうことを思うのも、ある意味、覚悟を決め始めているからであろう。もう簡単にプライヌスの塔を出ることは出来ないだろうって。

これまでは自分の街に帰れば絵を描く以外やることはないのだから、そんなことプライヌスの塔に来てまでやるものではないと考えていた。

しかしどうやら塔での生活を私の日常にしなくてはいけなくなってきた気がするのだ。

それに今、描きたいものがたくさんある。

あの巨大な塔や、その周りの風景を描きたいし、プラーヌスの肖像画も描きたい。

塔の召使いたちもそれぞれ出自が違うから、顔立ちが皆違う。

考えてみれば私の画家としての嗅覚を刺激してくれるものばかりではないか！

そんなふうに気持ちも新たに、少し妙な興奮に包まれた状態で宿に戻ったら、既にプラーヌスも帰っていた。

しかもまた彼は新たな扮装をしていた。華やかな吟遊詩人の格好から、かなり小汚い、すれ違うものは誰もが避けたいくなるようななどんよりした格好。

顔まで隠れる黒いローブだけど、上質な魔法使いのローブとは違う、これはまるで墓穴を掘る雑夫のよう。

「ちょっとした変装だよ。こういう格好も似合うだろう？」

プラーヌスが自分の姿を見下ろしながら満更でもないといった感じで言ってきた。

おそらくこれもバルザ殿を仲間にするための細工の一つなのだろう。

バルザ殿を仲間にするために、こんなことまでしなくてはいけないのかと呆れた気分だったが、またそんなことを言ってプラーヌスと揉めるつもりはなかった。

「帰りの準備は出来ているか？」

プラーヌスが急くように聞いてきた。

「大丈夫さ、荷物はまとめてある」

「よし、だったらすぐに塔に送る。僕が帰るのは早くて明後日になるだろう。それまで僕の塔を頼むぞ、シャグラン」

「わかった」

そう返事しながら私はまとめてある荷物を持ち、馬車を止めている外に出ようとしたら、プラーヌスに引き留められた。

「帰りは馬車を使わない。バルザ殿を乗せるのに使うからね。シヤグラン、君はこの魔方陣の上に立ってくれ」

プラーヌスはさつき黒猫や鴉を送った、三角や丸などで組み合わせられて描かれた模様を指差した。

「そういえば初めて塔にこうやって瞬間移動していったとき、宝石が足りなかったとかいって失敗してたよね」

私はふとそんなことを思い出して嫌な予感を覚えた。

「ああ、馬を半頭分、移動させ損ねたことがあったな。でも安心するんだ、君一人を移動させるのに、僕みたいな習熟した魔法使いが失敗することはない。間違いなくサファイア一つで無事に飛んで行けるさ」

私は荷物を持って、プラーヌスが魔法陣と呼ぶ模様の上に立った。

「もちろん、信頼しているけどさ」

「じゃあな、シャグラン、また明日後日会おう」

その言葉に返事しようとしたとき、プラーヌスが何か言葉をぶつぶつと唱え出した。

その瞬間、目の前が真っ暗になり、グルグルと振り回されるような感じがしばらく続いたかと思うと、私は塔の前に座り込んでいた。

あっという間に到着したようだ。間違いなくプラーヌスの塔である。

しかし何だか様子がおかしい。

私の前を十数頭の馬が砂埃を上げながら駆けていった。

すぐ傍で断末魔の悲鳴が聞こえる。

何かが耳元を掠めて飛んでいった。鳥か何かかと思ったら矢だった。違う矢だが、私の足元に突き刺さったのでそれがわかった。

私は思わず悲鳴を上げた。

もつれる足で後退して、出来るだけその場から離れようと努力した。

だけどそんな私の前や背後を、人が乗った馬が駆けていく。

槍を持ち、弓矢を放ち、努号を発している。

裸馬を巧みに操り、殺気だった表情で駆けていく。

まさに今、塔は蛮族の襲来に見舞われているようだ。

何という最悪のタイミングで帰還してしまったことか。

私は重い荷物を担ぎながら必死に走って、戦場の只中から退避し

た。幸いなことに蛮族は私の存在に見向きもしないで、塔に向かって駆けていく。

自分の安全もだけど、プラーヌスのいない塔の安否も気になった。しかしもちろんプラーヌスはそのための備えはしてある。

塔の前で何者かが塔を守っているのが見えた。その何者かが、押し寄せてくる蛮族たちを次々に撃退している。

見た目はプラーヌスである。

いつもの黒のローブをまとい、彼の愛用のロッドを握っている。しかし確かそれはコピーだったはず。プラーヌスが旅に出る前に言っていたが、中は魔族がその姿を借りている。

私はその偽のプラーヌスの戦い振りを、息を飲んで見守った。

実際、プラーヌスの戦い方とはまるで違った。

そのプラーヌスの姿をした魔族は蛮族に喰らいついたり、素手で殴り飛ばしたりしている。完全に戦意を失って地面に伏している蛮族にも、その槍を奪い刺し殺していく。

口は血塗れで、黒いローブは返り血で別の色に変わっていった。いや、返り血だけじゃない。蛮族の弓が背中刺さっていたり、槍が脇腹を貫通したりしている。自ら流した血で汚れてもいるようだ。

しかしそれでも少しもダメージを負った様子を見せず、ひたすら目の前の動いている敵を殺し回っていた。

血の匂いと生き物の臓物の匂いが辺り一面にどんよりと漂っていた。首や手足だけじゃなく、あらゆる場所に内臓が飛び散っている。

戦いは終わったが、その偽のプラーヌスの蛮族への殺戮はなかなか終わらなかった。

そういえばプラーヌスは言っていた。こいつの中身はかなり残酷だつて。

確かにその通り、プラーヌスの偽物は、戦意を失い、助けを請う敵にも次々と止めを刺しているし、蛮族が乗っていた馬にも喰らいついていた。

塔に襲来してきた蛮族はおそらくほとんど逃げ切れることなく、残らず殺されたようだ。

私はその姿に怯えながらも、しかし塔の前で突っ立っているのは疲れるし、いつまで待っていてもその殺戮は終わりそうになかったから、意を決し、その魔族の横を素通りして塔の中に入ろうとした。

かなり距離を取って、こっそり歩いたつもりだったが、その魔族は血塗れの顔を上げて私に声をかけてきた。

「シャグランだろ？ あんた」

「えっ？ ああ、そ、そうだけど」

私は恐々と振り向きそう答えた。無視なんかしたら、逆に何をされるかわからないと思ったから。

「あんたがシャグランじゃなければ、あんたもこの馬のように食っていたぞ」

「はあ、そ、そうかい・・・」

そう返事しながら、そんなつもりはなかったのだけど、プラーヌ

スの偽物の顔をまともに見てしまった。

確かにそのプラーヌスの偽物はプラーヌスによく似ていた。

顔かたちはそっくりそのままだ。

しかし表情がまるで違っていた。目は血走っていて、口元はいびつに歪み、鼻息はやけに荒い。

顔は瓜二つだけど、ここまで表情が変わっていれば、誰も本物と見間違える者はいない気がする。

「あんたも馬を喰うか？ 生きている馬は美味いぞ」

「い、いらないよ。食事は塔でちゃんと用意してもらうつから」

喰われている馬はまだ息をしているようで、とても切なさうに私を見ていた。

助けてやれない自分の無力さから目を逸らして、私は力なく言い返した。

「そうか、こんなに美味しいのに。プラーヌスはまだか？」

「も、もうすぐ帰るらしいけど」

「あんな奴、永遠に帰って来なければいいのにな。こうやって人間の姿を借りて暴れるのも楽しいものだぜ」

そう言ってプラーヌスの姿をした魔族はケラケラと笑い出した。

私はどうしていいかわからず、追従笑いのようなのを浮かべながら、さっさと塔の中に駆け入った。

第四章 10)再び聞こえてくる女性の泣き声

塔に着いたのはまだそれほど夜も遅い時間でもなかった。

偽のプラーヌスの戦い振りを見張り台や窓から見守っていたアビユや、召使いたちや、カボチャの顔をしたバケモノまでもが、私の帰りを迎えてくれた。

「いいな、私もどうか遠いところに旅したいな」

そう言ってアビユがいつも通り快活に私に声を掛けてきた。

しかし偽のプラーヌスの衝撃で、まだ私は呆然自失とした表情をしていたのであろう、そんな私を見て、アビユが理解を示すように言ってきた。

「最近のご主人様、ずっと変なんだよ。毎日、塔の前に立って見張りを続けてるし、眠るのも外なんだよね」

「えっ？ ああ、それは実は内緒にしてただけど」

私は少し迷ったが、アビユになら言っても構わないだろうと判断し、他の召使いたちがから少し離れたところに連れて行って言った。

「実はプラーヌスも僕と一緒に旅に出ていたんだよ。あれは複製というか、偽物っていうか、とにかくプラーヌスじゃない」

「えっ？ 嘘！」

アビユは本当に虚を突かれたような顔をしていた。

こっちからすればあんなプラーヌスに騙されるのは蛮族ぐらいだ

ろうと思っていたけど、アビュもまだまだプラーヌスの実像を少しも知らないのかもしれない。

「よく見れば全然違う、とんでもない悪魔だよ、あれは。少し考えればわかりそうなものだけど」

「でも誰も気づいてないよ。確におかしい気はしてたけど、本当はああいう人かと思っていた」

「さすがのプラーヌスも生きている馬は食べないだろ」

「そう言われればそうかな」

首を傾げているからあまり納得していないようだけど、アビュはそう言った。

アビュは以前から、どうもプラーヌスを冷酷非情な悪魔のような人間だと思い込んでいるようだ。少なくとも彼に心を開いていないのは間違いないだろう。

「そうだ、食事はどうする？」

アビュが言ってきた。

「えっ？ いや、食欲なんてないよ。あんな壮絶な光景を見せられた後じゃ、何も喉を通らないさ」

私は内臓剥き出しにして死んでいった蛮族の死体や、塔の周りに漂っていた血生臭い匂いを思い出して吐き気を覚えた。

何だか無性に美しいものが見たい。あるいは麗しい香りを嗅ぎた

い。

そう、例えば花とか。

街で買って、プラーヌスが魔法で送ったはずの花を早速、塔中に飾ろう。ちょうど具合の良い仕事があるようだ。

「ところで留守中に何か変わったことは？」

「特には別に。突然、謁見の間が花だらけになったけど」

「ああ、それは予定通りのことだよ。街で大量に花を買ってきたんだ、塔に花をいっぱい飾るからね」

「何それ、ちょっと悪趣味じゃない」

アビュは吹き出すように笑ったかと思うと、私のセンスを心底疑うといった感じの表情を向けてきた。

「いや、花を飾れば塔が明るくなるし、あのグロテスクな生き物の残した悪臭も誤魔化せるだろ」

「でも花なんてすぐに枯れちゃうじゃない」

「そんな魔法でどうにかなるさ。プラーヌスと一緒に旅をして改めて魔法の凄さを実感したけど、魔法に不可能なことはそうはないよ」

「うーん、まあ、そう言われると悪い考えじゃないかな」

花でいっぱいになった塔を想像しているのか、アビュはふとニヤニヤし始めた。「うん、全く印象が変わるわ」

「アビュもちろん手伝ってくれよ、一人じゃ到底作業が進みそうにないくらいの量だ」

そう言いながら私は一端、自室に引き上げようと東の回廊に向かった。

さつさと新しい洋服に着替え、顔を洗ってさっぱりしたい。自分の服や身体に、血の匂いがべっとりと染み着いている気がするのだ。

「あつ、そう言えば思い出した。また聞こえ出したんだよね、あれが」

そんな私を引き留めるようにアビュが声を上げた。

「聞こえ出したって何が？」

私はまるで見当がつかなくてアビュに尋ねた。

「あの女性の泣き声よ」

アビュは忌まわしいものについて喋るかのように、表情を少し歪めた。

「えっ？ でもあれって・・・」

ここ数日、旅に出る前からあの声が聞こえなくなっていた。ちょうどあのグロテスクな生き物の問題が解決したと同時にあの声は止んでいたのだ。

だからあの女性の泣き声と、あの哀れなグロテスクに改造された人々は、何か関連しているのかと考えていた。

つまり私は、あのグロテスクに改造された人が、自分の運命を呪う嘆きだつて解釈していたわけだ。

確かにどういふ関係があるのかと説明を求められれば答えられない。

しかし物理的な距離を無視して塔中に響き渡る声なのだ。もともと超自然なものなのだから論理的な説明は不可能。

でもとりあえずその問題は解決したのだから、あの泣き声ももう聞こえなくなるものだと思っていたのに。

「・・・本当か、また面倒なことになりそうだな」

あの声の正体は何なのか、その謎を解いてくれとプラーヌスに言われている。

ここしばらく聞こえなかったから彼も忘れていたかもしれないけれど、いずれプラーヌスもその声を耳にするかもしれない。

「ほら！ 噂をすれば」

そのときアビュが飛び退くようにして言ってきた。

確かに聞こえてきた。

前に聞いたあの声と瓜二つ、確かにあの女性の泣き声だ。

それがどこからかわからないが、確かにはつきりと聞こえてくる。

「本当だね、わかった、どうにかして解決しないとな」

まるで恨みとか悲しみとかが、こちらにも伝染してきそうな声だ。自分が泣いているわけでもないのに、自分が泣いているような気

分にさせられる。他人の感情なのに自分の感情と取り違えそうになる。

その女性のすすり泣く声はますます高まってきた、部屋中に響きわたった。まるで四方の壁からその声が発せられているかのように。

第五章 1) 悲しきバルザの章 前編

国境守備隊には大胆な挑発行為を繰り返していた隣国の兵も、バルザの名を聞いただけで逃げ出すのが常であった。

今回もバルザ到着の報と共に、隣国の兵は引き上げようとしていた。

しかし簡単に逃げ去ることをバルザは許さない。

バルザは機動力に優れた選りすぐりの精兵だけ率いて、疾風のよ
うに国境を越え、ほとんど休まず荒野を駆け、後れを取った者は置
き去りにし、何匹もの馬を乗り捨てて、敵軍に追いつくと同時に僅
か五百の兵で相手の五千の兵に狼のように襲いかかり、ズタズタに
切り裂いていった。

まさかここまで追ってくるとは思わなかった敵軍はバルザの急襲
に不意を突かれ、指揮系統は乱れに乱れ、本隊はガラ空きになった。
バルザはその隙を突いた。

敵の将の首を打ったのである。
敵軍は算を乱して逃げ、ほうほうの体でようやく城塞に逃げ込ん
でいった。

バルザは自軍の兵をまとめ上げ、悠々と引き上げていく。

バルザは強かった。

兵を自らの手足のように動かす才に長け、剣を持って戦っても無
敵であった。

兵たちはバルザに全幅の信頼を寄せ、その命をバルザのために惜
しみなく投げ出した。

四方を強国に囲まれ、常に周辺の国から脅かされ続けていた小国

のバルが、ここ十数年に渡り絶対的な安泰を見せているのも、最高司令官バルザの率いる部隊が、一分の隙も見せずに大勝をおさめてきたからである。

今やバルザの名声は味方も恐れるほどで、心ない者はいつか国王の権力も越え、その地位を篡奪する日も近いのではないかと噂していた。

しかしバルザの名声を真に揺るぎないものになっているのは、バルザの騎士としての高潔な人柄にあった。

厳しい騎士の典範を守り、一度仕えた王に忠誠を誓い続け、部下を大切にし、一人の妻のみを愛して、決して私利私欲に走らないその人間性が、バルザの名をいっそう高めているのである。

騎士団団長を歴代最年少にして就任したバルザはまだ若く、これから先の長い活躍を嘱望されていた。

いつかバルザの率いる遠征軍が、パルの国の版図を広げるのではないかと臣民たちは期待し、彼もその期待に応えるために日頃から綿密な作戦を練るのを怠らなかった。

そんなバルザが圧倒的な勝利をおさめて、都に凱旋したその夜、しかし彼は最悪な知らせを聞くことになる。

「バルザ様、至急、お屋敷お屋敷にお戻りくださいませ」

自分の屋敷で働く使用人が血相を変えて宮殿に現れる姿を見た瞬間から、バルザは嫌な予感を覚えた。

「なぜだ？」

バルザはその使用人に尋ねた。

「奥様が何もかに誘拐されました」

そう耳打ちされた瞬間、数々の修羅場をくぐり抜けてきたバルザの強靱な心臓も止まりそうになった。

第五章 2) 悲しきバルザの章 前編

バルザは気が動転して、王宮からどうやって自分の屋敷に辿り着いたのか覚えていない。

戦場を駆けるときよりも速く馬を走らせ、街路を歩く通行人たちを乱暴になぎ倒しながら屋敷に戻った。

普段のバルザなら考えられない行動だった。すれ違う者たちはバルザの慌てた姿に驚き、戸惑っている。

屋敷に辿り着いたバルザは、屋敷の中がまるで墓場のように静まり返っているのを見て、妻が本当にいなくなったことを確信した。いや、実際に屋敷は静まり返っていたわけではない。

大勢の使用人たちが先程のバルザのように慌てふためいていたのだから、むしろ普段よりも騒がしかった。

しかしバルザにとって妻の姿がないだけで、屋敷はまるで花が摘まれ、緑の茎だけになってしまったような寂しさなのである。

しかしバルザは以前にも、このように静まり返った屋敷を体験したことがある。

赤子を身籠っていた妻が流産した夜のことである。

あのとき彼女は死んだように眠り続けた。それで屋敷も死んだように静まり続けたのだ。

あのときバルザどうやって妻を慰めればいいのかその術がわからず、ただ自分の無力を呪いながら、庭で剣をふるうだけだった。

もし彼女が本当に拉致されたというなら、今度こそ自分の力で彼女を助けなければならない。

バルザはそう心に誓った。

あのときは何も出来なかった自分だが、もう二度と彼女を闇と戯れさせてはならない。

「いつたい何が起きたんだ？ 詳しいことを教えるんだ」

バルザは一向に落ち着いた様子を見せない使用人たちを集め、陰しい形相で叱り飛ばした。

使用人だけではない。万が一のため、日頃から屋敷を防備させていた自分の部下たちも招集した。

そして彼らからこれまでの詳しい状況を丹念に聞き出した。

しかし使用人たちや部下たちの供述は食い違う部分がありに多かった。

ある者は夕暮れ、妻が馬車に押し込まれたのを目撃したと話し、ある者は屋敷の庭に突然大きな穴が開いて、その穴に落ちたのを見た気がすると言い、またある者は屋敷の中で黒いローブをまとった怪しい人影が妻を抱えて飛び立ったと答えた。

更にはバルザ自身が、妻と手を取って屋敷を出たのを見たなどという者もいた。

バルザは話を聞くにつれて更に混乱に陥った。

「いつたい我が妻の身に何が起きたのだ！」

とにかく屋敷の中に妻がいなくなったことは確かで、彼は妻を取り戻さなければならぬことは間違いないことである。

しかしあまりにそれは唐突で、謎が多く、いま一つ実感を伴わないから、まるで悪い夢の中を彷徨っているようであった。

そのとき突然、屋敷中の灯りが全て消えたかと思うと、花や陶器の器などを飾っていた出窓から黒い鴉が侵入してきた。

その黒い鴉は嘴に咥えていた手紙のようなものを、まるで無礼な配達人のような仕草で、バルザの足元に放り投げてきた。

しかしその様子も、バルザは夢で見ているかのような気分で眺めていた。

使用人たちはその突然の侵入者の出現に慌てふためき、悪魔の仕業などと口走りながら、逃げ惑っていたが、バルザだけは遠い世界の出来事のようにしか感じられない。

しかし鴉の不吉な黒さを見ながら、ふとバルザは思い出したことがあった。

妻が近頃、不可解なことを口走っていたことを。

何か不吉な黒い影が私に付きまといっていると。黒い猫、黒い犬、黒い鳥、黒い人間・・・、そんなのが始終私を見ているの。決して私を一人にしないで。

そうだ！ 妻はそんな恐怖を訴えていたんだ。

なぜ私はそれを馬鹿げたことだと笑い、可憐な妻の心配に耳を傾けなかったのだろうか。

バルザは苦々しい表情を浮かべながら、鴉が咥えてきた紙切れを拾って読んだ。

そこにはこう書かれていた。

妻を返して欲しければ、夜明け前に、迎えに行く黒い馬車に乗れ。ただし必ず一人で来い。

もしその約束を違えば、あなたの妻は狼の餌になる。

第五章 3) 悲しきバルザの章 前編

手紙の中にはこんなことも書かれていた。

愛用の武器を携えて来い。槍、鎧、そして自慢の大剣、岩を真つ二つに断ち切ったという伝説の剣も必ずと。

山賊が身代金目的で誘拐したのなら、そのようなことを書いてくるだろうか。

普通なら武器を持たずに来いと書いてくるであろう。

いや、そもそもあえてバルザの妻を狙ってくる愚かな賊などいるはずもない。バルザは最強の騎士なのだから。

だとしたらどこかの国の罾なのだろうか？

そうだとすると、そのような姑息で卑怯な罾など、岩のように真つ二つにしてくれよう。

腕に絶対的な覚えのあるバルザは豪胆にもそう思い、臆することは少しもなかった。

いや、それどころかむしろ戦意が湧き上がってくる。

背中に大剣を背負い、槍を携え、鎧を着込み、バルザは手紙の文言通り屋敷の前で待ち続けた。

手紙に書かれていた通りの黒い馬車が、夜明け前にやってきた。闇の中から蹄の音もなく近づいてくる馬車を見て、バルザはようやく理解した。これは悪魔の仕業か、あるいは悪魔を仲間として慕う、邪悪な魔法使いの仕業であると。

しかし悪魔か、悪魔を仲間として慕う邪悪な魔法使いが、いった

いこの私に何の用があるというのか。

馬車はピタリとバルザの前で止まった。

そこから汚らしい檻褌をまとった若い男が降りてきて、バルザに馬車に乗るよう促してきた。

どこかの農夫の息子か、石工か、あるいは墓掘り雑夫か、そのような雰囲気の男だ。

バルザはその若い男に詰め寄って激しい口調で妻の安否を問い質したが、その男は怯えた表情で、自分はただ使いの者だと言っばかりであった。

それならば早く妻の許に連れて行けと、バルザは自らその馬車に乗り込んだ。

第五章 4) 悲しきバルザの章 前編

馬車はひたすら闇の中を走り続けた。

しかしいつまでも馬車の外は夜で、とうに夜明けが来ていてもおかしくないくらい時間は経っているはずなのに、いや、それどころか夜が明け、そしてまた日が沈んでいてもおかしくないくらいなのに、外は変わることなく闇であり続けた。

バルザは自分の時間の感覚がすっかり狂っていることが不快で堪らなかった。今、馬車がどの方角に走っているのかも検討がつかない。

そのとき突然、馬車が止まったかと思ったら、先程の小汚い若者が馬車の扉を開け、外に出るように言ってきた。バルザは彼の言う通り外に出る。外の光景が見たかったし、縮こまっていた四肢を広い場所で十分に伸ばしたくもあつたからだ。

馬車は暗い森の中に止まっていた。

着いたのかと聞くと若者は首を振り、バルザにパンと飲み物を渡してきた。休憩ですよ。

食欲はなかったから飲み物にだけ口をつけた。甘草が入った冷たい水だ。まるで今さっき、泉から汲んで来たような。

若者も空腹だったのか、むしゃむしゃとパンを食べていた。硬そうなパンだ。大麦かライ麦のパンだろう。

若者はバルザの正面の倒れた丸太の上に座ってパンを食べながら、彼を不躰な視線でじっと眺めてきた。

そうかと思うと突然、その若者は騎士の典範について質問してき

た。

騎士は一度忠誠を誓った相手を裏切ることはないのかとか、騎士は一度愛した女性を生涯愛し続けるのかとか、典範を破った騎士はどうなるのかとか、騎士でなくなった騎士はいたい何者なのかとか。

バルザは呆れる思いだった。

むしろ数々の質問を抱えているのはこちらのほうだと。

妻は無事なのか？

なぜいつまで夜が明けないのか？

だからバルザはその男からの質問に答えずに、逆に若者にその問いを投げ返した。

「無事です。塔におられます」

どうせ質問に答えはしないだろうと思っていたら、若者ははつきりとそう答えてきた。

「塔だと？」

「はい、塔です。それと、どうしても夜が明けないのかというと、それは馬車が近道を通っているからだそうです」

「近道？」

「近道、遠回りの反対です。ところで騎士様、僕は質問に答えたのだから、騎士様も僕の質問にお答え下さいよ」

若者はニヤニヤと笑いながらそう言う。

汚い粗末なローブを頭からかぶっていて、口しか見えない。

しかしその話し方や仕草などから、まともな教育を受けられなかった下賤な者だということは容易に想像出来る。

何者かに、おそらく邪悪な魔法使いなのであるうが、金で雇われ、汚い仕事に力を貸しているのであるう。

「わかった」

しかしバルザはそんな相手にも誠実に対処することにする。

「君の質問に答えることにしよう。騎士は決して裏切らない。主君も、妻も、臣民の期待も。典範を破った騎士はもはや騎士でなくなる。一度でも破れば、これまで築いてきた名誉も誇りも全て失う。審問会で騎士の資格を剥奪されるのは当然のこと。もしかして君がこうやって騎士について詳しく聞きたがるのは、このような汚い仕事から足を洗って騎士になりたいからか？ だったら私が力になるう。騎士には簡単になれないが、君はまだまだ若いようだ。どうにか努力次第で道は開けるもの」

「誠実なお答と僕の将来に対するご心配、痛み入ります。だけど僕は大きな夢を叶えたばかりなので遠慮します。そんなことより騎士様、確か騎士はどんな苦境に陥っても自ら死を選ぶことは出来ないんですよね」

「ああ、もちろんだ、自死は悪だ。典範によって絶対的に禁じられている」

バルザは答えた。

「それと騎士は自ら騎士を辞めることも出来ない。騎士の資格を剥奪出来るのはあくまで審問会のみですよね？」

「その通りだ」

「だつたら例えばこんな場合はどうなるんですか？ 騎士の典範の誓いを破ってしまったのに、ある理由で騎士の資格は剥奪されず、ただ恥辱の中で生きざる得なくなったが、騎士ゆえに自殺も許されない。このような状況に陥った騎士は？」

「君の言っている意味が私にはわからないな。そのような状況になるわけがないのだから。騎士は典範を破ったことを認識したとき、自ら審問会に出向くもの。それが出来ない者は騎士ではない」

「しかし審問会に出向ける状況ではなかったら？ それまでは自ら死を選ぶことは出来ないということですよね？」

「確かにその通りだ。しかしもし戦に敗れ、敵国の虜囚になったとしても、敵国が我々と同じルノーヴォの神を信奉しているのならそのようなことはしない。敵国にも騎士はいるのだから、騎士にそのような辱めを与えはしない」

「では異教徒の国では？」

「たとえ異教徒でも、こちらが正々堂々と戦えば、向こうもそれなりの礼儀を尽くすもの。そのようなことは杞憂に過ぎない」

「そうですか？ ではそんな状況は滅多に起こることはないということですか。とりあえずわかりました。僕は考え過ぎだったみたい

いですね」

若者は笑みを浮かべてそう言った。「ではもうそろそろ出発してもよろしいでしょうか？　あと少しで塔に到着します」

第五章 5) 悲しきバルザの章 前編

馬車が突然激しく揺れ始めたので、ウトウトしていたバルザはその衝撃で目を覚ました。

彼は目覚めてすぐに剣に手を掛け、周りを威嚇するようにらみ回す。

馬車の中だ。

誰もいない。

彼は緊張を解いて窓の外を見た。

どれくらい眠っていたのだろうか。外は依然として夜で、その風景は特に変わっている様子もなく、それだけではどれくらい時間が経過したのか計ることは出来ない。

しかし馬車が激しく揺れていることに気づいて、初めてバルザは今まで少しも揺れなかった異常さに思い至った。

そもそも馬車はこのように激しく揺れる乗り心地の悪い乗り物なのに、まるで今まで空中を滑走していたみたいだった。

今ようやく、小石や窪みがある、現実のデコボコした道を進み出したかのようだ。

馬車はそれから上下動を繰り返しながらしばらく進み続け、時折激しく左右に揺れたりして、そしてやがて止まった。

馬車が止まったかと思うと、さっきの若い男ではなくて、その若い男よりもずっと身綺麗な男が馬車の扉を開け、丁寧な口調で外に出るようバルザに促してきた。

外に出ると目の前に塔があった。

巨大な塔だった。

夜の闇を切り裂きながら上方に突き立ち、すぐにその傷口を縫い合わせたかのように、塔が闇と闇の間をつなぎ合わせている。

バルザの住む、パルの都に建つ建物群とは違う様式だ。

バルザの住む都の多くの建物は、オレンジ色の外壁で、窓は大きく、降り注ぐ太陽の光との相性を考えて設計されているが、この塔は太陽ではなく、闇と共存することを前提に建てられているよう。

まるで冬の枯れた樹木のような印象。

あるいは痩せた野犬のあばら骨のよう。

だからと言ってその塔はみすばらしいわけではない。怖いもの知らずのバルザを威嚇するような迫力があった。

バルザはその塔を見た瞬間から、塔から発せられる邪悪な雰囲気を感じ取っていた。

このまま進めば、その先に決定的な破滅が待ち構えていることが予想出来た。

引き返すなら今この瞬間が最後の機会ではないか。

武人の勘がそう耳打ちしてくる。

しかし自分にそんな選択肢など存在していないこともバルザ自身が一番知っている。

たとえこの身と引き換えても、妻の命を助けなければならない。それが騎士としての務めであり、愛する妻を守る夫としての当然の望みであるから。

馬車の扉を開けた男はバルザを賓客でも扱うような態度で、塔の中へ案内しようとしている。

バルザはその男に導かれるまま、塔の中に入ってしまった。

第五章 6) 悲しきバルザの章 前編

大剣を背中に背負い、槍を携えたままのバルザは、武器を携帯したまま塔に入っ正しいのかと逆に問うた。

男はあっさり頷いて、足下にお気をつけ下さいと言いながら先に進んでいった。

この男、妻をさらった組織の一員なのであろうか。

しかしさっきの馬車を運転していた若者の軽い雰囲気とは違う、思慮深げな雰囲気漂わせている。

年齢は若者と同じであらうが、身なりも言葉遣いも丁寧で、それなりの教養を伺わせた。

どうしてこれほどの人物が身をやつし、悪に手を貸しているのだろうかと不思議に思うほどだ。しかし人はちよとしたきかけのみで、悪に転落してしまう生き物なのだろう。

塔の中はまるで誘うような、怪しい香りで満ちていた。

その原因は花の香りのようだとすぐに気づいた。

塔の至る所に花が飾られているのだ。

階段には一段置きに花瓶があり、あるいはただ無造作に花束が置かれていたり、もしくは廊下に花弁が冬の落ち葉のようにまかれていたりする。

花の香りは甘ったるく、バルザの頬や脇腹を優しく撫でるようであった。

まるで目に見えない大勢の女性が、近くを行ったり来たりしているかのようだ。

彼はもちろん一度も足を踏み入れたことはないが、宮殿の奥の後

宮はこのような香りがしているのかもしれないと思った。

しかし花が豪勢に飾られているわりには、塔の廊下や壁は冷たい石が露わなままで、後宮の雰囲気とは程遠く、ちぐはぐな感じもする。

もしかしてこの香りで五感を狂わして、不意打ちを狙っているのかもしれないとバルザは気を引き締める。

しかしこんな程度の子供騙しが彼に効くわけもない。

「この上の部屋で、塔の主がお待ちしています」

さつきまでずっと黙ったまま淡々と階段を上っていた男が、バルザの方を振り返って言った。

「妻もここにいるのか？」

「全ての質問には、この塔の主が答えるでしょう」

第五章 7) 悲しきバルザの章 前編

階段を上がり、手の込んだ装飾の施されたアーチをくぐると、広々とした部屋に出た。

宮殿で言えば、王のいる玉座の間のように。

バルザが仕える宮殿よりはずっと小さく地味ではあるが、床は大理石が輝き、天井は夜空に似て遠い。

少なくともさっきまで通り過ぎてきた、塔の質素な廊下に比べる
と豪勢だ。

まっすぐ赤い絨毯の伸びる向こうに派手な作りの椅子があり、そこに何者かが座っていた。

その人物の座る椅子はまるでこの空間の中の消失点のごとくで、何もかもがその一点に集まって収斂されていくかのよう。

バルザもそこに吸い寄せられていくように歩み寄っていく。

「お待ちしておりましたよ、騎士殿」

椅子に座っている人物が声を張り上げて言ってきた。

どこかで聞いたことのある声だということに、バルザはすぐに気づいた。

男にしては少し甲高い、金属的な声だ。

そこから傲慢な性格が窺える気がする。しかし決して、人に対して命令し慣れていない声。

「女一人の安否を確かめるために、わざわざこんな遠いところまでお越しいただくとは。あなたの命は今や、国の二つか三つに相当するぐらい重要なのにね」

全身黒ずくめのローブをまとい、横柄な姿勢で足を組んで座っていた。

若い男のようである。

確かにこの声、どこかで聞いたことがある。

昔の部下なのだろうか。何かの過ちを犯して、罰として我が部隊から放擲した昔の部下が、それを恨みにこんな無謀なことを企てたのか。

それとも以前に戦場で対峙した敵の一人であろうか。そういう者がこのような形で復讐を図ったのか。

いや、どちらでもない。

「そ、そなた・・・」

バルザは思い出した。

昔の記憶を深く遡る必要などなかった。最近に出会った者の中でも最も不愉快な人物。

「覚えておられますか？ わざわざ都まで馬車でお迎えに伺った者ですよ」

その若い男は今も黒いローブをまとっているが、あのとき着ていたのとは違うローブだ。

あときはまるで物乞いのような粗末なローブであつたが、今の若い男がまとっているのはまさに魔法使いの衣装。

「やはり魔法使いの仕業だったか・・・」

「そうですよ、騎士殿は魔法使いに見初められたのです」

その魔法使いは笑みを浮かべながらそうやってきた。

ローブで隠されていた顔が今は露わになっている。

陽になど当たったことのないような白い肌。

女のような真つ赤な唇が不敵な笑みに歪んでいる。

宮殿でときおり見かける、貴族の放蕩息子によくいる、男か女かわからない細面な顔立ちだ。

そういう者はしばしば武芸や政などに見向きもせず、だらしなく楽の音と色に溺れ、朝に眠り、夜に起きる退廃の生き物。

だけどここの魔法使いがバルザを見つめてくる眼差しは、鋭く堂々としたものだった。

貴族の放蕩息子とは比べ物にならないほどの圧倒的な知力と自信を感じさせる。

悔しいかな、只者ではないことが見て取れる。

とはいえ、この者の前にいるだけで、今までの騎士としての人生全てを否定されているような気がしてしまう。

この邪悪な空気、バルザのこれまで築いてきた一切を軽視しているような態度。

バルザは同じ空気を呼吸するのも腹立たしかった。

「シャグラン、すまないが少し下がっていてくれ。バルザ殿と二人で話すことがある」

塔の入り口からこの部屋まで案内してくれたシャグランと呼ばれた男に、魔法使いがそう言った。

シャグランと呼ばれた男は頷いて去っていった。

「実は騎士団団長というから、僕の父親ぐらいの年齢を想像していたんだけど、兄としても充分通りそうですよね」

シャグランという男が去って、しばらくしてから魔法使いが言ってきた。

「無駄話はいいい、さっさと妻を返してもらおうか。もし大人しく返すのならば、その首はつながったまま、明日も朝日を眺めることができるであろう」

「おお、なかなかの迫力ですね。その脅迫に何の根拠もないのに、だけど堂々とおっしゃられるのはさすがだ。まるで手負いの獣の前に立たされているような気分ですよ。しかも別に、軍や王の力を後ろ添えにして脅迫するわけでもない。あくまで己の力の身一つで僕を脅そうとする。何と頼もしい方だ。ますますその人柄、気に入りましたよ」

「妻を返せ！」

「もちろん僕だってあなたの奥さんを返してあげたい。これほどのお方が、たかが奥様が誘拐されたと知ってあんなにも取り乱され

たんだ。さぞ奥様を愛していたのでしょね。それを思うと本当に心が痛む」

「そなたの首と胸がまだつながって自由に話し出来る間に、何が望みか聞いておこつ」

「では話せる間に言っておきましょうか。僕は門番が欲しいんですよ、騎士殿、もちろん謝礼はたと弾む」

「も、門番だと？」

「そうです、この塔をしっかりと守ってくれる門番を」

「た、たわけたことを！」

「奥様の安全は永遠に保証いたします。誰も指一本触れないことを誓おう。あなたは塔に侵入者が来たときにだけ働けばいいんです。楽な仕事ですよ？ それとも魔法使いごときの門番を務めるのは、あなたの誇りが許さないと云うのですか？」

「そ、そなたは、私にこのようなことをさせるために、妻をさらい、そして私をここまで呼び出したというのか・・・」

バルザは信じられない思いだった。

騎士団団長にして、パルの軍の最高司令官である彼を、たかが塔を守る番人として使うために、これ程大それたことを企てたなんて！

バルザは怒りに溢れた表情で、背中の大剣を鞘から抜いた。

「下衆な魔法使いよ、心せよ！」

「話しが飲み込めていないようですね、騎士殿。それとも奥様の安否など、もはやどうでもいいとおっしゃられるのではないでしょうね」

「わ、私はそなたの馬車に乗った時点で全てを覚悟していた」

バルザは大粒の涙を、その清廉な瞳から大量にあふれ出しながら言った。「妻は自分が捕まったせいで、私がお前の言いなりになることを恥じ、もはや自ら命を断っているだろう。騎士の妻とはそういうものなのだ。お前は騎士の典範について質問してきたが、騎士の妻の覚悟に関する知識が徹底的に足りなかったようだな」

「な、何だと？」

「死ぬがよい、愚かな魔法使いよ！」

「お、落ち着きなさい。だけど剣で魔法使いに勝てると思いませんですか？」

「たとえ私がそなたに勝てずとも、魔法使いの番犬として使われることなど決してないのだ！」

愚かな魔法使いは取り乱し始めた。

椅子から腰を浮かし、慌てて手に持っていた魔法使いのロッドを構えようとする。

バルザは剣を振り上げ、猛烈な勢いでその魔法使いに向かって突進した。

もしかしたら一太刀さえ浴びせかけることが出来れば、この魔法使いに勝てるかもしれない。

これまでの騎士としての輝かしい戦歴の中でも、バルザは魔法使いと戦ったことはなかった。だから相手がどのような攻撃をしているのか想像もつかない。

だが、もうこの距離はバルザの距離だった。

何もかも圧倒的に有利。もはやこの大剣を打ち下ろすだけで相手の首は飛んでいくはず。

いくら魔法使いでもここから逆転するのは不可能であろう。現に相手は酷く慌てている。ようやくロッドを構え始めたばかり。

しかしそのとき突如、魔法使いは不敵な笑みを、その酷薄な唇の端に浮かべた。

「騎士殿、実は僕はあなたの秘密を知っている」

魔法使いはそう言いながら小指を立てて、バルザに何か見せつけてきた。

魔法使いの小指には指輪がはまっていた。魔法使いの細い小指でも小さ過ぎる、女性ものの指輪のようだ。

バルザはその指輪を見て、凍りついたように動きを止めた。

第五章 8) 悲しきバルザの章 前編

「魔法を使わなくても騎士の突進を止められるなんてね。ところで下衆な魔法使いとやらはどこにいるんだろっかな？」

魔法使いはバルザの大剣をさすりながらゆっくりと押し返してくる。

形勢は逆転してしまった。

魔法使いの貧弱な力に抵抗せず、バルザは押されるがままになった。

「この指輪に見覚えがあまりのようだね、騎士殿」

魔法使いはさっきよりもいっそう冷酷な笑みを投げかけてきた。「あなたには愛人がおられる。彼女も実は僕の手の中にあるんだ。この指輪はあなたが彼女に贈った者ですよね？」

「ひ、卑劣な・・・」

バルザは再び剣を持つ手に力を込めようとした。

「卑劣だつて？ 誰が？ 僕がですか？ もう貞節振るのはやめるがいい、騎士の典範とやらなど、聞いて笑ってしまうよ」

魔法使いはバルザの横を通り過ぎ、堂々と背中を見せながら歩いていった。

「その愛人に、騎士の妻としての教育は行き届いているのですか

？ 行き届いていませんよね。確かに奥様はさつさと自死されてしまった。騎士には自死は許されていないのに、妻にはそれが奨励されているというのは何とも言えないことだが。しかし夫に迷惑をかけまいと、その決心は早かった。一方、愛人のほうはまるで逆。命だけは助けてくれと哀願するばかり。まあ、まだかなり若いのだから仕方ないですよね」

魔法使いは振り返って、勝ち誇ったような表情を向けてきた。

「まず剣を捨てよ。僕の足元に放り投げて跪け。さもないとあなたの美しい愛人を、白い柔肌に飢えた下層民たちの慰めものにしてやる……。もしかしたらその下層民の中に僕も入っているかもしれませんよ」

ああ、ハインよ。

バルザの全身から力が抜けていった。

強く握りしめていた大剣が手から滑り落ちた。

バルザは上から押さえつけられたように崩れ落ちた。

「もう私の騎士としての人生は終わった」

いや、もうとつくの昔に終わっていたのかもしれない……。ハインを愛してしまったあの瞬間から。

「あなたは卑劣な騎士だ。妻の他に愛人がいるなんて！ まさに魔法使いの番犬に相応しいじゃありませんか。だけど僕はあなたの武人としての実力と、仕事に対する責任感に認めてあげよう。コソコソと、妻の他に愛人をこしらえる卑怯な男だとしても、高い給金は払ってあげますから」

「い、一時の気の迷いだっただ」

「だけどそれがいつしか、本当の愛に変わってしまった……」

「ハイネは私の優秀な腹心の妻だった。その腹心が戦場で戦死して、その死を報せに行ったとき、彼女と出会ってしまった。私の妻は生まれることの出来なかった赤子を失って以来、人が変わったようになった。そのせいか、お互い伴侶を亡くした者同士のように惹かれ合ってしまった」

「騎士殿、御見苦しいですよ。僕に向かって言い訳ですか？ それにしても騎士の典範などというのは邪魔なものです。そんなものに縛られていたら不自由にしか生きられない。誰もが、より愛するものを愛し、より自分の能力を発揮できる主君の下に仕えればいいのに」

魔法使いはバルザの剣を拾い上げ、それを力一杯遠くに放り投げた。

剣が大理石の床に跳ね返る金属音が、バルザの耳に差すように貫いた。

「僕は既に都に噂を流しておきました。騎士団団長だったバルザという男は妻を殺し、愛人と共に隣国に逃げたと。民たちの反応は、それは見事なものだった。これまでの恩も忘れて、皆、あなたを裏切り者だとか、不逞の輩だとか罵っていましたよ。でも事実ですよ。ね？ もうあなたには帰る場所はないのだ。あなたはこれから愛人の命のためにここで生きていくしかない。この塔の番人としてね」

「……ま、魔法使いよ、慈悲をくれ。私とハイネを二人して殺

して欲しい」

バルザは屈辱に齒噛みしながら、声を振り絞るようにして言った。

「駄目だ。あなたは愛するハイネのために生き続けるがいい」

膝をついて呆然としているバルザの正面に、魔法使いは足音を傲慢に響きかせながらやってきた。

「彼女の命は保証しよう。どんな人間も一切手を触れないことを約束する。だけどハイネとあなたを逢わすわけにはいかない。下手に逢わせて二人で心中など画策されるとたまったものではないからね。けどそうか、騎士は自死出来なかったんだよね。なんて馬鹿げた規律だろうか！」

魔法使いは天を振り仰いで高らかに笑ったかと思うと、瞬時に厳粛な表情に変わった。

「あなたは僕に忠誠を尽くさないかもしれない。しかしあなたのように責任感が強い御仁は、たとえ意に沿わぬ仕事だとしても、申しつけられたことはやり遂げるはずだ、決して中途半端なことはいないだろうし、わざと敵の手にかかって死ぬこともないと信じている。あなたが死んだときはハイネも死ぬときだけだね」

そう言いながら歩いていき、魔法使いは玉座のような椅子に再び腰を下ろした。

「バルザよ、明日から早速、門番としてこの塔を守れ。これは僕からの命令だ。それとも一つ約束してもらおう。この塔に住む者に、全てのことを内密にしておくのだ。妻の死、愛人が監禁されている

こと、何一つ口外してはならない」

そう言って魔法使いはバルザの目の前にハイネの指輪を放り投げてきた。「その命令に従わなければ、あなたの愛するハイネに大変な屈辱を与えよう」

その指輪は、最初は馬車の車輪のように軽快にバルザに向かって転がってきたが、しかしまるでバルザの辿った狂った運命のように、突如バタリと横に倒れた。

「どうだ、全て御理解されてかな？」

バルザはこの耐え難い屈辱に、身体が引き裂かれるような怒りを感じ、奥歯をギリギリと噛み締めていた。

すると口の中で何かが割れる音を聞いた。

唇の横を血が流れる感触を感じて、奥歯が割れたことに気がついた。

第六章 1) 上機嫌なプラーヌ

バルザを馬車で連れ帰ってきたその日の夕食の時間、いつものように私たちは夕食を共にしたのだけど、そのときプラーヌはすこぶる上機嫌だった。

おそらく何の問題もなく、予定通りバルザを仲間に出ることが出来て安心したのだろう、いつもよりも饒舌だったし、ワインを口にするペースも早い。

「次は腕の良い料理人だな。今夜の料理は悪くないが、料理人が二、三人いても構わないだろう。交互に作らせたならその味に厭きることもない。その次は召使いを総入れ替えする。しみつたれた下層民のような輩は追い出す。専用の仕立て屋も雇おうかな。宮殿のように揃いの制服を用意させるんだ。そうだ、大工も雇おう。少しでもこの塔を住みやすく作り変える」

どんなときでもドライなプラーヌスが熱い口調で将来を語っている。

それは本当に珍しいことだ。

多分、プラーヌスの心を覗けば、野原に花が咲き誇り、そこで無垢な子供が走り回っているような風景が見えるかもしれない。

それくらい幸せそうに見えるのだ。

「まあ、それにはかなりの金貨が必要だけどね。今回のことで宝石もかなり消費したし、いずれ大きな仕事を請け負わないといけない。それはそうと、街から傭兵が来たはずだけど」

上機嫌なまま、プラーヌスはそう言ってきた。

「ああ、今朝着いたよ。何やらガラの悪そうな連中だったけど・
」

「わかつている、まるで精査せず、暇そうな奴らを安値で雇っただけだからね。しかしそんな連中もバルザが率いれば精鋭に生まれ変わるはずさ。塔を守る素晴らしい番犬になるだろう」

とにかく僕はこれで魔法の研究に専念出来る。待ちに待った生活だよ。

プラーヌスは何もかも万全だといった感じで、夕食のエビのパイ包みを頬張り、大豆のスープに口をつけた。「うむ、美味しいな、これは。料理係に伝えておいてくれ、シャグラン、僕はどうやらエビのパイ包みが好物のようだ」

「わかった、言っておくよ」

プラーヌスは本当に美味しそうにモグモグと食べている。

そんなプラーヌスの機嫌の良い表情を前に言うのはためらったが、「僕はこれで魔法の研究に専念出来る」という言葉を聞いたとき、彼に報告しておかなければいけないことを思い出した。

「プラーヌス、実はまだ一つ、厄介な問題が残っているんだけど」

「厄介な問題？」

私は少し躊躇したが、むしろ機嫌の良いときに言っておくべきだと考え、思い切って言った。まだあの女性の不気味な泣き声が、どこからか聞こえるということを。

「あの声が聞こえてきたら集中力が途切れる。騒音ではないが、わずらわしいことこの上ない」

私の報告を聞いてプラーヌスは少し眉をひそめたが、それほど不機嫌になった様子もなくそう言ってきた。「あのグロテスクな生き物の問題が解決して、その声も止むと思ったのだけど関係なかったのか」

「ああ、僕もそう思っていた。だから安心していただけ、何の関係もなかったようなんだ・・・」

「いや、おそらく何の関係もないはずはないな。どこかで関連しているはずだ。一時的とはいえ、それからしばらく声が止んだことは事実だろ？」

プラーヌスはナイフとフォークを置いて、思案気に宙を見つめた。「そういえばあの女性、まだ生き残りのあの生き物の世話を名乗り出た女性がいたじゃないか」

「ああ」

もちろん覚えている。確か名前はフローリア。

自らも囚われの身であったのに、あの改造された哀れな人たちの世話を最後まですると言って出たのだ。

そのことは大変に印象的で記憶に残っている。いったい何を考えているのか驚かされたものだ。それに利発そうで、美しい少女だったという記憶もある。

「その少女と、あの改造された者たちの様子を見てきてくれない

か。何か気になるんだ」

「えっ？ ああ、もちろん、いいけど」

「あの少女はどこか普通じゃないね。上手く説明出来ないが、何か他の人間と感触が違ふ気がする」

プラーヌスは口達者な自分が、上手く言葉に出来ないことに苛立つ感じでそう言った。

「そ、そうかなあ、まあ、確かに元は人間だったとはいえ、あんなグロテスクな人間たちの世話をしようなんて並みの人間じゃ無理だけど。よっぽど心が優しいか、責任感があるのか」

「そうだ、僕には理解しにくいタイプさ。だからそう感じるのかもしれないが」

自分の極度に利己的な性格をよく認識しているのか、プラーヌスは苦笑いしながらそう言ってきた。「まあ、とにかくさっさと解決してくれ。あれが完全に解決されないと、完全なる平穩を手に入れたことにならない。もちろん僕も出来ることがあれば手伝う。どこかにこういうことに詳しい者もいるかもしれない。魔界を通して情報を収集しておく」

「うん、是非、お願いするよ」

そう言いながら私も、プラーヌスが気に入ったというエビのパイ包みを口にしたときであった。

またあの泣き声が聞こえてきたのだ。

その声は、色とりどりの食事で飾られたテーブルの上を、まるで蛇かネズミが横切ったような不快さで、わたしたちのせつかくの楽しい時間に黒い影を投げかけてきた。

「うむ、改めてこれは実に不快な現象だな。旺盛だった食欲も一気に萎える」

プラーヌスは怒りを滲ませた口調で言った。「さすがにこういうことはバルザ殿でも解決出来まい。僕たちで何とかしなければいけない」

「うん、出来るだけ僕で何とかするけど・・・」

しかしまたしてもである。ちょうどこの泣き声の噂をしていたら、折よく聞こえてきたのだ。それはこの前、アビュとるときもそうであった。

これは偶然で片付けられるのか。

この泣き声に何か意志でも込められているのではないのか。
すなわちこの泣き声の主は私たちに伝えたいことがあるということ？

いや、この泣き声に主なんてものがあるのかどうかわからない。
何か意志が込められているかもしれないというのも、こっちの思い込みかもしれない。

しかしいずれにしろプラーヌスの言う通り、あのフローリアという少女と、生き残りのグロテスクに改造された人たちに会う必要があるだろう。

少なくともこの声のことを探ろうとしたら、まず思いつく行動は

それぐらいしかない。

そういうわけで私は夕食後、早速行動に移すことにした。

第六章 2) アビュとバルコニーで

私はフローリアという少女がこの塔のどの部屋で寝泊まりしているのか知らなかったたので、彼女の居所をアビュに聞きに行った。

アビュは食事を既に終えていて、それから寝るまでの時間を持て余していたのか、北の塔のバルコニーで歌をうたっていた。

確かに天気は良く、星がきれいに見える夜だ。歌いたくなる気持ちもわからないではない。

しかしどうやらアビュはそんな場面を私に見られたのが恥ずかしかったようで、少しバツが悪そうに顔を赤らめながら言ってきた。

「えーと、確か東の塔の地下に牢獄があつて、その近くの部屋を使っていると思うけど」

さすが私の優秀な助手である。私の知らないことも大概把握している。

しかしアビュのその答えに私は愕然としてしまった。

「牢獄だつて？」

私はアビュを咎めるように思わず声を荒げてしまった。

「そ、そうみたいだよ、別に私がその部屋を用意したんじゃないから怒られる筋合いはないけど・・・」

「だけど罪人でもないのに牢獄なんて」

「正確に言えば牢獄じゃないよ。牢獄の下にある部屋なんだけど・・・でも多分、他に適当な部屋がなかったんだよ。それにボスも

最初、檻の中に押し込んでたじゃないか」

この頃、アビュは私のことをボスと呼ぶようになっていた。そんなふうと呼ばれた経験なんてないから変な感じだけど、しかしそのわりには私の対する意見は容赦ない。

「まあ、確かにそうだけど・・・」

私はアビュの言葉に思わずたじろいだ。

確かに最初、私は彼らを牢獄に押し込んだ。

しかも前の主に閉じ込められていたあの実験室の檻の中にである。

しかしそれはあのとときもう夜も遅く、誰も疲れている様子だったので、一時的な措置のつもりだったのだ。

まさかそこからの移動先が、また別の牢獄になるなんて考えているわけもない。

私は召使いたちの仕打ちに対し、怒りを通り越して呆れ返った。

まあ、もちろん私だって皆があのだグロテスクに改造された人たちを忌避する気持ちは分かる。

出来るだけ自分たちの部屋から遠いスペースにしたかったのだらう。

しかしさすがに牢獄に閉じ込めておくのは間違いである。

まして、いくらあのだグロテスクに改造された人たちと起居を共にしているからといって、フローリアという少女の部屋まで牢獄にするなんて言語道断。

「でも鍵はかけてないよ」

アビュが言い訳するように言ってきた。「自由に出歩き出来るようになったというはずだよ」

「それでも牢獄は牢獄じゃないか。そんなところに寝泊まりしろと言われたら気分は悪いだろ。とにかく一日でも早くそれを知れて良かった」

「うん」

まあ、細かい指示を出さなかった私も悪かったとは思っ。今日までそういうこと一切気にかけてこなかったことも事実だ。

「ところでこれから彼女に会いに行くんだけど、君も来るか？」

私は当然、受け合うだろうと思ってアビュにそう呼び掛けた。

「え、遠慮しとくよ、こればかりは・・・」

しかしどんな仕事でも喜んで飛びついてくるアビュにしては珍しく、後ずさりするようにして私の誘いを断ってきた。

私は一瞬、彼女を叱り過ぎて嫌われたのかと焦ったが、どうやらその表情を見る限り、あのグロテスクに改造された生き物のもとに行くのを忌避しているようだ。

まあ、実はそれは私も同じで、彼女たちに会いに行くのはかなり気が重かった。

「一人じゃこっちも少しばかり心細いじゃないか、これも仕事だ、君も来いよ」

「嫌だよ、こればかりはいくらボスの命令でも」

アビュはまるで肥溜に頭を無理に押し込められるのは拒否するように、激しく首を振ってきた。

「どうしてもか？」

「どうしても嫌だ！」

「・・・そうか、わかった、ここまで嫌なら、もういいけど」

私がそう言うと、アビュはホッと胸を撫で下ろした。しかしこんなアビュの表情を見ると、ますます私も彼女たちのもとに行く気が失せてくる。

「ねえ、ボス、何だか断ったのにこんなこと言うのどうかと思うんだけど」

アビュが言いにくそうに口を開いた。「そのフロリアっていう女性、あの人たちを連れて夜中に塔をうろついているのを見た人がいるって聞いたんだよね」

「うろついている？ どうして？ まさか誰も彼女たちに食事を用意していなかったんじゃないだろうね」

「違うよ、それは途中まで誰か運んでいるよ」

「そうか、安心した」

「でも夜の散歩とかされたら洒落にならないじゃない。みんな、

すごい嫌がつてるから」

「だけど彼女たちも、新鮮な空気を吸いたくなることもあるだろ。それぐらいは我慢すべきさ」

しかし私もあのグロテスクな生き物と真夜中、ふいに遭遇なんかしたときのことを想像して、思わず背筋に冷たいものが走った。

「わ、わかった、無暗に出歩くなとは言っとくけど。だけど牢獄のままじゃ駄目だ。どこかに新しい部屋を用意する必要があるな」

「うん、それはそうだと思うけど、私たちのエリアの近くはやめてよ、本当に」

「ああ、わかってるよ」

普段は素直なのに、あのグロテスクな生き物のこととなったら我儘になるアビュと別れて、私はフローリアに会いに地下のほうに向かおうと歩を進めた。

しかしその前に私は振り向き、アビュにもう一度言った。

「なあ、アビュ、もう一度聞くけど、本当に一緒に来る気はないのか？」

「ないよ、私、本当にあの人たち怖くて仕方ないんだから！」

第六章 3) 地下の更に地下にある牢獄

かなりこの塔にも慣れてきたので、私はあの護衛人代わりのバケモノ、カボチャの頭をした鎧の騎士「ワ」と「ギヤー」を連れて歩くのを先の旅から帰ってから一切やめていた。別に大切な物を置いているわけでもないが、私の居室の前の守衛として立たせているだけだ。

しかしフローリアのいる牢獄に一人で行くのは心細くて、久しぶりに彼らを伴って行くことにした。

フローリアたちがいる牢獄は北の塔の地下にある。

以前、彼女たちが閉じ込められていた地下の実験室の近くである。そういうこともあってその部屋をあてがったのだろうが、それにして牢獄とは酷い話である。

私は「ワー」と「ギヤー」を従え、ランタンで足下を照らしながら地下への階段を下りていった。

やがて牢獄の並ぶエリアに到着した。

牢獄は廊下の両脇に十数室並んでいた。しかしその牢獄に彼女たちはいないらしい。更にその階下の牢獄に入れたそうである。

そこから下へ、更に階段を下りていくにつれて、さっきまで様子が変わり始めていることに私は気づいた。

ネズミが足下を横切り、無数の蜘蛛が我がもの顔で巣を張り、天井を占有している。

空気もジメジメし出して、鼻をつく匂いも漂い始めた。牢獄までの階段は掃除がそれなりに行き届いていたが、それより下は完全に見捨てられているようなのだ。

これは酷過ぎる。

私は顔を顰めながら首を振った。もしかしたら彼女たちが以前閉じ込められていた地下室よりも、もっと酷い環境ではないか。

さすがにこの部屋にフローリアにあてがった召使いを咎めておかなければいけないと思った。

確かにあのグロテスクに改造された人たちを塔の中心部に済ませておくわけにはいかないだろうけど、だからってこんなところまで追放しなくてもいいではないか。

この環境は人が暮らすところではない。

下まで降り切ると、すぐそこに木製の半腐朽ちかけた扉があった。それが部屋の扉のようだ。

下半分が腐っているような扉では、確かにアビュの言った通り、彼女たちが監禁されているわけでないと言える。

しかしこれでは逆に、ネズミも冷たい風も防ぐことは出来ないであろう。部屋としての体をなしていないのだ。

しかしフローリアたちがいる部屋はこのようだ。

私が怒りで顔が熱くなってきた。

さっきまで彼女たちに会うことに怯えていたが、今はむしろ早くここから助け出すことしか念頭になかった。

私は怒りと焦りの織り交ざった気持で扉を叩いて声を掛けた。

「フローリア、話がある、開けてくれ」

しかしそう呼び掛けても返事が来なかった。もう一度、強めに扉を叩いた。

しかしまた返事がない。私は少し迷ったが扉を押し開けてみた。

扉を開けた瞬間、あの独特の激しい腐臭が、更に猛烈な勢いで嗅覚に襲いかかってきた。

私は吐き気を我慢しながら、ランタンの光で薄暗い部屋を照らした。

部屋の中は朽ちかけた扉以上に酷い状態だった。

中は意外に広いが、むしろ広過ぎて部屋と呼べるようなものではなくて、ただのガランとした空間という感じ。

足下に水溜まりがあり、私の足を濡らした。

地下水がどこから漏れているようだ。

窓はもちろんなく、部屋の端にベッドと椅子があるだけのようにある。

部屋の隅に蠟燭や、ランタンがあって部屋の中をかすかに照らしている。

フローリアが部屋の中央に座っているのがすぐに見えた。

こちらに背を向けているが、あの少女の背中に間違いないだろう。その膝の上にあのグロテスクに改造された人が横たわっているのも見える。

「勝手に部屋に入ってすまない」

彼女が無事に生きていることに安心しながら私はゆっくり近づいた。

「フ、フローリア？」

私はそう呼び掛けながら、横から回り込み彼女の顔を覗きこもうとした。

長い髪の毛が垂れ下がって顔の表情がよく見えない。もう一度声を掛けようと思ったとき、フローリアの身体が少し動いた。

「いま、最後の一人が死んでしまいました・・・」

フローリアが前を見つめたまま口を開いた。

「えっ？」

聞こえなかったわけではなかったが、私は聞き返した。

「この人が最後の一人でした。やっぱり皆、身体をこんなふうにされて、かなり生命力が弱っていたみたいです」

フローリアは膝の上の遺体を優しく撫でながら、こちらに顔を向けてきた。

彼女は前に会ったときと少しも変わりなく、まるで街角ですれ違って、挨拶でも返してくるかのような表情だった。

もちろん悲惨な死を前にして悲しげに見える。しかしこの過酷な環境によって、彼女の表情は暗く汚されていないよう。

何だかそれに、私は心をうたれたような感情を覚えた。

「・・・そうか、死んでしまったのか」

私は返事した。

「はい」

私は部屋をさっと見回した。

遺体はフロリアの膝の上にいる者だけで、他にはいなかった。
確か数十体はいたはずだ。

もしかしたら他の遺体はきちんと埋葬されたのかもしれない。そのため彼女は夜中、塔の中を歩いていたのではないか。

そのときフロリアは膝の上の遺体をゆつくりと床に横たえて立ち上がり、私のほうを向いて何か言おうとした。

しかし突然、崖の上で強い風に煽られたかのように、フロリアの身体はふわりと揺れた。

私は急いで彼女の身体を抱き止めた。

フロリアの身体は燃えるように熱かった。

服は汗にしっかりと濡れていて、顔は紅潮し、息も荒い。

酷い風邪でもひいているようであつた。

私はフロリアをしっかりと抱き上げ、急いで部屋を出た。

第六章 4) 塔の医務室

「アビュ！ この塔に医師はいるかい？」

「医師？」

アビュはまだバルコニーにいた。もしかしたら事の成り行きが気になって、私が戻ってくるのを待っていたのかもしれない。しかしまさかこんなふうに戻ってくるとは予想していなかったよ
うで、私が抱えているフローリアを驚きながら見つめている。

「えーと、医師ならミオンおじさんがいるけど、どうしたの、この人？」

アビュが言った。

「大変な熱があるみたいだ。すぐにそこに案内してくれ」

アビュのいた北の塔のバルコニーの近くに医務室はあった。

かなり粗末でみすばらしくあったが、設備自体は街の医院とそれほど変わらないようだ。

棚にたくさん薬が並んでいる。

ベッドも清潔できれいなシートがかかっている。

私はフローリアをその医務室のベッドに静かに横たえ、部屋の照明器具に火を灯した。

白いシートに横たえて、フローリアの纏っている服がいかにも汚れているのかに気づいた。

それまでどれだけ悪条件の中で暮らしていたのかそれが示してい

るようである。

アビュはそのミオンおじさんという医師を呼びに彼の部屋に行ってくれている。おそらく医師は既に眠っているのだろう、起すのに手間取っているようだ。

私は二人が早く来ないかと焦りながらフローリアの様子を見守った。

彼女は酷くうなされていた。

しきりに首を振って、苦しみと戦っている。

額に浮き出た汗を拭ってやることくらいしか私には出来なかった。あとは精々、頑張るんだと声をかけてやることと。

実際にはそれほど待っていないのかもしれないが、ようやくアビュが医師を連れてやってきてくれた。

私は彼らが到着してホツと胸を撫で下ろしかけたが、ミオンおじさんという医師を見てそれまで以上に不安になってきた。

ミオンおじさんという医師は大変に年老いていたのだ。

足取りは覚束なく、腰が曲がっていて、吹けば飛んでいきそうな小さい老人だった。

昔は優秀な医者だったかもしれないが、今、ちゃんとした思考力を有しているのか不安になるほどだ。「どれどれ、急患は君か？」と私を診察しようとしてきたのだから。

しかし私の助手のアビュは彼を信頼しているようだから、その医師に任せるしかないだろう。

「うむ、かなり熱があるようだな」

医師はフローリアの額に手を当てて言った。かと思うと、いきなり彼女の胸をはだけ始めた。

すぐに白い豊かな乳房が現れたのに気づき、私は慌てて眼を逸らそうとしたが、思わずその美しさに釘づけになってしまった。

だって医師はただ当たり前の処置を行っているだけという手つきだし、それにそれは本当に美しくて、私は頭に血が上ってしまい、少しボーっとした状態になってしまったのだ。

「ちょっとボス？ 何、ジロジロ見てるのよ」

アビュが私の脇を強めに小突いてきた。

「えっ？ いや、別に」

それedyouやく私は目を逸らした。

「しばらく外に出て」

バカじゃないの。信じられないわ。ここぞとばかりに、女の人の裸を見ようとするなんて。こんな変態だったなんて！ 私も気を付けないとね。

アビュが私を心底軽蔑するような眼差しで見ながら悪態をついてくる。私はその言葉から逃げるよう医務室を出た。

第六章 5) 医務室の夜

「いいよ、もう来ても」

医務室を出て北の塔のバルコニーの上で風に当たっていたら、しばらくしてアビュが私を呼びに来た。

少し外に出て落ち着いたと思う。

風が私の頭の中のモヤモヤをきれいに吹き飛ばしてくれたようだ。しかしアビュの後に続いて医務室に入り、ベッドに寝ているとフローリアを見ると、またさっきの光景が甦ってきて頬が赤くなった。

私はそんな自分を振り払うため、咳払いをしてから事務的な口調で医師に尋ねた。

「治るんですか？」

「はあ？」

「治るんですかって聞いたんです？」

「えっ？」

私は医者の耳元にまでしゃがみ込み、大きな声で怒鳴った。

「ああ、治るかどうかわかっているのか？ それはわからない、何か悪質なものが彼女の身体の奥深くまで侵入しているような気がする……。まあ、いずれにしろ、あんなに酷い環境にいたら、どんな体が丈夫な戦士でも病に倒れるだろうな」

ミオンおじさんは椅子に座り、緑色の草をすり鉢で摺り潰していた。「とりあえずこの薬で様子を見よう。出来れば朝までにもう一度飲ませたほうがいいのだが」

そう言いながら老医師はその摺り潰した薬草の中に水を加えていった。

そしてそれを自らの口に含んだかと思うと、やにわにフローリアに口移しで飲ませ始めた。

私はミオンおじさんの診察模様を何気なく見ていたのだけど、いきなりこんなことをし始めたのを見て、再び激しく取り乱してしまった。

手に何かを持っていたら、間違いなくそれを落としてかもしれないくらいに。

フローリアの小さな唇がかすかに開き、そこに老人のひび割れた唇が重なる。

彼女の喉がゆっくりと動き、ときおりこぼれ落ちるように緑色の液体が口の横を流れていった。

老医師はそれを何度か繰り返した。

「ねえねえ、羨ましいって思ってるでしょ？」

私が呆然とその様子を見ていたら、何だか嬉しそうな様子でアビユが言ってきた。「だってキスと同じじゃん、あれ」

「か、彼女は病気で倒れてるんだぞ」私はフローリアから目を逸らし、アビユをにらんだ。「少し不謹慎だ、もういい加減にしろよ」

「はいはい」

「おい、その君」

ミオンおじさんが私に言ってきた。「わしはもう寝るから、後はあんたに任せたぞ。あんたも同じようにして薬を飲ませるんだ」

「えっ？　僕が？」

私はきつと驚きのあまり、間の抜けた声を発したんだと思う。そんな私にほとほとあきれたのか、アビュが押しのけるようにして言った。

「いい、私がやるよ」

「まあ、誰がやってもよいが、ちゃんと様子を見ておくんだぞ。夜明け前に、同じようにして薬を飲ましてやるんだ」

「はい」

「何かまた異変があったら、わしを起こせばいい」

老医師は来たときと同じように、トボトボとした足取りで部屋に帰っていった。

「はあーあ、今夜は眠れないのか」

アビュが大きな欠伸をしながら言った。

「眠りたかったら眠ってもいいぞ。薬の時間に起こすから」

「いいよ」

するとアビユが何とも嫌みな微笑みを浮かべながら言ってきた。

「ボスの前でなんて安心して眠れないよ。寝ている間に、私の服を脱がせて裸を見ようとしてくるからかもしれないから」

「馬鹿なことを言うんじゃないよ。そんなことするわけないだろう！」

「そうかな、到底信用出来ないよ。だってフローリアさんの裸を見てたときのボスの視線、どんな切れ味の良い剣よりも鋭かったよ」

「あ、あれは、少し驚いただけさ・・・」

「まあ、そういうことにしておいてあげてもいいけど」

本気で私という人間のことをそう思っているのか、それともただ面白くて私をからかっているだけなのかわからないが、いずれにしてもアビユにあんな自分を見られたのは不覚だった。

確かにあのかときアビユがいなければ、私はフローリアの素肌からいつまでも目を逸らすことが出来なかったかもしれない。

アビユが私にこういうことを言うてくるのも仕方がないだろう。

しかし思い起こせば、気を失って私の胸に倒れ込んできたフローリアを抱きかかえていたときから、私はいつもの冷静さを完全に失っていたかもしれない。

あのかとき非常事態に心は焦りながらも、フローリアの身体の柔ら

かさと、その体温のあたたかさに陶然となっていた。

何ならずつとこのまま、フローリアを抱きかかえていたいと思っていたかもしれない。

フローリアがあんなに苦しそうな息使いをしていなければ、私はいつまでそうしていたことが。

「でもこの人、こんな奇麗だったっけ？」

アビュがさっきまでの私を嘲笑するような口調とはうって変わり、まるでふと見つけた蝶の美しさに心から感嘆するような声で言ってきた。「この髪の毛、櫛を通すと凄く綺麗になるよ。それに今、顔色は悪いけど肌は白くて奇麗だし。まあ、ボスがおかしくなっちゃうのも仕方ないね」

ねえ、そう思わない？

面倒だから何も応えないでいると、アビュが腹立ち気に声を上げた。

「ああ、確かにそうだね」

私は仕方なくそう言った。

「でも同時に、何だか汚らしい・・・」

アビュが真剣な面持ちで、少し悲しそうに言った。

「えっ？　どういうことだよ？」

確かに服は、汗や垢で変色しているくらい汚れているようだし、

もしかしたらこの塔に拉致されてから水浴びすらしていないかもしれない。

それどころかあのグロテスクな人たちと生活を共にしていたからか、彼らの腐臭も沁みついている。しかしそんなのは仕方ないではないか。

「そういうことじゃなくて、この人の行動がよ」

私が反論すると、アビュは少し苛立つようにして言った。「確かにあのグロテスクに改造された人たちみんな元は人間で、何の罪がないというのはわかるし、あの人たちが犠牲になったから、この人が助かったのは事実かもしれないよ。だけど人間には我慢出来る範囲があるでしょ？ この人の行動はそういうのを越えてるよ。凄いいというより理解出来ない。いえ、それどころか生理的に何か気持ち悪い・・・」

「プラーヌスもそう言つてよ。君みたいなことを」

私は冷たく言い放った。

「えっ？」

「彼も彼女のことが理解出来ないって言ってたな。君が嫌いなプラーヌスと同意見みたいだね」

アビュはプラーヌスが苦手なようだった。

どうにもあの冷たそうな性格が耐えられないらしい。彼の前だと態度が硬くなるのはそのせいだ。

「な、何よ、その言い方・・・」

アビュは少し傷ついたように言った。「別に私、ここのご主人様のこと。前ほど嫌いじゃなくなっただし……」

「そう？　だったら良かったじゃないか、怒ることじゃない」

「な、何よ、……もう、いいわよ」

アビュはそう言って私に背を向けた。

私も別にアビュの怒りを和らげる気にもならず、そのままにしておいた。

医務室の中はずっと沈黙が続いた。

アビュはその空気に疲れたのか、「薬の時間になったら起こして」と不貞腐れたように言って、医務室のもう一つのベッドで横になった。

しばらくして寝息が聞こえてきたので本当に眠ってしまったようだ。

私は少し迷ったが、医務室を出て、北の塔のバルコニーで夜明けを待つことにした。

私も眠気を抑えられそうになかったからだ。

それに無防備に眠っている女性の部屋にいるのも緊張を強いられる。

もちろん眠っている間に何かおかしいことをする気などさらさらはないが、そんな欲望と戦うよりもバルコニーで風に当たっているほうがいい。

その間に私は大切なことを思い出していた。

そもそも私がフローリアの部屋を訪れた訳を。

私はあの泣き声の正体を探りに行ったのだ。もしかしたらフローリアと、あのグロテスクに改造されたあの人たちから、何か少しでも情報を得られはしないかって。

フローリアがこのような状態でそれどころではなくなっただけど、いつか健康が戻れば改めて尋ねておかなければいけないことである。目下のところそれぐらいしか、あのことについての情報を得られそうなのではないからだ。

そんなことを考えながら、待ち疲れるくらい待って、ようやく地平線が明るくなってきた。

今夜の夜明けは南のようだ。気まぐれな太陽は南から空に昇り始めた。

私は医務室に行つてアビュを起こし、彼女があの場合のやり方でフローリアに薬を飲ませたのを見届けたあと、自分の部屋に戻って眠ることにした。

まあ、フローリアの様態はいくらか安静になったようだし、隣でアビュが寝ていればそれで事足りるだろう。

いつまでも私が付き添っていても仕方ないという判断だ。

ところでアビュを起こしたとき、彼女の寝起きは悪かったけど、しかし私は改めてアビュのさっぱりした性格に感心した。

まあ、もしかしたら寝起きで、まだ頭が回っていないくて、その前に何があったのか忘れていただけかもしれないが、その前の争いをすっかり忘れたような態度で、いつもの彼女に戻っていたのだ。

そういうアビュを見てしまうと、先程あまりに冷たくし過ぎた気がした。そんなことを反省しながら私はすぐに眠りに落ちた。

第六章 6) 夢と現実との狭間の夢

女性が目の前で泣いている。

馴染みのない異民族の衣装をまとった、髪の高い女性だ。

背中を向けていて顔は見えない。

だけど彼女こそが、あの泣き声の主であるようだということに私はすぐに気づいた。確かにこの声に聞き覚えがあるのだ。

「なあ、どうして泣いているんだよ？」

私は尋ねた。

「君がなぜ泣くのかその理由を問い質すよう、プラーヌスに頼まれているんだよ」

ところで私は夢を見ているようである。

なぜ夢の中にいるのに夢であることが自覚出来るのか、その理由を説明出来ないのだけど、しかし私が今眠っていることは確かなのだ。

私は今、東の回廊の部屋のベッドの上で眠っている。

いや、もっと正確に言うと、これは夢であって夢でないことにも最初から気づいていた。

夢と現実の狭間、目の前にいる女性はそうだった狭間の中でしかその姿を現すことの出来ない何者かに違いない。

なんてことを私は考えているのだけど、その夢と現実の狭間の世

界というものがよくわからない。

そんなものが存在しているなんて聞いたこともない。

しかし私はそれで妙に納得しているのだ。

そしてその泣き声の主と出会えたのを幸いに、もうこれ以上迷惑をかけないでくれと、きっちり申し入れしようと思った。

「私を解放するんだ！」

そのとき突然、その女性が顔を上げながらそう叫んだ。

まるで草むらの中から、虎かそれに類する凶暴な野獣が飛び出て生きたような驚きで、私は尻餅をつきそうになった。

目は赤く血走り、目尻はつり上がり、小鼻はひきつき、口は抑えきれない怒りの衝動で歪んでいる。

しかしこの女性の怒りよりも気にかかったことがあった。

この目の前で叫んでいる女性が誰かに似ていることに気づいたのだ。

肌が白く、艶やかな黒髪が肩まで流れ、思わず見とれてしまいそうな整った容姿をしている。

年齢は私より少し年上、激しい恨みと怒りで我を忘れたようになっているが、この女性はフローリアに似ている……。

「君は何者なんだ？」

だけどフローリアではないことも間違いないことだ。

確かに似ているが他人である。

それはいちいち違う部分を数え上げる必要もないくらいだ。

たとえば年齢が違うようだし、背の高さも違うかもしれない。それにあんな温厚で優しいフローリアが、地獄の住人のような表情を浮かべるわけもない。

「早く私をここから解放しろ！ さもないと報復は永遠に終わることはない」

女性は私に向かって、またそう叫んできた。

「ここから君を解放しろだって？ ど、どういうことだよ？」

私がそう尋ねようとしたら目が覚めた。

目覚めるとベッドの上だった。

やはり夢だったようだ。

だけど夢に過ぎないとも言切れない。何だかこの部屋の中に、さっきまで何者かがいた気配が濃厚に残っている気がするのだ。

私はまださっきの女性がこの部屋の近くにいるのではないかと思っ
て部屋を飛び出た。

しかし廊下は当然のように静かで、部屋の前に「ワ」と「ギャー」が立っているだけだった。

せつかく何らかの情報が得られたかもしれないのにと悔しさを感じると共に、どこか安堵感も覚えた。

だってさっきの女性の私をにらみつける眼差しは尋常じゃなかったからだ。まるで私が彼女の親を殺したとでもいった感じ。

それほど長い時間眠れなかった気がするが、今更寝つけそうにな
いと判断して私は起きることにした。

いずれにしろフローリアのことが気になる。

彼女の様態が気になるし、さっきの夢の女性とフローリアが似ているように見えたことも気になる。

それが私の勘違いだったのか、それとも正しい判断だったのか確かめるためにも、まださっきの記憶が定かな間に彼女に会いに行こう。

私はすぐに服を着替え、彼女が眠っている医務室に向かった。

第六章 7) 掃除婦フローリア

中央の塔に向かって歩いていく私の肌を、高窓から差し込んでくる正午の若々しい光が刺し貫く。

出来ればこの廊下にももっと窓を増やしたいぐらいだ。

プラーヌスが光は嫌いでも、せめてこの東の塔ぐらいいは街にある普通の住居のようにしたい。

そんなことを思いながら北の塔にある医務室に向かう途中、私はフローリアとすれ違った。

突然、彼女から声を掛けられ、廊下を掃除している召使いの女性がフローリアだということに気づいたのだ。

「フ、フローリア？」

私は驚愕しながら彼女を見つめた。

「おはようございます」

私がフローリアに気づかなかったのは、彼女がこんなにも早く元気になるのは予想していなかったからだけでなく、彼女が見違えるようだったからでもある。

身につけている衣服は清潔で真新しいものに変わり、髪も櫛が通ったようにきれいにとかれ、まるで湯浴みしたばかりの香りもした。

「もう大丈夫なのかい、フローリア？」

「大丈夫です。心配かけて申し訳ありません」

フローリアは駆け寄るようにして私のすぐ近くまで来て頭を下げた。「えーと、あの人たちは昨夜、最後の一人が亡くなってしまいました。もう私もこの塔にいる理由はなくなりました。でも行くところがないで、・・・だからどうかこの塔で働かせて下さい。お願いします」

「えっ？ それは全然構わないと思うけど・・・」

「本当ですか？ 安心しました。一生懸命仕事をします」

もしかしたらそれが、フローリアがこうやって無理して働いている理由かもしれない。

嬉しそくにそう言ったフローリアの眼の中に、疲労の残りの火のようなものが、ゆらめいているのが見え、私はそう思った。

まだ到底動き回れるような体調でなくても、働かなければいけないと気が焦っているのだろう。

「だけどこれは君に強く求めたいことがあるんだけど」

私はフローリアに言った。

「な、何でしょうか？」

「まずはゆっくり休んだほうがいい。君はまだ」

私とその先を言おうとした時、フローリアの目の中の疲労の振幅が大きくなったかと思うと、彼女の身体もフラフラとゆらめき出し、フローリアはまた私の腕の中に崩れるように倒れ込んできた。

私は慌てて彼女を抱き止めて、また大慌てで医務室に走った。

医務室にフローリアを抱えて運んで行こうとしている途中、北の回廊でアビュと会った。

これはちょうど良かったと、私は彼女を叱ろうとした。

フローリアをゆっくり休ませず、早々に働かせたことについて、あの老医師共々、恐らくアビュにも責任があるだろうと思ったのだ。

しかしその前に、先にアビュに言われた。

「またそのお姉さんと抱き合ってるの？」

「な、何だって？」

「イチャイチャするなら他でやってよ」

冷たくそう言い放ってアビュは私の前からさっさと去っていった。

第六章 8) バルザ出陣

私は医務室にフローリアを運んでいった。

他の患者を診察していた老医師は、倒れたフローリアを見て呆れたように言ってきた。

「だから言わないことじゃない。しばらく寝ておけとあんなに言っただのに」

「患者がそう言っても、何が何でも止めるのが医師の仕事じゃないのですか？」

私は少し苛立ちながら言い返した。

「なかなか頑固な女なのじゃ。言ってわからないのなら、身をもって知るしかない。これで懲りてしばらく安静にしているだろ」

「だけでも・・・」

私は昨日と同じベッドにフローリアを横たえた。

そして更にこの老医師に文句を言うと思ったが、フローリアが倒れることも見越し、あえて働かせたというなら言うことはないかもしれない。

「とりあえずかなり回復したことは事実なんですね？」

私は尋ねた。

「ああ、この女にはわしの理解を超えた生命力を持っておる。も

う少し寝ておればすぐに健康になりそうだ」

「はあ」

いつでも飛び跳ねるように歩くアビュならともかく、こんなか弱そうな女性が、「理解を超えた生命力を持っている」なんて言われても今一つピンと来ないが、確かに昨日のフローリアの様態と比べると見間違えるように回復していることは事実だろう。

今は光が消えたように眠っているとはいえ、さつき廊下で働いていたフローリアは到底病み上がりには見えなかったのだから。

「まあ、とにかく次に目覚めたら呼んで下さい。彼女の部屋を用意しておきます。そこに移しても問題ないですよね？」

「ああ、このベッドは別に彼女専用ではないから助かる」

私は早速部屋の準備に取り掛かろうと医務室を出た。

それと同時に鐘の音が鳴り出した。

これは確か蛮族襲来の音だ。

私はそのまま走って中央の塔の見張り台に向かった。

バルザ殿がこの塔に来て初めての襲来である。まだ大した準備も出来ていないのかもしれないが、私はその戦い振りを見てみたかった。

見張り台には既にたくさんの召使いが集まっていた。

彼らの内のどれだけがバルザ殿の高名をかねてから知っていたのかはわからないが、少なくとも有名な騎士がこの塔の門番を勤めたという噂は伝わっているようで、私同様の好奇心に動かされて高みの見物にやってきたようだ。

バルザ殿と、彼が率いる部隊は、塔の前に既に展開されていた。

私はバルザ殿が率いる兵の数を一人ずつ数えていったのだけど、あつという間に数え終えてしまった。

その数、僅か三十人だ。

それに反してこの塔にやってくる蛮族は百を超える。

確かにプラーヌスは一人で蛮族百人を相手にして涼しい顔をしている。

しかしそれは彼が魔法使いだからだ。

一方、バルザ殿とその部下たちの武器は蛮族と同じ弓と槍。

少し装備は豪華かもしれないが物理的には敵と同じ。

しかもその三十人の兵は確かプラーヌスが街で適当に雇っただけの傭兵である。

いや、傭兵と呼ぶのも勿体ない。私が会ったときの印象では、ただの街のゴロツキ。

しかし私のその心配は杞憂だった。

バルザ殿率いるその部隊の動きは蛮族の動きとは質が違ったのだ。

蛮族たちはそのときどきの間近にある攻撃対象にすぐに心を奪われ、各自バラバラに攻撃をしているのだけど、バルザの兵は一つに集まったり、あるいはときに散開したりと、その動きに統制が取れているのだ。

まあ、私はそもそも兵士であつたことはないし、戦いそのものには無知だからよくわからない部分もある。

だけどそんな私でもバルザの部隊の統制の取れた戦いは一目で見

て取れた。

それに実際、次々と蛮族たちが倒れていくのだから間違いないだろう。

おそらくバルザ殿は自らをあえて危険に晒し、囷として敵を引きつけていた。

蛮族がバルザ殿に気を取られたところを残りの兵が攻撃する。そういう作戦だと思う。

最初はその連携が上手くいかない場面も見られたが、実戦ならではの緊張感からか、あるいは死を前にしての緊迫感がそうさせるのか、バルザの兵の戦いは徐々にまとまりを見せていった。

戦いも中盤に差し掛かり始めると、まるで兵たちはバルザ殿の手足のように動くようになっていったのだ。

そして何より驚くべきなのは、バルザ殿の強さだった。

槍を一振りするだけで無数の蛮族の首が飛んでいくのである。

まるで巨人と子供のケンカのようなだった。

バルザ殿の動きには何一つ無駄がなく、わずかな動きだけで相手の攻撃を全て避け、逆に彼の攻撃は全て相手に致命的なダメージを与えている。

そんな指揮官に率いられているのだ。兵たちが彼に全幅の信頼を寄せるようになるのも不思議ではない。

もしかしたら戦闘が始まる前まで、傭兵たちはバルザ殿のことをさほど信頼していなかったのかもしれない。

しかし戦いが終わった頃には彼らはまるで、ルヌーヴォの神を崇めるようにバルザ殿を見上げていた。

第六章 9) 戦いの神バルベス

戦いはもちろんバルザ軍の圧倒的な勝利で終わった。

蛮族たちは算を乱して逃げていった。バルザは無駄な深追いをせず、すぐに兵をまとめて塔に帰還してきた。

プラーヌスは自分の部屋で何らかの魔法を使い、その模様を観察していたらしい。

バルザのその戦い振りに、プラーヌスは大変満足しているようだ。

「これで僕を最も悩ましていた最大の問題は消えた。これから日夜、ゆっくり魔法の研究に集中出来る。無駄な戦闘に魔法も使わなくて済む。僕の寿命はかなり伸びたろうね」

いつもの時間、謁見の間での会合で、プラーヌスは上機嫌にそう言ってきた。「彼を仲間にするのは大変に手が掛かったけれど、存分に報われそうだ」

確かにバルザの戦いはまさに戦闘の神バルベスのようで、私は是非とも彼に会って、直接その労をねぎらいたい気分であった。

いや、正直に言くと、噂にたがわぬ実力を持つ、有名なバルザ殿の姿を一目でいいから見たいという、まるで人気の吟遊詩人を熱烈に追いかける、浮ついた婦女のような気持ちに近いかもしれない。

いずれにしろバルザ殿の雄姿は私の目に焼き付いて離れない。

「ところで次は君の番だぞ、シャグラン」

プラーヌスが言ってきた。

「えっ？ ああ、あの女性の泣き声の件だね」

私は雄々しい騎士が踊るように戦う戦場の夢から醒めて、いつもの現実引き戻された。

「残念ながらまだ何も進展はないよ。あの少女と、前の主に哀れに改造された人たちに会いに行っただけど、彼らは全員亡くなっただけだし、それにフローリアという少女は体調を崩して寝込んでいて話を聞けていない」

「そうか」

「いずれにしろ彼女に話を聞いても、何かわかることがあるとも思えないんだけどね。彼女は至極まっとうな普通の女性だよ。フローリアとあの不気味な現象が結びつくなんて想像がつかないな」

私はあの奇妙な夢のことをプラーヌスに黙っていることにした。どことなくフローリアに似た女性が、ここから自分を解放しろと迫ってくる不思議な夢。

いや、夢と言いつつ切れない妙な現実感を伴っている現象だった。

あれを話すとプラーヌスは更に彼女を疑い出すに違いない。

だけど私にすれば、そのような夢を見たにも関わらず、彼女とあの不気味な泣き声に何か関係があるとは思えないのだ。

まあ、そんなのは当たり前だろう。

本当にフローリアはどこにでもいる普通の女性に過ぎない。

確かに美しく、人並み外れて優しい性格をしているかもしれないけれど、私はこの手でフローリアの体温を感じた。

それは湯浴みする時のお湯のように温かった。

心臓だって呼吸のリズムと同じリズムで鼓動していた。

私や、私の母なんかと変わらない、どこにでもいる普通の人間と同じである。

あのどこから聞こえてくる不気味な泣き声と関連があるわけないではないか。だってあれは何か怪異な者の仕業に決まっているのだから。

「だとしたらこれ以上、調査しようがないわけか。そんなことからシャグラン、この調査もバルザ殿に任せたほうがいいようだね」

プラーヌスは冷たい声で私に言ってきた。まるで私の無能さに呆れるような感じ。

「いや、でももう少し僕に任せて欲しい。フローリアが元気になったら色々と聞いてみるつもりだし、まだまだお手上げてわけじゃない」

そういう扱いをされると私も不本意だ。思わず必死の形相になってプラーヌスに食い下がった。

「だけど君には他にも仕事があるだろ？ この塔を運営するためにはどれくらいの召使いの数が適切なのかっていう大事な仕事だ」

「まあ、そっちはそれなりに順調にいつているよ。アビュにも手伝ってもらって、だいたい名簿作りは終わったからね。後はどれだけの仕事があつて、それにどれだけの人員が必要かって分析ぐらいかな。とはいえその分析にかなり骨が折れそうなんだけど・・・」

そのためにやはり塔の隅々まで自分の足で回る必要がありそうで

ある。

最近、何かと忙しく肝心のその仕事はあまり進んでいない。もちろんこういうことも何人かで手分けしてやればいいのだろうけど、残念ながらまだアビュ以外、信用出来る人物にも出会えていないのが実情だ。

私がそんなことを思って表情を曇らせていると、プラーヌスが立ち上がりながら言った。

「わかった、とりあえず全て君に任せるよ。何と言っても君は僕がこの世界で唯一信頼出来る友人だからね。色々忙しいだろうけど、よろしく頼む」

プラーヌスはさっきまでの厳しい表情をにわかに緩めてそう言った。

「あ、ああ」

私はそんなプラーヌスを見て、ホッと胸を撫で下ろした。

「とにかく事態は良い方向に進み始めている。一時はどうなるかと思っただけで、何もかも少しずつ解決に向かっていることは事実だ。少なくとももうあの怪物どもは一掃されたし、蛮族の問題もどうにかなったんだしね。この問題もいずれ解決するだろう」

「うん、時間はいくらか掛かるかもしれないけれど全力を尽くすよ」

プラーヌスは謁見の間を出て、西の回廊のほうに歩いて帰った。それと入れ違うように、謁見の間にアビュがやってきた。おそら

く苦手なプラーヌスが部屋を去るのを待っていたのだろう、偶然にしてはタイミングが良すぎる。

「ボス、今、時間ある？」

プラーヌスが出ていった西の回廊に通じる扉のほうを気にしながら、アビュが言ってきた。

「ああ、少しくらいならあるけど」

アビュは昨夜のちょっとした諍いや、今朝、手酷く私をからかったのをすっかり忘れて、いつもの表情である。

まあ、私はそういう性格のアビュが大好きなのだが。

「よかった、バルザさんがボスに会いたいらしいんだ」

「バ、バルザ殿が？ どうして？」

私は驚いてアビュに問い返した。

「さあ、この塔に来てすぐ、この謁見の間にまで自分を案内した人は誰か知りたいって言ってるさ、多分それはこの塔のナンバー2のシャグランっていう人だと思うって教えたら是非会いたいわって」

「ああ、確かに僕が謁見の間にまで案内したけど・・・」

「私もどうしてボスなんかに出たいのかよくわからないんだけどね。だってバルザさんって男の中の男って感じじゃない。めっちゃくちゃ強いし、なんか優しそうだし、声は低くて、直接耳の中で囁かれているように話すし、とにかく紳士よ。それに引き換えボスは

寝ている女性の裸を見て喜んでいるような最低の男なのに」

「おいおい」

どうやら顔や態度には出ていなかっただけで、アビュはまだそのことを覚えていたようだ。

「まあ、とにかくちょうど医務室にいるから来てよ」

アビュはそう言って私の手を引き、医務室に引っ張るようにして連れていった。

？

第六章 10) バルザからの誘い

バルザの兵も圧倒的勝利とはいえ、激しい戦の中いづらか負傷者はいたようだ。

塔の医務室に数人の負傷兵が簡単な治療を受けていた。

それでまた私は驚いたというか、呆れさせられたのだけど、その治療行為の手伝いを看護婦と、共にフローリアがやっていたのだ。

「フローリア！ いい加減にしないか！ しばらく安静にしてなくてはならないじゃないか」

上半身裸の傭兵の肩に包帯を巻こうとしていたフローリアに、私は声を荒げてそう言った。

しかし私がそう言うと、逆に私のほうがおかしいことを言っているというように彼女に叱られた。

「怪我をしている人を前に、のんびり寝てろって言うんですか？ それぐらいならもう一度倒れたほうがましです」

「だ、だけど・・・」

「おいおい、兄ちゃん、固いこと言うなよ」

フローリアに包帯を巻かれている傭兵が私に言ってきた。「俺もどうせなら、あの中年の女性より彼女にやってもらいたいよ。あんただってそうだろ？」

そう言いながらその傭兵はガハハと大口を開けて笑ってくる。他

の傭兵たちもそれに賛同するように声を上げて笑った。

さつきは世にも雄々しい戦い振りを見せたが、正体はこのようなガラの悪い男たちなのである。

私は眉をひそめながらも、しかしフロリアの行動を制限出来る立場でもないから、彼女から注意を逸らした。

ふと視線を向けた先にバルザが座っていた。

銀色の胸当てをしているだけの軽い武装で武器も持っていない。

傭兵たちの遣り取りを笑うでもなく、憤るでもなく、ただ穏やかな表情で眺めている。

先程、戦場を鬼神のように走り回った人とは思えないほどの静謐さだ。

しかしこの堂々たる体躯、そして私に向けてくる優しいが鋭い眼差し。

間違いなくバルザ殿である。

「恐れ入ります、シャグラン殿、わざわざここに起こしになられたとは。会いたいと申し出たのは私のほうですから、どこでも出向かせて頂いたものを」

バルザは坐っていた椅子から立ち上がり、丁寧にそう言ってきた。

「そ、そんなこと、滅相もないことです。それにちょうどここに用もありました」

私は恐縮しながら言った。

「あなたはこの塔のナンバー2だと聞きました。いくらかお願いしたいことがあるのですが。それともそういうことは直接、塔の主に申しつけるほうがよろしいのでしょうか」

「いいえ、ある程度のことは私が請け負いましょう」

「そうですか。ではお話しさせていただきますでしょう。しかしこれからの戦いに関わる重要な話もあります。人の多いところではなく、他の場所で」

バルザがそう言ったので、私は彼を東の塔にある応接の間にまで案内することにした。

応接の間は私とプラーヌスがいつも夕食を共にする部屋だ。まだきれいに整えられていない塔の中で、ここが客を迎えるのに最も適した部屋であろう。

私はアビュにコーヒーを持ってくるよう頼み、バルザ殿と共に応接の間に向かった。

第六章 11) 奇妙な記憶の混乱

「戦いが連日続く恐れもあると聞きました。出来るだけこちらの被害を少なくするようにしたいのは言うまでもありません」

バルザ殿は席に着くや否や、すぐにそう言ってきた。

おそらくこれがこの人の仕事のスタンスなのだろう。無駄な前置きなど省き、常に単刀直入。

そういう姿に、これまで勤めていた騎士団団長としての働きぶりの一端を垣間見ることが出来た気がした。

本当に優秀な司令官でもあったに違いない。私は改めてこの人が塔の番人をしていることの違和感を覚えた。

しかしバルザ殿はそんな私の複雑な心中など知る由もなく淡々と話していった。

「来襲してくる敵は強敵ではありませんが油断も出来ません。このような戦いが続けばこの塔を守る兵たちの疲労は溜まり、いずれ後れを取る者も出るでしょう。それを防止するためにもせめて今の二倍の兵は必要です」

「えーと、今現在はい？」

私もバルザのモードに合わせようと、仕事の出来る役人のような口振りで尋ねた。

「私を抜いて三十二人です」

「ではあと三十人程ですね。まあ、それくらいならすぐに用意で

きるでしょう。手が空いている召使いは多いですし、その中にはそれなりに武具を扱うことに慣れた者もいるようです」

「そうですか、それならすぐに集めて下さい。訓練にそれなりの時間もかかります。とにかくこの馬鹿げた戦いで一人たりとも犠牲者を出したくない」

「は、はい・・・」

まるで目の前にこの馬鹿げた戦いが存在しているかのように、バルザはそれへの怒りをあらわにして言った。

別に私が叱られているわけではないのに、その迫力に思わず謝りたくなつた程だ。

「それで更に、こちらの優位を確固とするために砦も作りたい。その為の人員と資材も用意願いたい」

「砦ですか？ まあ、それは少し時間が必要でしょうが、もちろん何とかします」

「砦の設計や、工事の監督も私がします。とりあえず人手と資材さえあれば何とかなるでしょう」

「わかりました。突然、塔の前に砦が出来れば主も驚くでしょうから、彼の許可が必要ですが、プライヌスも反対することはないでしょう」

扉をノックする声が聞こえ、アビュがようやくコーヒーを持ってきた。

持ってくるまでに時間がかかった気がすると思つたら、どうやら

アビュはさつき着ていた服を着替えていたようだ。

いつもの動きやすい服ではなく、まるでどこかの舞踏会にでも出掛けるような格好で現れた。しかもおまけに頭に髪飾りまでつけている。

「どうぞいれたてのコーヒーです」とバルザ殿の前に置く手が緊張で軽くふるえていた。

「ありがとう」と返事するバルザ殿の声を聞いて顔を赤らめていた。

まさに初めての恋に舞い上がっている乙女の姿である。

私はそんなアビュの様子に苦笑を禁じ得なかった。

コーヒーを置いて、なかなか部屋から去ろうとしないので、仕方なく私は彼女に出ていくよう言い渡した。

「何か用事があれば申しつけ下さい」

「ないよ、何も」

バルザ殿に言ったのだろうけど、私が代わりに応えておいた。バルザ殿に見えないよう私に舌を出しながら、ようやくアビュは部屋を出た。

「想像したよりも賑やかで、穏やかなところですね」

バルザ殿はコーヒーに口をつけながら言った。「もっと暗鬱で、陰気な場所かと思っていましたよ。だけど驚くほど笑顔もある」

「そうですね、ここは俗界から遠く離れ、ある意味平和なところですよ」

「うむ、ある意味平和か・・・」

私のその言葉にバルザ殿は複雑な表情を浮かべた。

「あつ、すいません、平和といってもバルザ殿はさっき戦われてきたばかりでしたね」

「いえ、戦いは私の宿命です。謝られる必要はありません。一度、人を斬ったものはいずれ誰かに斬られるのが定め、どこに行こうが血と剣に出迎えられるものです。それよりも私が意外に思ったのは・・・言葉が過ぎるなら聞き流してもらって結構なのですが・・・、もつと何というか、皆がこの塔の主の圧政のもとに虐げられているのかと」

「まあ、確かに一部の人間はプライヌスのことを恐れています。そしてほとんどの召使いが彼を嫌っているでしょうね。ただど彼はほとんど自分の部屋から出てきませんし、普段、誰が何をしてようが興味を持っていません。圧政とは程遠い状態です」

しかし彼が今いる召使いに興味がないのは、いずれ多くの召使いを解雇しようとしているからかもしれない。

そういう意味では、私がバルザ殿に言ったことは正確な言葉ではないかもしれない。

とはいえ、プライヌスが恐怖によってこの塔を支配しているわけではないことは確かであろう。

この塔は間違いなく、穏やかな場所ではある。

「プライヌスとおっしゃられるのですか？ この塔の主の名は」

「は、はい」

どうやらバルザ殿も、プラーヌスのことを話すときはその表情を暗く曇らせるようだ。

それまでは力強く、どこまでも晴れ渡った空のように雄大だった表情が、嵐が来たように曇ったのだ。

私はそんな彼の姿を見て、プラーヌスがどういう方法でバルザ殿をこの塔の番人に招き入れたのか、改めて気になった。

それが公明正大に行われた訳はないとは考えていたが、このバルザ殿の表情を見る限り、私の想像を絶する類の悪行が想像されるのだ。

しかし私は事の真相に触れるのを恐れるように、バルザ殿から思わず目を逸らした。

たとえバルザ殿の意に沿わない形でこの塔に招き入れられたのだとしても、私にはどうすることも出来ない。

私はあくまでプラーヌスの側の人間なのだ。
どんなにバルザ殿が高潔で素晴らしい人間であろうが、だからと言ってプラーヌスを裏切ることはいえぬ。

何だか私のそんな心の動きを機敏に察知したようにバルザ殿は言ってきた。

「あなたとこの塔の主、プラーヌス殿とはどういう御関係なのでしょう？　ただの主従関係でも、雇用主と従者でもないようですね」

「ああ、まあ、一応、彼とは友人関係です」

「ご友人？」

「はあ、そうです」

私はなぜだかその事実がとてもおかしいことでもあるかのように、照れ笑いを浮かべながら答えた。

「そうですか、ご友人ですか、何だかそんなことを言うのは大変失礼な気がするのですが、しかしとても不釣り合いと言いか・・・」

それまでずっとハキハキと明朗に話していたバルザ殿が少し口籠るように言った。

「いえ、そう思われるのも無理ありません。確かに僕はしがな絵描きです。一方、プラーヌスは天才的魔法使い。大洋を泳ぐ魚と、池の力エルくらい接点がない。おっしゃられる通りだと思います」

「いや、そういう意味ではなくて」

バルザが慌てるように言い足してきた。「あなたのような真面目で誠実そうな御仁が、一般的に邪悪で計算高いと言われる魔法使いとご友人であられることが私にとって不思議なのです」

「はあ・・・」

「私にとって魔法使いというのは、ときおり里を襲う残虐な賊と同義。いや、悪魔を崇め、それを使役する点に置いて、賊よりも悪質・・・。すいません、言葉が過ぎましたね、しかしルヌーヴォの神に仕える騎士としてそれは当然」

バルザ殿は出来るだけ感情を交えずそう言っただけだったのかもしれないが、魔法使いへの、いや、プラーヌスへの侮蔑は隠し切れていないようだった。

私はバルザ殿と、このような会話をプラーヌスに内緒でしていることに一抹の不安を覚えた。

プラーヌスのことだから、どこかで聞き耳をたてているかもしれないのだ。

確かにバルザ殿の言っていることに一つの間違いもないと思う。そもそも聖なる存在である騎士と、魔族と親しむ魔法使いは対極の存在。

こうやって同じ場所にいることが誤りなのだ。バルザ殿がそのような不満を抱くのは当然であろう。

とはいえ塔を守ることを課せられた者がそのようなことを言うべきでないのも間違いないと思う。

それはバルザ殿自身も重々承知しているようで、かなり言葉を選ばうとしているのは口振りや表情からも明らかだった。

それでも隠しきれない苦い胸中に、私は事態の深刻さを感じている。

「だけどプラーヌスはああ見えて良い奴ですよ」

私は少しでもバルザ殿のプラーヌスへの嫌悪感を和らげようと、そんなことを言ってみた。「バルザ殿も彼と酒を酌み交わすことがあれば、その印象は変わりますよ。普段は本当にユーモアもある奴なんです」

しかし案の定、そのような白々しい言葉にバルザ殿が心を動かさ

れた様子はなかった。

ただ一言、「そうですか」と言って、次の話題に映った。
バルザはまだ私とプラーヌスが友人であることに疑念を感じているのか、こんなことを質問してきた。

「ところでシャグラン殿でしたね、あなたとこの塔の主はどこでお知り合いになられたのですか？」

「ああ、それはですね、えーと、確か、あれ？ えーと・・・」

私は一瞬、健忘症に陥ったかのように頭の中が真っ白になった。

この塔に来る以前の、プラーヌスと過ごした記憶が全く思い出せなくなっただのだ。

もしかしたら高名なるバルザ殿との会話で舞い上がって、緊張しているせいかもしれない。

もう既に一杯のコーヒーを飲み終えるのに十分な時間を過ごしたけど、それでもまだ私はバルザ殿の何とも言えない偉大なオーラに飲まれている。

「ああ、そうだった！」

私はようやく頭の中が整理出来てきた。「どれくらい前なのか正確に思い出せないんですが、一度、彼に命を助けられたことがあったんです。僕は肖像画家なんですが風景を描くのも好きで、美しい風景を求めて遠くまで歩くことがしばしばありました。そういうとき絵を描くのに夢中になってしまい、帰りの時間も計算に入れず日暮れまで描いていることもあって、それで帰り道、取り囲まれたことがあるんですよ、盗賊たちに」

「城壁の外はどこでも物騒です。私の国でもそういう事件が頻繁に起きていました」

「僕もまあ、その有り触れた事件の被害者になりかけた訳です。しかも自分の不注意が招いた事態。あのときは本当に死ぬのを覚悟しました。奴隷として売られるならまだましだとも。しかしそこを偶然通りかかったのがプラーヌスでした。私は間一髪のところ助けられたんです」

「なるほど、彼には恩義もあるのですね」

「そうですね、しかし彼は決してその恩を着せるような男でもありません。まあ、確かに強引なところはありますが、そういうところにつけ込んだりはしませんよ」

「そうですか」

バルザ殿自身は私のプラーヌス評価に同意出来ないと感じているかもしれないが、私がプラーヌスに抱く友情は充分に共感出来るといった表情で頷いてくれた。

「実は父は宝石店を営んでいて、僕が幼い頃、魔法使い見習いの少年に殺されたんです。だから僕も魔法使い全般に良い印象はありませんでした。恨んでいたと言っても過言じゃありません。だけどそんな偏見を覆してくれたのも彼でした」

「亡き父上にお悔やみ申し上げます」

バルザ殿はそう言って短い祈りを捧げてくれた。

騎士団団長にそのようなことをされるなんて、亡き父もきっと喜

んでいるであろう。

「それでこの事件をきっかけにプラーヌスと出会い、それから・
・、あれ、えーと、それからどうやって仲良くなったんだっけ・
・、えーと」

私はまた頭の中が真っ白になった。

さっきのように上手く思い出せないとか、そんな感じではなくて、
まるで読み進めていた本のページが突然白紙になったかのように、
頭の中が真っ白になったのだ。

「どうなされたのですか？」

慌てる私に、バルザ殿がいぶかしげに尋ねてきた。

「いえ、どうしてだかプラーヌスのこととなると、記憶があやふ
やになることがあります・・・」

これまでも時折、そういうことを感じることはあった。

プラーヌスの存在が私の人生史の中で上手く収まっていけない。
極端な言い方をすればそういうことを感じたことが度々あったの
だ。

しかし別に私の記憶の機能が狂っているようではなさそうだ。
他の記憶はしっかり思い出せる。

母のこと、父のこと、姉のこと、他の友人のこと。

だけどその記憶とプラーヌスの存在が関係していかない。

私は首を傾げながらバルザ殿に言った。

「また後で思い出せたら説明したいと思いますが、とにかくプラ
ーヌスとはいつのまにか、このように仲良くなっただけですよ」

だってこれ以上、思い出そうとしたら頭がどうにかなってしまい
そうなのだ。

私は自分の混乱から逃げるように、そんな自分を笑いで誤魔化し
た。

「記憶の妙な混乱ですか？」

バルザがふと真剣な面持ちでそう尋ねてきた。

「は、はい、記憶の妙な混乱、まさにそんな感じですね」

その記憶の混乱が何か実生活に悪影響を及ぼすということはない。
だからこれまではさして真剣にそれに向き合うことはなかった。
しかしそれは看過出来ないくらい不気味な事実であることは確か
であろう。

「私も最近、それを感じていますよ」

混乱している私を憐れんでくれたのか、バルザ殿がそう言ってき
た。

「そ、そうですか？　そういうことって誰でもありますよね。良
かった、そんな歳でもないのに、何だか自分の脳味噌が駄目になっ
てしまったのかと思って焦ってしまいましたよ」

「私もある人物のことがよく思い出せないんです」

いや、ただ私を憐れんだのではなさそうだ。
バルザ殿自身も当事者とは思えないほど、深刻な面持ちでそう
言ってきたのだ。

「もしかしたら私はあなた以上に重傷かもしれない。どんなに記憶を辿って思い出せないことがある……。いや、しかしこのことについてあまり他言するようなことではございません。聞き流して下され」

「はあ……」

バルザ殿は私に何かを打ち明けようとしたが、ふと我に返ったように口を噤んでしまった。

そんな態度を取られると、そのあと言おうとしたことが気になって仕方がないが、バルザ殿は席を立ち上がり私に言ってきた。

「あなたと話せて楽しかったです。またいつかこういう機会を是非設けていただきたい」

「そんなの、こちらのセリフです。僕のほうこそバルザ殿と話せるのを楽しみにしていました。それがこんなに早く叶えられて本当に嬉しかったです。実際、こうやって話せたバルザ殿は聞き知った噂よりもずっと素敵なお人柄、感動余りあります」

「私は運が良いのかもしれませんが、どんなところに行ってもこうやって出会いに恵まれるのですから」

それでは失礼します。

極端なくらい背筋を伸ばして、曲げた右手を胸に当てる、正式な騎士の挨拶をしてバルザ殿は部屋を出ていかれた。

私は恐れ多くて、どうやってその礼に応えていいかわからず、卑屈な商人のように何度も頭を下げるだけであつた。

第六章 12) 不吉な胸騒ぎ

バルザ殿が部屋からいなくなって、私はドツと疲れを感じ、へたりこむように椅子に坐った。

バルザ殿が醸し出すオーラは凄まじい。

口調は丁寧で、眼差しは優しく、その印象はあくまで温厚な僧か、知的な学者という感じである。

しかし先程の戦い振りを見ていたせいか、その温厚で知的な表面の下に、とんでもなく凶暴な野獣を裡に抱えているのも感じ取れるのだ。

それが私を終始脅かしていたかもしれない。

あまり正確な喩えではないかもしれないが、獰猛な野獣が閉じ込められている、檻の前に立っているような感じなのだ。

但しその檻は絶対的に頑丈で、その野獣がいくら暴れようとも壊れることはないと保障されている。

だけど野獣のその迫力を鼻先に感じ続けられるのだから、こっちとしては断じて平静でいられない。

プラーヌスと一緒にいても疲れることは確かだ。

あの二人旅以降は多少慣れたけれど、プラーヌスも檻の中に凶暴な獣を飼っていて、しかもその檻の鉄格子はバルザのよりも遥かに壊れやすい。

野獣がちよつとした刺激で飛び出てきそうで、そういう意味ではプラーヌスのほうが厄介は厄介である。

しかしプラーヌスは自堕落なところがあって、自らを何かで厳し

く律しているところがない。

何かと要求が多い主ではあるが、どこか好い加減な部分が見て取れ、そんな奴に何を言われても気は楽なのである。

基本的に彼は孤独で、個人主義者であろう。

プラーヌスは何も他人に期待していないと思う。

そもそも他人を信用していないに違いない。何か下手なことをやらかして怒らせさえしなければ扱いは簡単なのだ。

一方、バルザ殿はそういう意味ではまるでプラーヌスと正反対だと思う。

バルザ殿はストイックで、大変に高いレベルに生きている。

私は普通に話していても、終始彼を見上げているような気分になせられる。

いや、しかしそれが不快なのかという決してそうではない。

そんなバルザ殿に魅せられて、むしろこっちも彼のレベルに合わせなければいけない気にさせられるのだ。

そう、何かバルザ殿といると、いつもの自分以上の自分でありたくなるのだ。

だからバルザ殿に率いられた兵たちは自分たち以上の力を出すのかもしれない。

誰もがバルザ殿の期待に応えたい、バルザ殿に認められたいと張り切るから。

しかしそういう人と一緒にいると疲れるのは間違いないだろう。特に私のような、部屋に籠って絵を描いているだけで幸せを充分

に感じられるタイプは、バルザ殿の太陽のようなエネルギーは苦手である。

長時間、太陽の光の下にいととその熱で体力を奪われるように、全身汗だらけでくたびれ果ててしまう。

そういうわけで私は疲れ切っていた。

しばらく椅子に座って休んでいた。

何だか自分のパワーを全てバルザ殿に吸い取られたような気分である。

私はプラーヌス同様、もしかしたら太陽と相性は悪いのかもしれない。次にバルザ殿と会うときは貴婦人が持つような日傘が必要だろう。

そんなことを考えながら椅子に座り休んでいたら、そこにプラーヌスが現れた。

その表情から明らかに、私とバルザ殿の会話をどうやってか盗み聞きしていたようであった。

しかしプラーヌスはその事実をことさら言いたてることもなく、まして言い訳もすることもなく、さもそれは当然だと言うように話し始めた。

「拙いことになったかもしれないよ、シャグラン」

プラーヌスはさっきまでバルザ殿が座っていた椅子に腰かけた。

「な、何がだよ？」

私はバルザ殿との会話の中で、何か彼の気を損ねるようなことを言っていたのかと思ってドキリとした。

そう言っ て私に語りかけてきたプラーヌスの表情は暗く曇っていたのだ。

「いや、バルザ殿のことさ。せっかく優秀な門番を見つけたと思ったのに、すぐに彼を解雇しなければいけない事態になるかもしれないと僕は危惧している」

「ど、どうしてさ？」

どうやらプラーヌスは私のことでその表情を暗く曇らせているわけではないようだ。

それがわかって私は少しホッとしたが、バルザ殿を解雇するなんてどういうことだ？

「バルザ殿はやはり只者ではない。ただ強いだけの乱暴者でなく、かなり頭も切れるということさ。恐るべき勘の良さだよ」

「・・・何のことを言っているのかさっぱりわからないけれど、確かに彼は頭も良さそうだね」

「まあ、僕も少しばかり無茶なことをしたことは事実なんだ。無から有を生じさせるのは、あまりに強引なやり方だったかもしれない。記憶を奪うよりもずっとね。ましてや指輪一つでそれをやるなんて、今から思うと正気の沙汰とは思えない」

「だから何のことを言ってるんだよ？」

私はプラーヌスの話している言葉の意味が一つも理解出来なくて苛々してきた。

「まあ、独り言のようなものだね」

プラーヌスは苦笑いしながらそう言った。「君には永遠にわからないことさ。教えるつもりもないよ。だけどそれぐらいの愚痴は許してくれ」

「愚痴なのかい、これは・・・」

「ああ、愚痴と後悔さ。もっと念入りに、バルザ殿の心の奥に入り込んで操作すべきだったって今、心底から後悔している。しかしまあ、あれだけの人物だ、多少の小細工じゃどうにもならなかったかもしれないが」

「本当に訳がわからないよ、プラーヌス」

私は呆れるように声を上げた。

「いずれにしろ、来るべき時は来てしまうだろうってことさ。バルザ殿が僕たちの許から去ってしまうときが」

君は彼を尊敬しているな。

プラーヌスがふと口調を変え、私にそう尋ねた。

「ま、まあね、だってあれだけの人物だもの」

「この塔の召使いたちも彼に魅せられている者は多そうだな」

「ああ、あの強さと彼の人柄に、誰もが心酔しているかもしれない」

「では彼が去るまで精々、得られる物は得とくよう、君から皆に話しておくんだな。それがいつになるのかわからないが、その日は近いぞ」

結局、彼が何を言いたいのかこっちはわからないまま、プラーヌスは部屋を出ていってしまった。

それでも私がわかったことは、私とバルザ殿の会話を盗み聞きしたプラーヌスが、バルザ殿はいつかこの塔を出ざるを得なくなると考えたということだ。

それを悟るに至った事情は、その会話のどの断片からなのか私にはまるでわからないのだけど、プラーヌスはその事実を確信しているということ。

プラーヌスがそれを確信しているというのなら、どうやらそれは事実間違いないということ。

私はその事実を前に取り乱さざるにはいられなかった。
バルザ殿と話すとき汗をぐっしょりかくほど疲れるが、彼にはこの塔を出て行って欲しくない。

そんなの寂しいに決まっているではないか。

確かにバルザ殿はこの塔にいるのが不本意かもしれない。だけどせつかく得られた門番なのだ。

この塔の人間として、そのような大切な人材を失いたくないのは当たり前だ。

それにバルザ殿が出ていくというのは、プラーヌスの計画がどこかで失敗したということである。

それは何らかの不幸な結末を招くかもしれないのだ。
私は勘の良いほうではないが、嫌な胸騒ぎを感じざるを得なかつた。

第六章 13) 平穩なる日々

しかしそれからしばらく、日々は平穩に過ぎたと言っている。う。

もちろん相変わらず蛮族は来襲し、バルザ殿と傭兵たちは戦場を駆けずり回っているのだから、平穩という表現は間違っているかもしれないが、少なくともプラヌスが危惧していたようなことは起きなかった。

その間、私の仕事はけっこう捗った。

まあ、まだあの女性の不気味な泣き声については何の前進も見せなかったが、この塔の全貌を把握し、どれだけの仕事にどれだけの人員が必要か調べる、例のライフワークについてはそれなりに目星がついてきたと言っていると思う。

バルザ殿に頼まれた、新たな兵の補充も順調に進んだ。

バルザ殿のカリスマ性に打たれた塔の住人は多く、自らその徴兵に応じる者の数がけっこういたのだ。

フロリアの体力も徐々に回復し、彼女は掃除婦として働いている。

言うまでもなく彼女の仕事ぶりは真面目そのもので、ただの掃除婦にしておくのは勿体ないくらいである。

実は老医師や、彼女自身も看護婦として働くことを希望していた。確かに彼女の神経の細やかさと、人当たりの良さは看護婦に打ってつけであるのは間違いない。しかし私は熟慮の末その希望を撥ねつけた。

私のその決断をアビュなどは誤解している。

フローリアが傭兵たちと関わる機会を、持たせないようにしたんじゃないかと彼女は考えているようなのだ。

すなわちフローリアを看護婦として働かせないのは、私の嫉妬心が原因だと。

確かにフローリアは、あのちょっとばかりガラの悪い傭兵たちに人気があったと思う。フローリアに花をプレゼントしたり、どこかに散歩に誘おうとする輩は後を絶たないようだった。

まあ、実際のところ、傭兵同士がお互いを牽制し合って、フローリアの心を射止めるところまでいった者はいないようだけど、正直言って私はそんな状況にヤキモキもした。

しかし私がフローリアを看護婦にしなかったのはそんな理由ではない。

そんなバカなことがあるわけじゃないか。私がそういった私情を差し挟むわけがない。

実は昔からこの塔にいる召使いたちの多くがフローリアを嫌っていて、彼女を看護婦として働かせることに反対していたのだ。

いや、嫌っているというのは言い過ぎかもしれない。

フローリアを忌避していると言ったほうが正確かもしれない。

最初はなぜかわからなかった。あんなに優しくて美しいフローリアが、どうしてこのように思われるのか私には想像も出来なかった。

しかしよくよく聞いているうちにとその理由が何となくわかった。召使いの多くが、あのグロテスクに改造されていた人たちと長く関わっていたフローリアに、触れられるのを嫌がっているようなのだ。

ましてそんな人間が医療に関わるのは問題外。召使いの多くがそのように考えているらしいのだ。

それを聞いて啞然とさせられたのは言うまでもない。

こんな狭い塔の中でこのような差別意識が蔓延しているなんて何と愚かしいことかと。

しかし召使いたちの意向を無視するわけにもいかない。そういうわけで看護婦のほうが適職かもしれないが、フローリアには掃除婦として働いてもらっている。

まあ、彼女のきめ細かい性格と、隅々まで神経の生き届いた丁寧さは、掃除婦にも必須な能力であるのは間違いないことだ。

彼女が働き出してから塔の中が以前よりも綺麗になったような気にさせられるので、それはそれで良かったことであろう。

プラーヌスはあの日以来、いつかバルザ殿がこの塔から出ていくのではないかという不安を口にするとはなくなかった。

そして実際、バルザ殿もそのような動きを一切見せなかった。

むしろ兵たちの訓練や、砦の建設の準備を進めるなど、いつそう懸命に仕事に励んでおられるようである。

だから私は、プラーヌスがあのととき口にした不安は、ただの杞憂だったのかと思い始めていた。

それにこんな明るい出来事もあった。

この塔に街から、旅の劇団がやってきたのである。

どうやらその劇団はこの塔を定期的に訪れているようで、あるときなぜだか召使いたちが浮かれているので不思議に思っていたら、その旅の劇団が来る日が近づいていたからであった。

普段、何の娯楽もないこの塔の住人たちにとってそれは、日の出や春の訪れのように待ち遠しいことだったようで、その劇団が到着したとき召使いたちは狂わんばかりに喜んでいた。

一瞬にして塔は、ロガシオンの祭りの夜のように盛り上がったのだ。

私もその祭りを楽しんだことは言うまでもない。

まあ、しかし唯一、残念だったことはこの劇団が、私とプラーヌがついこの間、街で観た劇団と奇しくも同じだったということである。

しかも出し物までも同じであの「悲しきハイネの物語」であった。

この世界にはたくさんの劇があるのに、取り立ててそれが名作というわけでもないのに、また「ハイネの物語」を観ることになったのは何とも言えない不運だ。

とは言えそんなことは些細なことである。

旅芸人たちの奏でる音楽に合わせて踊ったり、酒を飲んで騒いだり、私はそのお祭りを存分に楽しんだ。

旅芸人の何人かは娼婦や男娼も兼ねているようで、劇の後にはそれぞれ部屋や廊下の隅で嬌態が繰り広げられていたようだ。

私はすっかり酔い潰れ、気がつけば朝だったが、多くの住人が破目を外して楽しんだよう。

プラーヌはそのような狂騒に興味がないようだから、そこには現れなかった。しかしあの生真面目なバルザ殿も楽しんでおられた。

そういうわけで塔は平和そのものだと私の目には映っていたので

ある。

しかしそうでないことがすぐに判明してしまう。私の知らないところで事態は静かに進行しているようであった。

第七章 1) 悲しきバルザの章 後編

バルザは最初、塔の主から三十人の部下を与えられた。

それだけでこの塔に來襲する敵を撃退するよう命じられたのだ。

しかしその三十人の部下の誰もが、盜賊まがいの傭兵か、臆病者の農奴上がりで、これまで命令や規則などに従ってきた経験のないものばかりであった。

彼らはバルザの栄光ある名声も知らなければ、その実力も知らなかった。

そんな彼らを一端の兵隊にまで鍛え上げるまでには、少なからぬ労苦と忍耐が必要であった。

しかし邪悪な魔法使いによつて粉々にされたバルザの虚ろな心は、自分が自分であることを忘れるぐらい働くことで、何とか平常を保つことが出来た。

むしろバルザにとってその困難な任務は好都合であったのだ。

有難いことに戦いは連日続いた。

目下の敵である蛮族たちは弱いが、バルザの率いる部下たちも弱く、彼らを鍛えながら戦うのはバルザにとって多大なる緊張感を強いられ、それは一時たりとて息の抜ける仕事ではなかった。

それにバルザはこの大義のない戦いで、自分の部下を一人も失いたくなかった。

最初、三十人だった兵もその二倍に増やしてもらい、兵に余裕はあるが、いかに自分の部下たちを消耗させないで戦うかということ
をバルザは己に課してもいた。

そのせいで更にその仕事は困難を極める。

もちろん、常に全神経を尖らせて国家の任に当たっていた、騎士団団長にして、軍の最高司令官であった頃と比べれば、その労苦は比べ物にならない。しかしこの戦場にはまた違った心の張りがあった。

バルザは来襲してくる蛮族と戦いながら、少年の頃、騎士の従者をしていたときのことを思い出していた。

あとき、ちよつとした油断が即、死に直結した。

生き抜くためには強くなければいけなかった。

しかし騎士団団長にして最高司令官になってからは大勢の部下たちに守られ、そのような気持ちを失いかけていたかもしれない。だがこの塔に来て、その頃の自分に少し戻れた気がするのだ。

やはり騎士であるバルザにとって戦いとは、槍を振り回し、剣を振るうものである。

万の兵を率いて後方から指揮を発したり、細かな駆け引きをするよりも、敵の恐怖心を嗅ぎながら、自らも死の恐怖に身を晒すことである。

その戦士としての本能を思い出せて、バルザは久しぶりに戦う喜びのようなものを感じていた。

しかしバルザは邪悪な魔法使いの悪辣な策に嵌められ、このような境遇に堕してしまったのである。

愛しのハイネがこの塔のどこかで囚われの身になっているらしい。

その事実が少しでも彼の心をかすめただけで、彼の心は張り裂け

そうなくらい苦しくなった。

戦いの中で見出せる平穩など一時の感情に過ぎない。永遠に海の中を泳ぎ続けることを宿命づけられた者の、ひと時の息継ぎみたいなもの。

しかもそうなったのは全て自分の咎なのである。

もし自分が妻以外の女性に目を向けなければ、こんな目にあうことはなかったのだ。全てあのようなことをしてしまった自分が悪い。

その罪を贖う機会は訪れそうになかった。

ただこの苦しみと、自らの犯した過ちを悔いるしかない生活、それがバルザの全てである。

第七章 2) 悲しきバルザの章 後編

バルザはハイネに贈った指輪を手の平の上で弄びながら、彼女のことを思い出し、自分の砕けそうな心を日々奮い立たせていた。

この指輪と、記憶に宿る彼女の思い出だけが、今、ハイネと触れることの出来る唯一の方法だった。

ハイネは一度も彼の夢の中に出てきてはくれなかった。もしかしたらハイネも死んだ妻と同じように、彼を責めているのかもしれない。だから夢に出てくれないのかもしれない。

バルザはこの指輪を見つめながらハイネの姿を思い描く。

ハイネは世にも珍しい銀色の髪をしていた。

瞳は薄い青、唇は濡れたように赤く、口の下に二つの黒子があった。乳房は桃色、白い足がすらりと伸びていた。

それら全てがバルザにとって理想で、思い描いていた理想が実態となって現れたとしか思えない奇跡だった。

いや、あるいはその肢体の内に美しい心が宿っていたから、その姿がより美しく見えたのかもしれない。

ハイネは美しい容姿と美しい心を併せ持った、本当に特別な女性だった。

もし妻とではなく、ハイネと最初に出会っていれば、誰もこのような悲惨な目にあわずに済んだのかもしれないとバルザは思う。

こんなことを思うのは妻には申し訳ないことであるが、出会った順

序を間違えてしまったと。

ただそれだけのことで、これほどの狂いが人生にもたらされてしまったのだ。

バルザの人生はこのように粉々に砕かれてしまったのだが、しかし彼の未来に希望がまるでないわけではなかった。

あの邪悪な魔法使いのことだから信用出来るかどうか分からないのだが、いずれ代わりの門番が見つかりなどすれば、ハイネを解放してやってもいいというようなことを言われたことがあったのだ。二人でどことなり、静かなところで暮らせと、あの邪悪な魔法使いはバルザに向かって暗に匂わせたのだ。

バルザはその希望にすがりついていた。

今は我慢して、この孤独で悲惨な状況に耐え続けていれば、いつか不幸をもたらしている星の配置は変わり、バルザにもささやかな幸福が訪れることがあるかもしれない。

もはや騎士としての栄光も、武人としての栄達も望むべくもないが、せめてハイネとし幸せに暮らせればと切に願っていた。

そのいつかのためにバルザは生き続けようと思った。

第七章 3) 悲しきバルザの章 後編

しかしバルザはときおり、ハイネを失ってしまいそうになるときがあつた。

こんなにも愛してやまない大切なハイネが、心から消えてしまいそうになるときがあるのだ。

例えば深い眠りから不意に醒めてしまったとき、あるいは戦いのあと、疲労の極致にいるとき、バルザはハイネと過ごした思い出を何一つ思い描くことが出来なかったり、ハイネの顔が全く思い出せなくなったりするのだ。

バルザはそれが不思議でならなかった。

試しに自分の妻や両親、あの憎き邪悪な魔法使いのことを思い出してみるのだが、それに関しては全く記憶があやふやになることはない。

しかしなぜだか愛しいハイネだけは淡く儚く、霧の彼方に幻として溶けていきそうになるのである。

もちろんそんなときでも、いずれはハイネのことを思い出す。

その喪失は一瞬の錯誤に過ぎない。

だけどバルザはそんな自分が怖くなる。

いったい自分の記憶に何が起きているのかと不安に思う。

あるいは自分の頭はおかしくなりつつあるのではないかと恐怖を感じる。

バルザはときに、こんな危惧を感じることもあつた。

あの邪悪な魔法使いが自分の中からハイネの記憶を消そうとして

いるのではないのかと。

妻の命と、バルザの人生を奪っただけは物足りず、奴は更にこのバルザから思い出まで奪おうとしているのだ。

しかし少し考えてみれば、それではバルザを引き留めている人質の存在がいなくなってしまうわけである。

計算高い魔法使いがそんなことをするわけがない。

いや、だったらこう考えた方が自然かもしれない。

もしかしてハイネなど最初からいなかったのではないかって。

あれは邪悪な魔法使いが、バルザを自由に操るためにでっち上げた偽の記憶。だからハイネはときに夢く、記憶から消えそうになる・
・。

バルザはその思いつきに背筋が寒くなった。

しかしそんなことがありえるだろうか？

いくら魔法使いといえど、そのようなことが可能だとは思えない。人の記憶を自由に操り、偽の記憶を植え付けるようなこと、それはルヌーヴォの神をも脅かすような、とんでもない所業。

それに確かにハイネが思い出せなくなるときはあるのだが、何の問題もなくハイネのことを頭の中に描くことが出来るほうが普通で、もしハイネが存在しないなんてことがあったら、こんなにハイネの姿を具体的に思い描けるわけがない。

バルザは試しに思い描いてみる。

ハイネの銀色の髪を、ハイネの薄い青い瞳を、ハイネの赤い唇を、

ハイネの桃色の乳房を、そしてハイネの砂糖のように白い脚を。

バルザは何度その銀色の髪を撫で、薄い青い瞳を見つめ、濡れたような赤い唇に口づけし、そしてその桃色の乳房を愛撫し、白い脚を優しく開かせたことか。

もしハイネがいらないなんてことがあったら、このように仔細に思い出せるわけがないではないか。

バルザはそう考えて、自分の極端な考えを打ち消すのであった。

第七章 4) 悲しきバルザの章 後編

しかしバルザはこの問題にますます心囚われていた。

こんなことありえないと思いつながら、心からその不安を完全に打ち消すことが出来なかった。

むしろこの問題を考えれば考えるほど、ハイネは更に白い砂の中に埋もれていつて、どこかに消えてしまいそうな気がするのだ。

ところでこの塔にシャグランという男がいた。

塔のナンバー2で、あの邪悪な魔法使いの腹心であり、その男の友人であるとも自らを紹介してきた若者である。

しかしシャグランという男は、あの邪悪な魔法使いと近しい関係であるにもかかわらず、その心に一点の曇りのない紳士であった。

バルザはそのシャグランという男に、この心の不安をそれとなく打ち明けたことがあった。

いや、バルザが打ち明けたというよりも、シャグランのほうが似たような不安を話し出したのである。

なんと彼もときおり、自分の記憶に混乱を感じるらしい。

それを聞いてバルザはまた不安を新たにした。

邪悪な魔法使いの傍にいる者同士、その不気味な共通点はただの偶然と思えないと。

とするならこの若者も、あの邪悪な魔法使いに何かされているのであらうか。

とはいえこの二人は友人同士であるらしい。

あの邪悪な魔法使いは友人にもそのようなことをするのか？

わからない。

バルザは用心深くこの塔で起きる出来事を細々と観察しているのだが、何一つ彼を確信させる材料を得ることは出来なかった。

そんな頃、この塔に旅芸人の一行が訪れるという出来事があった。

毎年、塔で働く召使いたちのために劇を見せにやってくるらしい。バルザはそのような慰め事を馬鹿にしていたが、部下たちの執拗な誘いもあって遅れて参加することにした。

近頃沈みがちであったバルザを、部下たちなりに心配してくれたのかもしれない。部隊長としてはそのような誘いに乗らないわけにいかない。

しかしその出来事が、彼のその悩みを解決する端緒となるのであった。

第七章 5) 悲しきバルザの章 後編

夜、中央の塔、謁見の間の下にあるホールに、塔中の召使いたちが観客として集まった。

塔の中でも最も広い部屋だ。

バルザはあの邪悪な魔法使いもその観劇に参加するというのなら、当然すぐにこの部屋を出ていこうと思っていた。

しかし幸いにも彼がいる気配はない。

バルザは一番後ろに座ってその劇を観ることを決意した。

バルザはこのような劇に一切興味無かった。

街の場末か、農村の祭りでやるような出し物だろう。

バルザの住む禁欲的な騎士の世界とは無縁なものである。これまでにそのような劇を観たことなど一度もない。

しかしたまにはこのような庶民の娯楽で気晴らしするのも良いだろう。

鼻をつく酒の匂いと、バルザが嫌っている、心をくゆらせる薬草の匂いが辺りに立ち込めている。

ホールはどことなく紫色に煙っていた。

観客である塔の召使いたちや彼の部下たちも、普段の仕事を忘れるためか、あるいはその劇をより楽しむためか、酒とその薬草で、すすんで理性を緩めようとしていた。

今にも誰もが裸で踊り出しそうな、だらしない空気が漂っている。

バルザがそこに到着した頃には、既に場は十分に盛り上がっていた。

旅芸人の女たちの騒々しい踊りが、その空気を更に増長させていく。

派手な化粧を施し、薄い衣だけを身にまとい、扇動的な太鼓の音に合わせ、身体をくねくねと動かしながら踊っていた。

バルザは最初、眉をひそめてその様子を見ていたが、しかし彼の頑なな心もゆっくりと緩んでいった。

誰もが笑顔で楽しそうに浮かれているのだ。バルザも自然と顔がほころんでいくのを止めることは出来なかった。

やがて踊りの時間が終わった。すぐに即席の舞台が素早く設えられたかと思うと、この劇団の座長らしき男が現れた。

子供のように小さな男であったが、頭だけは大きく、その目つきは鋭かった。

その座長は奇妙なくらい自信満々の口調で言った。

「さて、今夜の出し物は何にいたしましょうか、お集まりの皆様方！」

召使いやバルザの部下たちは興奮したように叫びながら、口々に何かを言っている。

どうやらこれから観たい劇の名をそれぞれ叫んでいるようであった。

その座長はその興奮を沈めるように手を振りながら言った。

「英雄譚なら『少年とドラゴン』、世にも残酷な神々の物語がお

好みなら『巨人の足跡』、人知を超えた不思議な魔法のお伽噺が観たいなら『三人のセラフィム』、あるいは涙なくして観ることの出来ない恋愛悲劇なら『悲しきハイネの物語』」

「ハイネだと！」

思わずバルザは、ハイネという言葉に反応してしまい、声を張り上げて立ちあがった。

他の観客たち、顔見知りの召使いたちや部下たちが振り向いて、不思議そうにそんなバルザを見てきた。

その視線に気づいて、バルザは思わず取り乱してしまった自分に恥じ入りながら座った。

しかしハイネだって？

「あそこの逞しい身体をなされた紳士から『悲しきハイネの物語』を希望する声が上がりました。それではそれにいたしましょうか？」

座長がそう言うと、観客たちから拍手が沸き起こった。

座長は満足そうに頷いてさっさと消えてしまった。

「いや、ちょっと待て」

バルザは慌ててその声を掛けようとしたが、しかしホールは闇に包まれたかと思うと、美しい旋律が流れ出し、劇の幕が開いた。

第七章 6) 悲しきバルザの章 後編

悲しきハイネの物語。

それがどんな内容の物語であつたのかよく覚えていない。バルザは物語に集中するどころではなかつたのだ。

劇が始まってすぐに、その物語の中のハイネがこう描写されていたことで、彼の心は驚きと混乱に満たされた。

珍しい銀色の髪、薄い青い瞳、濡れたような赤い唇、桃色の乳房、砂糖のように白い脚と、そして特徴的な口の下の二つの黒子。

それはまさにバルザの愛するハイネと瓜二つの姿ではないか……。

しかしどうして、物語の中のハイネと、バルザの愛するハイネの特徴がこうも似通っているのだろうか？

そうやって呆然としているうちに劇は終わった。

その時間はあつという間に思われたが、劇が終わったとき、バルザ以外の観客たちは涙に咽び泣き、あれほどだらしなく浮かれていた者たちが、まるで弔いの儀式にでも参列しているかのように引き締まった表情をしていたから、それは悲しいと同時に、凜と背筋を伸ばさせるような物語であつたのだらう。

劇は終わり、夜も更け、だが狂騒はますます高まっていた。

どうやら劇団の踊り子は娼婦も兼ねているようで、次々と客を取り、暗い場所にしけ込んでいくのである。

塔の召使い同士も気の合った者は腕を組んで次々と広間から消えていった。

ホールに残ったのは、完全に酔い潰れ寝ている者か、劇の後片付けをしている旅芸人か、そしてバルザだけであった。

しばらく思い悩むように呆然としていたバルザは、旅芸人たちが忙しく動き回っている中に入っていた。

バルザは最初に目についた大男に声をかけた。

「さっきの劇を作った方にお会いしたい」

「はあ？ みんな忙しいんだよ、消えな！」

確かにその大男はいそいそと楽器の手入れをしているようだ。舌打ちしながらバルザにそう言ってきた。

「さっきの劇を作った方にお会いしたい。聞きたいことがある」

「だから忙しいって言うてるだろ！ 怪我しなくなったら、さっさと言う通りにしやがれ」

大男は凄むようにして声を荒げ、拳を振り上げて威嚇してきた。バルザはその威嚇を歯牙にもかけず、また言う。

「作業中、申し訳のないのは承知だが、大切な話があるのだ。お目通り願いたい」

「おい、しつこいな、てめえ！ 何度言わせれば気がすむんだ」

そう叫びながら大男はバルザの襟首を掴もうとしてきた。バルザはうんざりしたような表情を浮かべながら瞬時に身構える。

その大男はバルザよりも背は高く、体重は二倍以上かもしれない。しかしこのような男を打ちのめすのはバルザにとって訳ないこと。

「やめろ！」

そのとき大男の背後で声がした。

この声を聞いた途端、大男は半分程に縮こまり、慌ててバルザから離れていった。

バルザは声のしたほうを見た。

そこには先程の、子供ぐらいの身長しかないこの劇団の座長が立っていた。

「大切なお客様に何という口を聞いているのだ、貴様は！」

そう言いながら座長は大男に近づいて行って、すれ違いざま、持っていたステッキで大男の向う脛を思い切り打ち据えた。

大男は痛そうにうずくまっていたが、少しも反抗の様子を見せることなく引き下がっていった。

「我が劇団員のご無礼、お許し願いたい。危険な旅に生きる日々と、ときに世間の蔑むような眼差し、旅芸人は少々荒っばい人間に育ってしまうのです。ところで何かご用でしょうか？」

座長は鋭い眼差しをバルザに向けてきた。

「はい、少しばかり尋ねたいことがあります。時間を煩わすことをお許し願いたい」

「伺いましょう」

「先程の劇をお書きになられたのはあなたでしょうか？」

バルザは礼儀正しく一礼してからそう尋ねた。

「先程の劇というのは『悲しきハイネの物語』のことでしょうか？」

「左様です」

「あのような美しい作品、私が書きましたと言いたいところですが、ご存じないのですか？ あ物語は何世代も前から語り継がれてきた有名な逸話ですぞ。私の父も、私の祖父も、そのまた祖父も知っていた。もちろん私の母も、その母の祖母も。まあ、多少は手を加えたりしましたが、基本的には伝承通り。そもそも私の仕事はこの劇団をまとめ上げることです。それは物語をゼロから書きあげることより困難なこと」

「ならばそのハイネの麗しき姿の描写、それも語り継がれている通りなのでしょうか？」

バルザは息急くように尋ねた。

「珍しい銀色の髪、薄い青い瞳、濡れたように赤い唇、桃色の乳房、砂糖のように白い脚と、そして特徴的な口の下の二つの黒子。その部分でしょうか？」

「そ、そうです」

「そこも語り継がれた部分です。どこか気に入らないところでも

あつたのでしょうか？」

座長の視線がいぶかしげにバルザを見つめた。

「いいや、そういうわけではないのだが・・・」

そう言っただけ、バルザは口籠ってしまった。

いったいこの男に何を尋ねればいいのか？

彼がこの劇を書いたわけではないのなら、なぜハイネのことを知っているのだと聞いても無駄であろうし、バルザの知っているハイネの特徴と、劇の中のハイネの特徴がどうして同じなのかと責めても意味のないことだ。

「御用がなければお暇させてもらいますが」

バルザが黙っていると、座長がバルザの前から去ろうとした。

「ちょっと待ってくれ」

バルザは慌てて引き止めて彼に尋ねた。

「あなたにこの質問をするのは筋違いかもしれませんが、しかも一つ尋ねたいことがあります。魔法使いは偽の記憶を他人の頭の中に植えつけたりする能力など、あるものでしょうか？」

「どうしてそんなことを私にお尋ねられるのです？ この塔は魔法使いの塔ではございませんか。誰よりも詳しい方がおられるのに」

座長はバルザを馬鹿にするように笑った。

「はつきりとした答えじゃなくて構いません。少しでも知っていることがあればお聞かせ頂ければと思います・・・」

バルザは座長の嘲笑に恥じ入りながらそう言った。

するとバルザの真剣な表情を前に考えを改めたのか、その嘲笑を引っ返して座長は言ってきた。

「まあ、確かそんな魔法を題材にした物語があるのは知っていますが、実際はどうでしょうか・・・」

「あ、あるのですか？」

座長の言葉を聞いて、バルザは思わず子供ほどの大きさの座長に詰め寄ってしまった。

「い、いえ、はつきりそう言えるわけではないのですが、聞いたことはございます」

「それが本当ならば」

やはり私は奴に騙されていたのではないか？

この胸の中に居るハイネは、この劇の登場人物をモデルにして適当にでっち上げた、あの邪悪な魔法使いが植えつけた偽の記憶？

もし本当にそんな魔法があるとしたら、その可能性が断然高まる

！

バルザは興奮した面持ちでそう叫びかけたが、寸前のところでその言葉を飲み込んだ。

だってあのハイネが存在しないなんて、そんなこと俄かに信じられるわけがない。

ハイネがないなどということがあれば、その瞬間、バルザの世界は崩壊するであろう。この世界は花も潤いもない、茫漠とした荒野になる。

それに注意しなければならぬかもしれない。

この塔にやってきた劇団の座長だ。あの邪悪な魔法使いと通じているかもしれないではないか。

「ひどく興奮なされているようだが、どうなされたんですか？」

先程までバルザの前から一刻も早く離れたがつっていた座長は、今はバルザに興味深々といった様子を見せ始めていた。

バルザはそんな座長を危ぶんで、丁寧に礼を言って彼の前から去ろうと思ったが、やはり考え直した。

ハイネが本当に実在するのか、それとも邪悪な魔法使いの魔法に拠る偽の記憶なのか、はつきり確かめておかなければならない。

しかしバルザの一人の力では無理だ。

協力者が必要なのだ。この旅芸人はその仕事に打ってつけなのではないだろうか。

「あなたがこの塔を訪れたのは何回目ですか？」

だが彼が邪悪な魔法使いと通じている可能性がある。
それをまず探らなければならない。そう思いバルザは尋ねた。

「さて似たような塔を廻っておりますからね」

ということは、あの邪悪な魔法使いと何かつながりがあって、この塔にやってきたといわけではないのか。

「では次はどこに行かれるのでしょうか？」

「さあ、それは風が教えてくれるでしょう。北風が強くなり始めました。南にでも向かいましょうかな。それともどこか住んでおられる貴方のお知り合いが、我々のような旅芸人を求めているのでしょうか？」

「残念ながらそういうわけではないのですが、しかしまだ行き先が決まっていないというのならば、是非とも行って欲しいところがあります」

「ほう、どこですか？」

「パルです」

ああ、我が故郷、パル。

バルザはパルと言ったとき、切ないくらいの懐かしさと愛おしさ
が、自分の胸に溢れて来るのを感じた。

「パル、いいですね」

「そしてそこでハイネという名の女性が実在するかどうか探って欲しいのです」

バルザは「ハイネ」という名前を口にすると自然と声をひそめた。

どこであの邪悪な魔法使いが立ち聞きしているかもしれないから。

「ハイネ、ですか？　しかしハイネなどという名前はありふれています」

座長は先程までと同じ声のトーンで言ったのかもしれないが、バルザにはそれがひどく大きな声に聞こえた。バルザが声をひそめているのを知りながら、わざと嫌がらせしてきたような感じ。

バルザは思わず辺りを見渡す。そして眉をひそめながら続けた。

「バルザという騎士団団長にして、軍の最高司令官がパルにおられるらしい。いや、おられたらしいと言い変えましょう。その腹心の妻に、その名の女性がいるかどうか探って欲しいのです。しかしその腹心はまだ亡くなっているとも聞く」

「バルザ殿といえば有名な御仁。そのお方の腹心とはいえ、奥様の名前を探るなどとは、なかなか骨の折れる仕事」

「いや、そんなこと子供でも」

そう言いかけてバルザはその座長が何を望んでいるのか気がついた。

「謝礼は弾みましょう」

「おいくらで？」

「先払いで金貨、二十」

バルザが今、手元に持っている全財産がそれだけだった。あの邪悪な魔法使いはバルザをあくまで雇っているという形にしたいように、それなりの給金は払われているのだ。

「二十枚でございますか？」

それなりの大金だ。しかしその程度では不満だというような表情を、座長はあからさまに見せた。

しかしバルザは彼のその表情を見てむしろ安心した。
この男は金次第でどうにかなる男のようだ。バルザの言っていることを不審に思い、あの邪悪な魔法使いに注進に及ぶなどということはないであろう。

「その報告を持ってきてくれたら、同じだけの金貨を後に渡そう。全部で四十」

「五十で」

「わかった」

バルザが渋々答えると、座長は満足そうに頷いた。

「実は私はあなたを一廉の人物だと思っておりました。その言葉遣い、堂々たる体躯、隠しても隠しきれない気品と威厳。こんな片

田舎で働くのは相応しからぬお人と」

「私の正体を探るのがそなたの役目ではありませんせぬ」

バルザは冷たい一瞥をくれた。

「おっと、そうでしたね。ハイネという女性の存在の有無を確かめるんでしたね」

今度は、座長は声をひそめて「ハイネ」と言った。

「わかりました。約束は守ります。この職業も商売と同じ、信義によって成り立っているのです。どうぞ安心してお待ちください」

第七章 7) 悲しきバルザの章 後編

ハインがもし存在しないのならば、バルザは騎士の典範を破りはしなかったことになる。

妻以外の女性を愛してはいなかったことになるのだから。

その事実は彼の失っていた騎士としての誇りを取り戻させてくれる。

それに何より、バルザはもうこれ以上あの邪悪な魔法使いの言いなりにならなくて済むのである。

ならば荷物をまとめてすぐにここを立ち去れる。

そしてパルに戻って前の職に復権出来るかもしれない。

いや、もはやそれが無理でも、どこかの村で畑を耕しながら、貧しい子供たちに読み書きや剣術を教えて過ごす余生も悪くない。少なくとも邪悪な魔法使いの塔を守る番人であるよりは。

再び人生を立て直すのだ。

邪悪な魔法使いによって粉々に砕かれた人生を、元通りとはいかなくても、また調和の取れたものに。

しかし自分がそんなことするつもりでないことをバルザは知っている。

この命に代えても、あの邪悪な魔法使いは殺す……。

彼の心の中には、憎悪がふつふつと煮えたぎっていた。

今までの人生で抱いたことのない、どす黒い、あの邪悪な魔法使い以上に邪悪な悪が、バルザの胸の中で音をたてて煮えたぎっている。

るのだ。

ようやく復讐の機会が得られそうだ。

しかしそれもこれも、あの座長が持つて帰ってくる答え次第ではあるが。

果たして本当にあのハイネがいらないなんてことが、ありえるのだろうか？

今、バルザの胸の中にハイネの思い出が鮮やかに咲き乱れている。妻や両親や仲間たちと同じ濃密さで、彼女は心の中にいる。

初めてハイネを抱いたときの思い出、それは何と甘く、切ない出来事であつたろうか。あのときバルザは初めて愛を知つたと言つていい。

厳しい訓練に次ぐ訓練の日々、血生臭い戦場で過ごした青春、それがバルザの人生の全てだった。

若過ぎた日の妻との出会いは、バルザに愛も安らぎも与えはしなかった。

ハイネが存在しないのなら、バルザはまだ愛を知らないということになるかもしれない。

バルザはハイネのために花を摘んだことがある。

偽名を使い、王室御用達の仕立屋にドレスを作らせたことも。

それをプレゼントしたときのハイネが浮かべた微笑みを今、生々しく思い出せる。そのとき嗅いだハイネの髪の毛の香り、そして香水の香りと共に。

ハイネはありがとうと言いながら、椅子を台にしてバルザにキス

をしてきた。

これがあの邪悪な魔法使いがでっち上げた偽の記憶だとは到底考えられない。

やはりハイネがいらないなどというのは、一時の気の迷いに過ぎないのかもしれない。

この苦しい環境から少しでも逃れたいという、バルザの脆弱な精神が見せている幻か何かなのではないか。

果たして自分はどちらの答えを望んでいるのだろうか？

ハイネが存在しないとすると、すぐにでもあの邪悪な魔法使いに復讐出来る。

しかしそれと同時に、ハイネが存在しないという事実、それはいつたい何という悲しい事実であろうか。

こんなに心の中に鮮やかに生きているハイネが、実は、あの邪悪な魔法使いの掬え物であるかもしれないなんて。

それはハイネが囚われているという事実よりも悲しいことではないか！

私は何という孤独を味あわせられることになるであろう！

バルザは声に出さずにそう叫んだ。

一睡もすることなく夜が明けていく。

今日も蛮族たちが塔に押し寄せてくるのであろう。何度退治しても、性懲りもなく彼らは押し寄せてくる。

バルザはただそれらを虐殺同然に殺すだけ。

また昨日と同じ今日が始まるうとしている。

第七章 8) 悲しきバルザの章 後編

バルザはひたすら待った。

しかし座長か、もしくは彼の遣いが報告を携えて現れる気配は一向になかった。地平線の彼方から現われるのは蛮族ばかり。

バルザの目測通り、五十あまりの金貨は溜まりつつあった。

それだけの大金であっても、待っている間に稼ぐことの出来る給金で補えるであろうと計算していた。

そして実際その通りにいつている。これで後払いの金貨の心配はなくなつたのであるが、しかし当の座長が現れる気配は一向にない。

バル国からこの塔までどのくらいの距離があるのかわからない。

バルザはこの塔がどこに存在しているか見当もつかないから。

森の風景や、季節の肌触りなどから、それほど離れているとは思えない。

しかし一部の召使いが話す言葉は知らない異国の言葉で、もしかしたらバルから遠く離れている可能性もないわけではない。

だからもうあの座長がバルに着いたのか、それとも今まさに、この塔に向かっている最中なのか見当もつかないのだ。

もしかしたら座長は先払いだけの金貨で満足して、ここまで来ないつもりかもしれない。

この森は危険である。あの蛮族たちがいつ出沒して、襲ってくるとも限らないのだから。

何ならば、もうこのまま現れないほうがいいのかもしれないと、バルザはときおり思ったりもする。

彼は自分がどちらの答えを欲しているのかわからなかった。

ハインが存在しなかったほうが自分にとって都合がいいのか、存在してくれたほうがいいのか。

いや、どちらにしてもバルザにとって辛い事実であるような気がする。

それならばいつそ全てがあやふやなまま、この人生を歩み続けようか。

部下たちは彼を慕い、塔で働く召使たちとも良好な関係を結べている。

あの邪悪な魔法使いの門番として働いているという事実を除けば、この牧歌的な人生も悪いものではないかもしれない。

騎士団団長であり、軍の最高司令官であったときは一時も心休まるいとまがなかったのに比べれば、ここは楽園。

バルザは騎士団団長であり、軍の最高司令官であったとき、このような余生を夢見ることもあった。

しかしそれは当然、あり得ないことである。

あの邪悪な魔法使いに対する憎しみと怒りが、バルザの胸の中から消え去ることなどないのだ。この屈辱を抱きながら生きるなどという選択肢は、名誉ある騎士バルザには想像も出来ないこと。

いずれ報告はやって来るであろう。

あの男がバルザの下に来ない理由などない。

決して豊かとは言えない旅芸人が、金貨五十もの大金をむざむざと棒に振るとは思えない。まして旅芸人が旅を厭うわけなどないのだから。

そのもたらされた報告が、もしハイネなど存在しないという答えなら、バルザはすぐに剣を抜いてあの邪悪な魔法使いに勝負を挑むであろう。

勝つことが出来れば何も問題はないが、しかしバルザが敗れ、殺される可能性だってある。

いや、むしろそちらのほうが可能性は高いであろうと彼は冷静に判断している。

剣で魔法使いに勝つことは普通不可能なのだ。

そのときバルザが一つ憂いていることがあった。

あの邪悪な魔法使いにバルザが負けたあと、自分の部下たちはどうなるのであろうかということ。

もちろんバルザの部下だからといって、彼らが邪悪な魔法使いに殺されるということはないであろう。

バルザはそれを憂っているわけではない。

バルザ亡き後も、残された部下たちは蛮族と戦わされ続けるであろうことは間違いない。

それは彼らだけでは少し肩の荷が重い仕事。

バルザは自分が邪悪な魔法使いに負けた場合のことを考えて、部下たちのために少しでも良い環境にしてやるべきだと思っていた。すなわち蛮族の問題を解決しておこうと。

それにバルザは近頃、自分の部下たちの変わりように、恐怖に近い感情を抱いていた。

部下たちは殺戮に酔い始めているのだ。

バルザの訓練の結果、正規軍並みの力量を身につけた部下たちと、何の規律もない蛮族たちとの力の差は圧倒的に開き始めている。

容易に打ち勝つことの出来る蛮族たちを殺すことを、部下たちは楽しんでゐる。

このままでは彼らは、戦場の中で生きられない獣と化してしまうかもしれない。そんな危惧もあり、この蛮族の問題はいち早く解決しておかなければならないと考えている。

バルザは意を決し、あの邪悪な魔法使いに進言してみることにした。

なぜ蛮族があのように何度も何度も襲いかかってくるのか。

蛮族といえども何かの目的があつてのことではないのか、と。蛮族を捉まえて尋問してみてはどうか。

バルザは奴の顔を見るのも、近寄るのも不愉快なことであつたが、部下たちのために我慢して、邪悪な魔法使いの前に跪きながら進言した。

「なるほど、それはその通りかもしれないな」

邪悪な魔法使いは満足そうな表情でそう言ってきた。

バルザがこのような提案をするのは、門番としての職務に熱心になり始めた証だと思つたのだろつ。本当はバルザが心置きなく、邪悪な魔法使いと対決するための準備であるというのに。

「わかつた、騎士殿に任せよう」

邪悪な魔法使いはそう言つた。

第七章 9) 悲しきバルザの章 後編

バルザは攻め寄せてくる蛮族の中で最も身分の高そうな一人を捕まえ、塔に連れて帰った。

尋問は邪悪な魔法使いと、彼の腹心であり塔のナンバー2、シャグランも立ち会う中、暗くて狭い牢獄の中で行われた。

通訳は蛮族の言葉を幾らか理解出来るという、塔の馬小屋で働いている飼葉係りが勤めた。

そしてバルザが蛮族への尋問を進める。

バルザは蛮族に尋ねた。この塔の襲撃する目的は何なのか？

「古よりの宿命、と言っております」

飼葉係りが蛮族の言葉を通訳してバルザに言った。

牢獄の前には、口髭をはやした牢番が槍を構えて立っている。

蛮族自身は縄で後ろ手を強く縛られている。

バルザは鋭い視線で蛮族をにらみつけた。しかし蛮族の男はそれに怯えることなく、むしろ堂々とした視線で見つめ返している。

「古よりの宿命？ なぜ君たちはそのような宿命を課せられないといけないのだ。それには必ず理由があるだろう」

バルザは続けて尋ねた。

「宿命を果たすことが我々の生きている意味、宿命に理由などあるわけがない、と申しております」

通訳の飼葉係りが言った。

「そうか」

それは騎士にとっても同じかもしれない。

宿命とは何か、生きる意味とは何か、騎士の典範を守ることとは何か、そのようなことを考えて思い悩んでも意味がない。

そういう悩みを超越することこそ騎士なのだ。

「では質問を変えよう。そなたたちは誰にその宿命を課せられたのだ？」

騎士にとってそれはルヌーヴォオの神である。

「そんなことは言うまでもない、我が愛しき女神」

「女神？　女神がこの塔を攻めると命令しているのか？　だつたらそれは戦いの女神なのか？」

騎士が信奉しているルヌーヴォオの神は戦を奨励などしない。騎士は守るために存在しているのだ。

とはいえ、そのような当たり前のことを忘れてしまっている騎士は多い。

バルザですら血生臭い戦場の中で、ただ敵を殺すことだけに専心してしまい、その元々の理念を忘れてしまうことがある。しかしルヌーヴォオの神は戦いを扇動することは決してありえないこと。

「違う、女神には調和の女神と嘆きの女神がいる。我々の女神は姉妹なのだ。確かに嘆きの女神のほうは憎しみを怒りに変えろと教える。しかし決して女神は戦いを奨励したりしない、と申ししていま

す」

「うむ」

あまり有益な答えが得られていない。ただ観念的な会話をぐるぐる交わしているだけだ。

これ以上このような質問をして、有益な答えが得られるのか不安に思いながらも、しかしバルザは更に問うた。

「戦いを奨励しない女神が、なぜそなたたちを戦場に駆り立てるのだ？ それは矛盾してはいないか？」

「我々はお前たちに奪われた女神を取り戻すために戦っているのだ、そのどこが矛盾しているのかと言っております」

「我々が奪った女神だと？」

もしかしたら一歩前進したかもしれない。バルザは逸る心を抑えながら質問した。

「それはいったいどういう意味だ？」

「この塔に奪われて我々は女神を失ったのだ。毎晩取り返しに来いと女神の告げがある、と」

バルザの熱い口調に応えるように、通訳の飼葉係りがそう訳して伝えてきた。

「なるほど、それを取り返すまで攻め続ける気だということか？」

これだ。

蛮族がどれほど被害を出そうと、この塔を厭きずに何度も攻めてくる理由。

この塔に奪われた女神を取り戻すために彼らは戦っているのだ。

確かにそれなら矛盾しないかもしれない。女神は大義のために戦いを奨励していることになる。

「よくわかった、だったらそれを返しさえすればこの問題は解決するということだな？」

そのようなこと簡単なことではないか。
もちろんこの邪悪な魔法使いがそれを返す気があるかどうか次第ではあるが。

「心当たりはございますでしょうか？」

バルザは邪悪な魔法使いの目を見ることなく、彼にそう尋ねた。

「女神など知らないね。何のことやら僕にはまるで見当がつかないが」

そう答えながら邪悪な魔法使いがバルザを見てくる。

バルザは奴の視線を横顔に感じて、顔が引き攣るのを感じた。

邪悪な魔法使いはさつきからずっと不気味な薄ら笑いを浮かべていた。

騎士であるバルザが、拷問係りなどを勤めさせられている。このようなシチュエーションが楽しくて仕方ないと言った様子で、バルザと蛮族の遣り取りを見ていたのだ。

しかし女神を知らないという言葉に嘘はなさそうだ。

バルザは尋問を続けた。

「奪われた女神とはいったい何なのだ？ それは我々が奪ったり出来る物なのか？」

「女神とは、この世で最も清らかで美しいもの」

「そんなものがあれば僕も欲しいものだな」

邪悪な魔法使いが笑いながらそう言った。

その笑い声はバルザの神経にとっても障った。

もちろん彼はそんな感情を顔に出さないようにするが、しかし彼以外にもその笑い声を不快に思ったものがいたようだ。

捕虜の蛮族だ。

邪悪な魔法使いが何を言っているのかわからないであろうに、その笑い声だけで頭にきたようで、邪悪な魔法使いに今にも掴みかかるばかりであった。

「ご主人様を泥棒呼ばわりしてますが」

通訳が邪悪な魔法使いにそう言った。

「なんと無礼な奴だ。僕がそれを奪ったわけではないのに」

邪悪な魔法使いは蛮族を挑発するように、更に大袈裟に笑い出した。しかし不意にその笑いをおさめ、ふと考え込むような顔をした。

「しかしこの塔は先代の主から、この蛮族の襲来に悩まされているらしい。その主が奴らの大事なものを奪ったという可能性はある。そいつは本当にとんでもない男だったようだからね」

「女神ともしや、像か何かなのか？」

バルザはそう尋ねた。

「像であつて像でない。その中に女神が宿り、我々を癒し慈しんで下さるもの、だそうです」

通訳はそう訳してきた。

「女神など信じない僕たちにとって、それはすなわちただの像に過ぎないということだな」

邪悪な魔法使いが口を挟んで言ってきた。「しかしもしかすればこの塔の倉庫にあるかもしれない、シャグランよ」

邪悪な魔法使いは彼の隣にいるこの塔のナンバー2のシャグランに声を掛けた。「すまないが倉庫係にでも尋ねておいてくれ。女神の像があるかどうか」

「ああ、わかったけど・・・」

「それを返して解決するのなら安いものだ、なあ、バルザ殿」

確かにその通りだ。むしろこれまで、その程度の行き違いでこんなに血が流されていたということに驚きを覚えるほどである。

「なかなか有益な尋問だった。忙しい時間を犠牲にした甲斐があったものだ」

邪悪な魔法使いはバルザにそう言いながら、満足そうな様子で牢獄の中から出ていこうとしていた。

バルザは邪悪な魔法使いに返事を返そうと思い、彼のほうを振り向いた。

その瞬間、彼の心は激しく揺さぶられた。

狭い牢獄の扉を屈みこんで出ていこうとする邪悪な魔法使いの背中が、バルザのすぐ目の前にあったのだ。

それはあまりに無防備な背中だった。

隙だらけで、少しの戦いの心得もない、まるで女のような背中。

一方、戦場から戻ってきたばかりのバルザは帯剣している。

槍を持った牢番は牢獄の向こうにいた。

バルザの背後にいるのは何の武装もしていない通訳を務めた飼葉係りとシャグランだけ。

剣を抜きさえすれば、この憎くて堪らない邪悪な魔法使いを一瞬で殺れる状況。

しかし指先まで漲らせた殺気を、バルザは心の底に収めた。

騎士であるバルザが、丸腰の者を背後から切り捨てるなどというような卑怯なことが出来るはずがなかった。

邪悪な魔法使いは牢を出て、代わりに牢番が入ってきた。

邪悪な魔法使いとバルザの間に、牢番の持った槍がきらめく。

しかしバルザは立ち去っていく魔法使いの背中から視線を外すことが出来なかった。

千載一遇の機会を逸したのかもしれない。

だがやはり、不意打ちで人を殺すなど、どんな悪魔に対しても出来ない・・・。

第七章 10) 悲しきバルザの章 後編

そのあと蛮族の女神の像が、倉庫から見つかったのかどうかバルザは知らない。

その前に座長がついに報告を携えてやってきたからである。

座長は言った。バルザ殿の腹心の妻に、ハイネなどという女性はいないと。念のため、あの劇のハイネの特徴と類似した女性がいるかどうか調べたが、そんな噂もない。

答えは出たようだ。もはや疑うべくもないであろう。

バルザは約束通り金貨を払った。

その帰り際、座長は言った。

パル国は今、危機に瀕している。バルザという軍の最高司令官に裏切られたせいで、戦いに敗れ続けて。

「私の報告が少し遅れたのもそのせいでした。現在パルの中に旅人が入るのは極めて困難だったのです」

「ならば国中で、バルザという裏切り者への怨嗟の声で満ちているのでしょうかね」

バルザは苦難に喘いでいるだろう、パルの街の光景を思い浮かべ胸が張り裂けそうになった。

「いいえ、バルザ殿の帰還を国中の人間は待ち侘びているようでした。祖国の危機を救えるのはやはり彼しかいないと」

座長が去ったあと、バルザは自分の荷物をまとめ、部下たちへの書置きを書いた。そのあと部屋を出て、塔の裏庭にある馬小屋に向かった。

夕暮れ、太陽が北の方角に沈んでいく。

その太陽を眺めながら、そこで最後の戦いのため愛用の剣を研いでいた。

この剣であの邪悪な魔法使いの首を叩き斬る。

それを考えると、黒く曇っていた胸が晴れ渡っていくようだ。

いや、奴の首を叩き落とすことは叶わないかもしれない。

相手は魔法使い、いくらバルザの腕でもその敵を殺すことは不可能に違いない。

しかしせめて一太刀、バルザが生きた証をあの邪悪な魔法使いの身体に刻み込む。

それを置き土産に、冥府の妻に詫びに行こう。

いずれにしろその瞬間は近い。

「その剣に恨みでもおありになるのですか？ バルザ様？」

そのときそう言って声を掛けてきた女性がいた。

バルザはその声のほうに視線を向けた。

夕暮れの逆光で、最初その女性は黒い影法師にしか見えなかった。少しずつ目が慣れ、ようやくその女性の顔がはっきりと目に入った。

うら若い少女のようだ。この塔の召使いの一人だろう、馬小屋にいるということは飼葉係りか何かだろうか。

「ファファン、夕飯よ」

いや、違ったようだ。その少女は馬小屋の外れに繋がれている犬に餌をあげている。

その少女の飼い犬なのだろうか。もしかしたら塔の掃除婦にそのような少女がいたのを見たことがあるかもしれない。

「剣に恨み？ 剣は剣です。むしろ使えば使う程、愛着がわいてくるもの」

バルザはその剣を置いて、その少女の問い掛けに応えることにした。

「けどとても恐ろしい表情をしておられました」

少女はその犬から視線を上げ、バルザにそうやってきた。

「私が？」

「は、はい、まるで何というか・・・」

その少女はそう言って、言葉を選ぶように口籠った。

「まるで人を殺すことに快感を感じる、殺人鬼のような顔をしていましたか？ このバルザが」

彼は口籠った少女の後を継いでそう言った。「私はこの剣で数え切れないくらいの人間の命を奪ってきました。そう思われても仕方がないでしょう」

「いえ、殺人鬼なんてんでもありません。むしろバルザ様はこの剣を憎むような眼差しをしておられました。まるであらゆる戦いを憎む修道士様や修道女様の眼差し。バルザ様、これまで人が憎くて、その剣を振り下ろしたことはないのではないのでしょうか？」

少女が首を振りながら、必死に言い繕うように言ってきた。

「人が憎くて？」

「はい、全て何かを守るため、あるいはお国の勝利のためでは」「すみません、私めごときが、このような差し出がましいことを申し上げて。」

少女は突然、我に返ったように頭を下げた。「失礼しました、バルザ様。ご無礼をお許しください」

そして慌ててバルザの前から立ち去ろうとする。

バルザは少女を引き止めるように言った。

「確かに私は今、憎しみに動かされてこの剣を振り下ろそうとしています。誰かを守るためでもなく、何かを得るためでもありません。しかし私が憎むその者は、私からあらゆるものを奪った。誰に聞いても正義に過っていると、私の復讐を支持してくれるでしょう」

あの邪悪な魔法使いと対決する瞬間は近い。この少女にこのようなことを言っても、もはや問題はないであろう。

「どうしてもその人を許すことは出来ないのですか？」

その少女はバルザのその言葉に足を止め、遠慮がちにそう言ってきた。

「ゆ、許すだって？」

バルザはその少女のその言葉に愕然とした。

なんと甘い、宮廷の女どもが好んで食す、ガト・シヨコラのような考え。

「許すなどという言葉、騎士の典範にはありませんよ」

バルザはすげなく答えた。

「ですがそれでは、いつまでも争いが終わらないではないですか？」

少女はバルザのことを憐れむような表情でそう言ってきた。

いや、このバルザを憐れんでいるのではないのかもしれない。そうではなくて、全ての生きとし生けるものを憐れんでいるような表情。

「そなた、名前は？」

少女のその視線を前に、バルザはふと尋ねた。

「も、申し遅れました、フローリアといいます」

少女は慌てて頭を下げそう名乗った。

聞いたことのある名前だ。確か部下たちの間で、美しいとしきりに話題になっている少女の名前。

「フローリア、そなたはたとえば、最も大切にしている物を嘲笑われたり、壊されたりした人間を許せるのですか？」

「そ、そのようなことはそのときにならなければわかりませんが許さないと私はこの先の人生を生きていけないと思います」

まあ、何も特別な考えでもない。パルの都にもそのような人物はウヨウヨいた。

ルヌーヴォの教会に仕える修道士や修道女などだ。

彼らの中にはこれまでの人生で、それほど大切な物を失った経験がない者もいるであろうに、誰も彼もが一段高いところから説教を垂れてきた。

愛と許しで世界から争いはなくなるであろうと説いていたのだ。

この少女もそのような理想にかぶれているのだろう。

しかし実際にはその教会が騎士を集め、組織しているのである。

確かに騎士は厳しい典範に支配されている。ただ無暗やたらに武装した組織ではない。しかし突き詰めて考えると、ルヌーヴォの教えと騎士は矛盾を来たしはしないか？ 世界は矛盾と不条理で出来ているものであるとはいえ。

「あなたはまだ若い。愛と許しでどうにかなると考えておられ

る」

バルザはフローリアを叱るように言った。

「ですがルヌーヴオの神様は確かおっしゃっていました。片足の者はたとえ義肢を奪われても、その盗人を許せと」

やはりそうだ。ルヌーヴオの神。

その少女はその教えに影響されて、絵空事を述べているだけ。

しかし現実はその通りに行かないことをこの少女に教えてやるのか。

「ではフローリア、例えば私が」

バルザはおもむろに立ち上がり、その少女に一步近づいた。「いきなりそなたの服を切り裂き、この干場の上に押し倒し」

その言葉に、少女が明らかに怯えた眼差しでバルザを見上げてきた。しかしバルザは意に介せず続ける。

「そなたの必死の抵抗を押さえつけ、ただ己の欲望を遂げるためだけに、その純潔を奪ったとする。どういう意味がお分かりですね？ それでもそなたは許されるのか！」

「・・・そ、そんなの当然、私はバルザ様を憎みます、恨みます」

少女は実際、バルザにそのような暴力を振るわれたかのように、涙に滲んだ瞳でそう言ってきた。

「・・・やはりそうですね」

バルザは肩に入っていた力を緩めそう言った。

「で、でも許します」

「何だと！」

「そのような野蛮な暴力振るわれたあなたを憎んで、憎んで、憎み続けます。でも私は命を掛けてバルザ様に復讐はしません。出来ることなら、あなたがなぜそのようなことをしたのか理解しようと努めます。そして許したいと思います。それが無理ならただ時間に身を委ね、一刻も早く忘れるよう努力します・・・」

「馬鹿らしい！」

バルザは声を荒げた。

どうしてこのような屈辱を与えてきた輩を理解など出来ようか！そんなこと不可能に決まっているではないか。

だったら私の場合、あの邪悪な魔法使いがなぜ自分をこのような目に合わせたのか理解しなければいけなくなる。

その為にいつまでもこの塔で門番を勤めろというのか？

何という愚かな話し。

もういい。時間の無駄だ。

このような少女と話しをしても仕方がない。

「フローリア、たとえ叶わない相手でも、大切な物を奪われたのならその者に立ち向かわなければならぬ。許すというのは、ただ

自分の命を優先して逃げるということです。まして騎士は命よりもプライドを優先するもの。それが騎士を騎士たらしめている極意」

「だったらバルザ様、こちらからも質問があります。許す人間は騎士になれないのですか？」

「そうです」

果たしてそうであつたろうか？

バルザの心にふとそんな疑問が過つた。

「騎士は非寛容なものなのですね」

「そうです」

私はもしかや何か大切なことを忘れようとはしていないか？
あまりに強烈な復讐心の下、我を失つてはいないか。

しかしそんなこと、もはやどうでもいい。

「では怒りや恨みは永遠に続くということなのですか？」

バルザは少女のそ問い掛けに一瞬の躊躇のあと、頷いた。

「そうですか、その答えにがっかりしました」

「それは残念でした。しかし私は騎士です。あなたと違う世界に生きているのですしょう」

まだ少女は何か言いたげであつたが、バルザは剣を拾い上げ、そ

の少女を残してその場から立ち去った。

戦いを前にして、このような会話をするべきではなかった。

戦いに向けて高めていた集中力が、四方に散らされたような感じの
のだ。

騎士の間に、このようなジンクスが伝わっていた。「戦いを前に、
戦いを引き止めようとする者と話すべきではない」

そのとき必ず、その戦いに負けるものだと言われている。

これは不吉な前兆に思えた。

この最後の戦いを延期しようどうかバルザは迷った。

だがもはやこの逸る心を抑えられそうにない。いずれにしろ魔法
使いに勝てる見込みはほとんどないのだ。それなら延期するのも無
駄であろう。

ふとバルザは背後に視線を感じた。

振り向くと、まだあの少女がこちらを眺めていた。

それにしてもあの少女に、とても無礼なことをしたかもしれない。
迫る復讐を前にして、いささか我を失っていたとしても、あれは騎
士の取るべき態度では決してなかった。

バルザはその少女に向かって深々と頭を下げた。

「私はこの塔で！」

頭を下げたバルザに向かって、少女が大声を張り上げて言った。

「父と母の命と、幾ばくかの時間を失いました。バルザ様は何を失ったのでしょうか？」

「私は・・・」

妻と、地位と、名誉と、誇りと、そしてハイネを失った・・・。

戦わなければいけない理由は充分にあるのです。

第七章 11) 悲しきバルザの章 後編

それからバルザは最後の戦いに赴くため、この塔のナンバー2、シャグランに会いに行った。

塔の主にとっても大切な話があるから取り次いで頂きたいと言うと、彼は驚いたような表情でバルザを見つめて言ってきた。

「ここを去るおつもりなのですか？」

「相変わらずお察しが早い。あなたにはお世話になりました」

バルザは丁寧な頭を下げた。

確かにこの塔に来たときと同じ、自前の鎧を着こみ、背中には大剣を背負った、完全武装した姿でいるが、それだけでバルザの心の内がわかるとは、彼は以前から何かを察していたのかもしれない。

「出来れば蛮族が求める女神の謎を解き、それからこの塔を去るべきでしょう。せつかく建築資材を集めようとして頂いたのに、砦の建設に取り掛かることも出来ませんでした。何もかも半ばで放棄して、この塔から逃げ出すなど、騎士にあるまじき男と思われることは覚悟しています」

「いいえ、そんなこと滅相もない。きっと、何か深い理由があるのでしょう」

「私が去ったあと、部下たちには蛮族と無理に戦わないように書き置きしておきました。このまま戦いが続けば、いずれ部下たちが敗れること間違いありません。シャグラン殿、彼らが逃げるのがあっても責めないで頂きたい。出来ればそのとき、あなたから塔の

主に口添えを」

「わ、わかりました、確約はできませんが努力しましょう」

「有難い、私はどこに行こうが人に恵まれる運に生まれついたようです。あなたと出会えたことを神に感謝します」

「なんて勿体ないお言葉！」

「それとこれはあなたにとって余計なお世話かもしれないが・・・

」

バルザはこのことについて言うつもりはなかったが、彼の身を心配するあまり思わず口を出た。「あなたもお気をつけられたほうがいい」

「えっ、気をつけたほうがいいとはいいたい何を？」

「いや、私から確かなことは言えません。自分のことですら確信が持てないので。あなたがいかに判断するかの問題ですが」

バルザは親近感を抱くこの男に、邪悪な魔法使いのその邪悪さを丁寧に説明しようと思った。

しかし確信の持てないことを言って、彼を惑わすのは心苦しい。それにもはや高ぶった精神状態のバルザに、そのようなことを順序立てて喋るだけの余裕はなかった。

バルザの心は飢えた獣のように逸っている。今すぐにも鞘から剣を抜いて、その剣を邪悪な魔法使いの心臓に突き立てんと。

「とにかくこの塔の中で信じられるのは自分だけだと覚悟された

ほうが良いと思います。たとえご友人が相手であつても。それでは失礼」

そう言つてシャグランの前を去つた。

第七章 12) 悲しきバルザの章 後編

バルザは謁見の間に向かうため、塔の廊下を歩いた。

廊下の端には切り花が、まるで敷き詰めたように並んでいる。到底、趣味が良いとは思えないが、花は念入りに交換されているのか、それとも魔法の力のせいかわ、水に浸かってもいないのになぜだか常に新鮮で、心地良い香りを放っていた。

このような奇妙な光景を見るのもこれで最後であろう。そんなことを思いながら、バルザは謁見の間に向かった。

邪悪な魔法使いは既に謁見の間の玉座に座っていた。

バルザは今にも走り出したい気持ちを抑えながら、ゆったりとした足取りでそこに近づいていく。

「ここを去らせてもらおう」

まだ邪悪な魔法使いの表情もよく見えないぐらい離れていたが、バルザは声を張り上げて言った。

「なぜです？ ハイネがどうなっても」

邪悪な魔法使いがそう言い終わらないうちにバルザは言った。

「ハイネなどいない！」

「いないだって？」

「ああ、いない。彼女はある有名な劇な主人公をモデルにした偽の記憶。私が彼女と何らかの関係を持ったという事実はない」

そう言いながらバルザは、邪悪な魔法使いから一瞬も視線を離さず近づいていく。

「おお、さすが、バルザ殿、見破りましたか。僕はあなたを甘く見ていたようだ。ハイネの特徴を劇から引用したのは安易過ぎたです。それで御用は？」

「ここを去らせてもらう」

「それは困る。あなたが門番になってくれたお陰で、実に静かに充実した日々を送らせてもらっていたのに。もう一度考え直してもられないだろうか」

「無理だ」

「そうですか、ならば引き留めはしない」

本心なのか、口だけでそう言っているのかわからないが、邪悪な魔法使いは即座にそう言ってきた。

しかしそんなことは今のバルザにとってどちらでもいいことだった。

「そなたに最後に尋ねたい。どうして私を門番に選んだのだ？」

「うーん・・・、なぜだろうな、もう忘れたけれど。多分、あなたが最強の騎士だから、かな」

「到底納得出来る答えではない。そなたのエゴのせいで全てが狂った。祖国はいま危機に瀕し、私を待ち侘びているらしい」

「そうですか、僕に出来ることがあったら言っして下さい。帰りの馬車や旅費は出そう。それにしても急いで別の門番を探さないといけない。誰か適任を紹介して欲しいものですよ」

バルザは邪悪な魔法使いのその言葉を無視して言った。

「しかし祖国に帰る前にやっておかなければならないことがある」

「はて、それはいつたい？」

バルザは大剣を抜いた。

「お前を殺すことだ！」

そう叫んで彼は、邪悪な魔法使いに向かって突進した。

第八章 1) 地下の倉庫

あの不気味な女性の泣き声について少しも解明出来ていないのに、また私の仕事に面倒なの加わった。

女神探である。

バルザ殿が蛮族の捕虜から聞き出した情報により、蛮族たちはこの塔の前の主が奪った女神像を取り返すため、この塔に襲撃をかけていることが判明したのだ。

それを返しさえすれば、どうやら彼らもこれ以上、この塔に來襲することは無さそうだという見込み。

そういうわけで早速塔中を駆けずり回り、それを探することになった。

当然まず、それは塔の倉庫にあるだろうと検討をつけ、地下の倉庫に向かうことにした。

予め倉庫の責任者に女神の像のようなものに心当たりがあるかどうか聞いていたのであるが、芳しい答えは得られなかった。それでこの目で直接確かめることにしたのだ。

まあ、まだ倉庫に行ったことはなかったので、この塔の管理者として、そこをいつか見ておかなければいけないとは思っていた。調度良い機会ではあったわけである。

地下の倉庫は中央の塔の地下の、廊下の突き当たりにあった。

暗い廊下のその突き当たりだけ、赤々と明かりが燈っている。鋼鉄製の扉の前には二人の逞しい身体をした番人が立っていた。

それぞれ切れ味鋭そうな槍を持っている。

私が彼らに近づいていくと、槍をクロスに交差させて行く手を遮って来た。

「僕はシャグランという、さっきこの塔の主、プラーヌスから許可があつたと思うけど」

「伺っております」

鋼鉄製の扉の奥から声がした。

かと思うとその扉が開き、そこから丸々と太った男が現れた。更にその彼の後ろを、その男とよく似た体形の子供まで出てきた。

彼らは私に向かってとても丁寧に頭を下げてきた。

「私はこの倉庫の責任者です」

丸々と太った男が言ってきた。

「本来ならどんなことがあっても、塔の主以外にこの扉を潜らせるわけにはいきません。しかし主から直々に話しを伺っております。今回は特別にお招きいたしましたしょう」

倉庫の責任者はいささか勿体ぶった物腰でそう言ってきた。何だか面倒臭そうな人だと思ったが、私もそれに合わせ、丁寧な口調でお礼を言った。

しかしその倉庫は彼が勿体ぶりたくなる気持ちも理解出来る程、大袈裟な防犯体制が敷かれているようであった。

鋼鉄製の扉の奥に、更にそれよりも大きく頑丈そうな扉がある。そこには鍵が七つもかかっていて、丸々と太った倉庫の責任者がその鍵が全て開けるまで、蠟燭の半分が溶けるくらいの時間を要した。

慣れた手つきで鍵を開けながら、倉庫の責任者はこの倉庫の防犯体制について私に喋り続けてきた。

彼の家族は九世代も前から、その倉庫の責任者としてここで暮らしてきたらしい。

彼と、いずれ彼の後を継ぐこの息子、それ以外の一族は北の塔の地下の部屋に人質として軟禁されているのだという。

なんと倉庫の物が一つでもなくなればその人質は全員処刑。そういう厳しい掟があるらしい。

「それは九代前からの決まりなのかい？」

私は彼の話しに驚きながら尋ねた。

何事もルーズな塔にしては珍しいことだ。まだまだ私はこの塔のことを把握し切っていなかったようだ。

「はい、さようです」

「ほう、それは本当に厳しい掟だね」

私は彼とその家族の過酷な人生に心から同情した。

しかしだからって私にどうこう出来る問題でもない。九代も前に決まった掟を、九代目の倉庫の番人が守っているということは、まだこの倉庫が盗みの被害にあったことはないということだ。

厳しいその掟はそれなりに有効的のようで、私なんかをそれを辞

めさせるわけにもいかない。

ようやく倉庫の扉が開いた。

倉庫は想像以上に広がった、翼を広げたドラゴンをゆうに二、三匹収容出来るくらいの広さだ。

「おお、これは凄いね」

私は中に一歩足を踏み入れ、思わずそんな感嘆を漏らした。

「はい、二、三百人の重装兵団をすぐに装備させられるくらいの用意があります。それに武器だけじゃありません。馬車のワゴン、カバン、像や絵画、楽器から舟のオールまで何でもあります」

倉庫の責任者はまるで自分のコレクションを自慢するかのよう、誇らしげに言ってきた。

塔の責任者の言葉通り、そこには武器や防具などがかなりの数収めてあるようだ。

それも錆びたり壊れたりしているようなものはなく、かなりきちんと管理されている。

しかしその私のその感嘆も長くは続かなかった。

その広さのわりには、収められている物の数は少ないかもしれない。パツと見、まるで夕暮れどきの品薄になった市場のような感じと言ったらいいだろうか。

それにどうやら、そこにはこれと言って価値のある資産もないようであった。

いわゆる、ブライヌスが気に入るような華麗な装飾品のたぐいは何一つ所蔵されている様子がないのだ。あるのはいわば武骨な実用品ばかり。

「女神の像は見当たらなかったんだよね？」

私は改めて、確かめるように尋ねた。

「はい、ございませんでした。それにそのような物をここに収納した記録也没有せん」

倉庫の責任者は冊子に目を落としながらそう言った。

「そうか、その言葉をもちろん信じるけど、しばらく自分で探してみるよ。もしかしたら何かの手違いがあつたかもしれないし」

そういうわけで私は女神像を求めて、その広大な倉庫を歩き回った。しかしまあ、結局そこにそんなものはなかったわけだ。

第八章 2) 前の塔の主の私室

せつかく私はバルザ殿に良いところを見せようと張り切っていたのに。

いや、プラーヌスだって蛮族の問題が解決することを心から待ち望んでいるだろう。

私が探していることを知らないだろうが、何なら蛮族たちだってそれを望んでいるに違いない。

女神像が見つかることは誰もが一樣に心待ちにしていることなのである。邪魔する者などいないはずの平和への道。

だけど倉庫で女神像は見つけることは出来なかった。

私はしばらく途方に暮れた。倉庫になれば、他にどこにあるだろうかとしばらく悩んだ。

それで思いついたのがここ、前の主の私室である。

どういう動機で、はたまたどういう方法かもわからないが、蛮族から女神像を盗んだのは、この塔の前の主であることに間違いない。だったらその前の主の私室に大事に保管されてあるのではないか。そう考えて私は前の主の私室を探すことにした。

そこは西の塔の、プラーヌスの書斎兼寝室の近くにある。

この塔の隅々まで歩きまわっている私であるが、西の塔だけはこれまで一度も立ち入ったことがなかった。

プラーヌスは自分の部屋の近くをウロウロされるのを厭ったのだろつ、彼からその探査をする必要はないと言われていたからだ。

しかしこういう事情だと西の塔に行かないわけにいかない。プラーヌスから西の塔に入る許可を貰い、私は前の主の私室を探すことにした。

しかし結局、その部屋にもなかったのである。

前の塔の主の部屋は広く、乱雑に散らかっていた。

魔法書や羊皮紙の束がうず高く積もれていて、たくさんの戸棚や抽斗のついた家具が並んでいた。瓶やら水晶玉やらも足の踏み場もないくらい散らばっている。

私は出来るだけ念入りにそこを探したつもりである。

女神の像と言ってもそれはもしかしたら手の平より小さい物かもしれない。そんなことも念頭に入れて隅々まで調べた。しかしやはり見つからない。

「一度、じっくり前の塔の主の部屋は見たかったんだ。僕も持っていない魔法の道具や、資料があるかもしれないからね」

一向に見つからないので少し苛々しながら探していると、プラーヌスがその部屋に入ってきた。

「おお、これは人体実験で得られた結果が事細かに記されているノートだ」

プラーヌスは部屋に入ってくるや否や、傍にあった羊皮紙の束をめくりながら嬉しそうに言っている。

「なあ、プラーヌス、いくら探してもこの部屋にはなさそうだよ。魔法の隠し扉とかそういうのは考えられないものだろうか」

「それはないね。前の塔の主の魔法は、僕が正式に主になった時点で全て解かれたから。しかし彼がわざわざ自分の宝石を使って、何か細工をしていたのなら別だけど、まあ、そんなこと万に一つもないだろう」

「だけどもあれ、もう僕には見つけれそうにないな。君の魔法でどうにかならないものだろうか？」

私はプラーヌスに助けを請うようそう言った。

「無理さ」

しかしプラーヌスは私の言葉をすげなく足蹴りした。「まあ、その女神に何らかの魔法がかかっているなら、それで見つかるかもしれない。でもそれがただの青銅の塊り何かに過ぎなければ、魔法では探せないね」

「そうか、残念だな・・・」

「力になれなくて申し訳ないね、シャグラン」

「いいや、そんなこと・・・」

私はプラーヌスらしからぬ言葉に少し驚きながらそう言った。

「しかしわからないのは、どうして前の主がそのような物を盗む気になったのかだ。もしかしてその女神はそんなにも貴重な物なのか？　だったら見つけることが出来ても、僕も返す気にならないな」

「おいおい、プラーヌス！ 本気で言ってるのかい？」

「いや、冗談さ。しかし結局、彼はそんな物を蛮族から奪ったせいで寿命を縮めた。死にたくなければ蛮族にすぐに返せば良かったはずなのに。それは死を賭けるに値するほどのものだということだ。シャグラン、君もそのようなものに興味が出ないか？」

「だけど・・・」

「まあ、あるいはこんな可能性もある。結局、前の主はちよつと前までの僕たち同様、どうしても蛮族が襲撃をかけてくるかその理由を知らなかった。だから返そうと思う発想がそもそも湧かなかった。いや、違うな」

プラーヌスは首を振って言った。「いくら馬鹿でも、自分が蛮族からそれを奪ったのならそれぐらいの関連性には気づくな。だって、この女神が蛮族の物だと知らずに手に入れたのか・・・、いや、下手したら盗んだことにすら気づかなかった可能性もあるな」

「どういうことさ？」

「だから前の主の気づかぬ間に、それが塔の中にあつたってことだ。しかしそんなことがありえるのだろうか？」

「訳がわからないよ」

「うん、僕もね。まあ、いずれにしろゆつくり探せばいいさ。時間にはたっぷりある。バルザ殿が番人としている限り、そのような物が見つかるうが見つかるとは関係ないから」

「しかしプラーヌス、確かバルザ殿はすぐに出ていくかもしれないと君は言ってなかったっけ？」

まだバルザがここに来た間もない頃、プラーヌスはいくらか深刻な表情でそう言ったのだ。私はそのことをよく覚えている。

「ああ、そうだったね。かなり勘が良い御仁であることには驚いた、今でも疑っているだろうね。だけどそれ以上に彼は用心深い人間でもある。まだすぐに出ていかないさ、何かよほどの材料を得ない限りには」

プラーヌスはそのようなことを言って、また目の前の羊皮紙の束に視線を落とした。「これは凄いで、シャグラン、前の主はかなり人体実験を極めていたようだ」

「やめてくれよ、プラーヌス、君までそのようなことに手を出すのは」

プラーヌスは思ったほど女神像探しを焦っていないようだ。蛮族がいくら攻めてこようがバルザ殿に撃退させればいいと考えているようである。

しかしプラーヌスはそれでいいかもしれないが、バルザ殿たちにすればそうはいかないだろう。

彼らは命を賭して戦っているのだ。

少しでも油断すれば命を危うくする。戦いがなくなればそれに越したことはないに違いない。

それにこれは無益な戦いだと判明した。これ以上、殺し合いはたくさんのはずである。

そういうわけでプラーヌスのように私はのんびりしていられなかった。

それから女神像のありそうな場所を必死に考え、そこに足を運び、床板を剥がす勢いで隅々まで探した。

しかしやはりそれらしきものは見当たらない。

そんな頃であつた。バルザがこの塔から出ていったのは。

バルザ殿は用心深いから何とか言つて、ここからすぐに立ち去らないと言つていたプラーヌスの予想はあっさり外れたのだ。

第八章 3) 出会えただけの奇跡

バルザ殿がプラーヌスと会わせて欲しいと私に頼んできたとき、私はすぐに嫌な予感を覚えた。

バルザ殿の表情はいつでもシリアスな雰囲気を湛えているが、そのときは更に深刻さを帯びていて、何か悲壮な決意を胸に秘めている感じが見て取れたのだ。

その旨をプラーヌスに伝えたあと、私はバルザ殿と最後の別れをしようと塔の入り口辺りで待っていた。

バルザ殿の強さに魅せられているアビュにも声を掛けてやった。

アビュは私の知らせに非常にショックを受けたようで、しばらく私を噓つきだと罵ってきた。

しかしバルザ殿の置き手紙を読んでそれを知り、続々と集まってきた傭兵たちを見て、彼女もそれを受け入れたようだ。

「短い付き合いだったね。本来ならこんな田舎の塔にやってくるような人じゃなかったんだよね？」

アビュは呆然としながら言った。

「ああ、彼はとんでもない英雄なんだ。出会えただけで奇跡だったんだよ」

傭兵たちも泣いていた。中には泣き叫びながらバルザ殿のつれなさを罵る者もいた。

誰もがその突然の別れを到底受け入れられないといった表情である。

今、プラーヌスの塔はこの港よりも悲しい別れの間になるうと
している。

しかし当のバルザ殿は、私たちの前に一向に現れなかった。

私たちはさすがに待ち疲れ、そして悲しみ疲れた。その後、どう
してバルザ殿はここに現れないのかを訝り、その理由を口々に話し
合った。

もしかしたらバルザ殿は寸前で考えを翻してくれたのかもしれない。
い。

そういう希望的観測も出た。

それだったらプラーヌスに感謝しなければいけない。きっと彼が
説得してくれたのだから。

あるいは他に出口がないわけでもないから、そこを出たのかもしれ
ないという意見もあった。

バルザ殿は照れ屋なので私たちが大拳して待っている前を通るの
を避けたのではないかと。

しかしそうだとしたらバルザ殿はあまりに水臭い。

いずれにしろ私が代表してバルザ殿のことを尋ねに、プラーヌス
のもとに向かうことになった。

アビユも傭兵たちも、すがりつくような眼差しで私を見送ってく
る。彼らは私が携えて帰ってくる答え次第で、一安心出来るか、地
獄に墮とされるかであろう。

第八章 4 プライヌスは何やら陰鬱な顔で

その日、あの女性の不気味な泣き声がやけにうるさかった。いつもは気がつけば泣きやんでいるのに、しつこい雨のようにいつまでも泣きやまない。

しかしこのときは、そんなことよりもバルザ殿のことが気に掛かった。

いつもその泣き声が聞こえるだけで背筋に冷たいものを感じるが、今は風音が虫の音のように、私の耳の中を自然に通り過ぎていく。

謁見の間に向かうとプライヌスは何やら陰鬱な顔で玉座に座っていた。

愛用のロッドは大理石の床に無造作に転がっている。

プライヌスにも間違いなくその女性の泣き声は聞こえていたはずだ。しかしいつもなら不機嫌な顔で、さっさとこの声をどうにかしろと言ってくるプライヌスもそれどころではない様子で、何か違うことに深く気取られているようであった。

「プライヌス、少しいいかな？」

私はそんなプライヌスを怪訝に思いながら彼に近づいていった。私の足音と声がホールに反響する。残念ながらそこにバルザ殿はいなかった。広大な謁見の間に私とプライヌスだけだ。

「ああ、シャグランか、もう夕食の時間なのかな」

プライヌスが言ってきた。

深刻な表情をしていたが意外と声は穏やかであった。それで私は

少し安心した。

「違うよ、それには少し早いだろう。ただバルザ殿が君に何の用だったのか知りたいのさ。彼は出ていく気だったんだろ？ 彼の部下たちは最後の挨拶をしたがっていたんだけど・・・」

私はプラーヌスの発する雰囲気を見て、彼が到底バルザ殿の引き留めに成功したのではないことがわかった。
どうやらバルザ殿は既にこの塔にいないに違いない。

「彼は出ていったよ。これからまた代わりの番人を見つけなければいけないことになった。またゼロからのスタートだ」

プラーヌスはうんざりしたようにそう言いながら椅子から立ち上がり、自分のロッドを拾い上げた。

「出ていったって、でもどこから？ 僕たちはずっと塔の表の出口の前にいた。彼は裏口から出たのか？」

「さあね、そんなことまで僕が知るわけがない。とにかくここにはいない」

プラーヌスはそう言って、まるで出ていったバルザ殿の姿を求めるように窓のほうに視線をやった。

私も彼の視線の先を辿って、塔の下に広がる森を見た。
しかしもちろんバルザ殿の姿は見えない。

「どうして彼は出ていってしまったんだよ？」

バルザ殿がこんなに早くこの塔から出ていってしまったのはプラ

「ヌスに問題があるのは間違いない。

私はそのことを責めるように、思い切ってそんな質問を彼に投げかけた。

「それについては詳しく言えないな、シャグラン。かねてより僕が案じていたことが起きたということくらいしかね」

プラーヌスは私のほうに向きなおり、意味深な笑みを浮かべながらそう言ってきた。

その笑みを私は何度も見たことがある。

伝説の騎士、バルザ殿がこの塔の門番などを勤めるわけがないではないかと私が反論する度、プラーヌスがそんな私を馬鹿にするように浮かべてきた笑みだ。

「バルザ殿のことに關しては秘密だらけだね。結局、最後まで訳がわからないままだった」

私は憤るようにそう言った。

「仕方ないさ。知らないほうがいいこともある。しかしこのタイミングで出ていかれるとは思わなかったことは認めるよ。僕は油断していた。ここは外界から閉ざされた環境だからね。用心深い彼が確信を得る材料を得るなんて思っていなかった。なあ、シャグラン、ここ最近、バルザ殿に何か変わったことはなかったかな？」

まだ問い詰めるように彼を見ていた私に、プラーヌスが逆に尋ねてきた。

「変わったことだって？ さ、さあ、そんなのわからないよ、特

になかった気がするけど・・・」

「例えばこの塔に旅人が来たり、バルザ殿を尋ねる者が来たり」

「わからないな、彼と顔を合わすことはそうないから。僕が知らないところで何かあったかもしれないけど」

「今思えばバルザ殿が蛮族の捕虜を捕えて、尋問したのはおかしい行動だったと思わないか？ 嫌に職務熱心になったと僕は驚いていたんだが、あれが一種の前兆だったのかもしれない。彼は出ていくことを決めたから、あのような行動に出たのだ」

プラーヌスは眉に皺を寄せてそんなことをつぶやいた。

私からすればそのような行動のどこに問題があるのかという感じである。そんなことに違和感を抱くプラーヌスのほうがどうかしていると思えない。

しかしあの尋問のことで思い出すことがあった。

「そういえばあの尋問の日の前日、この塔に旅芸人の一団が来たね」

さして重要だと思えなかったが、私は思い出したのでそう言った。もうかなり前のことから、今日のことと関係はないだろう。しかしこの塔に外部の人間が来たことといえば、私の知る限りそれくらいだ。

「旅芸人だつて？」

しかし私の予想に反し、プラーヌスは私の言葉に引っ掛かるように声を上げた。

「あ、ああ、街から旅芸人の一団が来たんだ。プラーヌス、君は部屋に籠っていたけど、劇をやったり、音楽を奏でて踊ったりして夜中騒いだ」

「ああ、召使いたちが祭りの日ということで一日休養を願い出た日があったな。あの日、街から劇団が来ていたのか？」

プラーヌスが驚くようにそう言った。

「うん、しかもちょうど僕たちが街で観たのと同じ劇団が来たんだよ。まあ、偶然というより、この辺りで旅の劇団と言えば彼らしかいないのかもしれないけど」

「何だって！」

こんなに驚いたプラーヌスを見たのは初めてかもしれない。いつでもクールで冷静な彼が、後ろから「ワッ」と言われた子供のように驚いているのだ。

しかしこっちは、どの言葉で驚いたのかわからなかったぐらいだった。だって何も驚く様な事を言った覚えはないのだから。

「その劇団はどんな出し物をしたか覚えているか？」

プラーヌスが私に掴みかからんばかりに尋ねてきた。

「もちろん覚えている。僕たちがあの日、街で観たのをまるで同じ劇だよ、何だっけ？ 題名は、確か……」

「悲しきハイネの物語？」

「そう、それだよ、間違いない」

「そ、そうか、・・・なるほどね、これで一つの謎は解けた」

先程まで驚いていたプラーヌスが今度は声を上げて笑い始めた。
余りのプラーヌスの気分の変転ぶりに、今度は私が驚かされる番であった。

「しかしこういうこともあるものなんだね、もしかしたら本当にルルーヴオの神は存在しているのかもしれないな。それでこのような皮肉な運命に弄ばれる僕たち人間を見て楽しんでいるのかもしれない」

プラーヌスはまだおかしさを抑えきれないといった感じで、笑いながらそう言った。

「なあ、プラーヌス、これはそんなに驚いたり、笑えたり出来ることなのか？」

「ああ、これがどれだけ皮肉な偶然か、君に教えてやりたいくらいだよ。これが出来ないのが残念だ」

プラーヌスがまた意味ありげなことを言って私を煙に巻いてきた。
私は真つ暗な迷路の中に置き去りにされたような気分で、力なくプラーヌスを見つめた。

プラーヌスのこの秘密めいた口ぶりにはもううんざりだった。

まるで一人前の大人として扱われていない気分になされて惨めになるのだ。

それならいつそ何も言わないで欲しい。ここには秘密がある。しかしお前にはそれは言えない。そんな態度を取られると不快で仕方ない。

そのとき塔の窓の外から、馬蹄の響きと関の声が、風に乗ってかすかに聞こえてきた。

私とプラーヌスは同時にそれに気づいた。

見張り台のほうからも鐘の音の鳴る音が響き始める。

もう何度も聞き慣れている。蛮族襲来の報せだ。

「どうする、プラーヌス、バルザ殿はいなくなっただんどう？」

私は慌てて彼を見た。

「ああ、しかしまだ彼の鍛え上げた部下がいるだろ、奴らに向かってわせるんだ」

プラーヌスはそんなこと言うまでもないといった態度で、塔の見張り台に向かって歩いていった。

そこから塔の眼前で繰り広げられる戦いが見渡せられる。バルザ殿のいない部隊の戦い振りを見るようだ。

「いわば五十人程の部隊から、たった一人が抜けたただけ。問題なく戦えるだろう」

プラーヌスは言った。

「でもバルザ殿の置き手紙に、彼らだけで戦うのは控えるように

書かれてあつた。彼らだけではいつか負けると」

「だとしても、そんなことが許されるわけがないじゃないか。僕に殺されなくなったら戦うように命じてくるんだ、シャグラン」

「だけど！」

しかし私のそんな危惧をよそに、傭兵たちはそのバルザ殿の意向を無視することに決めたようだ。

私たちの眼下に武装した傭兵が次々と現れ、整然と隊列を組んでいく。

彼らはバルザ殿抜きでも戦うつもりのようであつた。

「彼らは君よりもずっと勇気があるようだな」

プラーヌスは私を馬鹿にするようにそう言った。

それなら私も黙って彼らの戦いを見守ることにしよう。

これまでこの部隊は蛮族に圧倒的に優位を示してきた。確かにバルザ殿が一人抜けただけで、負けることはないのかもしれない。

これまで副長だった者がバルザ殿に代わり、新たにこの部隊の隊長を勤めるようだった。

バルザ殿がいなくても士気は高いのか、掛け声がここまで聞こえてくる。むしろ彼らはバルザ殿がいなくても自分たちは戦えることを示したいのかもしれない。

隊列を組み終えた部隊は、その新たな隊長の指示のもと、襲来してくる蛮族に向かって突進していった。

第八章 5) 虐殺の戦場

しかし私たちの予想を覆るような戦況がもたらされることになる。

初めはこっちが優勢だった。

整然とした隊列は崩れることなく、次々と蛮族を打ち取っていった。

まあ、確かにバルザ殿のいない部隊はいつもの戦い方をしていなかったと思う。

バルザ殿が指揮しているときは、敵が勢い良く向かってくると軽やかにかわし、敵が怯むと一気に襲いかかる。

見ているだけでも力量の違いがわかる戦い方で、結果的にもこちらの被害を最小限に抑えて圧倒的な勝利を収めていた。

一方、この部隊は敵に真つ向からぶつかっているようだ。

そのせいか味方の兵も負傷して倒れる者が散見された。細やかな駆け引きなどせず、とにかく強い者が勝つという戦い方。

だけどその分、勝負は早々につきそうであった。

わが軍は物凄い勢いで、こちらよりも数の多い相手に押し勝っている。この部隊はバルザ殿がいなくても充分に戦えることを証明するのかと思われた。

だけどそんな戦況が少しずつ変わっていったのだ。

まず部隊を指揮していた元副長が蛮族の矢で負傷した頃から様子は変わった。

彼は落馬して身体を強く打ち、意識を失って倒れ込んだ。味方が

助けに入り、何とか敵の渦に巻き込まれずに済んだが、その辺りからこちらを押され始めた。

その戦いを高いところから見下ろしていたせいも、その様はよく見て取れた。

それを期に勢いを盛り返した蛮族の前に、わが軍は少しずつ押されていく。

じりじりと後退するうちはまだ良かったようだ。けどひとたび一角が崩れると、あっという間に全軍の統制が失われた。

そこからは本当に脆かった。

陣形は乱れ、もう戦うという状況ではない。ただ虐殺から逃げ乱れているだけという状態。

「プラーヌス！ このままでは」

彼もそんなことは充分に承知していたようだ。

私がそう言うよりも早く、魔法の言葉をつぶやき私の前から消えていた。

一瞬の後、プラーヌスが現れたのは戦場だ。蛮族たちがこれまでの鬱憤を存分に払おうと、わが軍の兵を虐殺している現場。

プラーヌスはその場に現れ、魔法で蛮族たちを殺していった。しかし彼もかなり苦労しながら。

巨大な炎や雷などでは、味方も同時に傷つけてしまうようだった。彼はそれに気をつけながら、蛮族たちを一人ずつ殺していった。それでかなり時間がかかったが、蛮族たちを何とか撃退待出来た。

生き残った兵も命からがら塔の中に逃げ込んできた。

第八章 5) 医務室の惨状

その後の塔の医務室は惨禍を極めた。血の匂いと、傷の痛みに呻く声が辺りに充満して、私はとても平静ではいられなかった。

そしてこの悲惨と呼応するように、あの女性の不気味な泣き声が聞こえてくるのだ。

まるでその女性は、どこかでこの塔の光景を見て、そのあまりの光景に嘆いているよう。

私はもう精神がどうにかなりそうであった。

出来ればそこから逃げ出したかったぐらいだった。

しかし看護人よりも怪我人の数が圧倒的に多く、私の手ですら必要とされた。もちろんアビュもフローリアも他の看護人たちと共に働いている。

怪我人は医務室に入りきらないから廊下にそのまま寝かされている。

老医師ミオンは老体に鞭打って必死に駆け回り、少しでも助かりそうな見込みの兵に治療を施している。しかし彼の表情は暗く曇っていきばかりだった。簡単に言えば、さっきまで怪我人だった兵が次々と死んでいくからだ。

「おい、シャグランと言ったな」

老医師は私を呼びつけた。「こいつの身体をしつかり押さえておけ」とベッドの上に寝ている一人の怪我人を指差した。

「は、はい」

この兵も痛みと死の恐怖に震えていた。

何とか助けてくれと、すがりつく様な眼差しで私たちを見ている。しかし私はその助けに応えられるかどうか分からないから、彼から目を逸らさざるを得なかった。

「おい、シャグラン、これを見る」

老医師はこの怪我人の血だらけの足を指差した。「このままでは右足が腐って蛆が湧く。命を助けるためには切断せざるを得ない」

「切断だつて？」

私は当惑しながら尋ねた。

当の怪我人もその言葉が聞こえてようだ。切断という言葉聞いて、どこからそんな力が出るのか、ベッドを飛び出そうとした。

私は慌てて彼を抑えつけた。

「大丈夫だ、既にこれだけの怪我だ。神経も麻痺している。今更、足を切断するくらい痛くもないだろ」

老医師はそう言ってその患者の口をこじ開け、ガブガブとワインを飲ませ始めた。

「更にお前は酔っぱらいだ。もう何も恐くないぞ」

「い、嫌だ！ もうこれ以上痛い思いをするのは・・・」

その兵は哀願するように言ってきた。

「死にたくなければ我慢するしかない。いくぞ！」

ミオン医師の持った鋸は既に彼の足を切り裂こうとしていた。

やはりウイスキーぐらいでは痛み止めにはならなかったようだ。
鋸が刺さった瞬間に患者は悲鳴を上げた。

私は何とか押さえつけようとするが、元々身体の大きい兵士である。

いくら大怪我をしても力は私よりも強かった。更に手負いの獣のように死に物狂いで暴れてくるから到底押さえ切れない。

「ちくしょう、だ、誰か」

私は何とか男を押さえようとしながら、手の空いている召使いか、傷の浅い兵士の姿を探した。

しかし周りにいるのは包帯だらけの怪我人が看護師の女性だけだ。私を助けてくれそうな者はいない。

「少しの我慢だ、それであんたは助かるんだ！」

私は男にそう言い聞かせようとするが、男の力は強まるばかり。逆に私がベッドに捻じ伏せられそうな勢いであった。

しかしそこにフローリアが来た。

「大丈夫よ！」

彼女はそう言ってその兵士を抱きしめた。

それでも男は暴れ続けた。振り回した手がフローリアの顔に当たり、髪の毛が乱れる。

しかし彼女は臆せず、その男を抱きしめ続けた。すると男はよう

やく自分の前にいるのが女性だということに気づいたのか、乱暴に暴れるのをやめた。

「フ、フローリア・・・」

私は彼女の振る舞いに戸惑わざるを得なかった。しかし一步身体を退いて、そこは彼女に任せることにした。

「大丈夫よ、少しの我慢じゃない」

フローリアはまるで聞き分けのない幼い子供に言い聞かせるように、背中や頭を撫でながら兵士にそう囁いた。「あなたは勇気があるわ」

「い、いや、無理だ！ もう死んでもいい、早く楽になりたいんだ！」

「駄目、あなたは生きるのよ。あなたの代わりに大勢の味方が亡くなったのに」

「知ってるよ、それくらい、でもそんなの俺が悪いわけじゃない！」

兵は泣きながら言った。「バルザ様が俺たちを見捨てからだ、どうしてバルザ様は俺を見捨てたんだ？・・・」

そうだ、兵士たちの絶望には、ただ戦いに負けた絶望だけでなく、バルザ殿に見捨てられたという絶望もあるのだ。

彼らはその事実戸惑い、やり切れなさを覚えている。

「誰もあなたを見捨てはしないわ、バルザ様だつてきつとそうよ」

しかしそんな男を叱りつけるようにフローリアが言った。「バルザ様がそのような人じゃないことはあなたが一番よくわかっているんじゃないの？　きつと何か事情があるのよ」

フローリアはバルザ殿のことをほとんど知らないはずだ。これまで接点などなかったのは間違いない。

しかしこの男の絶望の源を察知したのか、彼を励ますようにそう言った。

「・・・そ、そうだ、た、確かにあのバルザ様に限って俺たちを見捨てるなんて」

「あなたが死にたいなんて言つて泣くと、バルザ様はがっかりされるわ」

「ああ、バルザ様、帰ってきてくれ・・・、それで俺たちの仇を討つて下さい」

「バルザ様はきつと帰つて来るわ、それまで生きてないと！　みんな、あなたに生きて欲しいの」

「で、でも・・・」

その兵は私たちを見回してきた。私も老医師もフローリアの言葉に同意するように頷いた。

「・・・ずっと手を握っていてくれよ」

男は覚悟を決めたようにそう言って、フローリアの手を握った。

「もちろんよ」

フローリアはそう言って、彼の手をもう片方の手でも包み込んだ。

「おお、とても柔らかい手だ・・・」

男はその感触を味わうように目をつむった。

彼はその感触が気持ちいいのか、幸せそうにニヤニヤと微笑み出した。

男はふと目を開けて、彼女に言った。「あんた、フローリアだろ？」

「そう、フローリア」

フローリアは老医師に合図を送った。老医師は鋸の歯を男の足に入れた。男は痛みに叫んだが、もう暴れなかった。

気がつけばあの女性の泣き声も止んで、塔は不思議な静寂に満たされていた。

第八章 6) 女神に勘違いされた少女

「フローリア、俺の手も握ってくれ！」

「フローリア、俺も優しく慰めてくれ・・・」

「フローリア、あんたはまるで俺の故郷の母みたいに優しいな・・・」

怪我人たちは皆、フローリアを求めた。死んでいく者も、さっきの男のように痛みに耐えなければいけない者も。

しかしフローリアのお陰で、さっきまで苦しみと怒りと呪詛だけが聞こえなかったこの場所が、安らぎと優しさと、甘い思い出に満ちた場所に変貌したのだ。

私はフローリアの不思議な力に気づかざるを得なかった。

フローリアはただ美しいだけじゃない。

いや、そんなのはただ彼女の表面的な特性の一つに過ぎないのだ。兵士たちは死の床で、美しいだけの女性に優しさを求めているわけではなさそうだ。

彼女には人の心を根底から安らかにする何かがある。

それは超自然的な域に達する何か。例えばとてつもなく透き通った泉に感じる清らかさとか、聖地に聳え立つ大樹を見て覚える敬虔さとか。そういうものの前に行くと誰もが自然に感じるあの安らぎに近いもの・・・。

いや、確かに私はずっと前からフロリアの美しさに魅せられている。

そのせいであまりに過大な評価を下しているのかもしれない。

しかし以前の、グロテスクに改造された人たちへの対応、そして今現在、死の淵にいる兵士たちの様子を見ていたら、そのようにしか考えられないのだ。

「はあーは」

アビュがため息をつきながら私の横に座ってきた。「凄いわ、フロリアさん。もう対抗するの、やめる」

「対抗って何さ？」

私は笑いながらそう答えた。

「だって私とは別種の人間みたい。何て言うか器の大きさが違うわ、あんな真似、私に出来っこないもん」

「君もこの大変な中よくやったよ」

戦いが終わってから日が暮れ、もうそろそろ新しい太陽が昇ろうとしている。私たちは一睡もせず、夜を徹して怪我人たちの看病をしてきた。

その中で安静に眠り始めた者もいれば、静かに命が尽きていった者もいた。

そんな中、アビュは気丈に振る舞っているのは間違いない。昨日

まで軽口を交わしていた相手が苦しみながら死んでいくのに立ち会っているのに、彼女は逃げ出さずにいるのだ。それだけでも凄いものだ。

「そう言ってもらえると嬉しいわ。でもフローリアさんと比べると話しにならない。誰も私のこと見てないもん。みんな、フローリア、フローリアって・・・」

確かにアビュの言う通り、この空間はフローリアの慈愛に支配されているようで、誰も介入出来る余地はなさそうだった。

アビュだけではなく、他の看護人たちも蚊帳の外に追い出されている。元々彼女に好感を持っていなかった看護人たちは、本当に苦い顔でフローリアを見ていた。

「あなたたちが来てから毎日色んなことが起きてる気がする。前まではもっと、穏やかだったのに」

アビュが疲れ果てた表情でそう言ってきた。

その声にはいくらか私を責めるようなニュアンスが込められている気がした。

「確かに僕とプラーヌスはこの塔に災厄を運んで来たのかもしれない」

私は頷きながらそう答えた。

「ううん、あなたは違うと思う。でも・・・」

災厄を運んできたのはプラーヌスだけだ。そう言いたげにアビュは黙った。

アビユの気持ちもわからないではない。

プラーヌスが最初から蛮族たちの相手をしていたら、このような悲惨な結果にはならなかっただろう。

この塔は彼の塔なのだ。彼が命を削ってでも守らなければならぬはず。

しかしプラーヌスだけを責めるのはやはり酷だ。

そもそも蛮族が襲来していたのは前の主の代からなのである。その原因を作ったのだってその男だ。

前の主が蛮族から女神像を奪わなければ、こんなにも血生臭い塔にならなかったに違いないのだ。

私はプラーヌスの名誉のために、その事情を簡単に説明しておいた。アビユは私の言葉にあまり納得したようでもなかったが、渋々頷いた。

「じゃあ女神像さえ見つければ、もうこんな戦いは終わるってこと?」

私の説明を受けて、アビユが尋ねてきた。

「ああ、そうだね」

バルザ殿がこの塔を去ってしまい、それを探するのは急務になっただろう。

プラーヌスもきつと気が変わったはずだ。このままではプラーヌス自ら蛮族を撃退しなければならなくなるのだ。

早く女神像を見つけるんだと私を急かすに違いない。

しかし今夜もこのまま一睡も出来ないとなると、夜が明けてもすぐにそれを探す気にはなれない。

しかも女神像がどこにありそうなのか、もはや見当もつかないのだ。私は既に万策尽き果てている。

「それってどんなの？ 私と一緒に探そうか？」

諦めている私を励ますようにアビュはそう言ってきた。

「ああ、有難いね、だけどよくわからないんだ。蛮族の捕虜が言うには、女神像とはこの世で最も清らかで美しいものだって話しかけど・・・」

そんな説明、あまりに漠然としている。どんな形をしているのかを教えてくれればいいのに、その捕虜も見たことがないのだろう、いくらバルザ殿が尋ねてもそんな言葉しか引き出すことが出来なかった。

大きさも、形も、材質も何もわからない。

「女神っていうからには、女の人の像なんでしょ？」

「そうだろうね」

「でもこの世で最も清らかで美しいものって」

アビュはそう言って少し口籠った。何だか自分の思いつきにまごつくように。「何て言うかまるで・・・」

私はそんなアビュの様子を見て、彼女がこの先を続ける前にハッとした。

アビュが何を言おうとしたのかピンと来たのだ。

「まるでフローリアさんみたいね」

そう、私もそれを考えていたのだ。

美しくて清らかなもの、それはまさに今夜のフローリアそのものではないか。

私はそんな思いつきの確かさを確かめるように、患者たちの面倒を看ているフローリアのほうに視線をやった。

彼女は気丈にも疲れた様子を見せず、まだ一つ一つベッドを廻り、彼らの手を優しく握ってやっている。

彼らにとってフローリアは美しくて清らかな、まさに女神に違いない。

もしかして蛮族が求めている女神とはフローリアではないのか？

私は一瞬、本気でそう思った。

しかしさすがに、そんなことがありえるわけがないだろう。

私は自分のあまりに突拍子もない思いつきに苦笑いしながら首を振った。

彼女は普通の人間ではないか。私と同じ言葉を話し、同じように食事をし、汗をかいていた。そんなフローリアが蛮族の求めている女神だなんて。

「まさかね」

アビュも自分の言葉に苦笑いしながらそう言ってきた。

「ああ、まさかね・・・」

私もそれに同意した。

フローリアが私たちの話題が彼女のことについて話していることに気づいたのか、もの問いげな表情でこちらを見てきた。

私たちはフローリアを女神のようだと噂していたなんて言うわけにもいかず、困ったように苦笑いを浮かべた。

第八章 7) 女神への嫉妬

フローリアはさつきから少しも休憩せずに、甲斐甲斐しく患者たちの面倒を看ている。

私はもう疲れの限界に来ていた。起きているのもやつのよう状態だ。フローリアだってそうだろう。

「フローリア、疲れただろ、もう眠ったほうがいい」

私はフローリアの傍まで行き、その声を掛けた。

彼女の近くにまで行って改めて彼女の体温を感じたり、汗の匂いなどを嗅いだりしたら、いかに女神なんて考えが馬鹿げた思い込みであるとわかるだろうと思ったのだ。

やはり彼女もさすがに疲れているようだった。

かすかに息使いの乱れを感じたし、顔色も青白い。

これまで最も働いてきたのは老医師とフローリアなのだ。

老医師は眠っているが、彼女は変わらず動き回っている。これで疲れるなど言うほうが無茶であろう。

だけどそのように疲れが顔に出ているフローリアを間近で見ても、間違いなく彼女が人間だという事実には私は安心した。

もし女神であつたなら、フローリアは今でも涼しい顔をしていたに違いない。でも彼女は疲労の限界に近いようである。私はその事実には安堵感を覚えたのである。

「フローリア、やはり休んだほうがいい」

私は改めて言った。

しかしフローリアは私の言葉に静かに首を振った。

「大丈夫です、少しでも役に立てるなら、この程度の疲れは」

「でも君は前にも倒れたじゃないか。まだ完全にあれが治りきっていないかもしれないのに」

それでもフローリアは首を振っている。

このように頑な女神なんていないだろう。これは自分の限界を知らない子供の行いではないか。

「い、いいよ、や、休んでくれ」

私とフローリアの遣り取りを聞いていたのだろう、フローリアに手を握られながらベッドに眠っている患者が、傷の痛みに顔を顰めながら言った。

「で、でも」

フローリアが言った。

「も、もしあんたに倒れられたら、俺たちは完全に生きる氣力を失うよ。なあ、みんな？」

その声はあまりに小さかったので、彼のすぐ下、ベッドが足りなくて床に寝かされている兵にしか聞こえなかったようだ。

しかしその兵も苦しげに同意した。「ゆっくり寝てくれ・・・、そしてまた明日、会いに来てくれればいい」

「そうさ、フローリア、もう孤独で悲しい夜は終わったよ、夜明けはすぐだ」

私がそう言ってもフローリアはまだ首を振っていた。しかし私は少し強引にフローリアを部屋に下がらせることにした。椅子の上で欠伸をしているアビュも一緒に部屋から出した。

医務室に残ったのは私と元から看護師を勤めている者だけになった。

看護師はアビュやフローリアほど職務熱心でもないから、その辺りで疲れ果てて既に眠っている。私も彼らと同じように眠ることにした。

少し強引にフローリアを部屋に下がせたのは、彼女の健康を思いやったのはもちろんだが、もしかしたら嫉妬の感情もあったかもしれない。

こんな美しいフローリアを独り占めをしている患者たちに、私は情けないことに妬いていたのだ。

もはや私はフローリアという女性の虜になっていることを認めざるを得ないだろう。

私はまだまだ彼女のことを何も知らないが、もっとも彼女のことを知りたいし、傍にいたいと思うのだ。そしたらもっと、彼女の魅力に気づくことであろう。

そんなだからもしフローリアが女神だったりなんかしたら、私のジェラシーは果てしないものになるに違いない。

だってそうだと、フローリアを蛮族たちに返さなければいけない

いということになるのだから。そんなことに私は耐えられそうにない。

まあ、しかしそういうことはあり得ないことだろう。

フローリアが女神なんて考えが改めて馬鹿馬鹿しく思われた。

だいたい私には女神というものがどんなものか見当もついてない。ただ「美しくて清らか」というフレーズに引っ掛かっただけに過ぎない。その思いつきにはとんでもない飛躍があるであろう。

疲れていた私はすぐに眠りに落ちた。

朝が来て、老医師や看護師たちが働き始めても、しばらく眠り続けていたようだ。私が起きたのは、塔の門番から来訪者が来たという報せを受けたときだ。

門番は床の上でだらしく眠っている私を起こして言うてきた。バルの国からバルザ様の腹心であったと名乗る五人の騎士がやってきたと。

第八章 8) 五人の騎士

私は寝起きのまま、顔も洗わずに、急いで塔の入り口に走った。

パルの国からバルザ殿を尋ねてやってきた騎士だつて？

私はこの言葉の響きに、直感的に不吉さを感じた。

まずプラーヌスにそのことを報せたほうがいいのではないかと思つたが、まだ彼を起こすには早過ぎる。

「これくらいの事情で僕の生活サイクルを乱すなよ、シャグラン」
と叱られるかもしれない。

何か嫌な予感を覚えながらも、とはいえ私はこの事態がどれくらいの緊急性を要しているのか計りかねたのだ。

いずれにしろ客を待たすわけにもいかないだろう。

まず彼らを迎えに塔を駆け下りた。

門番の言う通り、五人の騎士が塔の外に直立不動で立っていた。

誰もが身分の高そうな騎士であつた。

バルザ殿も装着していたような白銀の鎧を彼らもまとっている。
しかしその鎧は傷つき汚れていた。今まさに戦場から落ち延びてきたといった格好。その顔も、何日も満足に食事をしていないのか、やつれ果てている。

私が彼らに近づいていくと、その騎士たちの中でおそらく最も年嵩の者が一礼してから言ってきた。

「私たちはバルザ様の腹心であつた。ある旅芸人の者に聞いたの

だが、ここでバルザ様が働いておられると。その真偽は如何に？」

「バルザ殿ですか・・・」

私のこの事実を正直に認めていいものか迷った。

プラーヌスにはつきり聞いたわけではないが、どう考えてもバルザ殿がこの塔の門番であったことは秘密である。

それどころかそこに何か後ろ暗い事情があるのは間違いないのだ。

しかし騎士たちの血走った眼差しと、有無を言わさぬ迫力に負けて、私は嘘を言う気になれなかった。

「確かにバルザ殿はこの塔にいました。しかしちょうど昨日、この塔を去りました」

私は出来るだけ彼らを刺激しないように、さらりとそう言った。

「何だつて？」

しかし騎士たちの反応は凄まじきものがあつた。

「やはりこの塔にいたのか？」

と、一人の騎士が声を張り上げてきた。

「どうしてバルザ様がこんな片田舎の塔におられたのだ！ いや、それよりバルザ様はどこに行かれた？」

また別の騎士が私に詰め寄ってくる。

「答え次第ではその細い首を叩き斬るぞ！」

更に剣の手をかける者までいる始末。

「いや、・・・、その辺りの事情は私もよくわかりません、詳しいことはこの塔の主、プラーヌスに聞いて頂かないと・・・」

「ではその主とやらに会わせて頂きましょう」

他の四人に比べると少しは落ち着いていた年嵩の騎士がそう言った。

「わ、わかりました。しかしまだ彼は眠っている時間です。しばらくお待ち頂かないと・・・」

「何だと！ 眠っているだと！」

また私の言葉が騎士たちを激怒させたようだ。

「もう太陽は昇って数刻経っておる。一体いつまでその主は惰眠を貪っているつもりなのだ！」

「その主、己はベッドでぬくぬくと眠り、我々騎士を野晒しで待たすつもりなのか？」

「いったい、ここまで我々はどれくらい苦勞してやってきたと思っておるのだ！」

「もうすぐ我々の兵、百数十がここに辿り着く。こんな塔、一瞬にして打ち崩せるだけの軍であるぞ！」

「わ、わかりました、では塔の主を叩き起こしてまいります」

もう自分の力だけでは彼らの相手は出来そうになかった。彼らは最初から敵意を持ってこの塔にやってきたようなのだ。もはやブラーヌに任せるしかない。

「しかしなにぶん、急な来客でございます。しばしお待ち下さい。その間、こんな片田舎ではろくな歓待も出来ませんが、少しの食事と飲み物を用意させます。それを召し上がっていて下さい」

食事と聞いて彼らの表情はいくらか緩んだ。やはり飲まず喰わずで、ここまでやってきたようだ。

「わかった、その言葉に甘えさせていただく。その間だけ少しだけ待つことにしよう。しかしどのような事情であろうと客を待たせるなど礼を失していることだけは伝えたい」

年嵩の騎士が言った。

「わかりました。では塔の中にご案内いたします」

第八章 9) 寝起きのプラーヌス

出来るだけ多くの食事を騎士たちに用意して、時間稼ぎをしていた。その間、私はプラーヌスを起こしに行った。

プラーヌスの寝室がある西の回廊の入り口の前で、私は緊急を知らせるベルを鳴らす。

それは私の耳には小鳥が鳴く程度のボリュームしか聞こえないが、何かの魔法が施されていて、遠く廊下を隔ててプラーヌスの耳にまで届く仕組みになっているよう。

しばらくすると不機嫌な顔をしてプラーヌスが現れた

「何事だ、シャグラン、まだ僕にとっては真夜中のような時間だぞ。こんなに早く起こすからにはよっぽどの事情が起きたのであるうな」

「すまない、プラーヌス、でもかなりの緊急を要するはずだよ。バルザ殿を尋ねて、パルから五人の騎士がやってきたんだよ」

プラーヌスの表情が少し曇った。しかし彼はこう言った。「なるほど、それは確かに緊急を要する問題かもしれないな。しかし僕を叩き起こす必要はない。適当に君があしらえば良いようなことだ」

「彼らは百数十の兵を率いてきたらしい。事の次第ではこの塔をその兵で襲撃すると」

「・・・ほう、なかなか面白いことを言う連中だな」

プラーヌスが不敵な笑みを浮かべた。

「既にこちらに対して、かなりの敵意を抱いていると言っていると思う」

「わかった、会うことにしよう。謁見の間に案内するのだ。騎士が五人と言ったな？」

「ああ、五人だ。誰も彼も身分が高そうで、腕に覚えがあるといった雰囲気だった」

「ちょうど良い。だったら彼らを新しい門番にしてやろうではないか」

「何だつて？」

「何という愚かな者たちだ。自ら僕の塔に仕官しに来るとは」

プラーヌスはそう言って自室に引き下がって言った。

私はまた波乱の予感を覚えながら、応接の間にいる騎士たちのもとに向かった。

彼らは既に用意した食事を全て平らげ、私が来るのを今か今かと待ちかねていたようだ。

どうやらこの程度の歓迎では彼らの心を宿めることは出来なかったらしい。部屋に入った私に、騎士たちは怒鳴るように言ってきた。

「さつさと主のもとに案内するのだ！」

「これ以上待たせると、その男の寝室に怒鳴りこむぞ！」

「すぐにご案内いたします。謁見の間で、塔の主がお迎えいたします」

第八章 10) 邪悪な嘘

私が謁見の間に五人の騎士たちを連れていくと、プラーヌスは魔法使いの黒いローブに身をつつみ、既に玉座に座っていた。

手には愛用のロッドを持ち、その眼差しは先程のような寝惚けた気配は微塵もない。まるで戦場にいるかのように鋭く瞬いている。

「遠路はるばる、我が塔にようこそお越しいただいた。この者に
ご無礼があつたのなら、この私が代わりにお詫びしましょう」

プラーヌスは椅子に座ったまま、少し居丈高にそう言い放った。
お詫びいたしましたと言うっているが、しかし少しもこれは詫びる態度ではない。どちらの対場が上なのか、はつきりと申し渡すという態度。

お前たちなど僕の敵ではない、跪けとプラーヌスは告げているよ
うなのだ。

ただでさえ気が短そつな騎士たちを怒らせるなんて。

私は頭を抱えたい気持ちになつたが、騎士たちは戦士ならではの勘で何かを察知したようだった。

彼らはお互い顔を見合わせ、用心深そつに少し距離を取って立ち止まった。

「ほう、思つたよりも若い主殿ですな」

最も年嵩の騎士が口を開いた。「魔法使いの塔の主というから、棺桶に片足を突っ込んだような御老人が我々を迎えるのかと」

「残念でしたね、その予想が外れて。むしろ墓場よりも、揺り籠

との距離のほうが近いかもしれません。ところで御用は？」

「我々はバルザ様を迎えに参った。彼が言うところによると昨日まで、バルザ様が滞在されていたと聞いたが如何に？」

「バルザ殿ですか、確かに彼がご滞在されたことは事実。しかし今はおられない」

「バルザ様がどこに向かわれたか、御存じでは？」

「いや、バルザ殿にもプライバシーがある。そういうことを軽々しく話すわけにはいかないでしょう」

プラーヌスは騎士たちの良識を疑うように眉をひそめ、そう言った。

「な、何だと！ 我々はバルザ様の腹心であるぞ！」

プラーヌスのその言葉を受け、さっきまで話していた年嵩の騎士だけでなく、後ろに控えていた騎士たちも声を荒げ話し始めた。

「それに関しては何も問題はないはず！」

「きつとバルザ様も我々との再会を望んでいる！」

「・・・しかしその証拠をお見せ頂けなければ、何ともね」

それでもプラーヌスは、検討にも値しないと言うように首を横に振る。

「な、何だと！」

プラーヌスのその無礼な言葉に、当然、騎士たちは激昂した。

「我々、騎士の言葉を信じないというのか」

「そなたにはこの紋章が見えないのか！」

「これはパルの騎士団であることを示す正式な紋章であるぞ！」

興奮する仲間たちを抑えるよう、年嵩の騎士は一步前に踏み出しながら口を開いた。

「我が祖国、パルは今や風前の灯火。不甲斐ないことであるが、我々にはバルザ様が必要なのだ！」

彼は悔しそうに、ほとんど泣き叫ぶようにそう言った。

「ほう、風前の灯火とは？」

一方、プラーヌスは嫌みなくらい落ち着いて返す。

「い、戦は連敗が続き、都は敵に囲まれている。我々の率いていた兵も、残りはこの塔の外にいる百数人余りだけ。何とか残兵をまとめてここまで来たのは、ある旅芸人の定かならぬ話を聞いて」

「聞くところによるとバルザ殿は祖国を裏切り、愛人と共に隣国に走られたそうだが？」

プラーヌスは彼の言葉を遮ってそう言った。

「我々はそんな噂を信じない！」

「確かにそのような噂はあるが、バルザ様に限って考えられぬことだ！」

再び後ろの騎士たちが声を荒げ、口々に反論してきた。プラーヌに指を突きつけ、そんな噂を信じるといふのなら、すぐに剣で叩き斬るぞといった勢い。

「ほう、そうでしたか、噂とは恐ろしいものですな」

プラーヌは彼らの怒りに、肩をすくめる。

「バルザ様の屋敷に勤める召使いたちははつきりと言っている。バルザ様は怪しい影にさらわれた奥様を助けるために出て行かれたと」

「それを信じなかった宮殿の愚か者たちのせいで戦は敗れたのだ！」

「その通り！　バルザ様を弾劾したせいで、逆に兵の士気は落ちたのだから」

「バルザ様がパルを見捨てられるわけがない！」

騎士たちはまるで舞台の上の役者のように声を張り上げ、順々にそう言った。

彼らがバルザ様と言うとき、その声の中には大変な敬意と愛が込

められているのがよくわかった。

そのときだけ彼らの声が、女性が愛する男のことを語るときのように、優しく潤むのだ。

はつきり言つて彼らの居丈高な態度には不快感しか覚えなかった。腰にぶら下げた剣をチラつかせたその振る舞い。それによって、何が何でも自分の意志を押し通そうとする態度。

しかも彼らは明らかに私たちを敵視している。そんな相手に敬意を抱けと言われても無理な話だ。

しかしバルザ殿を敬う気持ちは私も彼らも同じであろう。いや、私なんかよりもこの騎士たちのほうがはるか上。それだけは確かだ。

「あなた方は大変にバルザ殿を愛されているようですね」

プラーヌスも私と同じようなことを感じたのであろう、そう言った。「わかりました。ならば私も話しましょう。しかしそんな貴方達に真実を告げるのは心苦しい」

「真実だって？」

騎士がプラーヌスに驚きの視線を向ける。

「バルザ殿はいかにもここにおられた。こういう事情が僕の知るところではないが、旅の途上、この塔に立ち寄られ、そのまま働いておられた」

私はプラーヌスの嘘に驚いたが、それを顔に出さないよう注意した。何やらプラーヌスは企んでいるようなのだ。

更にプラーヌスは、とても厳肅な表情を浮かべながらこう言った。
「しかしとても悲しいことが起きた。あなた方に告げるのは心苦しいことであるが、彼は残念ながら戦いで命を落とされたのだ」

「何だつて！」

私も彼らと共に思わずそう叫んだ。「本当なのか、プラーヌス？」

「我らのバルザ様が？」

「そんなことありえない」

「嘘だと言え！」

しかし騎士たちの驚きは私と比べ物にならなかった。
彼らは一様に愕然とした表情を浮かべ、お互いの顔を見合わせたかと思うと、子供のように大声で嘆き始めた。

まるで世界の崩壊が迫っているのを、神から確かな情報として聞かされたともいうような絶望。悲惨な運命を罵りながら天を振り仰ぎ、目が血走っている。

しばらくそのような状態が続いたが、やがて彼らは泣きやんで、口々に言い始めた。

「いったい何者に？」

「我らのバルザ様は殺されたというのだ？」

「これは許されることではない！」

「復讐あるのみ！」

まるで騎士たちはバルザ殿を殺したのはプラーヌスだとも言うように、怒りと殺気の溢れた視線を彼に向けた。

私はそんな騎士たちを見て、自分の背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

もし彼らが剣を抜いて襲いかかってきたら、プラーヌスは一人でこの五人を相手出来るだろうか？

万が一にもそのようなことは起きないだろうが、彼らの怒りがどのような方向に飛び火するか想像がつきにくいのだ。

それくらいバルザ殿の死は衝撃的事実。

しかしそれにしてもバルザ殿が亡くなっていたなんて・・・。

そのとき塔の鐘が鳴り響き出した。

「蛮族が襲来した。バルザ殿は奴らに殺されたのだ・・・」

プラーヌスは彼らの悲しみと怒りを真似たような、非常にドラマティックな表情でそう言った。

それを聞いた騎士たちは、一瞬の間、不気味に黙り込んだ。その後、泣き叫ぶようにこう言った。

「蛮族だと！」

「そんなもの、我々の手でこの地上から根絶やしにしてやろう！」

騎士たちは復讐へとまっしぐらに向かわんと、足音を高らかにならし謁見の間から出ていく。

しかし私はその言葉を聞いて、ようやくプライヌスが嘘についていることに気づいた。

第八章 11) 高みの見物

「どうだい、僕のアイデアは？ 彼らは蛮族に復讐するために、片端から奴らを殺していくだろう。まさに一つの投石で二羽の鳥を得るがごとき策」

中央の塔の見張り台で蛮族と騎士たちの戦いの様子を見下ろしながら、プラーヌスは言ってきた。

「是非とも彼らにはこのまま塔の門番になってもらうことにしよう」

「何というやり方だよ、プラーヌス！」

私は呆れるように首を振りながら言った。

「上手いやり方だと褒めてくれよ、シャグラン」

「これが上手いやり方だって？」

「僕にとって大切なのは、誰にも邪魔されない静かな生活だ。そのためになら何でもする。純粋なものを騙そうが、大切なものを人質に取るうが関係ない。もしそれが悪だというなら僕は悪だろうね」

いや、悪なんてものじゃない。邪悪そのものだ。

私はそう言おうと思ったが口を閉ざした。こんなことを言ってもプラーヌスの心には少しも響きはしないだろう。

「どうせ君は蛮族たちが求める女神像を見つけれないのだろ？」

逆にプラーヌスが私を嘲るように言ってきた。

「そ、そうだけど・・・」

「あれが見つかれば奴らも必要なくなる。だったら喜んで解放してやるさ」

そうだ、女神像、あれを見つけて、もうこの無益な戦いに蹴りをつけよう。そうすればプラーヌスもこれ以上、悪に手を染めずにいられるだろう。

本当にプラーヌスのやり方は卑劣極まりなかった。

いや、蛮族を撃退することにだけ焦点を置けば、これほど効率的なことはないのかもしれない。

しかしそれはあまりにも冷酷で非情・・・。

そのときふと私の心に、鳥の黒い影がさつと横切るように、心を過ったものがあつた。

「な、なあ、プラーヌス」

「うん？ 何だ、シャグラン」

「もしかしてバルザ殿がこの塔を出ていったって言うのも嘘なんじゃないのか？」

そんな考えが私の心に過つたのだ。

「うん？ どうしてそう思うんだ？」

「実は騎士たちに言った通り、彼は死んだんじゃ……」

そして彼を殺したのは君じゃないのか？

私は少しかすれた声でつぶやいた。

「もしそうだったらどうする、シャグラン？」

プラーヌスは私をまっすぐに見つめながらそう言ってきた。

「もしそうだったら……」

君を許すことが出来るかどうか分からないよ。

私とプラーヌスはしばらく見つめ合った。

息が詰まるような瞬間だった。なぜだかプラーヌスがとてつもなく悲しい表情を浮かべたからだ。

「馬鹿らしい、そんなわけじゃないか、シャグラン。彼は僕に愛想を尽かして出ていったのさ」

しかしプラーヌスはいつもの皮肉な笑みを浮かべ、私から目を逸らした。「そんなことよりも見る、シャグラン、戦争とはこういうものか。訓練された兵と烏合の衆では動きが全く違うものだな。僕は自分の軍隊が欲しい」

騎士たち率いる兵の前に、蛮族たちは簡単に蹴散らせていく。

蛮族たちは算を乱して逃げ始めたが、騎士たちはそれを許さず蛮族たちを次々と血祭りに上げていった。

その戦い振りはバルザ殿抜きの前兵とまるで違う。まさに恐るべき殺人機械となつて、少しの隙も見せずに蛮族たちを殺していく。

「あまりにも一方的過ぎるな。出来れば僕が蛮族に味方したくなるぐらいだ」

プラーヌスは笑いながら言った。しかし私はその言葉に愛想笑いを返す気にもなれなかった。

第八章 12) 女神像のありか

とにかく女神像だ。

あれを探そう。

もう戦いはうんざりなのである。

女神像を見つけてこの戦闘に終止符を打ってやる。

私はプラーヌスと別れ、回廊を走った。

しかしどこに向かって走っているのだろうか？

目的地は決まっていなかった。ただ逸る気持ちに従って駆けていくだけ。

私は我に返るように、廊下の真ん中で立ち止まった。

それなりに歩き慣れた塔の廊下がまるで迷路のように思える。もう少し考えをまとめてから行動しなければいけなかったようだ。これでは時間も何もかも無駄。

そのとき私はハッとして耳を澄ました。

あの女性の泣き声が聞こえてきたからだ。

己の悲しみを訴えかけて来るように、あるいは同情を求めてくるように、私の耳に迫ってくるこの泣き声。

「おい！ 君はどこにいるんだ？」

私は思わず、声の限りそう叫んでいた。「どこでこの悲惨な世界

を嘆いているんだよ？ 教えてくれ！ ここにいますってくれ。すぐそこに行つて君を慰めてやるから！」

もう何度も繰り返してやってきたことだが、壁に耳をつけて、その声がどこから聞こえてくるのか耳を澄ました。

しかしもちろん壁の向こうから聞こえてくるわけでもない。それに当然、声の主は返事などもしなかった。

「いったいどうすればいいんだよ・・・」

プラーヌスが言った通り、私は本当に何も解決出来ていない。問題は何一つ解決せず、ただ積み重なっていくだけ。

だけど普通に考えてみれば、そんな訳のわからないものがこの私に解決出来るわけがないではないか。

女神だとか、どこから聞こえてくるのかわからない女性の泣き声だとか、そのような現実の範疇を越えたようなものを・・・。

「もうお手上げだ」

私は口に出してそう言った。

全てを放り投げて、さつさと郷里に帰りたい。

仕事はそれほど多くなかったけれど、肖像画家の仕事は遣り甲斐があつて楽しかった。

あの生活こそが本当の私の人生。私の人生の生きる意味そのもの。

・・・しかし女神像を見つけられるかどうかで、何百もの人の命が左右されるのだ。

それもわかっていた。

その使命はとても重要なで、簡単に諦めてはいけないうてことも。しかしどうすればいいのか、まるで見当がつかないのだ。

どうしよう、どうしよう。

私はそうつぶやきながら再び廊下を進んだ。

とりあえずこの泣き声は後回しでいい。とにかく女神像を見つけなければいけないのだ。それがまず目下の目的。そのことだけに全力を注ごう。だけど蛮族の探している女神、そしてどこから聞こえてくるかわからない女性の泣き声・・・、何だかその二つは似てないか？

私はふとそう思った。

もしかしたらこの泣き声は、蛮族の求めている女神の泣いている声ではないのかって。

・・・そ、そうだ。

もしかしたら、ただそれは探し求めている物を単純につなげただけの思いつきかもしれない。窮した者がやる、愚かな早合点のようなものと笑われるかもしれない。

いや、だけどそれにしても妙にしっくりと来る気がするのだ。

この声はあの女神が泣いている声！

だったらこの女神の在り処さえわかれば、全ては解決することになるんじゃないか？

少し興奮しながら私はそう思った。

しかしたとえそうでも、女神像がどこにあるのか見当がつかない
事実には変わりはないし、そして同時にこの泣き声がどこから聞こえ
てくるかもわかりはしないのだ。

別に困難な謎が解けた訳でも少しもない。

一瞬、盛り上がった気持ちがすぐに萎えてきた。けどもとにかく
私は前に向かって歩いた。

私は行く当てもなく歩いているようで、その実、医務室を目指し
ていることに気づいた。

そこにフローリアがいる。無性に彼女に会いたい気分なのだ。何
だかプラーヌスの邪悪さに汚れきった私の心を、彼女の清らかさで
洗い流したい、そんなことを痛切に思っていた。

やはりフローリアは女神なんじゃないのか？

何だかまた、その馬鹿げた考えに私は囚われ始める。

フローリアは前の塔の主に騙され、地下の牢獄に閉じ込められて
いた。

それどころか愛する父と母は人体実験の餌食になり、彼女自身も
その毒牙にかかる寸前であった。

しかしそれなのに彼女は、まるでそんな境遇に汚されていないか
のよう。

少なくとも、怒りとか恨みとかいう黒い感情に曇らされていない。
未だに清らかで美しいまま。

そんな人間が存在するものなのか。それこそ彼女が女神であることを証明しているのではないか。

そうだ、それにあの夢・・・。

私は更に思い出したことがあった。以前、不思議な夢を見たではないか。

その夢の中でこの泣き声の女性が出てきて私はその者と会話した。その女性はここから解放しろと言ってきたんだっけ。さもないと報復すると。

何だかそれは蛮族の言い分に似てはいないか。だったら夢のあの女性は蛮族の探している女神の化身だということではないのか。

そしてその女性はどこことなくフローリアに似ている気がしたのだ・・・。

思い出した。どうしてこんなことを今まで無視してきたのだろうか？

しかし夢の記憶なんかあやふやだから、フローリアに似ていると感じても確かではない。

しかもそんなもの所詮、夢に過ぎないのだ。全て私のそのときの気分が見せた幻だったのかもしれないではないか。

やはりどう考えてもフローリアが女神の化身だなんて馬鹿みたいな考えだ。

しかしもしフローリアとその女神が少しでも関係があるのだとしたら、もしかしたら女神像のありかがわかったかもしれない。

私は何か重苦しいものを取り払われたような気分でそう思った。

少なくともその思いつきを確かめる価値はあるはずだ。

第八章 13) フローリアに似た微笑み

私は戦場を走る伝令兵のような勢いで廊下を駆け、階段を下りていった。

気が急いて仕方がない。

少しでも早く、前の主が実験を行っていたあの地下の部屋へと向かう。

とはいえ、またしてもあの陰鬱極まりない部屋に行かなければいけないのかと思うと、気分が進まないことは確かだった。

しかしそんなことを言っていられる状況ではない。そんな弱気な自分を振り払うかのように全速力で階段を駆け降りた。

道に迷うことなく、すぐに地下の実験室に到着した。

地下の部屋に通じる扉を開け、私は恐る恐る中に入った。

ランタンの光で真っ暗な地下室を照らしながら辺りを見回す。

一瞬、ここがあの地下の部屋だったのかと疑いたくなるくらい、きれいに片付けられていた。と言ってもこの部屋を片付けるように召使いに命じたのは私だけだ。

以前、部屋に散乱していた斧や鋸などの手術道具、あるいは手足や内臓の切れ端などが入った瓶などは、全てなくなっている。

そこで恐るべき実験が日夜行われていたという名残など、まるで見当たらなかった。

しかし過去のそんな事情を知らない人間でも、この部屋の闇が不穏な空気を発していることは察知出来るであろう。

壁や天井などにこびりついた腐臭は消えず、そのまま残り続けている。

それと同じように、恐怖や苦悶などの感情もこびりついて残っている気がする。そしてそれがまだ何かを訴え続けている。

こんなところ、二度と足を踏み入りたい場所ではない。

私は吐き気を抑えながら、しかし地下の部屋の中を隅々探りながら歩き回った。

もしフローリアが女神なのだとすれば、その像は最初にフローリアと出会ったところにあるのではないのか。

そう考えてこの地下室まで来たのだ。

しかしフローリアが蛮族の女神だなんて、何という馬鹿げた思いつきであろうか。今でもそんなことを思いついてしまった自分を笑いたい気がする。

フローリアは血の通った女性だ。その温もりを私はよく知っているではないか。そんな彼女を女神だなんて馬鹿らしいにも程がある。

だけど同時に、その思いつきが決して的外れではないという気もしているのだ……。

そのときランタンの明かりが、何かに反射してきらめいた。

私はドキリとして手を止めた。しかし反射したのは一瞬で、そのきらめいた何かはすぐに闇の中にまぎれて消えてしまった。

私は反射した辺りを、注意深くもう一度ランタンで照らしてみた。

しばらく探した挙句、やがて光は部屋の中に立てかけられている、手の平二つ分くらいの大きさの女性の像を、その輪郭の中に再び捉えた。

これではないのか？

私は信じられない思いでそれをしばらく見つめた。

その女性の像は厳めしい表情で、両手にそれぞれ剣を持っている。いや、その表情は怒りに満ちているようにも見えるし、まるで泣いているようにも見えるかもしれない。

何だか夢で見た女性に似ている気がする。

最初は泣いていたが、私が話しかけると、怒りに満ちた表情でこの塔から解放しろと迫ってきた、あの夢の中の女性と瓜二つの気がするのだ。

しかしフローリアにはまるで似ていないようだ。

やはりフローリアが女神だなんて勘違いだったのか。それを見てそう思った。

とはいえ探し物が本当にそこにあつたことは確かなのだ。その事実には驚愕せざるをえない。

私は呆然として、しばらくそれを眺めていた。

いくらかその驚きもやわらぎ、やがて屈んでその女性の像を手に取りうとした。そのときその隣に似たような形をしている像がもう一体あることに気づいた。

厳めしい表情で剣を構えている女性の像、その像だけでなく、もう一つ、同じような女性の像があったのだ。

しかしその女性の像は剣を持っていなくて、その代わり何かを迎え入れようとしているかのように両手を広げて微笑んでいた。

私はその女神像の微笑みが、どこことなくフローリアに似ている気がした。

第八章 14) 牢獄の捕虜

以前にも蛮族の通訳を務めた飼葉係りを連れて、私は北の塔にある地下の牢獄に向かった。

前にバルザ殿が尋問した、蛮族の捕虜が捕えられている牢獄である。

私は優しく微笑んでいる、よりフローリアに似ている気がする像のほうは懷に潜ませ、厳めしい表情で剣を構えている女性の像だけを、蛮族に格子越しに手渡した。

捕虜の蛮族はそれを見て驚いたような顔を見せたが、しかし残念そうな表情で首を振りながら何か言い始めた。

「何と言ったんだ？」

私は通訳をすぐに見る。

「これは嘆きの女神の像。こんなものがあるから我々は戦いを止めることが出来ないんだ、とのことですよ」

「嘆きの女神だつて？」

「はい、確かにこれも彼らの神だそうです、しかしこれは妹のほうだと。我々が欲しいのはこれではなくて、愛と慈しみをくれる調和の女神、だそうです」

蛮族の捕虜は、通訳が私に向かって訳し終えるのを確かめるや否や、突然、手に持っていた女神像を牢獄の壁に叩きつけた。

それは凄まじい音をたてて、幾千もの欠片に割れて飛び散った。

後ろで控えていた牢番たちが、槍を構えて慌てて一歩前へ踏み出す。

私はそんな牢番を手で制しながら言った。

「僕の夢にある女性が出てきた。最初は泣いていたが、顔を上げて恐ろしい顔でにらんできた。そしてこの塔から解放しろと、怒りに満ちた声で叫んできた……。夢の中だけじゃない、この塔で普通に暮らしてどこからともなく泣き声が聞こえたことも度々あった。全てはその嘆きの女神の仕業なのか？」

通訳が訳し始めた言葉を捕虜は幾度も頷きながら聞いていた。そして言った。

「その通りだそうです。嘆きの女神は我々を争いへとたきつける不吉な女神とのこと」

「彼女は何を嘆いていたんだ？」

「この世の悲惨の全て。嘆きを恨みに変える女神だそうです」

「この女神を壊したのだから、君たちはもう塔の襲撃をやめるのか？」

私は期待を込めてそう尋ねた。しかし蛮族が悲しそうに首を振ったのを見て、通訳が訳し終える前にその答えはわかった。

「無理だそうです。嘆きの女神は確かに我々に争いを焚きつけてくるが、それはそれ。それに関係なく、調和の女神を取り戻すこと

こそ我々の宿願だと」

「そうか・・・」

私は残念そうにつぶやいた。

「だけでも感動しています。あなたは初めて我々の言葉に耳を傾けてくれた人だと」

飼葉係りの通訳がそう言ってきた。

「何だって？」

私は自分の耳を失った。

彼は感動しているだって？

私は愕然とした表情を浮かべながら捕虜を見た。

実は私がもう一体を見つけながらも隠しているというのに？ 思わず私は捕虜の蛮族にそう言いたくなかった。

調和の女神を渡すとフローリアを失うかもしれないから、私は彼らに返すことを躊躇しているというのに、それなのに感動出来るのか？

私のこの判断のせいで、蛮族の死はまだまだ増え続けるかも知れないのに、そんなことが言えるのか？

しかし何も知らない捕虜は、キラキラした眼差しで見返してくる。その純朴な瞳に見つめられるのが耐えられなくなって、私はすぐ

に目を逸らした。

おそらく私とそれほど年齢は変わらないようであるが、捕虜の蛮族の目はまるで子供のものであった。

何という素朴な部族であろうか。

まるで鹿のように丸い黒目勝ちな瞳をしている。こんな部族たちをこれまで私たちは大量に殺してきたというのか。

そしてこれからも殺し続けるのか……。

「わかった、君は何とかこの牢獄から解放されるように差配するよ。君をここに捕えておくことにもう意味はないから」

私はつぶやくようにそう言って牢獄を出た。

しかしそれは逆に彼の命を縮めることになるかもしれないと思っ
った。

彼は解放されればまた武器を持って戦わされる事になるだろうか
らだ。だったらプラーヌスの魔法か、騎士たちの槍で返り討ちにな
るのは間違いことなのだ。

第八章 15) シャゲランの懊悩1

私は自分の部屋に戻り、疲れ果てた表情でぐったりとベッドに座りこんだ。

そして懷から女神の像を出し、それを眺めるでもなくただ手に持って物思いに耽った。

これを返しさえすれば、蛮族はもう二度と襲来してくることはないであろう。

そうすることによって、プラーヌスが待ち望んでいた静かな生活が手に入る。

のみならず、無益な戦いにも終止符を打てるのだ。

そもそも迷うような問題ではない。なぜ牢獄ですぐに決断しなかったのか不思議なぐらいだ。

しかしまだ迷い続けている。

これを返せば私はとても大切な物を失ってしまうことになるからだ。

もしフローリアが女神の化身なのだとしたら、彼女も塔から消え去ってしまうに違いないのだ。

これまで私が諦めた恋は数多い。

むしろ今まで、好きな人に向かって好きだって言ったことなんてない。全てうやむやに諦めてきたのだ。今回だってきっとそうだろう。

まして相手は人間じゃない！ よくわからないけど女神だそう。
フロリアが振り向いてくれるわけがない。この恋だって私の片
思いで終わるに決まっている。

それなのに私はフロリアと離れたくない。

蛮族たちが命を賭して戦う気持ちがよくわかる気がする。

私はそんな彼らと同じ気持ちなのだ。フロリアに愛されること
はなくても、彼女と離れたくない。たとえ自分の命を犠牲にしてで
も。

そうだ、これからは私もせめて武器を持ち蛮族と戦おう。

自らの手も血で汚すのだ。それがせめてもの償いというものであ
ろう。

その程度ではこの我儘に見合わないかもしれないけれど、それぐ
らいしないと気が済まない。

とにかくフロリアに会いに行こう。

私はそう思ってベッドから立ち上がった。

会って何をどうやって話せばいいのかわからないけれど、彼女が
何とか真実を聞き出そう。

いや、正直言えばそんなことはどうだっていい。ただフロリア
に会って、顔が見たいだけ。

私はすぐに部屋を出て医務室に向かった。

彼女がそこにいるのは間違いないはずだ。今日も今朝から働いて
いるに違いない。

しかし医務室を探しても彼女の姿は見当たらなかった。もしかし

て私がこの像を発見したことによって、事態は既に変わってしまったのか？

「なあ、アビユ、フローリアはどこに？」

相変わらずキビキビと働いているアビユを捉まえて、私はそう尋ねた。

「ど、どうしたのよ、ボス、こんな顔して・・・」

「こんな顔って？」

「顔色が悪いわ。もしかしてボスも体調悪いの？ フローリアさんも朝からまた体調を崩して寝込んでるのよ。やっぱり昨日、頑張り過ぎたみたい」

「また倒れたのか？」

「うん、そうみたい」

そう言って仕事に戻ろうとしたアビユを引き止めて私は言った。

「おい、アビユ、その姿を確かめてきたか？」

「姿を確かめたかってどういう意味よ？」

「だ、だから・・・えーと、彼女は部屋でちゃんと安静にしているかどうかってことさ」

私はしどろもどろになりながらも、何とかそう言っただけで誤魔化した。

「うん、今日はゆっくり寝てなさいって部屋まで送ってあげたから。だってフローリアさん、フラフラになりながら働こうとしたんだから。どう考えても無茶でしょ？」

「そ、そうか……。なあ、アビユ、申し訳ないけどフローリアの様子をもう一回見てきてくれないか？」

「えっ？ まあ、ちょうど夕食の時間だから、食事を持っていくけど」

「すまないね」

「いいよ、別にこれくらい。……でも変な、ボス」

アビユはそう言って医務室を出ていった。

第八章 16) シャゲランの懊悩2

フローリアは安静に眠っていたようだ。

私もアビュについていって彼女の姿を直接確かめたかったが、抜けたアビュの代わりに医務室で仕事をして、アビュの返事を待っていた。

アビュを信じる限り、とにかくフローリアはこの塔に確かに滞在している。

この女神像を蛮族の渡さない限り、彼女の失うことはなさそうである。私はとりあえずその事実に安心しながら、その日は医務室で過ごした。

この日も蛮族との戦いで数人の怪我人が出た。あの五人の騎士がパルから率いてきた兵だ。

しかし彼らは熟達の者ばかりである。昨日とは比べ物にならない程度の軽傷ばかりだった。

それでも医務室は混乱を極めている。昨日の重傷人たちがまだまだベッドにいるからだ。彼らの様態はまだ予断を許さない状況であった。

私は彼らの看病をしながら、彼らもフローリアの不在を寂しがつている様子を見て取った。きっと昨日のようにフローリアに傍にいて欲しいのだろう。

私は彼らの為にもフローリアを失ってはいけないと思った。

彼らこそ死の淵からフローリアの女神性を照らし出した張本人なのだ。彼女の清らかな光を私よりもずっと浴びたはず。

いや、しかし同時に彼らの為にも、女神を蛮族に返して戦いを終わらせるべきなのかもしれないと思う。

彼らはこの傷から回復したら、また戦場に赴かなければいけないと恐怖しているかもしれないのだから。

でもわからない。

わからないまま、この日は過ぎていった。

私はこの日の夕食を一人で摂った。いつもは歓待の間でプラーヌと食べる夕食。

しかし今日はプラーヌと顔を会わせる気になれなかったのだ。

プラーヌスのあまりの自分勝手な性格に辟易したせいもあるだろう。

自分の都合の為なら、誰であろうが利用するあの自己中心的な生き方。私はまだプラーヌスがバルザ殿を手に掛けたのではないかという疑念が拭いきれないでいる。

しかしプラーヌスと会いたくない理由はそれだけではない。

何でも見通しそうなプラーヌスだ。私が女神像を見つけたことすら、彼はどうやってか知っているかもしれないのだ。

いや、そうでなくても、女神像の話題が出たとき、私はどうやって誤魔化せばいいのかわからない。

そういうこともあり、私はプラーヌスを避けた。

そうやってこの日は過ぎていった。

第八章 17) 傲慢な騎士たち

次の日、朝一番から五人の騎士がプラーヌスに目通りしたいと言ってきた。

せっかく私はフローリアと会えるのを楽しみにしていたのに、彼らの相手をせざる得なくなった。

しかしこれも良い機会だと今日の戦いから私も加わりたい意思を彼らに告げた。

「戦いの経験は？」

一人の騎士が私を馬鹿にするように言ってきた。

「全くありません。しかし戦わなければいけない理由が出来ました、どうか戦列の端で構いませんから是非」

私は精一杯の誠意を込めて言った。

「戦わなければいけない理由、何という感傷的な言葉か」

違う騎士が私の言葉を鼻で笑った。「まあ、戦いたければ勝手に戦うがいい。しかし昨日の蛮族は我々が散々叩きのめした。もうこの塔に来襲することもなからう」

「そうであればいいのですが・・・」

私は説明するのが面倒だったから、本当のことは言わずそうやって言葉を濁しておいた。

「とにかく塔の主を目通りしたい。その蛮族のことで色々と聞きたいことがあるのだ」

年嵩の騎士が言ってきた。

「わかりました、しかし前にも言った通り、塔の主はまだ」

私とその言葉を言い終わらないうちに騎士たちは怒気を込めて言い始めた。

「いい加減にしろ！」

「また我々を待たせるつもりか！」

「もし前のように待たせるのなら、その男の寝室まで我々は押しかけるぞ！」

「こんな時間まで寝ている者は宮廷にはおらぬぞ！」

「いてもすぐに打ち首だ！」

しかしここは宮廷ではありません。私たちには私たちのルールもあります。

そう口答えしようと思ったが、この頑固そうな騎士たちに通じるわけもないと口をつぐんだ。

彼らもブラーヌと変わりがなくらい、自己中心的に生きているようだ。

但しブライヌスはたった一人、自分だけの気分に従って生きているが、彼らは集団のルールを嵩になって押しつけてくる。むしろそっちのほうが、タチが悪い気がする。

バルザ殿は素晴らしい人物であつたのにと私は思った。

しかし騎士にもこのように融通の効かない人間がいるようだ。それとも彼らも祖国が存亡の危機で、余裕がないだけなのだろうか。

「・・・わかりました。すぐに主を起こします」

いずれにしろブライヌスを無理に起こしても彼らに少しの得もない。

騎士たちも不機嫌な状態のブライヌスを知れば、このように愚かなことは二度と言わなくなるだろう。

私はそんなことを期待しながらそう返事した。

第八章 18) プライヌスの正体

「あなたたちの戦いを上から拝見させていただいた。それは勇ましく、かつ猛々しく、きつとバルザ殿も地下で、かつての部下たちの戦い振りを喜んでおられることであろう」

謁見の間の玉座に座ったプライヌスは五人の騎士たちに向かって言った。

その表情は、傍目にはそれほど不機嫌に見えなかった。

確かに相変わらず偉そうで、まるでプライヌスが騎士たちの主君のような口振りであるが、騎士たちは彼のその迫力に飲まれているようで、その言葉を不快に感じている様子もない。

何だかこれから穏やかな話し合いがなされるような雰囲気を感じなくもなかった。

しかし私が鈴の音でプライヌスを起こしたときの様子を思い出せば、このまま穏健に進みそうもない。プライヌスは明らかに騎士たちに怒りを感じていたようだから。

「そのことで話がある。我々一同の意見は同じであった。バルザ様があのような未開の蛮族にやられるわけがないと思われるのだ。それは如何に？」

一番年嵩の騎士が言った。

「ああ、その通り。バルザ殿ほどの騎士が、蛮族ごときに後れを取るわけがないというのは僕も同じ意見。しかし蛮族たちは信じがたい程に卑劣だったんだ。僕は直接見たわけではないが、バルザ殿

は罫にかかって命を落とされた……。なあ、シャグラン？」

「えっ？」

私がプラーヌスの言葉に戸惑っている間もなく、五人の中でも血の気の多そうな騎士がいきり立って言った。

「ほ、本当なのか？ それは！」

「ああ、残念ながら」

プラーヌスは悲しげに眼を閉じた。

「ああ、何ということだ！」

「そんなことがあっていいのだろうか！」

「この世界はきつと悪魔が支配しているに違いない」

騎士たちは口々に嘆き始めた。

また下手な嘘をついているな。

私はプラーヌスを見つめながら思った。彼は同情に溢れた眼差しで騎士たちを見つめているが、きつと内心では彼らの反応を嘲笑っているに違いない。

「恐らく今日も蛮族たちは襲撃に来るだろう。復讐のチャンスはまだいくらかもあると思う。そういうわけで僕から提案なのだが、この塔の門番として働いてみたらどうだろうか。食料や住む場所は

こちらで世話をする。バルザ殿の遺体は残念ながら、バルザ殿が亡くなられたこの地こそ彼の墓標を建てるに相応しい地。そうすればあなたたちはバルザ殿から離れ離れにならずに済むと思うのだが」

プラーヌスは騎士たちの嘆きが終わる頃合いを見計らい、そう言った。

「バルザ殿はお一人で十万の兵に匹敵されると言われたお方だ。我々はあの蛮族十万の首を取るまで、バルザ殿を弔ったとは言えない！」

「その通りだ」

「その有難い提案、検討する必要もないほどである。我々は残って復讐を続けたい」

「ああ、蛮族をこの世から根絶やしにすることをここに誓おう」

騎士たちはプラーヌスが植え付けた偽の怒りによって、我を忘れていった。

彼らの近くにいるのも恐いくらいだ。動いている者なら、今にもその剣で叩き斬るのではないかという勢いなのだ。

「契約は成立しましたね。それでは私は忙しいので」

プラーヌスはそう言って玉座を立ち上がった。

プラーヌスは澄ました表情をしているが、内心では間抜けな騎士たちがおかしくて仕方ないことであろう。プラーヌスはこういう形で、騎士たちに対する意趣晴らしをしたようだ。

しかし私の予想よりも、ずっと平穩のままに事は終わりそうであった。プラーヌスのことだから、もっと直接的に苛立ちをぶつけると思ったのに。

私は無礼な騎士たちを魔法の力で捻じ伏せるプラーヌスの姿を期待していたのかもしれない。どうやらそれは空振りに終わりそうで、肩透かしをくらわされたような気分なのだ。

「皆の者、少し待たれるがいい。しかしバルザ様は血を好まぬお方でもあつたぞ！」

だけど一人の騎士がそう言って、謁見の間を去ろうとしていたプラーヌスを引き留めた。

私もプラーヌスも驚いて、その騎士を見た。

「果たしてバルザ様はこのような復讐を望まれるであろうか？
いや、きっと望まれはしないであろう」

最も年高の騎士を含め、他の騎士たちは怒りで我を忘れている中、その騎士は仲間たちに向かって落ち着いた口調でそう言っていた。

騎士にもこのような者がいたのか。私は少し驚きながら彼を見た。もしかしたら彼はプラーヌスの嘘に気づいてのかもしれない。

「何を言っておるのだ、お主？」

しかし最も血の気が多そうに見える、少し太り気味の騎士が怒鳴った。「今はそんなことを言っている場合ではない」

「いや、とにかく冷静になるんだ」

その冷静な騎士も負けずに声を上げた。「バルザ様は敵を根絶やしにしようなど、考えられるお人ではなかったではないか！」

「確かにそうだ。バルザ様は敵にも敬意を持って向かわれたお方」
一人の騎士がそれに同意した。

「しかしバルザ様は卑劣な罠にかかって命を失われたのだぞ！」
太り気味の騎士は反論した。「まさかそなた、戦場に罠は付き物だとも言つのではないだろうな！」

「そうは言わない。しかしバルザ様自身、戦場においては正と奇を併せ持たれた司令官。そんなバルザ様が蛮族如きの仕掛けた罠に引つ掛かったことが不思議だと、そもそもそなたたちはなぜ思わないのだ？」

冷静な騎士はあくまで冷静に血気盛んな騎士を窘めた。

「た、確かにそうだが・・・」

「それは確かにわからない」

「しかしきつと何か深い事情があつたはず」

「それがわかれば、我々は何もこんなに苦勞せずに済んでいるであらう」

「塔の主よ、それは如何であろうか？」

年嵩の騎士が一步進み出てプラーヌスにそう言った。

「そんなこと僕が知っている訳がない。真実が知りたければ、バルザ殿自身にも伺う他ないこと」

プラーヌスは騎士たちに冷たく言い放った。「そう言えばバルザ殿は嘆いていたことがあったな。自分の頭で考えられない、愚かな部下を持っていたことを」

「何だつて？」

プラーヌスのその言葉に騎士たちは反応を示した。

「バルザ様はそのようなことを言っておられたのか？」

「ああ、バルザ殿はきつとそなたたちのことを言っておられたのであるうな。自らでは何も決断出来ず、ただ無駄な話し合いに時間を費やすだけの無能な部下というのは」

私は驚きながらプラーヌスを見つめた。

どうやらプラーヌスは彼らを騙し切るのを諦めたのか、それとも騎士たちの煮え切らない態度が本当に頭に來たのか、騎士たちを侮蔑することにしたようだ。

明らかにプラーヌスの視線は先程までと変わっていた。不躰なくらい騎士たちを見下すような表情をしているのだから。

「わ、我々は確かに半人前だ。バルザ様がいなければ国を守るこ

とも出来ない……。祖国は今まさに滅ぼうとしているのに！」

しかし年嵩の騎士がブラーヌスの言葉を真に受けた様子で、そう言って反省を始めた。

「確かにそうだ。我々にバルザ様の半分ほどの力があれば」

他の騎士もそれに次々と賛意を示し出し、さっきまで息巻いていた血の気の多そうな騎士までそれに倣い始める。

「ああ、バルザ様はいつたいどういうおつもりだったんだろうか？」

騎士たちは各々、自己反省を始めた。もしあのときこうしていれば、自分があのとときこういう決断をしていれば、そういう感じで過去の自らの行動を悔やみ始めたのだ。

「ちょっと待て、騙されるな、たとえバルザ様がそう思われておられようとも、そんなことを赤の他人に軽々しく漏らすわけがないではないか」

しかしまたしても冷静な騎士がそう言って、仲間を窘め始めた。

「確かに我々の力不足でパルは滅びようとしている。しかし今、それを悔いるときではないはず」

「そなたはそう言うが、だが我々が不甲斐ないことも事実。どうやってバルザ様に申し開きすればいいのか……」

「そうだ、いくら悔いても悔い足りることはないだろう」

「しかしどうか考えてもおかしいとは思わないか。少し冷静になるうではないか。バルザ様の人柄を思い出すのだ。たとえあの方が我々を不甲斐なく思っていたとしても、このようなことを軽々しく他人にお話しになられるはずがないではないか」

「・・・た、確かにそうだ」

騎士たちは我に返ったように目を見開き始めた。「バルザ様に限ってそのような愚痴を他人にこぼされるなどありえない」

「それはそうだな」

「しかしだとしたらどういことなのだ？」

「私はこう思う。我々は騙されているのだと」

冷静な騎士が静かに言った

「誰に？」

「それはおそらく、この狡知に長けた悪魔にだ！」

これまで冷静だった騎士が、その冷静さをかなぐり捨てるかのように声を荒げ、プラーヌスに指を突きつけてそう怒鳴った。

謁見の間が静まり返った。

他の騎士は愕然としてその騎士を見た。それはあまりに思い寄らぬ考えだという感じで。

「私は思う。この者の言っていることは全てデタラメだと！」

「何を証拠にそんなことをおっしゃられるのか僕には理解出来ないが」

プラーヌスは邪魔臭そうに言った。

しかしむしろその展開がプラーヌスの望む方向だったのかもしれない。プラーヌスはもう既に何かを決断していたような気がするのだ。

それを証拠に、プラーヌスは困ったように眉をひそめながらも、唇がどこか嬉しそうに、微笑みで緩んでいるように見える。

「証拠は明らか。それは私の心の中に住んでいるバルザ様と、あなたが話すバルザ様があまりに違い過ぎること」

「確かにそうだ」

他の騎士も途端に追従し始めた。「確かにバルザ様は、未開の蛮族が仕掛けた罠などに安々とはまって、簡単に命を落とされる方ではない」

「だとしたら、もしかして！」

「そう、こいつが殺したとしか考えられない」

騎士たちは一斉に鞘から剣を抜いた。

ただ彼らが剣を抜いただけなのに、彼らの身体一回り以上大きくなったように見えた。

言葉では圧倒的にプラーヌスに後れを取っていた騎士たちだが、

剣を抜いたことで騎士としての誇りを取り戻したのかもしれない。彼らはもうさっきまでの間抜けな騎士たちではなくなったように見えた。

「プ、プラーヌス！ どうするんだよ？」

そう言おうとしたが、しかし私は凍りついたように身動き出来なくなった。

騎士たちの剣が太陽の光を反射して銀色に輝いている。私はその煌めきが騎士たちの発する凄まじい殺気のように思えた。

とにかく最悪の事態が起きようとしている・・・。

「そうか、では仕方ない」

しかしプラーヌスはそんなものどこ吹く風と言った感じで、漆黒のローブを翻しながら立ち上がった。

「まあ、まだ君たちを言いくるめる余地は存分にありそうだけだね。例えばこの冷静な、少しばかり頭が回る騎士だけを上手く排除すれば、あとの騎士たちなんて完全に僕の言いなりになるだろう。でも僕は呆れ返っているんだ。もうこんな茶番劇に付き合いきれない。あなたたちはあまりに愚かだ。この程度の者たちを門番にしても大した役には立たないだろう」

プラーヌスは愛用のロッドを構えながら言った。「その通り、バルザ殿を殺したのも僕だ。そして彼を騙し、この塔に拉致したのもこの僕さ」

「ついに正体を現したな、悪魔め！」

剣を抜いた騎士たちは、もはやプラーヌスの言葉に動揺しなかった。重心を下げ、いつでも彼に襲いかかれるようにギリギリと距離を詰めてくる。

「敵は二人だけだ。たとえ魔法使いであろうと、五人の騎士に敵うわけがない！」

私は自分も彼らの敵として数えられたことに困惑しながらも、しかし今更言い逃れできるとも思えなかった。

ただ生き残りたければプラーヌスを頼るしかない。

しかしバルザ殿を殺したのも僕だって？

プラーヌスは今、はっきりそう言ったよな……。

「確か五人の騎士を相手にするのは困難だ」

プラーヌスは私の動揺をいささかも気にすることもなく、五人の騎士に向かい合う。「いくら僕でも死を覚悟せざるを得ない状況だろうね。しかし君たち五人をまとめて戦う方法は既に見つけ出している」

「何だと！」

「但し戦うのは僕じゃない。後ろを見る、騎士たちよ、バルザ殿が冥府から蘇られたぞ！」

最終章 1) 揺れる記憶

バルザの幻を見て混乱した騎士五人を殺すのは、プラーヌスにとって訳ないことのようにであった。

まるで血の沼から這い上がってきたかのような血塗れのバルザが、大剣を振り上げて騎士たちに迫ってくるのだ。

生前のバルザを慕っていなかった者でも、あのような亡霊の姿を見たら取り乱すであろう。まして相手はバルザを神のように崇める騎士たちである。彼らの混乱は痛ましい程であった。

その混乱に付け入って、プラーヌスは騎士たちの息の根を次々と止めていった

「プラーヌス・・・」

私は無残な五人の騎士の死体を見つめながらつぶやいた。

「召使いたちに死体を片づけさせるよう命じておいてくれ、シャグラン」

「プラーヌス！」

私の声に驚いたようにプラーヌスが私を見た。

「君は何てことを！」

「何てことだって？ こっちがやらなければ君も殺されていたよ。こついうときは責めるのではなく、命の恩人に感謝するのが普通じ

やないのかい？」

しかし私は彼の言葉を見殺しに言った。

「バルザ殿を殺しただって？」

「うん？ さっきどさくさにまぎれてそんなことを言ったかもしれないね。しかしそんなの、奴らを謀るための出まかせだよ」

プラーヌスはまだ惚けるつもりのものであった。

しかしこの様を見れば、そのような嘘はもう通じない。五人の騎士は心臓を突然停止されたようで、ひどく苦しい表情で倒れている。

もしかしたらあのバルザ殿もこのように彼に殺されたのか・・・。

自分に刃向かう者がいれば、プラーヌスは躊躇なく殺す。それは間違いない気がする。

「もうここにはいられないよ」

私は彼に言った。

「何だって？」

プラーヌスは私が予想したよりも驚いた表情で私を見た。しかし私ははっきり申し渡した。

「この塔を去らしてもら」

「・・・シャグラン、何を言っている。そんなことが許されるわけがないだろ」

「昨日、女神像は見つけたよ。この世で最も清らかで美しいもの・・・、多分、フローリアは女神の化身だったんだ。それで僕は返すのを躊躇してしまったが、もうこの塔から出ていくからそういうことも関係ない。ほら、これだよ」

私は懷から女神像を取り出し、それをそつと床に置いた。

「これで戦いは終わるだろう。君はもう誰かを騙して、この塔を守らせる必要もなくなるはずだ。念願の静かな生活が手に入る。あの不気味な泣き声も止んだはずだしね。これがせめてもの置き土産さ」

「よくやった、シャグラン。君はやはり優秀な男だ。僕は尚更、君が必要になったね」

プラーヌスは私を宥めるように優しい口調で言ってきた。

「もう無理だよ」

しかし私は首を振る。「もう君にはついていけない」

「何を愚かなことを言っているんだ。僕は何をしてでも君を引き留めるさ」

プラーヌスは私のそんな言葉など取るに足らないことだと言うように鼻で笑った。「まあ、僕に出来ないことなんてないことを君も知っているだろ？ 何が何でも出ていくと言うなら、今日の日の君

の記憶を消すことにする」

「な、何だつて？」

プラーヌスがさりりと言った言葉に私は愕然として眼を見開いた。

「君は僕がこの五人の騎士を殺したのも見なければ、バルザ殿を殺したのも知らないことにしよう。そんなのは僕にとって容易いことなんだ」

「プ、プラーヌス！」

それが嘘でも脅しでもないことを私は知っている。

実際、彼は以前、前の主に囚われていた者たちの記憶を消したのを私は見ている。

それはこの塔から彼らを自由にするために必要な作業だったが、彼らは確かに彼によって記憶を消されたのだ。

「ぼ、僕の記憶を奪うだつて？ そんなこと許されるわけがないじゃないか！」

「いや、友情を維持するためにはこういうことも必要さ」

「友情？ こういうことを友人にする人間なんていないさ！ そんなことは悪魔の所業だ！」

「友人を悪魔呼ばわりとは君も酷いね」

「いや、酷いのは君じゃないか！」

私はそう言い返ししながら、ハツとして思った。

私はこの塔に来て以来、ずっと考えていたことがあった。
一体いつからこの魔法使い、プラーヌスと友人になったのかって
ことだ。

私たちは別に同郷でもなければ同窓でもない。
まして一介の肖像画家である私と、魔法使いのプラーヌスに何の
接点もない。そもそも出会うはずのないような間柄、それなのに。

私はいくら思い起こしても、どうやって彼と友人になったのか思
い出せないのだ。

もしかして既に私はプラーヌスに記憶を消されたことがあるのか
？

「なあ、プラーヌス、本当に僕たちは友達なのか？ 幾ら記憶を
思いめぐらせても思い出せないことがあるんだ。どうやって僕たち
は出会い、このような仲になったのか・・・」

「ひどいな、シャグラン、僕は君の命の恩人だろ？ あれは何年
前だ。君が夜盗に襲われたとき僕は助けたことがあったじゃないか」

「ああ、そ、そうだった」

そんなことがあると言われたらある気がする。

しかしその記憶は奇妙で、とても不安定で、消えたり浮かんたり
して、明らかに他の記憶と切り離されているのだ。

もしかしたらこの記憶をプラーヌスに消されたことがあるのか？

いや、そんなはずはない。

もしそうだったら彼から言うはずがないではないか。むしろその逆じゃないのか？

私とプラーヌスはそもそも友達なんかじゃない。

彼は私に偽の記憶を植え付けた？

「なあ、プラーヌス、一つ聞きたいことがあるんだけど・・・」

「ああ」

「結局は失敗したけど、君はバルザ殿をどうにかこの塔の門番として働かせることが出来たよな。どうしてそんなことが君に可能だったのか・・・。バルザ殿は世にも名高い騎士だ。塔の門番を勤めるような身分じゃない！」

「シャグラン、君はずっとそれを疑問に思っていたな」

「実はバルザ殿から聞いたことがあるんだ。彼も僕と同じような妙な記憶の混乱を抱えているって」

「・・・妙な記憶の混乱か。面白い言葉だ」

「そして去り際、彼は言ってきた。あなたも気をつけたほうがいいって・・・」

「なるほど」

「君はもしかして僕たちに何かした？」

私はプラーヌスの瞳を、真っ向から見つめながらそう言った。
今までこんなふうに彼を見たことはないかもしれない。私はいつもどこかでプラーヌスを恐れていたのだ。

だけどそんな関係が友情だなんて呼べるのか？

そうだ、私はずっとこの友情に疑問を感じていたのだ。

もしかしてプラーヌスは私の記憶を操って、無理にこの友情をでっち上げたのではないのか？

しかし同時に私はこのような疑問も感じる。
どうして私にそんなことをする必要があったのかって。

バルザ殿をこの塔の門番にするために、プラーヌスが手を尽くすのは理解出来る。

彼は有名で優秀だ。プラーヌスがバルザ殿を欲しがる気持ちはわかるというもの。

だけど私は？

私はどこにでもいる無名の画家に過ぎないのに……。

「あまりにも直接的な質問なので、どうやって答えていいのかわからないね」

プラーヌスは困ったように眉をひそめそう言った。「まあ、君はいずれにしろ今日の記憶は失う。だから何もかも喋ってやってもいいんだけど、それもいささか抵抗を覚える……」

「記憶を消すだって？ プラーヌス、まだそんなことを言ってるのか！ なぜそこまでして僕を引き止めておかなければいけないん

だよ？ 僕は君に恩がある。バルザ殿は大切な人だったが、それ以上君には恩義を感じているよ。だからもし君が僕に妙な魔法をかけていたとしても、決してこのことは口外しない。僕だってもう面倒は嫌だ。バルザ殿の件も黙っている。君を窮地に陥れたりするわけないさ。なのにどうしてこの塔から解放してくれないんだよ！」

「それは僕が君のことを、大好きだからとしか言いようがないな」

「何だつて？」

私はプラーヌスの言葉に耳を疑った。

「仕方がない。全て話そうか。実はいつか言おうとは思っていたんだ。いや、もしかしたら君なら思い出してくれるかと期待していたんだけどね」

「な、何をだよ？・・・」

「確かに僕が君の命を助けたというのは嘘だ。あれは君の想像通り、僕が植え付けた偽の記憶だよ」

や、やっぱりそうなのか・・・。

「僕たちが出会ったのはそれよりもっと前、僕も君もずっと幼い頃」

「幼い頃？」

「ああ、僕がようやく幾つかの魔法を覚え始めた頃のことだ」

最終章 2) 告白

「その頃、僕は本当に貧しかった。だけど母は僕を世界一の魔法使いにしようと必死に働いてくれていた」

ブラーヌスはまるで他人の人生を語るように淡々と話し始めた。

「君も知つての通り、魔法使いになるには血の滲むような努力や、生まれ持った才能だけではなく、大変な財力も必要とされる。なにせ魔法を使うには宝石が必要だからね。僕は才能は余りある程備わっていたけど貧しかった。だから母は自分の身を売って金を稼いでいたんだ。すなわち売女だったのさ。母は僕に似てとても美しかった。だからけっこう稼いでくれたみたいだね、しかし魔法使いになるにはそれでも到底足りなかった」

「そうなのか・・・」

私は彼の生い立ちに少し痛ましさを覚えながら言った。

「ああ、でもそんなことはどうでもいいんだ。驚くべきは身売ってでも、母は僕を魔法使いにさせたかったってことだよ。その意気込みは驚くべきものだ。ほとんど狂気に近かったと思うね。実は僕自身、そんな母にかなり戸惑わされていたことも事実だ。だけど母のお陰で僕はこうして魔法使いになれたのも間違いないことだ。とても感謝している」

「あ、ああ」

「おっと前置きが長くてすまない。まだ君は出てこないけど、も

う少し辛抱強く聞いてくれ。とにかくそんな母がね、タチの悪い客に引っ掛かって、ボロボロに犯された拳句殺されたのさ。やったのは街のゴロツキだよ。当然、僕は復讐を考えた。しかし僕はまだ幼くて無力だった。魔法は使えるけど、肝心の宝石に余裕がなかったわけだ。宝石を持たない魔法使いは丸腰の騎士よりも弱い。魔法使いを志したのを、このとき後悔したときはなかったよ。剣術でも学んでいれば、さっさと報復出来たからね。色々調べてわかったけど、そいつらは二、三十人もグループを成していた。簡単に手は出せない。そいつらを全て殺し尽くすには、けっこうな数の宝石がいる。それで君がようやく登場だ。まだ思い出さないか？」

「まだ何も・・・」

私は首を振った。しかし何て残酷で血生臭い話なんだ。母が売春婦だとか、二、三十人相手に復讐だとか、私にとってはあまりに無縁な世界。まるで舞台の上のような話ではないか。

「仕方ない、ではもう少し話を続けよう。それで僕は復讐のために宝石を盗むことにして、ある街の宝石店を一つ一つ物色していった。そのとき偶然目に着いた宝石店の名が確か、・・・『メイン宝石店』」

「メイン・・・」

私のファミリネームはメイン。父の営んでいた店がメイン宝石店だった。

それを聞いて私は思い出したことがあった。

幼い頃、宝石商をしていた父の店に泥棒が入ったことがあった。

いや、宝石店が襲われることはよくあることだった。だからちょっとした部隊並みの数の用心棒を、父は常に雇っていた。そんなことは別に印象的な事件でも何でもない。

しかしこのとき珍しかったのはまだ子供の、僕と同じ歳くらいの魔法使い見習いが侵入してきたってことだった。街の宝石店だからと甘く見ていたのだろう。余りにも無知で、向こう見ずな子供。

父と、用心棒を兼ねた従業員は、子供であろうが容赦なく、捕えたその泥棒を殴りつけた。

あれは満月の夜だと思う。月明かりの中、私は自分の部屋の窓から、店の前で繰り広げられている暴力の一部始終を見ていた。

父は特別残虐な人じゃなかったけど、自分の命よりも宝石が盗まれそうになったことに逆上していた。

まあ、父の気持ちもわからないわけじゃなかった。これをもって生計をたてているのである。それを盗もうとする相手に厳しく対応するのは当たり前だったかもしれない。

だけど私は、ほとんど自分と年齢が変わらない子供が酷く殴りつけられているのを見て、まるで自分の友人が殴られているような気持ちになったのだ。

そうじゃなくても父は宝石強盗を必要以上に手酷く殴りつけることが多かった。いつも宝石を守るのに汲々としていた。まるでそれだけが生きがいのお守り奴のような人だった。

もうそんな父に嫌気がしていたんだ。私はそういう父を否定したい気分だったんだと思う。

父たちはその子供を縄で縛ってから、夜警を呼びにその場を少し離れた。私は彼のことが気になってこっさり様子を見に行った。

「そうさ、あのときの愚かなガキがこの僕さ」

プラーヌスは言った。「シャグラン、君は僕の縄を解いてくれて早く逃げるよう言ってくれたね。僕はそのとき、本物の天使が現れたのかと思ったよ。まあ、あまりに手酷く手殴られて、意識がかなり朦朧としていたせいもあるけど、君の優しい言葉に僕が感動したことは確かだ」

プラーヌスは私の反応を確かめるように少し黙ったあと、また話し出した。

「しかしあのとときの僕に逃げる切る体力なんて残ってなかった。君がせっかく縄を解いてくれても、指を動かすのがやっとだった」

それで君はとんでもない提案をしてくれたんだ。

プラーヌスはまるでそのときの、子供の私にでも語りかけるように、一瞬優しい表情を浮かべた

「『魔法を使ったら逃げられるだろう』そう言って、君の父の宝石をくすねて僕に渡してきたのさ」

「・・・そ、そんなの、まるで覚えていないな」

私は首を激しく振りながら言った。

本当に細かいことまで覚えていないのだ。

それは幼少の私にとって、とても印象的な出来事で、人生の岐路と言ってもいい事件なのだけど、この記憶もあやふやでまるで夢のよう。

「まあ、無理もないね。実はあのとき、僕の縄をとき、更に逃げるための宝石まで用意してくれた恩義のある君に向かって、僕は魔法を使ったんだよ。宝石一つじゃ足りない。もっと持ってきてくれ。そうやって君を操ったのさ」

プラーヌスは過去のその行いを恥じるように、少し照れ臭そうに笑った。

私は彼の言葉に呆れてか、あるいは驚いたからか、いずれにしろ何も言葉が出てこなかった。

プラーヌスはそんな私の様子を気遣うようにに見つめながら更に言った。

「それで君はありったけの宝石を持ってきてくれた。両手でも持てないくらいの宝石だった。僕はそれを前に歓喜に打ち震えたよ。一瞬、傷の痛みも吹き飛ぶほどに。これで奴らに復讐出来るって思ったし、これだけあれば魔法の修行にも使えるってね。結果的にこの大量の宝石のお陰で、僕は魔法使いとして若くして成功出来たと思う」

プラーヌスは少し間を置いてから言った。「しかしそれを持って逃げようと思ったとき、運悪く、君の父と従業員たちが夜警を連れて戻ってきた。そこから先は覚えているだろ？」

「・・・あ、ああ。父も従業員たちも、そして夜警もみんな死んでいた。僕は気絶して朝まで眠っていたけど、自分の判断のせいで

こんなことになったと自分を責め続けた。それにこの事件を期に宝石店だって潰れた。それなりに裕福だった人生はあの日で終わった」

「うん、あれは僕がやったんだ。すまなかった、シャグラン。君の父まで手にかけて……。殺すつもりはなかったけど、逃げるためには仕方なかった」

プラーヌスは珍しいことに、申し訳なさそうに少しだけ頭を下げてきた。

私はそんな彼の姿をまともに目つめながら、何も言葉を返さなかった。だって何を言われようと許せるわけがないではないか。父は周りの人から慕われたり、信用されたりするような人間ではなかったかもしれないけど、それでも私の父なのだ。この世界でたった一人の存在である。

それなのにこれくらいで許せるわけがない。プラーヌスが母の死に報復したのと同じ心境だ。

しかしプラーヌスはまだ私から許しを得られるとも思っているのか、言い訳をするように話し続けた。

「僕はしばらくの間、母の復讐に夢中で、その事件を自分の中で上手く処理する時間がなかった。いや、考えないようにしていたと言っていると思う。しかし復讐を果たしても、どうにも心が晴れないんだ。そしてなぜか君の顔が何度も夢に出てきた。それで気づいたわけさ。僕は君の優しさにとんでもなく魅了されていたってことを」

「な、何なんだよ、それ。人の人生を無茶苦茶にしておいて……」

私はさっきと同じように無視してやろうと思ったけど、思わず彼の言葉に笑いそうになった。だってあまりに勝手なプラーヌスの言葉に呆れ返ったからだ。いや、実際、私は声を上げて笑ってやった。

「馬鹿じゃないのか、プラーヌス、君はいつたいどの喜劇役者なんだよ！」

「ああ、笑えるだろ？ でも本当なのさ。それどころか僕は君と友達になりたかった。是非、成功と富を、君と分かち合いたいと思ったのさ。それでこの塔を手に入れたあかつきに、君の記憶をいじって、ここに呼び寄せた、そういうわけさ」

プラーヌスは全てを話し終えたのか、少しすっきりした表情で私を見てきた。

そのすっきりした表情に、子供のような無垢さを私は感じた。そのプラーヌスの表情が、宝石店を襲ったあの魔法使い見習いの少年の顔とつながって一つになる。

間違いない、彼が真実を告白しているのは確かな気がする。

もちろんプラーヌスにはどんなデタラメでも信じ込ませる力があるのである。これだって偽の記憶かもしれない。

しかしもはや嘘を言っても意味のない場面。

「・・・な、なるほどね、色々、わからなかったものがわかってきたことは確かかもしれない」

私は呆れて何も喋る気になれなかったが、何とか絞り出すように

言った。「幼い日のあの事件の真相、空白の記憶の理由。そして僕と君に関わる、何もかもが偽りだったことがよくわかった・・・」

すると私も驚くくらい、プラーヌスが声を張り上げて私の言葉を否定してきた。

「僕と君に関わる何もかも偽りだったって？ シャグラン、そんなことないさ！」

「ど、どうしてさ？」

「少なくとも僕が君に感じる友情は本物だったよ・・・」

「こ、これが本物の友情だって？」

今度は私が声を張り上げる番だった。

「プ、プラーヌス、本気でそう思っているのなら君はあまりに悲しい男だよ。あまりに悲しくて、こっちが泣きたくなってくる！」

私は泣き叫ぶように言った。

本当ならプラーヌスを殴ってやりたい気分だ。しかし彼に近寄るのも面倒。精一杯の憐れみと軽蔑を込めてこう言ってやるだけで十分であろう。

「君は今まで友達なんていなかっただろ？ よくわかるよ、君に寂しい生い立ちがね！」

本当に寂しい奴だ。

憐れで憐れで仕方がない。

もう彼に投げかける言葉なんて何も思いつかないくらい……。

「……何を泣いてるんだよ、シャグラン」

プラーヌスが困惑したように私に言ってきた。

「な、泣いてなどいないさ！　ただあまりに君が愚かだから、情けなくて仕方がないのさ！」

更にそう言ってやろうとしたとき、鐘の音が塔に鳴り響いた。

蛮族が来襲した合図だ。

こんなときに邪魔をしやがって！　何て忌々しい連中だ。

私は普段のプラーヌスがやるように、苛々した眼差しで鐘の音のするほうに目をやった。

「また来たな。話し合いはしばらく中断だ」

しかしプラーヌスはずっと冷静にそう言った。私と彼の間に置かれていた女神像を見ながら。

むしろ彼はようやくこの場面から解放されてホッとしているのかもしれない。

「あ、ああ……」

確かにもう泣いている場合じゃない。まして苛々している場合では。

これで全ての戦いに終止符を打たなければいけないのだ。それがこの塔で最後の私の務めであろう。これから自分の身がどうなるのかわからないが、せめてこれだけはやり遂げなければ。

私はその女神像を拾い上げた。

まだまだブラスに言いたりないことがあるような気がしたけれど、そのような感情を振り払うように、塔の出口に向かって全速力で走った。

最終章 3) 戦いの音

しかし頭が混乱する。プラーヌスの言った言葉が私の中で渦巻いて、一向に整理出来ない。いったいどういうことなんだ？

とにかく私はプラーヌスに利用され通しだったってことか。プラーヌスは友情がどうか言っていたけれど、結局はそういうことなんだろ？

それに私はもう一つの事態でも頭を悩ましている。

これを渡せばフローリアとも逢うことが出来なくなるという事実。その前にせめて一言、フローリアと別れを告げるべきだったと私は後悔した。

プラーヌスなんかの問題に時間を取られたことが腹正しい。あんな告白は何もかもが落ち着いてからで良かったと今になれば思う。

いや、もしかしたらもう少しくらいフローリアと話す時間はあるかもしれない。私は廊下を駆けながらふと思った。

蛮族の来襲を知らせる鐘は高い見張り台にある。かなり早い段階で蛮族の襲来を察知出来るのだ。まだ蛮族がこの塔に到着するまでに少しくらいの時間に余裕はあるはずなのだ。

あわよくば一言くらい、フローリアと言葉を交わせるのではなからうか。だってこのままでは哀し過ぎる。

このまま彼女と別れの挨拶を交わすことなく二度と逢えなくなるなんて絶対に嫌だ。ああ、この偽りばかりの世界で、ただ彼女だけが真実に思える。

私は一瞬、フロリアのいるほうに足が向かいかけた。彼女の体調が戻ったなら医務室で働いているはずだ。それがまだなら部屋で眠っているであろう。

しかしそのとき窓の外から戦いの音が聞こえてきた。
鉄と鉄がぶつかり合う金属音、馬蹄の響き、努号と悲鳴が。

私はどうしてこのような戦いの音が聞こえてくるのかしばらく理解出来なかった。だがすぐに思い出した。

私はすっかり忘れていたのだ。五人の騎士たちが連れてきた兵が百数十人いたことを。

彼らは塔の外で幕舎を張って待機していた。どうやら蛮族の襲撃に対し、すぐに撃退に向かってしまったよう。

これでフロリアと逢っている時間はなくなつたようだ……。一刻でも早くこの戦いを終わらせなければ。

私は彼女と逢うのを諦め、塔の出口に向かって走った。

最終章 4) 雷鳴

外に出る扉を開けた瞬間、血の匂いがムツと嗅覚を刺激してきた。

「やめろ！」

そんな声が届くわけないことはわかっていたが、私は叫ばざるを得なかった。

五人の騎士が率いてきた百数十の兵は傲然と蛮族たちに襲いかかっていった。

蛮族を心の底から憎しみ、蛮族への復讐を果たそうとしているのだ。

そもそも兵たちをこの復讐に駆り立てたのはブラーヌスの策だ。彼らは蛮族がバルザ殿を殺したという嘘にすっかり騙され、怒りに燃えているのだ。

「もう戦いは終わったんだ」

私はまた叫んだ。

しかし戦場の真只中に私の声が聞こえるわけなどなかった。その間にも蛮族たちは次々に殺されていく。

正規に訓練を積んだ兵たちは組織立って弓矢を放ち、その攻撃に怯んで背中を見せた蛮族を馬上から槍で突き刺していった。

戦いは狩りに似た虐殺だった。

私はこの虐殺にどうやって割って入っていいかわからず、ただ手

をこまねいてそれを見るしかなかった。

これではこの女神像を蛮族に返すことなど不可能だ。その前に蛮族たちは殺されつくしてしまうに違いない。

どうにかしてこっちに注意を惹かなければならない。しかしそれをするには私はあまりに無力で無策だった。

「僕に任せるんだ」

そのとき私の横にプラーヌスがやってきてそう言った。

プラーヌスは懷から宝石を幾つか取り出した。

彼はその数を調節してから、ロッドを掲げ、何か言葉をつぶやいた。するとそれまで晴れ渡っていた空がにわかには曇り出した。

どこからともなく黒い雲が現れ、それが徐々に大きく発達していく。

その雲が雷を孕み、不穏な音を鳴らし始めた。

「何をするんだよ、プラーヌス？」

私は問い詰めるように尋ねた。

「もう誰も殺しはしないさ。こっちに注意を引いてやるだけだ」

プラーヌスは一呼吸置いてから、ロッドを振り下ろした。

すると眼を鋭く射るように光が瞬き、地面を揺るがすような爆音が戦場に響いた。

そのあと、辺りは一瞬死のように静まり返った。兵も蛮族も驚きのあまり戦いを一時やめて、雷の落ちたほうを呆然と見つめていた。

最終章 5) 沈黙する戦場の只中で

プラーヌスの放った雷がどこに落雷したのかよくわからなかったが、辺りはもうもうたる煙でしばらく視界も定かではなかった。

私はその煙の立ち込める中を蛮族たちの死体を跨ぎ越しながら、出来るだけ戦場の真ん中へ、兵と蛮族たちが密集する地帯に歩みを進めた。

先程までの喧騒が嘘のように、戦場は静まり返っている。

彼らはこれまで戦っていたことを一時忘れ、ノコノコと戦場の只中にやってくる私を呆然とした表情で不思議そうに見てきた。

「全て終わったんだ、蛮族たちよ。もう二度と塔に近寄るんじゃない」

私はそう言つて、一番身分の高そうな蛮族に女神像を手渡した。

その蛮族はそれをしばらく不思議そうに見つめていたが、事態を飲み込めたのか突然に悲鳴のような歓声を上げ、仲間たちを集めて向こうのほうに走り出していった。

私は次に、騎士たちが連れてきた兵たちのほうに注意を向けた。しかし彼らにどうやって説明をしたらいいのかわからなくて、そのまま沈黙してしまった。

彼らに何かを渡せば戦うことを止めてくれるのか？ そんなものはないのだ。だからといって本当のことを言えば、蛮族に対する剣

は収めるかもしれないが、今度は私たちが彼らと戦わなければいけなくなる。

すなわち打つ手など何一つない……。

そうやって困り果てていた私の横にプラーヌスがやってきた。

「僕がこの塔の主だ。パルの国の兵たちよ。すぐに剣を引いてくれ。彼らは実はバルザ殿の仇などではない」

「プ、プラーヌス」

私はその言葉に驚きながら彼を見つめた。

いや、驚いているのは私だけじゃない。プラーヌスの言葉を聞いた兵士たちは、混乱した表情で互いの顔を見合わせた。

彼らはしばらくまごついていたが、整列していた兵の一角が崩れて、馬に乗った兵士が一人、ゆっくりこっちに近づいてきた。

「この兵たちの中で一番身分の高いのは君か？」

プラーヌスはその男を見て言った。

初老の男だ。騎士のような武装だが、塔に来た五人の騎士たちよりも着ている鎧や、持っている武具はずっと粗末そうだ。

「ああ、その通り。だがいったいどういうことなんだ？ 我々の上官である五人の騎士様が塔を訪れたと思うが」

「彼らは五人とも死んだ」

プラーヌスはそう言った。

「何だつて？」

馬上の兵士は絶句した。後ろの兵士たちも騒然とし始めた。

「ど、どうしてだ？」

「つまり僕が殺したからだ」

プラーヌスは少し言い難そうであつたが、はっきりとそう言った。すると兵士たちはいっそうざわめいた。ざわめいた後、さっきまでの戸惑いに代わつて、プラーヌスに対する殺氣と憎しみが、兵たちの間に漲り始めたのが手に取るようにわかった。

「なぜそんなことを？」

リーダー格の馬上の兵士は信じられないと言つた表情で叫んだ。

「それは、バルザ殿を拉致したのが、この僕だからさ」

その言葉はさっきの言葉よりも衝撃的だつたようだ。兵たちは言葉もなく、ただ茫然とした表情でこつちを見つめてきた。

プラーヌスはそんな彼らに向けて切々と話し始めた。

「君たちは僕が憎くて仕方ないであろう。復讐を果たさないと気が済まないに違いない。だけど僕も殺されるわけにいかない。もちろん君たちを手に掛けたくもない。頼む、大人しく兵を退いてくれ

ないか」

誰一人、何も答えなかった。

依然として沈黙を続け、ただこちらをにらむわけでもなくじっと見つめてくるだけだ。

「都合の良過ぎる頼みだとはわかってる。許して欲しいとは言わない。僕を恨んだままでいい。引き下がって欲しい」

そう言ったプラーヌスに向かって、突然、一人の兵士が叫び声をあげながら突進してきた。

彼は無念そうにロッドを掲げて、突進してきた兵士の鼻先に炎を浴びせ掛けた。その兵は炎に驚いて尻餅をついた。

「お願いだ」

プラーヌスは哀願するように言った。

しかしその一人の兵士の行動によって目を覚ましたのか、さつきまで呆然とするだけであった他の兵士たちの目にも、彼に対する憎しみが甦ってきたようだった。

武器を握り直し、少しずつこちらににじり寄ってくる。

兵たちは襲いかかってくる寸前の獣のように全身を震わせていた。塔の中で五人の兵士たちがプラーヌスに襲いかかってきた時とまるで同じ空気。

やはり戦いになるのか。

私は無念を噛みしめながら思った。覚悟を決める必要があるかも

しない。

しかしプライヌスもこれ以上、無益な殺戮は犯したくないようであることは確かだ。

だってあのプライドが高く、傲慢なプライヌスが、さっき兵たちに許しを請うたのだから。私からすればそれは驚くべき出来事だった。

これまでのプライヌスとまるで変わった気がする。

何だかそんな態度を見て、彼は私に対しても謝ろうとしているんじゃないかって気にすらなかった。少しは心を入れ替える。だからこれまでのことを水に流してくれ、そう言っているかのよう。

何か逃れる方法はないのか？

だからこそ痛切にそう思った。もちろんそれだけで、プライヌスのこれまでの行いを水に流せるわけではないけれど、何が何でもこの戦いをやめさせたいのは確か。

とにかく私は兵たちのほうに注意を払いながら必死に考えた。とはいえ何も浮かんでこなかった。バルザと五人の騎士を殺した罪が許されるための方法など、いったいあるのだろうか。

しかし私が絶望的な思いに駆られたそのとき、突然とてつもなく大きな声が遠くのほうから湧き上がってきた。

それはこの緊張感に満ちた場面に相応しからぬ歓声だった。

まるで闘技場で勝利した闘士を讃えるとき、あるいは最良の俳優を目にしたときのような歓声。

私は驚いてそちらに目をやった。兵士たちもその声のほうを振り向いた。

私たちから少し離れた場所で、生き残りの蛮族たちが集まって何事が叫びながら騒いでいた。

彼らはまるで子供のように無邪気に飛び跳ねている。どうやら女神の像が返ってきた喜びを盛大に祝っているようだった。

最終章 6) 調停

その歓喜の大爆発の後、一瞬また静まり返ったかと思うと、今度はとても静かで清らかな時間が流れ始めた。

蛮族たちは大地にひれ伏し出した。

どうやら祈りの時間のようなものが始まったようだ。

私もプラーヌスも、殺気立っていた兵士たちも、思わずその光景に心を奪われた。

それは見ているだけで、こちらでも静謐で清らかな気分させられるような光景であったのだ。

蛮族たちは本当に心から祈りを捧げ、感動にむせび泣いている。私の胸の中にも、ある種の崇高な感情が呼び起こされた。それは兵士たちも同様のようで、その光景を見惚れているように眺めている。

蛮族たちのその祈りと陶酔の時間はどれくらいであったろうか。やがて女神の像を持った蛮族を先頭に、蛮族の群れはゆっくりと引き上げ始めた。

砂糖に集る蟻のように、懲りずに何度でもこの塔に襲撃を繰り返してきた蛮族たちが、自らの意思でその槍を納めようとしている。

これで一つ、難題は解決したようだ。

私はホッとため息を吐きながらそう思った。蛮族のこの様子を見る限り、もう二度とこの塔に襲撃をかけてくることはないであろう。

私にとってその代償は大きかったけれど、しかし平和が何よりなのだ。その光景を見る限り、自分の行動は正しかったのだと確信せざるを得ない。

だがまだ難題が残っている。

私は兵士たちに目をやった。

リーダー格の馬上の兵士がブライヌスをじっと見ていた。ブライヌスも彼を警戒するように見つめ返している。

馬上の兵はまだ怒りで震えているようだ。引き上げていく蛮族たちの姿も、彼の殺気をいささかも減じはしなかったよう。

彼は剣を振り上げ、大声で号令を掛けようとした。「全軍、この魔法使いを打ち取れ！」

しかしその言葉を言い終わらぬうちに、またもやそれを遮るように声がした。

「やめるんだ！ もう戦いは終わった」

私たちは驚いて、一斉にその声のするほうを見た。馬上のリーダー格の兵士も、彼の配下の兵士も、それにブライヌスですら、意外そうにその声に眉をひそめていた。

塔のほうから何者かが歩いてくる。

大柄の逞しい男だ。胸に女性を抱え、こっちに向かって堂々とした足取りでやってくる。

「バルザ様！」

誰かが叫んだ。

バルザ様だつて？

私は目を凝らしてその人影を見つめた。

確かに見覚えがある。極端に背筋を伸ばした美しい姿勢、頼りになりそうな広い肩幅、まるで勇氣と希望を形にした、そのシルエツト。

本当にそれはバルザ殿だつた。

私は咄嗟に、プラーヌスがまたもや魔法でそのような幻を拵えたのかと当然考えた。その偽のバルザを使って、この兵たちを引き上げさせようとしているのだと。

だってバルザ殿は死んだはずだ。あの日から二、三日は経っているはずである。生きていたとしたら、これまでどこにいたのか？

しかし当のプラーヌスも、そのバルザ殿に似た何者かを怪訝な眼差しで見つめている。

「我々も引き返そう」

その本物が偽物が定かならぬバルザ殿が、兵たちに向かって大声で言った。

「バルザ様、ご無事でしたか！」

馬上の兵士が馬から転げ落ちるように飛び降りて、そのバルザ殿

に似た何者かに駆け寄った。「この男からバルザ様を殺めたという言葉聞いて、私たちは危うく騙されるところでした！」

バルザ殿に似た者はプラーヌスを意味ありげな視線で見ながら言った。

「ああ、確かに私はこの男に敗れた。しかし寸前で私の命を奪うことを躊躇したようだ。おそらく数日間意識を失っていたが、まだ私は生き永らえている……」

「な、バルザ様が敗れたですと」

「ああ、私は負けたのだ……」

バルザ殿に似た何者かが屈辱を噛み締めるようにそう言った。ただど私はその表情を見て確信した。どうやらこれは本物のバルザ殿のようだった。

先程プラーヌスが呼びだした幻とはまるで違う。このバルザ殿には明らかな実体のようなものがあるように見える。重みがあるように見える。

それに何より誠実そうで、何事に対しても真剣なこの眼差し。少しやつれて、疲れ果てたような表情をしているが、間違いなくあのバルザ殿だ。

「すまない、皆の者」

どうやら本物に間違いないバルザ殿が兵たちに頭を下げた。「私は自分の失った誇りや、復讐の怒りにとらわれ、祖国のことを失念していた。一日でも早くパルに戻ることを第一に考えるべきであっ

たのに、このバルザ、私情に眼を曇らせてしまった。それは騎士としてあるまじき行動。私はこの事件で自分がいかに愚かで弱い人間であるかを悟った……。騎士と名乗っていることが恥ずかしいくらいに……。全軍今よりすぐ、パルに戻るぞ！」

「し、しかし、この者は？」

リーダーの男がバルザ殿の言葉に驚きながら断固として反論した。

「……確かに失ったものは余りに多い。謁見の間にあつた五人の騎士の死体も見た、存亡の危機にある祖国のことも聞いてた、それに我が妻はこの男に殺された」

バルザは胸に抱えている女性を悲しそうに見つめた。

「なんですと！」

バルザ殿のその言葉に、再び兵士たちの間に大きな動揺が広がった。

私もその言葉に驚愕したことは言うまでもない。プラーヌスはあ
の五人の騎士のみならず、女性まで手にかけていたとは。

「しかしもはや殺し合いは無益。ましてこの戦いは私の私闘でもある。そなたたちを巻き込むわけにはいかない」

「ではこの邪悪な男をそのまま生かしておくのですか？ 我々はバルザ様の復讐に喜んで従いますぞ！」

リーダー格の男だけでなく、他の兵士も口々にそう言った。

「私だつてこの塔の主が憎い。この男の行動を理解する気にもなれない。まして許すことなど永遠に不可能」

バルザ殿は込み上げてくる感情を抑えるようにしてプラーヌスにらんでいた。

「・・・しかし、全軍、ただちにパルに引き返す」

バルザ殿は振り払うようにプラーヌスから視線を話し、兵たちに号令をかけた。

兵たちはいくらか不満なようであつたが、バルザ殿の勢いに押され、皆、渋々頷き始めた。それを確かめてからバルザ殿はふと視線を緩め私を見てきた。

「シャグラン殿、女神像を見つけてくれたのですね。お手柄です。あなたのその行動がどうやらこの無益の戦を止めたようです。そしてもう一つの戦を止めるのはこのバルザの役目。彼への怒りが収まることはありませんが、我々は引き上げます」

異論はないな？

バルザ殿が再びプラーヌスに向き直りそう言った。

「ああ、もちろんね」

「今日で私はこの塔の門番を辞任するが？」

「止めはしないさ。あなたがパルの国を救うのを僕は願っている」

「ついてこれない者は置き去りにする！」

バルザ殿は馬に飛び乗り、そう言った。「ただちにバルに向けて
全軍全力疾走！」

最終章 7) 邪悪な友人

百数人の兵は塔の前から去っていった。

しかし誰一人納得して去っていく兵はいなかったようだ。最後まで憎しみの籠った視線で私たちをにらみつけていった。

私たちは黙ってそれを受け止めるしかなかった。兵は去っていったが、彼らの恨みは決して消え去ることはないだろう。それは間違いない。

「とはいえ全て解決したようだな」

去っていく兵たちを見守りながら、プラーヌスが言った。

「あ、ああ」

私はプラーヌスの言葉に頷いた。

しかしまだ私たちの問題は何も解決していない。いや、むしろ私はいつそう混乱を始めたと言っている。

蛮族が襲来する前、あの告白を聞いた直後は怒りしか感じなかった。すぐにでもこの塔を出て行こう、そう決心が定まっていた。

けど今は、この戦いをおさめるためにプラーヌスが取った行動に、私は少しばかり感心しているのだ。

それにゆつくりと響き出したのかもしれない。プラーヌスが告白した言葉がようやく今になって、それなりに理解出来るものになりつつある。

プラーヌスが私を必要としている。それは間違いない事実である。

それにさっき、プラーヌスから逃げるチャンスはあったと思う。バルザ殿に向かって、私もプラーヌスの被害者だから匿って頂けないかと願い出れば、あの場面では彼も手は出せなかった気がするのだ。

しかしそれは出来なかった。

いや、する気になれなかった。

私の考えが変わりつつあったからだ。

「わかったよ、プラーヌス！」

私は言った。「まだしばらくこの塔に居よう。はつきり言って君のことはよく理解出来ない。かなり自己中心的で自分勝手だし、とにかくその性格には驚かされることばかりだ。しかも結果的に君が僕の父を殺めたことは確か……。それを考えると、これから君と共に時間を過ごすなんてとてもじゃないけど無理だけど」

私は一呼吸置いてから言った。

「でも君が邪悪な人間じゃないことはわかる。それにいくらここから出ていくと言い張っても、どうせ記憶を奪う気なんだろ？ それならまだしばらくこの塔に居るよ。許したわけじゃないけど、さっきの行動で見直したことは事実だから」

私は努めて明るく、さっきまでの深刻な遣り取りなどなかったふうな口調で言った。

「そうか、シャグラン、嬉しいよ」

するとプラーヌスは少しホツとしたようにそう言った。

「それにてつきりバルザ殿をもその手で殺めたのかと思っていた、
ただどいくら君でもそこまで出来なかったわけだ」

私は言った。

「いや、まあ実はそれに関しては誤解がある。僕は彼を殺したつもりだった。魔法で彼の心臓を止めたはずだったんだ。それで彼の妻の死体を安置していた部屋に置いておいた」

プラーヌスは少し言い難そうにそう言ってきた。

「えっ？」

「だからさつきにこっちに向かって彼が歩いてきたときは本当に驚いたよ。いったい何事が起きたのかしばらく理解出来なかったぐらいだ」

「・・・え？」

「しかしまあ、バルザ殿は国宝に匹敵する高価な宝具。殺そうと思っただけ、僕もどこかで手心を加えたのかもしれないね」

「・・・あ、あれ、そ、そうだったのか。で、でも、それでも見直したよ。とにかくすぐに塔を出ると言った言葉は撤回する」

「うん、それは本当に嬉しいよ」

プラーヌスは安心したように私の言葉に頷いた。しかし彼は何か申し訳なさそうな表情を浮かべ、私にこう言ってきた。

「でも君の記憶は奪う。やはりあんな告白はするべきじゃなかった」

「えっ？」

私はプラーヌスの言葉に呆然とした。

「すまないね、あんなことはなかったことにしたいんだ」

「ちょっと待てよ、プラーヌス！ もう水に流すって僕は言っているんだぜ？」

「わかつている、でもね」

プラーヌスは残念そうに首を振りながら、懷から宝石を取り出した。

「ま、待ってくれよ、プラーヌス！」

私はどうにか彼を翻意させようと思いつくがまま喋った。「こんなことをしては君は永遠に友情なんてものを知ることはい出来な^いぜ。君にとって恥^づかしいかもしれないけど、そういう本音をぶつけ合うことが友情という」

だけどプラーヌスは私の言葉を無視して、何か魔法の言葉を唱え

出した。

私は思わず彼の仕草をマジマジと観察してしまった。しかしすぐに事態を理解して、とりあえず全速力で彼から逃げようとした。

しかしやがて足がもつれていき、その場に倒れた。

「すまないね、シャグラン」

そのような言葉が聞こえた気がするけど、しかしその記憶を忘れられてしまうのだろう。私の心は徐々に真っ暗になっていく・・・。

エピソード 1 悲しきバルザの章 エピソード

心臓が強烈に痛い。

意識してそれを動かさないと、今にも力なくその鼓動を止めてしまいそうだ。

バルザはその痛み顔に顔を顰めながら目覚めた。

私は生きているのか？

目覚めてすぐにバルザが思ったことはそれだ。

あの邪悪な魔法使いに私は負けたのに、しかしどうやら生き永らえてしまったようだ。

あの瞬間のことがありありと思い出される。

勝負は呆気なかった。バルザの剣があの邪悪な魔法使いの身体に届くはるか前に、邪悪な魔法使いの魔法によってバルザの肉体に異変が起きた。

そう、この痛み、まるで心臓を鷲掴みにされたような痛みが襲ったのだ。

それでバルザは力なく倒れた。

まるで勝負にもならなかったと言っていい。惨めな程の完敗である。

しかしその敗北には何の爽やかさもない。自分よりも圧倒的に強い戦士に出会えた感動とは無縁の、ただ負けただけの戦い……。

この心臓の痛みは、そのどうしようもない惨めさも起因しているかもしれない。

バルザはふと、隣で誰かが眠っていることに気がついた。彼が寝かされていたのと同じ、石で出来た台の上、痛む心臓を抑えながら、その人物のほうに目をやった。

それは妻だった。

顔色は生氣なく蒼ざめ、唇は色が抜けたように乾いている。しかし間違いなく妻だ。

「・・・おお、我が愛！」

バルザは思わず感極まり、倒れ込むようにして彼女の胸に顔をうずめて泣いた。

彼は妻の姿を見て、自分がいかに彼女のことを愛していたのかを瞬時に思い出した。

ハインへの感情、あの偽の思い出、それは全て妻に向けた愛、あるいは妻と共有したかったこのバルザの希望だったのだ。

それをあの邪悪な魔法使いに上手く利用された。その拳句の果て彼は妻への愛まで失いそうになったこともあった。

しかし彼が失ったのはハインではなく、妻だったのだ。

私がこれまで愛したのはこの女性しかない。

確かにその結婚生活は上手くいかなかったが、それは嘘偽りのない事実。今はそれを堂々と言える。

しかしどうやらその妻は死んでいるようだ。

彼女が息をしいないのは明らかだった。体温はなく、石のよう
に冷たい。

だがその姿は腐敗することなく、生きていたときの姿をそのまま
留めていた。

バルザはそれを不思議にも思わなかった。これは魔法使いの魔法
の仕業である。この塔に飾られてあった花は、一つとして枯れたり
萎えたりするものはなかった。妻も同じ魔法の支配下にあるのだろ
う。

ということは、ここは塔の中か。

バルザは悲しみから顔を上げ、そう思った。

外から戦いの音がする。聞き慣れた関の声、鉄と鉄がぶつかり合
う音。

目覚めてすぐに戦場の音が聞こえてくるなんて、私はやはり戦い
に呪われているようだ。

「戦場が私を呼んでいる・・・」

今すぐに行かなくては。

バルザは立ち上がった。

しかし戦場へ赴こうというのに、バルザは石畳の床に無造作に置
かれた愛用の剣は拾わず、その代わりのその空いた両手で妻の遺体
を抱き上げた。

外で何が起こっているのかわからない。

しかしもうバルに帰らなくてはならないのだ。

バルザはあの邪悪な魔法使いにその旨を告げるため、塔の外の戦場に向かった。

エピソード 2) シャゲランの勘違い

塔の中で迷子になっている。

ある程度は勝手知った塔のはずなのに、どれだけ歩いても見覚えのある場所を見つけられない。

私は焦っていた。このままだと自分の部屋に永遠に帰られないんじゃないかって。下手したら私はこの塔の中で餓死してしまうんじゃないか。

そのときふとちょうど廊下を曲がろうとしている召使いの後ろ姿を見掛けた。

見たことのない横顔だったけれど、私は慌てて彼を追いかけた。とりあえず彼の後についていけば、自分の部屋に帰られるはずだと思っ

しかし不思議と身体が重くて全くスピードが出ない。いくら足を動かしても、手を動かしても思うように前に進んでいかない。

そのうちに彼の後ろ姿はどんどん遠ざかっていく。せつかくのチヤンスを逃してしまいそうだと、私は絶望感に打ちひしがれていた。

そのときこれが夢だと気づいた。

これが夢なら迷子になったままでも、目覚めさえすれば自分の部屋に帰られるわけか。

私は目覚めつつある意識の中そう考えてホッとした。だったらもう必死になって追いかける必要はない。

私はそんな安心感を覚えながら目覚めた。

しかし見上げた天井にまるで見覚えがなかった。夢から覚めても私の迷いは続いていたのだ。

ど、どこだ、ここは？

私は焦りながら身体を起こした。

「あつ、起きた？」

声のほうを見るとアビュが立っていた。

「ア、アビュ？」

天井は見覚えがないが、見渡すとよく見知っている部屋だ。「……良かった、なんだ、ここは医務室か……」

「何よ、いきなり大声あげて」

「……迷子になった夢を見たんだよ。夢から覚めてもまだ知らないところだったんで、正夢になったのかとかなり焦った」

「そんなことあるわけじゃない」

アビュはおかしそうに笑った。

「そらそうだね」

その笑い声に改めて帰ってこられたことを実感しながら私も言った。

だけど私はどうしてこんなところで寝ているんだ？ 別に病気も

怪我もした記憶もなければ、そのような感触もないのに。

そのことをアビュに尋ねた。

「やっぱり迷子じゃない。何も覚えてないの？」

「あ、ああ・・・、まるで何も」

それに何かとんでもない空白感を感じるのだ。

空白感、あるいは欠落感と云えばいいのか。これまで感じたことのない虚しさ。夢の中で味わった心細さがそのまま続いている感覚。とても大切な物を失ったあとの喪失感。

いや、どう説明してもこの感覚は上手く説明出来ない。とにかく私はカラッポを抱えている。

「主にこうやって」

アビュは胸の前で何かを抱えるような仕草をした。「お姫様みたいに抱かれながら、医務室に運ばれてきたのよ。そのときはびっくりしたわ、色んな意味で」

わ、私がプラーヌスに？

「まあ、戦いが終わって、ホッとして気絶したみたいだって主は言ってたけど」

「戦いが終わっただって？ 何の戦いだよ？」

私はまたもやアビュの言葉に驚かされた。

「蛮族との戦いよ。それも覚えてないの？　ボスが女神像を見つけて、それを彼らに返したらいいじゃない。それで蛮族たちはすごい喜んで帰っていったんだから。それ以来、もう来襲してこないし。本当に大手柄よ」

「蛮族に女神像を返した？　ば、僕が？」

まるで覚えていない。アビュはまるで他人の出来事を喋ってきているようだ。

確かに女神像を見つけたのは覚えている。地下の牢獄にあったのだ。だけど私は返すのを躊躇していた。

あれを返せばフローリアがこの塔からいなくなってしまうからだ。それなのに私の知らない私は、そのようなことを決断したのか……。

もしかしたらそんな重大な決断に自分の理性が耐えきれなくて、一時的に記憶を失ってしまったのかもしれない。

いや、そうだったらあまりに情けないのだけど、別に外傷もないようだからそうとは思えない。

「そうか、そうだったのか……」

私は複雑な気持ちでそう言った。底がポカッと抜けてしまったような果てしない寂さを感じる。

これでもうフローリアと二度と逢うことは不可能になったわけか。願うべくはせめて、その私の知らない私が最後にフローリアと気のきいた別れの挨拶を交わしたことを望むぐらいだ。

「アビュ、君はフローリアとちゃんと別れることが出来たかい？」

私は言った。

「へ？ どういうこと？」

アビュが首を傾げて言ってきた。

「だ、だからフローリアはもうこの塔からいなくなっただろ？」

もしかしたらアビュはまだ気づいていないのか。私の行動によって彼女が消え去ってしまったことに。

「彼女は女神だったわけだ。それで僕が蛮族に女神を返したことによつて、もう」

私がそう説明しようとしたらアビュが遮ってきた。

「ちょ、ちょっと待って、何言ってるのよ。フローリアさん、いるよ、普通に」

「えっ？」

な、何だつて？

「やっぱり頭でも強く打ったんじゃない。何なの真面目な顔して、フローリアは女神だったって。まだそんなこと言ってたの？ 聞いているこつちが恥ずかしくなるような勘違いなんですけど」

「・・・えっ？」

「まあ、別にどうでもいいけど、ボスが誰に憧れようが」

そう言いながらアビュは不機嫌な表情で唇を尖らせ始めた。「バルザさんも元気みたいだったし、いつか私はパルに遊びに行くからさ」

「な、何だつて？」

これで何回目だろうか、アビュの言葉に驚かされるのは。どうやら私が失った記憶の中であらゆることが起きていたようだ。

「君はバルザ殿にも会ったのか？」

「ううん、会ったわけでも喋ったわけでもないし、何があつたのか私もよくわからないんだけど・・・、とにかくパルから迎えに来た兵を連れて帰っちゃった」

と言うことはバルザ殿は生きている・・・。

いや、そんなことよりもフローリアがまだこの塔にいるだって？

そのとき扉の方でカタカタと物音がした。

「ああ、女神さんが来たわ」

アビュは嫌みな口調でそう言って私に舌を出してきた。しかし本当に開いた扉の向こうにフローリアの姿が見えた。

「フ、フローリア・・・」

私はまるで亡霊でも眺めるように彼女の姿を見た。そんな私をフ

ローリアはいぶかしげに見返してきた。

「どうしたんですか？ そんな驚いた顔して・・・」

エピソード 3) 魔法使いとの友情

その日の夕暮、謁見の間でプラーヌスと会った。

「訳がわからないことだらけだよ、プラーヌス」

私は彼の顔を見て早々、訴え掛けるように言った。「どうしても一時的に記憶がないのかわからないし、それに女神像のことで僕はとんでもない勘違いをしていたようだ」

私は自分が抱いたその勘違いについて、プラーヌスに簡単に説明した。すなわちフローリアを女神だと思い込んでいたあの勘違いのことである。

すると彼は何だか訳知り顔で言ってきた。

「まあ、人は誰でも恋をすれば、その相手を天使だとか女神だとかに勘違いするものさ」

「そ、そうなのか」

「ああ、僕も若い頃、そんな勘違いをしたことがある。そんなことより、意識が戻って何よりだよ、シャグラン。最後に覚えていることは何だい？」

プラーヌスはまるで、私の病状を診断する医者のような口調で尋ねてきた。

「最後に覚えていること？ そうだな、地下の実験室で女神像を見つけて、それからこれをどうするか一晩中悩んでいたことかな。」

結局、僕はそれを蛮族たちに返したんだよな」

しかし蛮族に私にその女神像を渡した記憶がないから、まだフロリアが女神ではなかったという実感がイマイチ沸かない。

まだ女神像はこの塔のどこかにあるのに、皆で寄って集って私を謀っている可能性もなくはないはず。

私は冗談めかしてそう言った。しかしプラーヌスは私の言葉を一笑に伏した。

「いや、あれはとても感動的な光景だったよ。蛮族たちは本当に歓喜にむせび泣いていた。塔の召使いも、騎士が連れてきた兵も心を打たれていた。殊勲者の君があれを覚えてないなんて勿体ないな」

「そうか・・・」

それを見ていないせいで、私は蛮族の問題が解決したという実感もないのだ。まだ私だけ戦場の只中に取り残されたままの気分。とにかく全てがすっきりしない。

「それにこういう謎も残っていると思うんだ」

私はそのすっきりしない表情をプラーヌスに向けたった。「フロリアは女神でもないのに、だったらどうしてあの地下の実験室にあの女神像があったのか？ ただの偶然だったと片付けられないと思う。それと女性の泣き声が聞こえていたじゃないか。あれもどうやらその女神と同種のものようだった。蛮族の捕虜に聞いたんだけど、あれは嘆きの女神だそうだ。その二つの女神がどういうわけでこの塔に紛れこんだのか、まだまだ謎だらけだよ」

「ああ、そうだな。まあ、それについては君が意識を失って眠っている間、僕なりに考えたんだけども」

プラーヌスが言ってきた。「もしかしたら全ては、前の主の行っていたあの実験にあったのかもしれないと僕は考えている」

「あの実験？」

「ああ、人の道を踏み外した、目を覆う程に残虐なあの人体実験だよ。僕は前の主が残した人体実験の記録を記したノートと、彼が書いていた手記をじっくりと読んだ。彼は塔の召使いたちにも内緒で、近隣の村や街から人体実験用の人間を拉致してきたようなんだ。まあ、そんなこと魔法の力があれば容易い。とんだ才能の無駄遣いだけだね。それでどうやら、前の主はこの森に住む蛮族にも手を出したようだった」

「あ、ああ」

「はつきりとそう書かれていたわけではないんだが、偶然、彼は蛮族の神職にあつた者を拉致したのかもしれない。その日以来、彼は蛮族の襲来やあの女性の泣き声に悩まされ始めたようだからね。そう考えてもいいと思う」

「意図せず以前の主は女神を拉致してしまっていたわけか・・・」

「ああ、それで彼は墓穴を掘ったんだ。確実にその影響で寿命を縮めたのは間違いないからね。全てはそれが命取りだったんだよ。彼からすればそれは女神どころか死神だったってわけさ」

「そうか・・・」

そう言われると納得出来るかもしれない。やはりフローリアが女神だったなんて、こっちの思い込みだったって。

あんなのはフローリアの魅力に魅せられた私の恥ずかしい勘違いだったのだ。確かに私が惑わされるに充分な、いくつかの偶然の符合はあったと思う。だけどプラーヌスの説明のほうがずっと筋が通っている気がする。

「とにかく君のお陰で全ては解決したのさ」

まだ混乱している私を尻目に、プラーヌスはとても晴れやかな表情を浮かべて言ってきた。「全ての問題がこれで終わったんだよ、シャグラン。あの女性の不気味な泣き声も止んだ。蛮族の襲来も終わった。これで僕は門番のことで悩まされることもなくなった。ようやくこの塔は僕の塔だと心から言えるようになった」

そう言ったプラーヌスの瞳に希望のようなものさえ輝いているかもしれない。とにかく彼は上機嫌に微笑んでいた。

「これからは問題解決のために時間を費やすのではなくて、この塔をより快適にするために神経を注げられる。シャグラン、早速、ルーテティアの街に行こう」

「ルーテティア！」

ずっと昔から、私の憧れる芸術の都、ルーテティア！

「そこでありったけの宝飾品や家具、調度品を買うんだ。この塔を僕の宮殿に相応しい美しい場所にしていく。新しい料理人も雇お

う。工芸家や建築士も必要だ。 unnecessary 召使いたちは切つて、新しい召使いに挿げ替える。これからも忙しくなるぞ」

「あ、ああ、そうだね・・・」

でもそういうのが全て終わったら、もう街に帰ってもいいかな？

喉までそんな言葉が出かった。

だってもう私は充分に働いた気がするのだ。女神像も見つけたし、不気味な女性の泣き声も解決した。もう私はこの塔に十二分に貢献したのではないだろうか。

しかしプラーヌスの浮かれた表情を見るとそんなことを言う気になれなかった。

まあ、もしかしたら少なからず私も、この塔に居心地の良さを感じるようになってきたからかもしれない。

それにこの塔にはフローリアもいる。アビュもいる。そしてたくさん召使いたちも。彼らとも知り合い、友情が芽生えつつあるのだ。

そして何よりもこのプラーヌスも。

この塔に来た当初は久しぶりに再会したせいか気詰まりを感じていたけど、もうそのようなも感じない。

プラーヌスと別れることも、今となっては寂しいことだ。

私の人生はここに根を下ろし、そして何らかの花が咲こうとしているのかもしれない。それを捨て去るのはあまりに勿体ない。

私はそう思つて、プラーヌスの言葉に頷いた。

「よし、では出発だ」

プラーヌスは頷いた私を満足げに見ながらそう言つた。

「はっ？ い、今から？」

「ああ、早速出発すると言つたではないか」

「ちよつと待ってくれよ、プラーヌス。僕はまだ頭がボーっとして、イマイチ現実が掴めてない」

「それがどうしたのさ、シャグラン、僕は君が目覚めるのをずっと待っていたんだ。こっちはもう準備万端なんだよ」

さあ、行こう。

そう言つて彼は私の手を取つた。

終わり。

エピソード 3 魔法使いとの友情（後書き）

いささか読みにくい文章の、この小説を最後まで読んでいただき、
本当にありがとうございます。終わりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9366s/>

私の邪悪な魔法使いの友人

2011年11月13日22時09分発行